THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第四十三年　第五號　第四百八十四號

雨の御支度は松屋へ

何れも本年特製の優秀品豐富に取揃へ



レインコート

アイデアル……一五圓ゟ
羽二重ゴム引……九圓ゟ
〃銀波縮緬……二八圓
カシミヤゴム引……一九圓五〇錢
アルパカゴム引……一四圓五〇錢

オーバシュース

和製……二圓五〇錢
舶來……三圓五〇錢

殿方洋傘

毛繻子……二圓四〇錢ゟ
絹張……六圓三〇錢ゟ

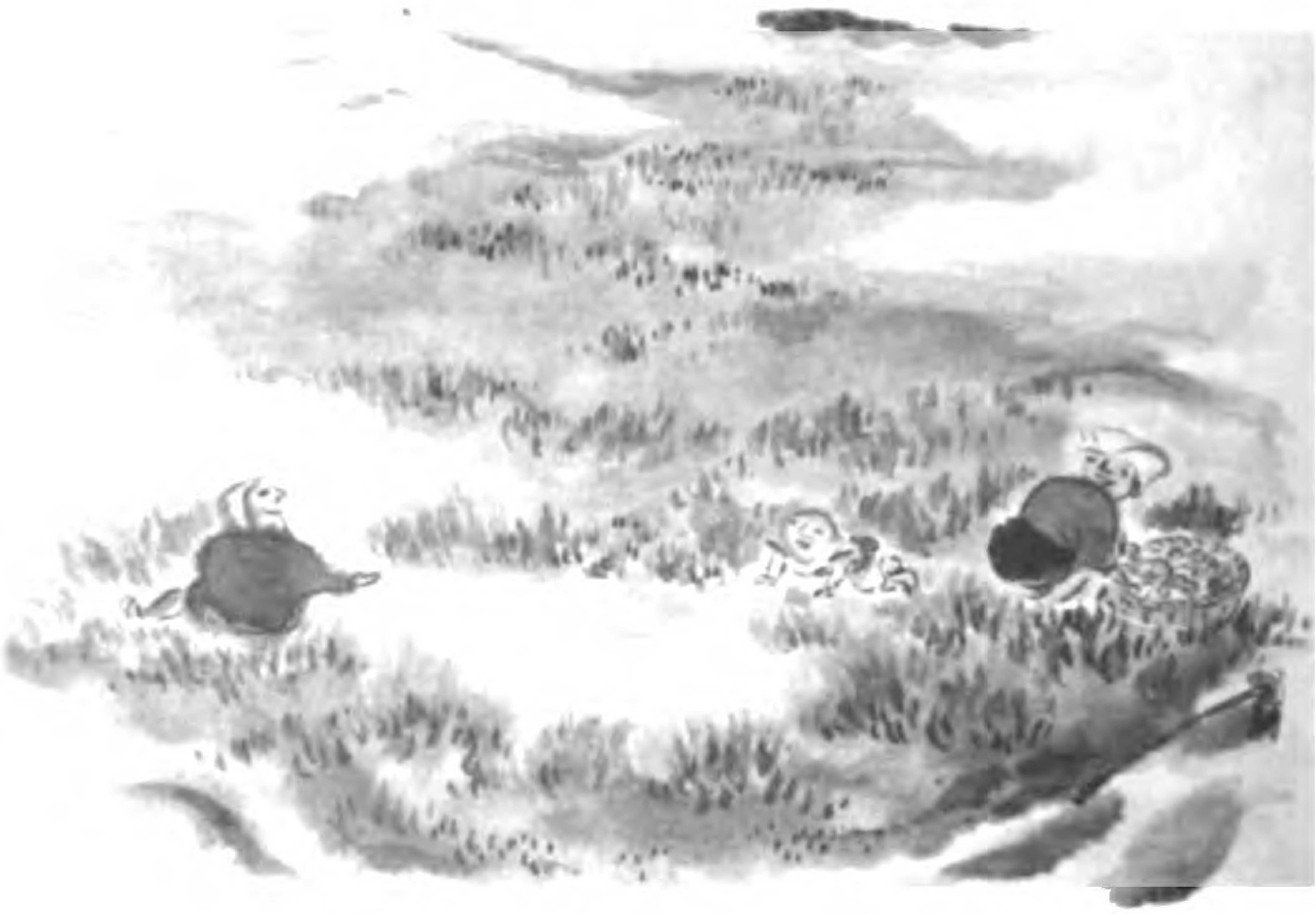
東京・銀座



寫眞材料界の權威
アグファの製品を推薦す
Agfa
FILMPACK
ROLLFILM
東京市麹町區丸ノ内
仲通十四番館左號
アグファ合名會社
大阪市東區備後町二
野村ビル
アグファ合名會社







草上和樂　　森田恒友筆

特別議會に於ける根本問題

――(巻　頭　言)――

特別議會に於てどんな問題に最も力を注ぐかは政府にも既成政黨にもそれ〳〵の興味はあらう。併し我々國民大衆の立場からして今度の議會で何よりも先きに解決して貰ひたい問題は頗る簡單だ。何ぞや、曰く、現内閣の存續を容るすか否か是れ。

我々は必ずしも現内閣を倒して民政黨に代らしむることが國民の爲め良策であるとは云はない。單に政權爭奪を中心基調とする憲政の形式的運用からいへば、第一黨だから辭職するに及ばないとか、假令多數でも第二黨との差が餘りに少いときには引ッ込むのが至當だとかの論にも、夫れ〳〵若干の眞理を認めることは出來る。併し斯れは英吉利などの如き、選擧が先づ大體其儘國民の意向を反映すると認め得る國に付て始めて言ひ得ることで、我國の如く、朝野兩黨が共に買收請託の不正手段を競ひ、甚しきは政府自ら干渉の兇刀を揮て良民の自由意思を蹂躙すると云ふ樣な處に在ては、得票の多少、當選者の多寡に何の道徳的意義があるか。所謂黨員の數を基礎としての政局轉換論には、國民大衆は何の興味も有せず又何の希望も繋けるものではない。たゞ我々に取て肝要な問題は、あゝまで罪惡を重ねた現政府をこの儘平然として其地位に留らしむべきものか如何である。政友會を倒したとて民政黨がまた同じ罪惡を繰返すだらうといふ者がある。罪惡を犯さば復之を倒すまでのこと。次に來る者に恃む能はずとの故を以て既遂犯を存することは出來ない。故に眞に心から政友會を賴むべしと確信する者は格別、否らざる限り、政府倒壊の文字通りの實現を來すべく協動するのは、少くとも今次特別議會に臨む代議士の深く覺悟するを要する所であらう。この點で去就を曖昧にするは斷じて大衆の要望に副ふ所以でない。

以上の立言は自ら所謂中立議員の行動を監視することの此際特に必要なるを思はしめる。内心爲にする所あらんとして出所進退を明にせざるは固より惜むべく、自ら潔うするに努むるの餘り超然的態度を執るの結果遂に現内閣の存續を許して顧みざるが如き尾崎氏一派の言動にも、我々は多大の遺憾と不滿とを感ずる。若し夫れ無産黨の一派が既成兩政黨に對して徹底的反感を明示せざるべからずと主張するのは、無産黨の立場として之を諒とし得ざるに非るも、我々は寧ろ、所謂獨自の不信任案の提出までを斷念して民政黨側の或は提出することあるべき不信任案に協同すべしとの決議のうちに、政治家的聰明を認めざるを得ない。但し之に附隨して獨自の立場を宣明するの機會を失はざることと、更に之を切ッ掛けに既成政黨と何等の腐れ緣を結ぶべからざることは勿論である。

中央公論



第四十三年第五號
五月號
四百八十四號

當面の政局を解剖して共産黨事件に及ぶ

猪俣津南雄

一

進步的な輿論は、この臨時議會を興味の中心に、新進の無産黨議員の陣容と、反動的な政友會內閣の切迫した運命とに、異常な注意を拂つてゐる。

無産黨議員といつても、僅か八名に過ぎない。四百六十六名中の八名といへば、言ふに足らぬ少數である。その彼等が、いま政治的興味の焦點となつてゐるのは何故であらうか。二つの支配的政黨たる政友會と民政黨との勢力の差が極めて微

少で、兩者の運命を決定するキャスチング・ヴォートが彼等の手に握られてゐるといふことも、理由の一つに相違ない。だが、そのキャスチング・ヴォートが、例へば革新黨や實業同志會に依つて握られた場合とは全然違つた或る深刻な意味において問題視されてゐるのは何故であらうか。それは、かの八名が、「普選」による第一回の總選擧の結果、日本の議會に侵入し來たれる全く新しき政治的要素であるからでなければならない。彼等こそは、決して金力とその支配とに屈しないところの、文字通りの民衆の政治家として、一切の期待をかけられてゐるからでなければならない。否な、金力の支配をこそ覆すべく、あらゆる妥協を斥けて、眞にデモクラテツクな要求の事實化の爲めに闘ひぬく人々と信じられてゐるからでなければならない。——進歩的な輿論は、明らかに、デモクラシーの要求を把握してしまつた。

それは一面、政友會内閣に對する強き反感となつて現はれてゐる。不人氣の微妙なる動きは、政友會が陸軍大將田中義一を總裁に戴いた時に既に現はれてゐた。昨年四月の組閣以來殆ど政治らしい政治を爲し得なかつたことも、原因の一つを加へた。政友會内閣による第五十四議會の解散は、政權に噛りつくといふ不評を濃くするに充分であつた。たゞ、民衆の渇望であつた普選による總選擧を早めたといふ偶然の結果のために、些か救はれ氣味であつたに過ぎない。しかるにその選擧に臨んだ政友會政府の態度、一擧手一投足は、普選の「精神」そのものを寸斷し、粉碎した。まだなま〳〵と諸君と吾々の記憶に生きてゐる流血の選擧戰——それは、討論により、集會により、投票によつて決すべきものを、警察力によつて決せんとする眞ツ黒な反動主義の跋扈であつた。暴壓の眞只中に暴露せられた「怪文書」事件、——それは、金力をもつて政治的意見を強制せんとするブルジョア獨裁特有の陋手段を意識的積極的に行使する者が何人であるかを、行使者自らが大衆に示したものであつた。かくして、新選擧法の眼目たるべき民主主義的精神は全く泥土に委された。そして、それでも尚ほ足らなかつたかのやうに、「腕の」内相の答書は、議會政治そのものをさへ否認してしまつた。内相の最大の功績は、政友會内閣が進歩的輿論の敵であることを「中外に宣明」したことにある。

二

だが、一口にデモクラシーへの要望と言つても、それが一定不變の內容を有する譯ではない。特定の時、例へば現在においても、デモクラシーへの要望は、階級乃至は社會層の異るに從つて必然に異なる內容を有ち、異つた希望を盛つてゐる。農民の欲するデモクラシーは、すべての百姓に對する土地所有乃至耕作權の平等を實現するまでは決して徹底されない。小資本家の欲するデモクラシーは、商業と金融と企業とにおける獨占的大資本の特權を排除し切るまでは決して徹底されない。しかるにプロレタリア、及びプロレタリアに近似する廣大な社會層は、資本家的搾取そのものが徹底せられた時にのみ徹底したデモクラシーを有つ。急進的及び自由主義的インテリゲンチアは、當の個人の生活を決定してゐる特殊の社會關係の如何と、彼れの視野の廣狹、洞察の深淺とに從つて、或はプロレタリアの、或は農民の、或は小資本家のデモクラシーの要求を、自己の要求として要求する。最も徹底的な民主々義者であるプロレタリアートを最先頭に、これら幾つかの社會層を代表する個人及び團體は、いま、當面の政局において、それぞれの立場からにもせよ先づ政治的デモクラシーを押し進めることに一致點を見出だしたところの進歩的な輿論及び政治的勢力の擔ひ手である。そして此の現象の特殊の意義は、今や初めて、農民からプロレタリヤに至る廣大な被抑壓階級が、公然たる能動的勢力として政治の舞臺に登場し來つたことに見出だされねばならぬ。この事からしてまた當然に、當面の政局は或る重大な政治的轉換期を表象する。

多かれ少なかれ封建的特權を持越し、それを自己存立の基礎としてゐる地主階級は論外としても、少くともブルジョアジーは、デモクラシーの支持者ではないであらうか。それは、現にブルジョアジーを代表してゐる諸政黨が極力「立憲政治」を主張し來たれることに現はれてをらぬか？——かく問ふ者は錯覺者である。最も危險なる錯覺者である。

政治的自由とデモクラシーとは、わがブルジョアジーが支配者となる途はブルジョアジーの要求であり、主張であり得た。ブルジョアジーとその政黨とが、「立憲政治」、政黨内閣主義のために鬪つて來たことは事實である。これはしかし、被抑壓大衆の政治的自由とデモクラシーのために鬪つたのではない。當時のブルジョアジーの敵は、一方ではプロレタリア大衆であり、他方では舊勢力を代表した「官僚軍閥」であつた。多かれ少なかれ彼等に握られてゐた政治的支配の實權を、確實に自己の手に收めるまでは、ブルジョアジーは民衆の名においてデモクラシーを要求した。彼等が敢へてした數次の選擧權擴張は、彼等の政權爭取戰に民衆を動員せんがために過ぎなかつた。「普選」の實施による政黨内閣主義の確立は、ブルジョア政權の確立を意味した。それは、半封建的な一切の舊勢力に對するブルジョアジーの政治的勝利を意味すると同時に、一切の反ブルジョア的、被抑壓階級に對する新らたなる反動的支配形態の發展を意味した。現に、右の手では新選擧法を書きおろしながら、左の手では——治安警察法以下の惡法を抹殺する代りに——それに輪をかけて惡辣的な諸法律を書きおろしたのは、新らたなる政治的覇者ブルジョアジーを代表する民政、政友の兩黨ではなかつたか。否な、新選擧法そのものが、極めて普通ならざる「普通選擧」を創作してあらゆる制限を[illegible]歪と不備とをもつて飾つてゐるではないか。

特に、ブルジョアジーの仇敵プロレタリアートは、意識的計畫的に新有權者から除外され、僅かに有權者全體の七パーセントを占めるに過ぎない。プロレタリアと貧農とは、その勢力を政治的に結集せしめるための基礎的な團結、即ち組合に團結する權利すら與へられてをらない。普選による第一回の總選擧が、あのやうな暴壓裡に行はれたことも、此の新しき反動的支配そのものの稍や尖鋭な一表現に過ぎない。假りに民政黨が政友會と位置を代へてゐたとしても、この民政黨政府が干渉と買收と壓迫のない眞にデモクラテツクな選擧を實行し得たと、何人が正氣に信じ得るであらう？　進歩的な輿論が、政友會内閣に對して極度の憎惡を有ちながらも決して民政黨内閣を歡迎しないのは理由あることである。

現在の搾取形態の維持と擴大とによつてのみ存在し得るブルジョア的支配階級を代表する限り、政友會たると民政黨た

るとを問はず、自由やデモクラシーの味方ではあり得ない。いかなる搾取者階級も支配を欲し、支配を得れば反動化する。政治的自由とデモクラシーとは、いまや支配的ブルジョアジーにとつては「必然惡」に過ぎない。自己の制覇の確立のためにのみ「民衆」に與へねばならなかつたそれらをば、彼等は再び自己の支配のために民衆から奪はうとする。たゞ抑壓される大衆が、その赤裸々な實力、自分自身の政治的勢力の獨立的な行使によつて支配者階級に迫る時にのみ、それによつてのみ、ヨリ多くの自由とデモクラシーとが大衆自身のものとなる。わが無產階級の參政權獲得の運動は、これからはじまる。そして、あらゆる進歩的な要求に最も徹底し、また獨りその實現のための實力を確有する無產階級を除外した政治闘爭は、すべての被抑壓階層にとつて徒勞であるであらう。本質的な政治的勢力としての無產階級に對する僅かばかりの懐疑でもは、——それと共にブルジョアジーに對する僅かばかりの信賴でもは、デモクラシーの要求者等のすべてをして、自己の運動を「骨抜き」にし、麻痺せしめ、自殺せしめるのみである

三

反動的支配階級のための新選擧法とその極度の反動的運用との下に行はれた總選擧は、三つの特徴を有つた結果を生み出した。（一）二大ブルジョア政黨の勢力は甲乙なきに至つた。（二）四五名の當選をさへ危ぶまれた無產諸黨は、一切の彈壓にも拘はらず八名の當選者を出した。（三）從來、二大ブルジョア政黨の中間にあつて、多少とも進歩的な政綱を掲げてゐた諸政黨の勢力が激減した。（「第四十八議會當時は、政友、政本、憲政以外の中間勢力は七十八名であり、第四十九議會には九十二名、第五十議會には八十三名であつて、第五十三議會にはなほ五十三名であつたが、總選擧の結果は僅か二十二名（無產派を除く）に激減した。」——山川均氏の論文より——）

政友、民政の兩黨の議會における力が殆ど甲乙ないものになつたことは、必ずしも偶然とのみは言へない。この二つの

政黨は、ブルジョア政黨としての本質においても、殆ど甲乙ないものになつてゐる。以前には、政友會は比較的に多く農村の勢力、地主の勢力を代表し、それと對立した憲政會は比較的に多く都市の資本家的勢力を代表してゐた。しかるに最近の民政黨と政友會とは、所屬代議士の職業別から見ても、地盤の地方的分布から見ても、また掲ぐるところの政策について見ても、以前の如き差異は全くなくなつてゐる。そしてそれは、世界大戰以來のわが資本主義經濟に生じた根本的な變化を反映するものとして當然の現象でなければならない。

戰時の經濟的膨脹の結果として、日本資本主義は自由競爭の段階を終つて獨占の段階に入り込んだ。獨占的な大資本の力と自餘の資本の力との差が決定的となり、全ブルジョア階級に對する前者の經濟的支配が確立された。と同時に、地主のブルジョア化も急速に進み、彼等と資本家階級との關係は利害對立から利害共同に强く傾いて來た。地主もまた、獨占的大資本即ち金融資本の支配下に立ち、また立たずにはをられない。經濟的變化はその政治的表現をもつ。現在のブルジョア黨は、苟しくもブルジョア黨である限り、何よりも先づ金融資本の利害を代表せねばならぬと同時に、特に地主の利害を代表するといふが如きは無意味なことになつてゐる。農業問題の發展は、もう一度地主と金融資本との利害對立を深めることもあるかも知れぬ。だが、たとひ地主の政黨をつくる必要に迫られても、かゝる政黨が永く金融資本の政黨と對立しつゞけることとは不可能であらう。

一方、我國における金融資本の代表的なものは、三井、三菱の資本である。そして周知の如く、政友會は三井財閥の利害を、民政黨は三菱財閥の利害を、それ〴〵に强く代表してゐる。その點において兩黨の對立は存在理由がないとはいへぬ。けれども、三井、三菱の二大コンツエルンがその勢力範圍とするところの事業の諸分野は殆ど同一である。從つて、二つのコンツエルンを代表する二つの政黨が、本質的に異つた政策を主張すべき理由もなくなる。

我國の金融資本は强大な國家資本と密接に結びついて發展して來た。いまや徐々兩者の結合が强められねばならぬ。强

力な國家資本主義トラストの急速なる成熟が、痛切に要求されてゐる。そしてそれは金融資本の制覇を强めるのみである。我國において、金融資本の直接の支配の外に立つてなほ獨立を維持し得る唯一の產業資本としては、紡績資本がある。紡績資本の代表者武藤山治君が、金融資本黨とは獨立に一黨の組織を思ひ立つたのは無理もない。

實業同志會の漠然たる微的な政綱の中にも、產業民營化の主張が際立つてゐるのは、金融資本の政策との尖銳な對立を意味する。だが、武藤君のブルジョア的同僚さへが、同君の「自由主義」は「マンチエスター派」時代のそれで、時代錯誤だと嗤つたのも不思議はなかつた。時代は獨占主義の金融資本のものとなつてゐる。獨占的資本は、全國民經濟の組織的統制による組織的搾取を必要とし、國家資本主義的トラストへの一路を進む。實業同志會は、獨立性あるブルジョア政黨としては、その誕生の當時から當てもなき存在であつた。我國の紡績資本は、それ自身獨占化した資本であり、支那への工場移植によつて帝國主義政策の率直な支持者となつてゐる。そして帝國主義政策こそは反動的な金融資本固有の政策であつた。一切の進步的な社會層の進步的な要求を反映する進步的な輿論が、反動主義の化身としての田中內閣に對する反對に向つて結晶せんとしてゐる此のクリチカルな政局に際して、實業同志會こそはまさに當面の敵との腑甲斐なき取引によつて、それ自身の無力と反動性とを告白しつゝあるではないか。

四

が、それにしても、實業同志會に支持された政友會政府が、此の臨時議會を切りぬけたにしても、反對黨に對する力の差が二人や三人の差に過ぎないなら、自黨の政策を一つとして滿足に遂行し得ないことは明らかである。反對に、現政府が敗れ、民政黨が內閣を組織したとしても、その勝利が僅か二三人の差によつて得られたのでは、自黨の政策を滿足に行ひ得ないことに變りはない。

兩黨はいづれもブルヂョアジーの政黨であり、兩黨の勢力を合すれば議會における壓倒的多數を占める。一見すれば、二つのブルヂョア政黨は、買收によれ、壓迫によれ、欺瞞によれ、選擧權の大擴張にも拘らず尙ほ投票者の壓倒的多數を摑みとつたことにより、ブルヂョアジーの政治的支配がまだ少しの動搖も來たさないことを立證したかのやうでもある。投票者をおどかすことも、嘘八百で丸めることも、利權で釣ることも、投票を買ひ占めることも、ブルヂョア的支配の方法には相違ない。だが、さうであればあるほど、そんな手段で搔き集め得た投票が、ブルヂョアジーの支配に對する眞實の信任を表はすものであることは出來ぬ。しかも、ブルヂョアジーに與へられた一千萬の投票は、二つの對立する政黨の間に眞つ二つに分割されてゐる。そしてその政黨のいづれもが、自己の政策の遂行能力を失つてゐる。これが果してブルヂョア支配の鞏固さを示すであらうか。

ブルヂョア黨に對する漠然とした一般的不信任は、いはゆる「既成政黨」に對する一般的非難となつて現はれてゐる。ブルヂョア階級に對する反對、反抗の意識的尖端は、明確に、四十五萬の投票となつて無產黨を支持した。尙ほ、當然に無產黨に投ぜられて反ブルヂョア意識を表明すべかりし投票の極めて多くが、無產黨そのものが未だ議會において微力であらうといふ豫想と、從つて直接に政治を左右し得ないだらうからといふ理由との下に、或は他黨に投ぜられ、或は全く投ぜられずに終つた。

五

事實の點において、政友、民政（さきには憲政）の兩黨は、戰後の九年恐慌以來、資本主義經濟の發達の爲めにさへ何一つ積極的な働きをなし得なかつた。――見よ、日本は依然として金の輸出を禁じて資本主義の支柱の一なる金本位制をかたわにしてゐる。國家財政の基礎はます〳〵薄弱となつて來たのに、減稅の必要はいよ〳〵急である。かゝる事態は、

世界大戰以後、日本資本主義の內包する矛盾が極めて深大なものとなつたから生じた。政治的に解決せねばならぬ問題が異常な困難を含むに至つたから生じた。ブルジョアジーは、自己の資本主義が發展によつて必然に生み出した矛盾の中に泳ぎはじめた。そして、渦卷く浪を乘り切り得ない。ブルジョア諸黨の古船は朽ち過ぎてゐる。

吾々は、昨年四月の金融恐慌の直後に書いて本誌に寄せた一文「吾國資本主義の安定の型、沒落の型」において、謂ふところの矛盾がいかなるものであるかを詳細に論究しておいた。（同論文は拙著「現代日本ブルジョアジーの政治的地位」に收めてある）。日本の資本主義産業は、世界大戰時において急激な變態的膨脹を遂げたが、戰爭がをはつて戰時需要が消滅すると共に俄かに市場の足をさらはれた。尨大な戰時的需要をあて込んで膨脹せしめた生産能力は尨大な資本設備の形態で殘つたのに、作り出す商品に對しては買手がない。戰時の生産は輸出向きであつたから、持越しの資本設備を生かして更に蓄積を續けるためには新らたなる海外市場を獲得せねばならず、その殆ど唯一の目當ては、直接に戰禍を受けない支那であつた。しかるにその支那が、自身の資本主義的發展により、外國資本の侵入と特權とを拒む革命的な打倒帝國主義運動を起した。支那への發展が不可能なのに、國內市場はひどく行き詰まつてゐる。地主の搾取と、帝國主義の重稅と、資本主義の發展が農業を犧牲としたことによつて、窮乏な農民層の購買力は衰へ切つた。零細な小資本家や手工業者や家內工業者が、大資本すら弱つてゐる時に思はしい購買力を持ち合はす筈はない。プロレタリアに至つては論外である。

市場がないとすれば、資本設備を切り落とすより外はない。此の退つ引きならぬ必要は、徹底的整理の標語を生んだ。整理と言へば氣が利いてゐる。減資、合併といへば穩かに響く。だが、事實においてそれらは、大小數千の資本家企業の破産と沒落とを强要することを意味してゐる。徹底的整理への過程は、大小强弱、種々なる資本相互の間の激烈なる鬪爭と、失業者群の增大と、經起的破産が齎らすパニックや恐慌の危險を伴はずにはをらない

ブルジョア政黨とその政府は、支那革命を克服し得なかつたと同じやうに、小作料や課稅の斷手たる減免によつて農民

大衆の購買力を高め得なかつたと同じやうに、破産の續出を意味する整理を敢行し得る筈はなかつた。

戰後、支那革命の發展と絡んで、東洋は帝國主義的紛爭衝突の中心の一となつた。軍事的必要は、戰時日本に發達した戰需品工業わけても重工業の存續及び發展を死活的重要事たらしめた。損益の如何を問はず、否な、いかなる償ひを拂つてもそれらを守り立ててゆく必要、——これがまた整理の進行を妨げた。しかも重工業の保護は、それを支配下におく獨占的大資本の利益とも完全に一致した。

かくして、急激なる物價下落によつて「財界混亂」を激發する虞れある金解禁は、幾度となく延期された。切り落すべき資本設備は、——收益力を失つてゐるにも拘らず、——保護關税や補助金や救濟資金によつて生き延ばされた。これらの「人爲的」政策は、政府事業を喚起して人工的に市場を造り出したことなどと相俟つて、しば〱謂はゆる中間景氣を出現せしめた。お蔭で根柢のない蓄積が行はれ、過剩資本に累加するに過剩資本をもつてした。

一方、たゞさへ貧弱な我國の自然的資源は、戰時における亂費によつて更に一層貧弱となつた。しかるに、戰後產業の規模は戰前に一倍してゐる。原料の不足、わけても軍事的意義ある重工業原料は、隣邦支那において獲得するより外はない。だが、海外における利權や特權の獲得と維持とは、帝國主義國らしい失費によつてのみ可能である。かゝる失費は、直接に資本を救濟し保護するためのそれと同樣、端的に國家財政の膨脹となる。國内の市場問題を解決するための、思ひ切つた減税の必要に當面しながら、歳出の増大をどうすることも出來ない。租税の負擔は大衆を重壓する。大衆の購買力は高まらぬ。灰色の不景氣が際限もなく續いた。過剩資本に累加された過剩資本を處分すべく、整理の善後策を强制すべく、金融恐慌はやつて來た。

六

大正九年の大恐慌以來、幾つかの短命な内閣のあとを承けて、加藤高明子を總理大臣とする憲政會政府の成立を見たのは、徹底的整理の標語が徹底しはじめた頃であつた。年來、「緊縮政策」を標榜し來たれる憲政會は、その政策を唱導しはじめた時の事情とは全く異る事情の下に生じた整理の要求を拾ひ上げ、古ぼけた金看板に結びつけた。かくして憲政會は、當時においてまさに最高潮に達したところの、獨占的資本の要望に忠實であらうと努めた。獨占的大資本は、一方では自己の支配下なる鐵工業の保護を要求してゐた。憲政會政府は二つ返事でそれを與へた。が他方では支配的大資本は、劣弱な資本の併合及びその商權の奪取と、彼等に對して一敵國を成し來たれる鈴木コンツェルンの撲滅を企ててゐた。加藤内閣は、所要の財政政策と金融政策とによつて金解禁を準備しつゝ、ひたすらに此の「整理主義」を押し進めやうとした。しかるに、好事魔多し、整理主義の强行は、多數の中小資本及び一部の大資本を反政府的勢力に結成せしめんとする形勢を招來した。折も折、普選による第一回の總選擧が、ブル黨同士の問題となりつつあつた。大資本の政黨と雖も、投票の數を無視しはしない。憲政内閣の何たる不貞！　主人が禁じた金利の引下げを敢へてして何者かの機嫌を取らうとは。しかるにまた重ね〴〵の不埒！　主人の禁じた台銀救濟を敢へてして鈴木の命を延ばさうとするとは。――憲政會内閣を辭職に導いたのは、樞密院ではなかつた。彼を見離した主人であつた。

健忘性ならぬ讀者諸君は、少數黨の政友會が「棚ぼた式」に政權に有りついた劇的な一齣を記憶せられるであらう。政友會は自己の政策を掲げて鬪爭し、その支持者を獲得して内閣を組織したのではなかつた。ブルジョア的輿論は、政友内閣の出現と同時に、かの由緒ある「積極政策」の實行を堅くいましめた。政友會は、初めから政策のない政黨として政府に立つた。當面の課題であつたところの金融恐慌對策においてさへ、あらゆる無能と無力とを暴露した。そして、あくまでも政權に嚙りつく意地汚なさと、言語に絶した選擧干渉等々の最近の惡化行動の數々とにより大衆的憎惡の的となるに先きだつて既に、「滿蒙積極政策」のだらしなさによつてブルジョアジーからも好い加減愛想をつかされてゐた

七

金融恐慌は、ブルジョア政黨の敢行し得なかつた「整理」を、獨自の狂暴性をふるつて一擧に强行しようとした。驚いたのはブルジョアジーである。まづ眞つ先きに支配的金融資本が悲鳴をあげた。そこで布かれたモラトリアムが、いかなる銀行とその關係企業とを保護したかは天下公知のことである。七億の血税をあてにした巨額の公金が、何人のコールと預金との保全のために費やされたかは天下公知のことである。モラトリアムは、巨大金融資本を安全地帶に囲ひ込むと同時に、多數中小資本の資金を杜絶して沒落に突き進めた。數億の救濟資金は、急激なる預金の移動と相俟つて、一方では巨大銀行に資金を集中せしめてその支配力を相對的に激増し、他方では勞働大衆の汗と脂とのみによつて充塡さるべき大穴を國家財政にこしらへた。政友會政府もまた、彼れに先行せるブルジョア黨の憲政内閣と同樣に、小資本及び勞農大衆の犠牲において獨占的資本に奉仕すべく、動揺の資本主義の浪のまに〳〵漂つたに過ぎない。假りに民政黨がその局に當つてゐたとしても、また當面の政爭の勝利によつて政權を握るとしても、それ以上以外の運命を惠まれることは出來ない。資本主義の發展そのものが作り出した深大矛盾が、しつかりと彼等を捉まへてゐる。

謂ふところの矛盾の克服は、第一に、農民のために土地問題を解決することにかかつてゐる。しかるにその根本的解決は、我が金融資本ブルジョアジーとその政黨の敢行し得るところではない。(拙稿「農民運動の根本問題と當面の問題」——「改造」四月號參照)。矛盾は、第二に、國家資本主義トラストの形成を主要内容とする産業合理化の促進によつて部分的相對的に克服せられる。そしてそれと共に第三に、資源と市場とを隣邦支那に獲得し、維持する帝國主義政策の遂行によつてのみ、同じく部分的相對的に克服せられるであらう。だが、國家資本主義的トラストの成熟と帝國主義政策の前進とは、現形態の矛盾を實行的に緩和すると同時に新らたなる、ヨリ深刻な、ヨリ尖鋭な形態において再生産するところの、

矛盾の螺旋狀展開を行はしめる過程に過ぎない。それにも拘らず、ブルジョアジーは、自身の資本主義によつて決定された此の宿命的な一路を進むより外はない。そして、欺瞞的な農業政策（例へば謂はゆる「自作農創定」の如き）と、國家資本主義トラストの促進及び帝國主義の強行のために必要なる一切の政策とを、比較的成功的に押進め行く職業政治家の一群にこそ、ブルジョア政黨政治家としての甲斐なき榮冠は歸するであらう。

　金融恐慌から現在までの發展は、本質的差異を失つた二つのブルジョア黨をして、その當面具體の政策上の差異さへ失はしめてしまつた。農村政策における一致を見よ。金解禁に關する一致を見よ。金融政策、鐵トラスト案に關する一致を見よ。更にまた、支那における國民革命の一時的退潮と南北兩勢力の暫行的均衡、並びに英國のひたすらなる硬化と米國の進出とは、對支政策、對露政策における一致をさへ齎らしつゝあるではないか。

　政策において爭はない「二大政黨」による政權の爭ひ、――それが當面の政局の一つの意味である。それは無意味な意味である。それ〳〵に獨自の政策とその遂行能力とを失つた二つのブルジョア黨が、剩へ對立し鬪爭するといふのでは、ブルジョア階級そのものにとつてさへ無意味であらう。まして、その二つの政黨からは、反動政治の當面の實行者を選擇せよと強ひられてゐるに過ぎない被抑壓諸層にとつてをや。――かゝる諸層の諸要求を體現する進歩的、民主主義的政治勢力は既に結晶しつゝあるのである。後者にとつての唯一の意味は、兩黨の對立鬪爭の利用でなければならぬ。それによつて、ブルジョア兩黨の破綻と沒落とを促進することにあらねばならぬ。そしてそれは、新興の政治勢力そのものを無産階級中心に結集し強化する努力と並行する時にのみ可能であらう。

　資本主義社會の基本的矛盾――資本家階級内部の競爭、社會的生産の無計畫無統制無政府、搾取階級と被搾取階級との對立鬪爭――の發展が、それを必然ならしめる。その發展の現段階は、明かに、ブルジョア黨を沒落に導き入れる轉期を劃してゐる。政友會が、政府黨として總選擧に臨み、歷史的な大干渉を敢へてしてなほ多數を制し得ず、剩へ公然と議會

政治の否認を高唱して益々自らを窮地に陷れた時、一部の有力なブルジョアジーは、早くも、政黨としての政友會の失脚と解體とを豫言したと傳へられる。

さまざまなエピソードを遺しつゝ滅びるものの滅びる時が來た。歴史の車輪が廻つてゐる。

八

一部の資本家論者の豫言は直ちに適中しないかも知れぬ。或はするかも知れぬ。吾々は、此種の豫言に大した興味を置くものではない。

だが、二大ブルジョア政黨の何れか一つの衰亡崩壊によるにせよ、また兩者の間の離合聚散のゴタゴタを通じてにせよ、議會におけるブルジョア政黨全體としての勢力の失墜は、プロレタリアを含めた下層人口のかなりの多數が選擧權を得た今においては唯だ時の問題として殘るのみである。一つの重要問題をも勞農大衆の利益において解決し得ざる身分にまで落ちぶれ、從つて決して勞農大衆及び小市民層の進歩的輿論を體現し得ないところの「既成政黨」が辿らんとする道は運命的に劃されてゐる。急速に政治へと進出する新興の政治勢力が、彼等に取つて代らねばならぬ。新興勢力の勃興は、ブルジョア諸黨の分裂を再編制への直接的な促迫である。その序曲としてはすでに「革新黨」の末路と「政友本黨」の生滅の描き曲があつた。しかるにまた當面の議會では、解散に次ぐ解散がブルジョア諸黨を脅かしてゐる。かの「一時の問題」は、決して其の解決に暇取らぬであらう。

新興政治勢力の構成要素としては、無產階級を中心勢力に、農民及び小市民がある。

貧農が壓倒的多數を占める我國の農民層は、その生活と地位とを實質的に向上せしめ得る何等かの施設、方策を、我がブルジョア政府に期待することは絶對に不可能である。貧農は、地主の利益を犧牲としてのみ、收穫及び土地のより多く

の分け前を得なければならぬ。しかるに眞實にそれを與へることは、或は地價の暴落を惹起し、或は土地私有制の根本を覆へす。貧農は更に、農業の生産力を格段に高めることによつてのみ、生活の基礎を確立せねばならぬ。しかるに、現制度の下で農業生産力を高めるには、資本の増投による外はない、而かも資本が農業に流入すべき一切の道は塞がれてゐる。資本家化した地主階級と、土地に放資する金融資本ブルジョアジーとの間に、後者を覇者として結ばれた神聖同盟は、一方では飽くまでも貧農大衆の運動を抑壓し、他方ではます／＼金融關係と獨占價格と租税政策とによつて農民搾取を強め行くところの、ブルジョア政治の强行を必然ならしめる。民政、政友の兩黨が爭つて賣物にしてゐる「自作農創定」の政策の如きは、土地問題解決の假面をかぶつた、金融資本の農村進出を意味し、從つて農村振興の名の下に市場問題の緩和を企圖しつつも農民の欺瞞といふよりは寧ろ自己の欺瞞に終るべきほどの愚策に過ぎない。

一方、小市民の窮乏化は、金融恐慌以來特に急速に深められた。余りにも露骨に小所有者（小預金者その他）の利益を無視せねばならなかつた資本家政府の恐慌對策は、異常に小市民層の政治的自覺を促した。無産黨に投ぜられた投票のかなりに多くが此層のものであつたのは不思議でない。九年恐慌以來、多數の賃銀勞働者の陷つた慢性的な失業狀態と現實の失業者群の漸増と更に金融恐慌によるその激増、——それは、近年の謂はゆる「人口問題」を形づくる過剩人口の實體をなしてゐる。が、吾々が既に指摘したやうに、我國の「下層小ブルジョアの大多數の生活は、戸主乃至は家族の定期不定期の勞賃所得に少なからず依存する。不景氣はかゝる所得を切下げた。我國の家族制度、『家族主義』は、最も姑息なる失業者收容機關として、失業者の不滿反抗の緩和劑となり、資本家の不當解雇を容易ならしめるが、同時にそれは全家族を半失業狀態に陷らしめ、廣汎な小市民大衆の窮迫を深める。」（拙著「現代日本ブルジョアジーの政治的地位」二四頁）そして「此の層に屬する家族にして勞賃所得者たる者の少なからぬ部分は、プロレタリアに近似する下級サラリーマンである」（同上二四頁）。

すでに獨占の段階に達した我國の資本主義は、その似合ひの機構としての國家資本主義トラストの急速なる成熟過程において、ます／＼小所有者の獨立性を失はしめて行く。ブルジョアジーの帝國主義政策が不測の大成功を收めざる限り、而かも決して收めないであらうが故に、此の社會層に小資本家をも加へた廣大な中間層は、ひたすらに獨占的大資本の壓迫の下に立ち、その「横暴」に對する絶望的な反抗にまで押進められる。稍や上層のサラリーマンその他から成る「知識階級」も、産業の合理化と企業のトラスト化とによつてます／＼失業と就職難の脅威に摑まれる。

赤裸々な生活問題が、農民及び小市民大衆を驅り立てる。そして、地主＝ブルジョアジーの反動的政治支配に對する對抗勢力たらしめる。此の民衆層は、それ／＼の立場からにもせよ結局、政治的自由及びデモクラシーの獲得によつてのみ窮乏沒落と抗爭せざるを得ないが故にまた必然的に、獨自の歴史的鬪爭を鬪ひつくす政治的プロレタリアートの豫備隊であらねばならぬ。

九

反動化によつて沒落への一歩を踏み出しつゝあるブルジョア政黨と、端的にこれと鬪ふべく擡頭し進出する急進的無産政黨との中間に、中農をも含めた小ブルジョア的勢力を代表する政黨が發生し、成長し得べきことは、吾々はこれを歴史的必然的な一傾向として認識する。當面の政局においても既に、此の傾向への動きと見るべきものがないではない。もちろん、此の議會における二大政黨の勢力關係が、謂はゆる中立議員の地位を異常に重からしめてゐるといふ特殊の情勢に即してのことではあるが、例へば鶴見祐輔君の「新自由主義」の新黨組織の如きは、もし何ものかの萌芽であるとすれば小ブルジョア政黨への萌芽以外のものではない。又もちろん、革新黨の殘黨組の如きも、夙に小ブルジョア黨の結成を狙つてゐた。だが、此の殘黨組にせよ、またこれから大いに理想主義を鼓吹しようといふ鶴見君一派にせよ、そのまゝで小ブ

ルジョア黨の指導者をもつて任ずるならば大した誤算であらう。小ブルジョア層は、それ自身獨立の政治的勢力を形成し得ない社會層である。この層は、その社會的地位の中途半端なことからして、また構成分子の雜然たることからして、決して強固たる方向を有つことが出來ず、時には支配的ブルジョアジーに追隨し、時にプロレタリアートに追隨する。いかなる資本主義國においても、表面的にも多かれ少かれブルジョアジーとの對立を續ける小ブルジョア政黨は、すべて勞働階級と結びついてゐる。實質上の小ブルジョア黨は、例外なく、日和見主義のプロレタリア指導者に率ゐられてゐる。例へば、イギリスの勞働黨、ドイツの社會民主黨、等。舊革新黨の「急進分子」の失敗は、――そして鶴見君によつても繰返されるであらう失敗は、――直接に勞働者運動と結びつかなかつたことにある。一方、わが社會民衆黨は、夙にプロレタリア黨と小ブルジョア黨との岐路に立ち、既に後者に向つての數歩を踏み、なほ踏み進まんとする不斷の危險に曝されてゐる。階級的態度行動を明確にする必要の最大なる此のクリチカルな政局に際し、無産諸黨の議員團の共同戰線が、ひとり社民黨の行動、主張によつてのみ破壞せられんとしてゐるのは、同黨のみが無産黨の軌道を踏みはづしてゐるからである。他方、日本農民黨の二三の幹部は各農民組合の合同を機會に、これを基礎とする獨立の農民黨の組織を主張した。歐米においても、一時的な特殊の農業事情の發展に刺戟されて農民が獨立の政黨をつくり、相當の勢力になつたことはある。しかし、いづれも數年の短命にをはり、何等かの實質的利益を農民に齎らす代りに、たゞブルジョアジーの利用するところとなつたに過ぎない。吾々がしば〳〵指摘し強調した通り、我國の農村事情、都市勞働と農村勞働との關係、わが資本主義經濟における農業の地位、わが支配者階級の階級的構成等は、獨立の農民黨を無意味ならしめると同時に、勞働者と農民との協同戰線をこそ可能ならしめ、また必要ならしめてゐる。單なる農民黨を企圖するものは、故意であれ過失であれ、農民を支配者階級に賣るであらう。

我國の無產階級は、全人口の多數を占めず、農民に比すれば遙かに少數である。けれども、數の大小は、決して、政治的勢力としての階級の强弱優劣を決定しない。階級としては恐らく十萬にも足らぬ少數の大資本家階級が現に全日本の政治を支配してゐるではないか。言ふまでもなく、反動的政治勢力としての支配的ブルジョアジーに對立する決定的な政治勢力は、たゞ無產階級あるのみである。プロレタリアこそは、その日常生活においてさへ、正面から資本家と對立し、失ふべき一物も有たないが故に逡巡と動搖なしに自己解放の鬪爭に直進し、しかも多數の「兄弟」と共に工場に都市に集中せられて容易に團結の威力を發揮する。組織は力である。被抑壓階級のうち唯だ無產階級のみが有する力である。こゝに、中途半端な、逡巡し動搖しやすい農民や小市民と異つた、プロレタリアート獨自の階級的特質があり、本質がある。無產階級のみが、全民衆層の鬪爭の先頭に立つ指導的階級である。

すでに議會主義の政治を我物としたブルジョアジーの基本的階級的政策は、此の無產階級を孤立せしめて小ブルジョア層を自己の支配下に置くことにある。わが支配的ブルジョアジーが與へた普選は、新有權者の投票の殆んど大部分を小ブルジョア層に傾つた。そして、第一回の總選擧の結果は、小ブルジョア有權者の投票の大部分のみならず、また實に、勞働者有權者の投票の一部さへがブルジョア政黨に投じられたことを示した。明かにこれは、――少くとも投票の關する限りでは――、ブルジョアジーの基本的階級的政策の成功を物語る。この點は、眼前の事實として吾々は率直に承認せねばならぬ。

が、それにも拘らず、深刻な資本主義的矛盾のうちに自らを見出したブルヂョアジーは、勞働者農民の驚くべき政治的進出に當面して、自己の支配の動搖のはじまつたことを知る。いまや、ブルヂョアジーとその政黨が、搾取者の支配を維

持し強めるために、都市と農村の小ブルヂョア層を獲得する必要はまことに死活的となつた。かくしてその懐柔と欺瞞とのために立案された地租委讓案や農地金庫案や營業税減免案その他の、等々の「社會政策」(一)的施設や法案が日程に上つた。だが、彼等は、進んで勞働者層の一部をさへ獲得すべく、無産政黨に小ブルヂョア黨の魂を打ち込まねばならぬ。そこにわがブルジョアジーの勞働政策の眼目がある。この政策は、プロレタリア戰線の最も戰鬪的で強力な部分に極度の彈壓を加へて意識の低い勞働者層を威嚇しつゝ、軟弱で妥協的で容易に資本家と取引をする部分に特別待遇を與へてこれを伸ばせるだけ伸ばすことによつて遂行せられる。それは全運動を骨拔きにする。

だが、――政治的進歩のために幸あれ、――わがブルジョア階級は、骨拔きにするほど有効に懐柔政策を遂行し得る余裕と力とを有たない。戰後、我が大資本に率ゐられる資本家階級は、慢性的な不景氣と恐慌の頻發となつてあらはれる深大矛盾を克服すべく、徒らに必死の努力をつゞけて來た。それは、勞働階級に對しては、不當解雇と、賃銀の切下げと、勞働條件の低下とを強ふるにあつた。そして國際勞働會議において提唱または決議された初等的な勞働立法をさへ拒み、勞働者の雇傭條件を飽くまでも劣等國の水準に引下げて置くために、有らゆる方法が講ぜられた。勞働組合には決して法律上の存在を與へず、極めて單純な罷業をさへ警察力で壓迫しないことはない。勞働者階級の生活を極度まで引下げて置き、少しでも有効な仕方で反抗すればそれを「過激」と叫ぶ。そしてプロレタリア獨自の鬪爭を抑壓するために、言論と集會と結社の自由を奪ふために、四十年以前に制定された古典的な人權蹂躪法を廢さないのみならず、新らたに「治安維持」の名をもつて暴虐此上もなき社會運動鎭壓法を制定した。

かくして、資本主義固有の疾患たる不景氣と恐慌とより生ずる一切の損害を自ら負擔せずして之れを被抑壓大衆、わけても無産階級に負擔せしめること、――これが、獨占的大資本の努力の中心であつた。すでに、單なる勞働組合をさへ絞め殺すつもりならば、勞働政策の全基調は必至的に狂暴な彈壓主義でなければならぬ。

二

彈壓政策は、金融恐慌以來ます／＼兇猛になつて來た。反抗への十分な理由なきところに反抗はない。その反抗の最高は、いよ／＼反抗をつよくする。彈壓主義の當然の歸結は、プロレタリア運動をます／＼戰鬪的ならしめた。七ケ月に亘る野田爭議を代表的なものとする最近一年間の勞働爭議一般の記錄がそれを示してゐる。爭議の記錄はまた、ブルジョアジーの努力が今や爭議の抑壓より進んで組合そのもの〻破壞に集注されてゐることを示す。そして、これは必然にプロレタリア運動の一切の組織の破壞への前提である。

ブルジョアジーが何よりも恐れるのは、無產階級の政治的進出である。その政治勢力の勃興である。それは、他のあらゆる被抑壓層を政治的大衆的に動員して彈壓主義の牙城に迫るであらう。――かくしてまた、選擧戰の無產黨に對する猛獸的な彈壓は必然であつた。（ブルジョアジーが如何に無產黨議員の當選を恐れたかについて、目擊者から筆者が直接にきいた所によると、開票の當日××クラブにあつて刻々の報告をきいてゐた著名な大資本家達は、はじめ無產黨議員の當選が相次いで三名まで報ぜられるや、色を變へて驚愕の叫びをあげ、右往左往を久しくしたと）

本稿の執筆半ばなる時、都下の新聞は一齊にセンセイショナルな記事をかゝげ、謂はゆる「日本共產黨事件」を報道した。

新聞紙の報ずる所がすべて事實であつたと假定しよう。然らば吾々は何よりも先づ、此の「事件」は、…………がその最尖端を暴露したに過ぎないことを見る。吾々は、上來究明し來れる所によつてすでに、わが國ブルジョアジーの彈壓主義の依つて來るところがいかに深いかを知り、またいかにそれが、被抑壓民衆の中心勢力たる無產階級に對しての、唯一のしかも一貫せる政策であるかを知つてゐる。吾々は今や、此の「事件」が、此機會にかの…………の發展における絕頂

の一なることを「事件」が展示しつゝある具體的事實そのものによつて疑ふことが出來ない。更にまたそれが、プロレタリア運動の一切の組織の破壞を企圖してゐることを疑ふことが出來ない。見よ、僅か百數十名の黨員を有するといふ「共產黨」の檢擧を機會として、無慮一千余名の勞働運動者及び農民運動者を警察に拉致し、拘留狀態に置いた、直接の革命的情勢が展開してゐたとしたら止むを得まいが、若し然らずして斯かる檢擧の方法がとられたとしたならば、それは何等の確證なくしての檢擧でなければ全勞働運動の威嚇とその組織の破壞のための陰策なることを物語る。果せるかな一秘密結社の檢擧が、公然の政黨として現に二名の代議士までを有つ勞働農民黨と、公然の勞働組合としてすでに五ケ年の存在を續け來れる評議會との解散を伴はねばならなかつた。そして、解散された勞働農民黨の當事者に黨再組織の許可とその方法の範圍とを明言した翌日に、組織準備會そのものの解散をさへ敢へてした。更にまた、學生の研究團體の撲滅を要求し、多數の大學教授の罷免を企圖してゐる。しかも、——最も重要な事だが、——これらすべては、政府の謂はゆる「重大事件」となすところのものが、法律上果して犯罪を構成するか否かすらが未だ不明なる時に、一擧にして强行せられんとしてゐるのである。

……………………………………………………

日本共產黨の檢擧が重大事件であると政府はいふ。然り、重大である。だが、反動的支配的ブルジョアジーと、それとの抗爭を必然ならしめられてゐる被抑壓大衆とにとつては、正に正反對の意味において！

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

…………

小山檢事總長は、「日本共産黨」の責任を前提し、その發生と發展とが我國の「社會組織の缺陷」に原因すると述べたと傳へられる。吾々は、その「缺陷」がいかなる形態において、いかに被抑壓大衆の生活と政治的意見の上に作用しつゝあるかを具體的に究明した。かゝる作用が存在し、ますく強まつて行く限り、支配者流がいかなる暴壓法をもつて臨むとも、、、、は必然的に無産階級の要求となり、…………………………………………、……………………………………………………、現はれるであらう。

「日本共産黨事件」は、反動的ブルジョアジーが、その基本的階級的政策の精髓の發揮として、自己に對する政治的勢力の最強なる分部を目指して……………………………のみ理解される。……………が、彼等の主張する如く愚劣なものであり、從つて共産黨運動は決して發展せず、從つてまた被抑壓階級の全運動が…………によつて決して强められないと信ずるならば、彼等は決して治安維持法を制定しなかつたであらう。

突如としていま吾々の前に現はれた……は、ブルジョアジーの一貫した政策であるところの、無産階級孤立化の政策の最も尖鋭な現はれである。從つて此の政策においてブルジョアジーに勝利せしめ、彈壓の前に屈することは、ひとり無産

階級のみならず、被抑壓大衆全體の、政治的進步のための全運動にとつてまことに致命的であるであらう。

もちろん、此の大檢擧が、特に臨時議會のクリチカルな政局を前にして行はれ、發表されたこと、從つてそれを田中反動内閣の議會切拔け策に利用せんがためであること、等、等は、余りに見え透いたこととして識者のすでに指摘したところである。この倆策は、就中、無產黨議員の政友會内閣倒壞の協同戰線を破壞することに眼目が置かれてゐる。だが、各無產黨は、……に面していよいよ尖鋭化されたる階級意識の下にますます戰鬪力を結集して反動政府に當り、無產階級その他一切の被壓迫大衆に加へられたる威嚇を決然として反撥し、政治的自由とデモクラシーのための歷史的鬪爭の擔ひ手としての無產階級の政治的威力をこそ高めるであらう。

臨時議會をめぐる當面の政局は、新興階級の政治的首途の偉大なる一步が踏み出されることによつて歷史的意義をもつ。かくしてそれはまた、偉大なる政治的過渡期の集中的表現である。

政治不安と社會不安の展望

政局不安の社會的意義

那須 皓

現下政局の不安が各方面から問題視せられてゐる。源平兩氏の如く相分れて政權を爭ふ政友、民政兩黨のそれぞれの立場や、其の他如何なる政黨的立場にも偏することなく、單なる一國民として時局を眺むる時、最も重大なる問題として我々の腦裡に泛ぶことは、如何にして政局の不安が除かるべきや又は直後の政權が何黨の手によりて掌握せらるべきや等の事柄ではなくして、寧ろ此の政局の不安が本邦の社會的發展に對して如何なる意味を有するや、また政權の移動が政治の實質的改善を伴うや否やと云ふ點に存するのである。

政局の不安そのものは直ちに之を以て國家の災厄視すべきではない。絶對過半數を擁する政黨が往々にして意傲り氣緩みて黨利を以て國利よりも重しとなし秕政百出の誤りを犯さりし過去の事實を顧れば、不安なる政情の下に多數黨の横恣を見ることなく、有力政黨に對して改過遷善の機會が與へられたことは、決して悲しむべきことではない。少數なる第三者がキャスティング・ヴォートを握ることの利弊は、其の少數者の政綱並びに態度の如何によりて決定せらるべきことであつて、これ亦直ちにそれを以て不幸と看做すべきではない。唯政局不安の爲めに必要なる法律も制定せられず又議會が屢々解散せられて豫算不成立となることは、新しき施設を要求しつつある進歩的國

家としては確かに不利たるを免れぬけれどもこれとても新しき法律や施設が必しも全部適當なものではなかつたこと、並びに豫算不成立の結果が直接に國民の大多數に甚しき惡影響を及ぼすこと稀なりし事實を顧ると、上記の不利なるものも相當に割引して考へる必要がある。されば新事業費を要求せし官廳の役員や、國家の補助金下附を期待せし會社の重役などが感ずるほど、然く重大なる災厄として豫算不成立の事實を受取る國民は、餘り數多くは存しないのである。それは一面には最大多數の國民が所謂政黨爭ひや地方的利害問題を離れて廣く國政全般に關する諒解や興味に缺けて居ると云ふ事實に由るところも勿論大であるが、又一面には國民全般に對して最大の關心を要求する如き新施設が滅多に無かつたと云ふ事實にも基いて居る。又かかる新施設新政策の考へ得らるるものがあつても、餘りに日和見的なる在來の政治家諸君には一切を擲つて之を斷行する丈けの信念と氣魄とを缺いて居つたから、自然、國民的信賴も之に集らなかつた次第である。屢々期待を裏切られたる國民は、終に眼前の地方的乃至私的利害關係に捉はれて狂奔する以外には、一般政治に對する冷笑と輕侮と無關心とを養ふに至つた。個人的には相當に善良なる人々も既成政黨の大なる舞台の上に躍る時には黨利本位と御都合主義との雰圍氣より脫却する能はずして均しく曖昧なる灰色に塗らるる實例を數多く目擊したる我々は、既成政黨の何れに對しても同じ穴の狢であるかの如き感想を抱くに至つた。故に政權が甲乙兩政黨の何れに赴くかを撰ぶ心は、多くの場合、在野黨を朝に立たしむることによりて刮目すべき善政の到來を積極的に期待する心持ちよりは、寧ろ消極的に在朝黨の堪え難き秕政より逃れむとする念慮によりて動かさるること切なるものがあつたのである。法律案や豫算案やは二大政黨の何れにも根本的なる相違を見ぬものであり、その意味で議會の解散又は政權の移動等につきては主として個人的興味をそそられたに過ぎない。見樣によりては保護干涉主義の過度なる弊に苦しめる本邦としては、年々膨脹を告ぐる豫算の不成立は敢て大いに悲しむに當らぬことかも知れない。斯く視する時は、在來の政局の不安は對內的よりも對外的に憂ふべき結果を招來するを慮るべきであつたのである。此の樣な事情が日露戰後の我が政界を領した。普選實施に至る迄最近約二十年間はブルヂョア政黨間の關葛藤に終始した我が政界の惰眠時代と云ふてよいかも知れぬ。但し此の惰眠時代に於て官僚勢力を驅逐して政黨政治が權威を占め來りしことと、國民の眼中に於て議會の尊嚴が大いに失墜せしこととが相並むで進行したことは、洵に面白き對照と云はざるを得ない。一見矛盾

せる如き此の兩事實の並存は、想ふに下の如くに説明せらるべきではなからうか。即ち政黨政治の發達は今日の議會の內容そのものの肯定を意味せずして寧ろ民衆的勢力の伸長を意味したに過ぎない。而して政黨勢力の增大は、軈て其の墮落を來し、ひいては國民の議會に對する信望の低落を招いたのである、と。更に斯かる政黨の墮落は我が資本主義的企業の發展階段が、政治家と實業家との種々なる提携結托を緊切且有益なりと資本家に認めしむる如き狀態に達したと云ふ事實を背景として考へられねばならない。

兎も角も政黨政治が次第に確立せられ來ると同時に、議會そのものの信望が衰へて來たことは、一の皮肉であつた。斯くて國民の大半が殆んど議會政治に愛想を盡かし果て、一部勞働階級間には議會政治の無視、直接行動の必要さへ唱へられ始めた頃、茲に新しき情勢を導き出すの意味を以て、忽然として普通選擧制が布かるるに至つたのである。而して第一回普選の結果は、我々の當面せる新しき政局の不安を生むに至つたのである。

政局の不安が總括的に嫌ふべきものでないことは前述した通りであるが、我々は現下の政局不安について特に考へさせられる何物かを持つて居るか。又それが日本の社會的政治的發展と如何なる關係を有して居るか。今日我國並びに全世界を蔽ふて居るところの社會的不安と、現下政局の不安とは如何なる交渉を有するものであるか。これに就て以下少しく所思を述べたい。

第一に考へられることは、現下政局の不安は最近の出來事であり何等かの形で一旦の解決は其のうちつくであらうが、社會的不安は其の淵源するところ遠く、容易に短年月間に解決されないと云ふことである。而して社會的不安が解決せられざる一方、政治が國民大衆の實生活に即したものとなり大衆の意嚮が實際政治の上に反映せらるゝに至れば至るほど、政局の不安は今後も繰返して發生するものと豫想せねばならぬ。何となれば今後は次第に小黨分立の勢ひを生ずべく、二大政黨の對立によつて一切の問題の片がついたり、又は一黨が永く議會の絶對過半數を擁して政權を占むるが如きことは次第に困難を加へ來ると思はるるからである。これは少數乍らも無產政黨の議會進出によつて豫言せられたる情勢であり、各國の事例によつても然く想像せられる。之と同時に今後の政局の不安は益々社會的不安と密接なる關係を有するに至るであらう。現に先頃の內閣更迭にしても銀行取付けと云ふ經濟的事實が機因をなして居るが今回の特別議會に臨む社會民衆黨の昨今の不鮮明なる態度は野

田爭議を有利に解決したいと云ふ同黨幹部の意嚮と何かの關係があるのではないかと、局外者には想像される。政權爭奪の爲に術策を弄する政治家は何時の時代にも絶えないであらうが、陰謀の種が抽象的論議であつては世人が次第に相手にしなくなるのである。そこで具體的社會問題の解決方針の如何が、今後の政局不安に際しての各政黨の離合を力強く決定するに至るに相違ない。そして政局不安は單なるブルヂョア政黨間の問題たるに止まらずして、ブルヂョア的、プロレタリア的、又は中間的諸見解の結合狀況に基く問題となるに相違ない。昨今の新聞紙上に若し民政黨の政府不信任案に無産政黨が獨自の見解から贊成したならば、無産政黨の其の見解を否とする理由により議會を再解散すべしとの議論が政友會内部にあると傳へて居るが、そんな理由で解散するならば、ムツリニ式彈壓を加へて無産黨を絶滅せさる以上、今後の議會は解散ばかりを繼續して結局無議會同樣になつて仕舞うであらう。かくして國民的憤激を買ふことは政友會自滅策として最も良好なるものである。無産政黨の結黨を認め乍ら、こんな解散理由を擧ぐることは、嗤ふべき矛盾であり政友會も餘りに惑へるものと許せさるを得ない。

目下の政局不安は新聞的興味の中心となつて居る。併し重大性から云へば野田爭議や小作爭議等に具體化されて居る社會的不安の方が遙かに多大の關心を吾人に要求するものである。此の當然なる要求が今後の政情不安の過程を通じて次第に其の重要さを認められて來るを疑はない。現に政友、民政兩黨共、社會政策的諸立法に昨今異常の熱心を示し始めたのである。議會政治の意義に關し、又社會問題の取扱方について往々にして可なり反動的且非實際的な論議を耳にすることがあるが、これも決して時勢の逆轉を示すものではない。否、左右兩翼よりの極端な言動の對立裡に於て、また社會思想の混亂裡に於て、私は徐々に新時代の誕生の近づく歩みを感知することが出來るやうに想ふ。

上述せる如き大體的感想を有しつゝ目下の政局不安を眺めるならば、私は玆に少くとも二つの潮流が相俟つて今日の政情の底を流れて居ることを認めざるを得ない。

第一は選擧に對する官權の干渉壓迫や怪文書事件等に關する國民的憤激の念である。之は國法の尊嚴を認むると同時に法により許されたる範圍内に於ける個人的自由を確保せむとする要求に出づるものであつて、封建的警察政治に對する近代の自由主義的立憲政治の爭ひを意味する。岡つ引政治が今日の本邦に對して時代錯誤なることは、今回の選擧の結果が之を證明して居る。此の一度燃やされたる憤激の念は、今後の政府當局が不

當に勢力を利用して勝を占めむとすることを次第に困難ならしめるであらう。選擧公平主義を唱へずして選擧第一主義を唱ふる政府からは國民的信頼が離れ去るであらう。警保局長や警視總監を特に重視した政府は今後此の封建的警察政治の餘臭より脱却せねばならぬ。

第二に今回の普選を機として自由主義的見地よりする政治の合理化が強く要求され考へらるゝに至つたことを見逃す譯にはゆかない。武藤氏の實業同志會は所屬議員の數こそ減じたれ、其の主張する主義の或者は漸次に既成政黨をも動かすに至るべき力を有して居る。此の自由主義的思想は武藤氏や實業同志會の興廢などに關係なく獨自の進み方を取り得るものである。鶴見氏なども此の傾向を代表するものであるが、革新倶樂部や民政黨なども思想的には之に近いものと思はれる。既成政黨の改造によるか又は新政黨の誕生によりて有力なる自由主義政黨が現はるることは未だ相當の年月を要することと思ふが、兎も角も其の機運は既に動いて居る。自由黨以來の傳統を有する政友會内部にも自由主義者は若干存することと思ふが最近一向その聲を聞かぬのは何故であるか。兎も角も今後既成政黨の間に政綱に基く離合集散を起して明確なる保守黨と自由黨とを生ずるに至ることは望ましい。而して商工業者は多く自由主義に傾くかと思ふが農村民は保守黨及び無産黨によりて多く分屬する傾向を有するのではないかと疑はれる。此の自由主義の擡頭も我が經濟界の現狀によりて促されて居るものではあるが、これのみで今日の社會不平を解決しうるものとは私は信じない。

第三に無産政黨の進出は今回の選擧を特色づけるものであり、其の向背が政權の移動を決する上に重要視せられて居るが、かゝる事態は今後も増大こそすれ消滅するものではないと信ぜられる。更に無産階級の政治的進出が今日の社會不安を背景として居るものであることは、云ふまでもないことである。

之を要するに今迄は政局の不安と社會の不安とが別々に進んで來たが、今次の普選を境として此の兩者が密接に結びつくに至つた。政治が職業的政治家の權力爭奪戰を意味するに止まらずして社會的不安に對する解決の努力を意味するに至ると同時に、政局の不安は今後はより大なる社會的危險を包藏するに至るかも知れない。併しその危險は政治の退化を意味せずして政治の進化に伴ふものであるから、我々は徒らに時勢を逆轉して往時の心易さに安むするを望むべきではない。而して最も堅實に且進歩的に今後の政局不安に處してゆく爲めには、朝に立つ者の態度が至公至正なることと、國民教養の向上とは最も基礎的なる必要條件である。選擧法其他の改正も之を斷行すること

とが併せて必要であが、之を論ずることは今は差し控え、唯政局不安は國民の聰明によりて裏付けられるならば、却つて政治の實質的改善を齎す可能性あるものなることを附言して擱筆する。

（三月六日）

政治的社會的不安の光明性

林　房　雄

つい最近、ある地方を旅行した際に、次のような挿話（エピソード）を土地の青年から聞かされた。

その地方で、地價修正が行はれることになり、そのための調査委員があげられたが、役所から通達があると、村の大地主と有力者達が勝手に委員になり、仲間同士のお手盛りで、自分達の肥沃な土地に比較的税が少なく、小地主や自作農の雜巾みたいなボロボロの土地には割合多額の税がかゝるように、勝手な調査を作りあげてしまつた。そこで被害者達が腹をたて、縣廳にねぢこんだが、あとの祭りでどうにもならない。それではといふことになつて、土地の代議士の某に、どうぞ御盡力のほどを、と申し出たら、その代議士の曰く

「それはお前さん達の勝手といふものだ。お前さん達が、わしを代議士に出したのは、何もわしの人格を信用したからとか、わしが議會でお前さん達のために盡すと約束したからとか、そんな理由ではなかつたではないか。この前の選擧の時も、その前の時も、お前さん達は、一票何圓と値段までつけて、わしからどつさり金をとつて行つたではないか。——投票も買つてくれ、自分達に都合のいゝ要求も通してくれと、一つの石で二つの鳥を狙ふのは、あまりに蟲がよすぎる。地價修正がどうならうと、わしは代議士として責任は持たん！」

で、請願者諸君は、一言もなく、すごすごとひきさがつたのだといふ。

そして、更に興味あることには、この政治家は、今次の「普選第一回の總選擧」ででも、見事に最高點で當選してゐる。土地の新聞が公然と發表したところによると、彼の選擧費用は內輪に見積つて十五萬圓だとある。

まるで、アリストファネスの喜劇にでも出て來さうな話である。だが、わざ〳〵これをこゝに引き出したのは、そうした諷刺的効果を狙つたのではない。現代日本の政治が如何なる現實の姿をとつてゐるか？　如何なる程度に、金權的政治であるか？　それを物語る恰好な縮圖として、この挿話に讀者の注意をひきたかつたからである。

何時であつたか、ある比較的自由主義的な代議士の議會での演説の中に、こんな意味の言葉のあつたことを、讀者は記憶してゐるであらう。

「現在の政黨は、平素に於ても何十萬圓、總選擧の時の如きは何百萬圓も使ふが、この金の出所は非常な秘密であつて、恐らく政黨員諸君も御存知ないことと思ひます。この秘密の鍵は總裁その他、僅かに二三人の人が握つてゐて、他には絶對に知らせないのであります……」

この「秘密の鍵」の彼方から出て來た莫大な金が、即ち既成政黨の「地盤」製造費なのである。

今次の總選擧で、初陣落選の光榮をになつた無産政黨の候補者諸君が、口をそろへて慨歎してゐることは、既成政黨の「地盤」の堅牢さであるが、無理もないことで、既成政黨の「地盤」なるものは、かのローマの都にも似て、決して一日でなつたものでない。それぞれの政治家の下には、專門の地盤掛りが附屬してゐて、平素からちやんと撒くべきものを撒き、刈入れるものを刈り入れて、用意をとゝのへてゐる。半月やそこらの「爭論戰」で、揺り動かし得べき性質のものではない。——例へば、村の五郎作が死んだとする。彼が有權者である場合には代議士の名でちやんと弔電が來、金一封がとゞけられる。その五郎作がたま〳〵村の有力者である場合には、ちやんと葬式に間に合ふように、弔花や弔旗が、地盤掛りの手によつて、とゞけられる。そればかりか、村の祝ひた、青年會の寄附たといふその度毎に、その政治家の名前のついた金一封や銘酒一樽やが村人の前に現はれる。…………それから、いよいよ選擧間際になつて來ると、特に投票日の早朝には、裏木戸を叩いて、運動員の誰彼れが、現なまをほうりこんで行く。

「金をほうりこんで行く現場をこの眼で見ても、あとで一家もろとも村をおん出される覺悟がなければ、うかつに摘發も出來ない仕末です。」

と、これはさきの挿話を聞かせてくれた青年の述懐である。

こうした消息に通じてゐるものは、今度の「普選」によつて、新らたに選擧權を得た、一千萬の中産以下の新有權者の投票

が、ことごとく既成二大政黨に吸收され盡したからといつて、別に怪しみはしないであらう。政府筋、既成政黨筋の無產政黨に對する樂觀的豫想も、彼等がこうした事情を百も承知してゐたからに他ならない。

今のところ、日本はまだ金權政治の完全狀態にあるといつても過言ではなからう。少數財閥のポケットマネーが、既成政黨の手を通じて民衆の間にふりまかれ、この金力の故に、民衆獨自の利害は支配階級の利害に從屬せしめられ、階級的區別は完全にぼやかされてゐる。全被壓迫層は――勞働者は、農民は、小市民は、自らの階級的利益を主張し、獨自の政治行動を遂行する道をしらないまゝに殘されてゐる。

こうした狀態の中で、「普選第一回の總選擧」は始まり、そして見事に既成二大政黨の勝利によつて終つたのだが、たまたま、この二大政黨の議員數がほゞ伯仲し、政府黨と反對黨の差僅かに數名にすぎなかつた結果、內閣總辭職說となり、議會再解散說となり、所謂「政治的不安」が傳へられてゐる。果してこれが眞の意味の政治的不安であらうか？――私は否と答へる。何故なら、その議會的勢力の同等さの故に、「政治的不安」の原動をなしてゐる二大政黨――政友會と民政黨との間に、何等政黨としての本質的差異を見出すことが出來ないからだ。なるほど、兩者の鬪爭をめぐつて、例の「皇室中心主義か、議會中心主義か」といふ、ちよつと見た眼には國體それ自體に關するかのやうな問題が論議されてゐる。だが、よく見れば、それとても、致命的な原則上の爭ひではなく、彼等の常とう手段である泥仕合、揚足取りの一變種にしかすぎない。まじめに問題にする方が馬鹿だ。

その昔、舊自由黨內の地主的勢力と明治專制政府の殘存たる官僚軍閥との合流によつて成立し、其後「時勢の變遷」に應じて三井系の大財閥と手を握ることによつて、ますます反動的な金融資本の政黨に變質してしまつた政友會。――それと、かつて前者がまだ官僚軍閥の黨として止まり、新興ブルジョア勢力と對立してゐた頃に、かの「護憲運動」その他を通じて、比較的民主的な政黨であるかの如き印象を國民の上に與へてゐたものの、わがブルジョアジイの金融資本家への成長と共に、次第に變質し、特に最近、若槻派に對する濱口派の勝利を契機として完全に財閥黨、金融資本黨に化し去つた民政黨。それと、これとの間には、何等の差異も見出せない。評者の言葉を借れば、まさにこの兩者は「大金融資本の宮殿をまもる二つがひの醜惡なブルドック」にすぎない。強いて異るところを求むれば、かのアメリカに於ける「民主」「共和」の二大金融黨の如く、一が

一連の大財閥を代表するに對して、他が他の一連のそれを代表するにすぎない。

かゝる政黨の間に、たとへ如何なる經路で政權が移動しようとも、それは同一階級間に於ける政權の「圓滿受授」以外の何物でもない。政治といふ言葉が、階級間の勢力關係を意味する限り、同一階級間の政權の受け渡しは、新しき政治をもたらさないといふ意味に於て、何等「政治的不安」ではあり得ない。

では、何故に、私は表題に暗示したように、この「圓滿なる政治的不安」の中に、なほ一種の光明性を認めるか？

それは、この「政治的不安」の背景に、否それと平行して、現在の日本には所謂「社會的不安」が動かすべからざる事實として存在してゐるからである。社會的不安とは、言葉を換へていへば、民衆の窮乏である。國民生活の經濟的破綻である。

この民衆の窮乏、國民生活の破綻が、もし假りに、政友會がかゝげてゐる「勞働問題の解決」「自作農創定」「科學的方法による漁農畜産の發展、」または民政黨の「農漁山村借財低利借換」「救貧施設」「小住宅の改善」等々のお役目的社會政策的綱領によつて解決されるものだつたら、それこそ天下は泰平である。問題はない。だが、遺憾ながら、この不安と窮乏は、現在日本の商業の資本主義自體が生み出した結果であつて、資本主義の御用黨としての政友會民政黨が如何に努力しようとも到底解決し能はない問題である。若し彼等が、眞にこの問題を解決しようとするならば、先づ彼等は金融資本黨としての固有の性質を捨てなければならぬであらう。

生活の窮乏は、少くとも民衆を懐疑的にする。懐疑は哲學の母だ。こゝに、新しき哲學——新しき政策と綱領をもつた無産政黨出現の根據がある。そしてすでに、無産政黨は、今次の總選擧に於て、その表面的敗北にも拘らず、またあらゆる不利な條件——被壓迫階級の未發達と無自覺、干渉と買收、黨自身の未經驗——にも拘らず、政府と既成政黨側の豫想を裏切る目覺しい進出を示した。これは、この社會的不安を眞に解決せんとし、また、し得る能力をもつものが無産政黨をおいて他にないことが幾分なりとも民衆に理解され始めたことに原因する。

社會的不安を、民衆の窮乏を如何に解決するか？ 今後の政黨の試金石は一にこの問題の中にある。社會的不安の激化と無産政黨の進出によつて、既成政黨も看板塗りかへを餘儀なくされるに至つてゐる。既成政黨の看板塗りかへが果して民衆の生活を救ひ得るか？ 無産政黨の活躍は果して何時金權政治のもとから民衆を呼び覺して自らの旗の下に彼等を糾合し得るか？

それは一つに今後の問題に屬する。後者が成功して、民衆が自らの階級的利益に準する獨自の政治的行動を開始した場合に始めて本來の意味の「政治的不安」は到來するであらう。

現在巷間に傳へられてゐる「政治的不安」即ち政友會と民政黨の間での政權動搖と「社會的不安」即ち民衆の窮乏との間には、今のところ必しも直接の關係は見出し得ない。（後者が既成政治家の無能の結果だといふ場合は話が別だ。）しかし、社會的不安の激化は近い將來に必ず無産政黨の勢力の増大をもたらし、かくて日本の政治も本來の意味の政治——階級間の勢力關係の表現としての政治にまで轉換するに至るであらう。といふ意味で私は、現在の「政治的社會的不安」の中に光明性を見てゐるものである。

——四、四——

社會的並に政治的不安の種々相

加田哲二

現代人は神經衰弱だといふものがある。ある意味でそれは正しいのだ。正しく神經衰弱的だ。それは近代社會が不安の様相を備へてゐるからである。すべての點において近代の社會生活は不安である。社會的にも政治的にも不安だ。だが、不安といつたところで、全體が同じやうな不安に陥ち入つてゐる譯ではない。八公熊公の不安と政黨總裁とか金融資本家の不安とを混同してはいけない。また政治が不安だといふ。如何にも不安らしい氣持もする。然し、政治が萬人に對して一様の不安を與へるのではない。不安は人によつて異つてゐる。神經衰弱症の様相と原因とは人間の種類によつて違ふ。だから社會的不安並びに政治的不安に對する概括的論斷は仲々下せるものではない。

先づ社會的不安を見るとそれは生活の不安だ。生きる手段についての不安である。生きるためには、吾々は何かの物質を獲得しなければならないが、人類を一體として見ると、この物質獲得の對象は自然を措いて他にない。自然を基礎としての生産である。このことは如何なる文化階段の社會にあつても、事實に相違ない。ところが現代の社會では人類全體が自然を基礎として生産するのでないことは明かだ。自然との生産においては勞

働が第一義だが、現代の社會では勞働を提供しないで、生產に參加して、その成果を收得してゐるものがある。資本家とか地主とかいふものは、この類で、彼等は物質なり、土地なりの支配權を有することによつて、生產の成果を取得してゐる。またある人は勞働を提供して、生產の成果を取得する。このことは經濟學原理の第一頁で數へる生產要素論で明かであり、このことが現代社會の階級構成の基礎でもある。

普通に世の中でブルジョアジイといつてゐるものはこの資本家並に地主を指すものであつて、勿論勞働の提供者よりも富裕である。だから彼等は勞働者（廣い意味での）よりも生活の不安はない。生產の成果の中からの大部分が、比較的少數であるこの人々のポケットに入るのだから物質の生活に對しては、別に苦勞の種はない譯である。酒池肉林の享樂が出來ないまでも、また世界の珍味を集めることが出來ないまでも、彼等はある程度まで鼓腹の狀態にあるのだから、彼等の不安はまた別のところにある。生活の不安を感じてゐるものは所謂プロレタリアである。プロレタリヤそのものも直接の生活不安に襲はれる程度は極めて少ない。殊に熟練勞働者などになると中流の獨立企業者位の生活は樂に出來るだけの稼がある。もつとも、プロレタリヤの大部分の生活程度は低いに違いないが、現在の狀態では、彼等が彼等相當の生活をするためには生きるの、死ぬのといふ程度にはまだ少し間隔があると思ふ。たゞ彼等の生活には保證がない。よしあつたとしても簡易保險とか、勞働組合の相互扶助的施設だとか、ほんの申譯許りのものに過ぎない。これに近代の社會は自由競爭だといふが、何等の豫備條件なしの自由競爭はプロレタリヤが行つてゐるのみだ。マルクスがいふやうにプロレタリヤには何時も過剩人口が存在してゐる。彼等の間には必然的に同志の競爭が行はれる。就職口以上に就職希望者が存在する譯だ。さうすれば、地位の安全は保證されないのは勿論だ。中世紀では勞働する者は貧困であつたに相異ないが、彼等には、彼等の地位相當の地位の保證があつた。だからのんきに神樣のお覺召しを難有がつてゐられたのだ。ところが近代のプロレタリヤにはこれがない。「明日より出社に不及」一の一札で街頭に放り出されたとて大した苦情がいへない。さうして見れば、メエンが身分から契約への發展と稱した社會の進步も甚だ難有くない仕合せだが、自由に使用人を換へ得ることは生產支配者にとつてはこの上もない便利な仕組である。だからこの點は生產の支配者である雇主に對しては少しも不安ではない。否その反對である。この制度こそ近世的生產方法の基礎なのだから。そこでプロレタリヤの不安は地位の不安定にある

といへる。この不安定が安定の要求を起さすのである。あらゆる種類の社會運動はこの生活の安定を要求してゐる。勞働組合運動でも、社會主義的運動でもそうである。ところが一定額の生産の成果を二つの階級で分けるとすれば、一方が增加すれば他方が減少するのは尋常一年生でも解る話だ。この運動が勢を得て來ることによつて、所謂ブルジョアジイは自己の所得に對する不安を感ずる。將來の成行に對する不安である。子孫に美田を殘し得るか否か、あるひは現實に自己の生活を維持するだけの利得を獲得し得ないやうになりはしないかと心配する。これがブルジョアジイの不安である。一方は貧困による不安、他方は富裕を離なれるの不安である。

これと共に精神的不安――從來のイデオロギイに對する不安が發生する。プロレタリヤ側からいへば、從來のイデオロギイ卽ち道德、政治、經濟などに關する從來の觀念の破壞に際しての不安、ブルジョアジイ側から言へば、從來の觀念の破壞せらるゝ不安である。プロレタリアといつても、何も全部が全部社會主義的であるのでも、革命的であるのでもない。大多數は今日の糊を下すつたことを神に感謝してゐる手合だ。この手合にもつといゝとがあるから、吾々のいふことを聞けといつたら、嬉ぶには嬉ぶかも知れないが、不安も感ずる。習慣は仲々打破し難い。習い性となつたものに對する破壞運動は仲々困難である。また困難であるやうに教育せられてゐる。小學校の教科書を讀めばこのとは直ちに判る。何時實現するか知れない社會主義運動に參加するのは餘程の決心を必要とする。また立派な指導者があつても、その決心のつくまでには仲々煩悶もする。これが不安でなくて何であらう。ブルジョアだつて惡人に限つたものではない、彼等の多くは善良の市民で、ありきたりのことをありきたりのままで行つてゐるに過ぎない。それをよいことと信じてゐる。一國のためになり全人民の利益になると信じてゐる。この信仰を論理的にまた實際的に否定せられやうとすれば彼等もまた不安に陷ち入らざるを得ないのだ。實際に於て、ブルジョアジイの生活は現今決して不安ではない。たゞ社會の狀勢はその將來の持續を疑はしめる要因が現はれてゐる。彼等の不安はこゝにある。

政治の不安はこの社會的狀態の一反映だと見ることが出來る。政治的不安は政治的支配權確立に對する不安ではない。このことは殊に日本において今度の總選擧で立證されてゐる。政友會にしても、民政黨にしても、決して日本國家の現狀を革命しやうといふのではない。彼等の間の政策の相異といへば、行政技術に關する末節に過ぎない。地租移譲と義務教育費國庫負

黨は、一方が地方分權主義で他方が中央集權主義といふ合言葉ほどの意義もないのだ。兩方共中央集權主義、政府中心主義たることの前提においての兩主義だ。この相異の外に相異らしい相異はない。積極、消極にしても、豫算に表現されたゞけではこの兩者の相異はない。尙ほ更らその政治的代表としての立場からいへば現在の支配階級である地主と資本家の代表である。金融資本的にいへば、三井と岩崎である。彼等は共に支配階級を代表してゐる。そして兩者合すれば、帝國議會の全部といつていゝ位の數だ。支配階級の政治的支配に何等の不安はない。たゞ彼等は同一階級內における對立を形成してゐるのだ。無産階級代表は八名といふ少數で問題にならぬ。ところが政友、民政の兩者は數において相近似してゐる。政權を保有することは支配階級內の問題としてのみ殘されるのだ。ところで自由主義的の時代を過ぎて帝國主義的、金融資本主義的時代に入ると、國家機關の掌握が經濟に對して大なる意義を持つ。國家は歲出十數億圓に達する一大消費者であり、それに絕大なる警察軍隊等の對內的並に對外的干涉勢力を持つてゐる。この權力を保有するか否かは大なる問題である。既に一階級の政治支配が確立されてゐるとすれば、その階級內における政權爭奪が行はれるのは當然である。ところが兩者の勢力が相伯仲してゐるとすれば、こゝに不安定または不安は必然に發生しなければならぬ。中立議員、並に無産黨議員の向背がこの政權推移の要因とすれば、この不安は仲々解決し難い。無産黨は政友會とも民政黨とも、一致の行動はとれまい。とつたとしたら、平生の口吻に恥るだらうし、信用にもかゝわるからである。無産黨が何れの政派の政府にも反對するとすれば、議會を解散して政府が有利な情勢を作るより外はない。だから政治の不安は決して政治一般の不安ではない。政治的支配權の確立といふ點では現在何等の不安もなく、ブルジョアジイの政權確立で、この部內での政權保持者の問題であるのだ。どの黨にか屬する議員が我等に安定を與へよといつたのは正しい。不安は政治の不安ではなくして、政治家の不安である。明日にも政權を離れなければならない政治家共と、政權のお鉢が此方に廻つて來るかどうかと心配してゐる政治家どもの不安であつて、一般被治者の關係のないことだ。

現下の政治的不安は一階級內の不安ではあるが、彼等の不安には、もう一つ別の不安がある。それは無産黨の進出だ。無産黨は四百數十名中の八名を占めるに過ぎないが、その落選代議士の票數を加へると五十萬票近くの投票を受けてゐて、選擧の協定さへ上手にやれば數名は增加してゐたところだつた。この無産黨は政治といふ點においては何等有産者政黨と異つてゐな

いが、政治のイデオロギイに對しては、殊に有産者政治の沒落を目的としてゐる點については、共同の目的を有してゐるし、また既成政黨と正反對の立場に立つてゐる。この政治運動に對しては、警察、暴力團、御用思想家買收などの手段で極力對抗彈壓するやうなものの、社會の大衆はこれらの政治思想に最も感染し易い立場に置かれてゐる。現に第一回の普通選擧においてさへ、五十萬の投票を集めたとすれば、回を重ねるに及んで、どの位の勢力を得るかは仲々想像を許されない。現に無産政黨の政治的勢力の興隆の實例としてはロシヤ、獨逸、中歐、英國などの例がある。これらの國と我國とは國狀が違ふと彼等は考へてゐるものの、決していゝ心持はしないのである。化物屋敷の隣に住んで、こつちにも化物が現はれるだらう位の不安は常に感じてゐる。この點で彼等は常に安定を求めてゐる。安定を求めるのは、不安だからだ。これらの種々なる社會的不安並に政治的不安は一掃せらるゝであらうか。勿論一掃せらるゝ時期もあらう。近頃日本でムツソリニの名が喧傳せらるゝのは、この安定の要求の支配者側の一表現であらう。けれども安定が彼等の希望通りに實現するかどうかは疑問である。自分はこの種種なる不安は當分持續すると思ふ。これを解決するものはたゞ時である。（四月六日稿）

不安を肯定する

千葉龜雄

不安といひ、安定といふ。けれども、歴史を通じて、いつの時代に、いつの社會に、決定的に安定なる世界があり得たかは疑問である。儒教は堯舜の治世を謳歌するが、堯舜自身の家庭悲劇や、當時の歴史を檢討して見れば見るほど、何が治世であつたは疑はしい。あまりに亂世つゞきである後世の支那である。せめて自分達を自慰する逃げ場として、儒者や哲學者が、誰も見知らない堯舜の時代の上に、假想の理想郷を築き上げただけのものではなからうか。ギリシヤが、デモクラシの見本であつても、たかだか二十萬そこその市民が、大多數の奴隷の上に統治する分では、歴史が何と書いて居るにしても、安定である

べき結論を導くことは出來ぬ筈である。わが國では、延喜の御代をいふ。けれども、歴史が記すところは、京洛に讒奏あり、帝都を一歩出れば、盜賊が山野に横行して、社會は生きることの不安におのゝいてゐたことを傳へる。だからこそ、聖帝が、寒夜に御衣を脱して、治をもはかられたのであらう。で、主觀的に觀察し、もしくは、當時に生きた時代人として見れば、「あめつちに、生きるしるしあり」と、民衆が心から謳歌し得た時代が、眞實においてどれほど存在したものか、怪しくなる。或は、社會の一部層だけが、こうした歡喜にひたる光榮を惠まれたにしても、全段階の民衆が、これで安定したといふ滿足を、心から言表し得る時代があつたことは恐らくなかつたであらう。第一、一部の階級だけが、生きる歡喜にひたるとすれば、それだけ、歡喜にひたり得ざる階級の反抗心を呼び起して、社會と政治の不安は、加速度に進展して行くわけだ。だから、後世に書き殘された知識人の記錄や、隨筆を讀めば、大抵、同時代に對する不滿や不安を表現するものが多くて、時代を肯定して居るものは至つて少ない。もつとも、それにはまた、後に述べるやうな、人類必然の心理もあり、それだけで、時代の不安と缺陷ばかりを示めすものとはきめられぬが、まあ大體において、原始から永續し、明らかに容認されるものは、不安の世界の存在のみであつて、絶對的安定の社會などといふものは、實體的に證明することが出來ないのである。どうでも、治安の世界が求めたいならば、それはたゞ、不安がいくらか稀薄になつた一時期といふ程度の、消極的な、相對的な意味で認める外はないであらう。いはゞ、不安が不規則な波線を永遠に延長する。その波長の緩漫な部分を、治世とでも名づける外はないであらう。でなければ、封建組織や、貴族時代のやうに、强權をもつて、盲目的に下層者を押しつぶし、その自由と生存權を無視することによつて、治者が、自分の主觀を、治世の名でごまかし得たのに止まる。

知識は力である。知識の眼が、嬰兒のそれのやうに見開かれたが最後、もうそこには、久遠の疑惑があるだけで、しばしの瞞着もない。人類の理知が尖銳化されればされるほど、現實に對する不滿が大きくなる。文字を知ることは憂患の始めであり、惰性の火を點ぜられることは、社會の不安をかもす醱酵素である。たとへ現實がある點まで、完成されたものであつてすらも、彼等は、どこかに缺陷を見出さねば止まぬものである。まして、それが缺陷と不滿だけのものであつたなら、それに對する反抗と憤慨が、正當にはげしく燃えねばならない。知識人のこれまでの社會不滿は、この、より善き世界を翹望する理想から

生れるものであるから、現實にあつては、或は彼等が記錄するほどに、事實、缺陷だけに滿ちたものではなかつたらうとも想像されるが。

何といつても、社會は進化する。進化は、舊物を破壞して、新物を置きかへる事業である。人類は、一方において好新性に燃えるが、他方にあつて、舊慣に安住する矛盾な心理がある。舊慣の制度に安住するものが、感情の上から、最後の死線まで、舊社會の維持のために奮闘しやうとするのは有りがちな話だ。ここに新舊の闘爭が起り、不安の渦紋が限りなく廣がる。それが、治者と被治者の對線である限り、不安が國民的になる。治者は質として、いつの場合も保守的である。無用なほどに、有害的に保守的である。それが全く、理知の全然的な鈍化から來るか、それとも、利害關係の入りくんだ事情から來るか、いづれにしても保守的である。被治者の全階級は、必ずしも理知的、進出的だとはいへない。だから長い時代、魚のやうに押しだまつて、治者——貴族、僧侶、金權の何れたるを問はず——の彈壓に甘んじて居た。けれども被治者は、近代知識階級の蜂起によつて、沈默な意志に口火が點ぜられた。知識者はどこまでも理想的である。現實を超越するほどにも或ひは理想的である。かれ等は、この理想を提げて被治者を示導する。かくして二階級の激烈な闘爭が開かれる。さうだ。世界が、治者と被治者のみが對線する限り、治者は、あらゆる私心と無知を捨てて、被治者の福祉に奉仕すべきであるのに、現代のわが二大既成政黨は何といふざまか。非時代的であるのがあまりに極端になつた。現代の政治は經濟的政治である。まづ民衆にパンを與へることが肝要であるのに、彼等は、民衆には石を與へて、自分等だけが、ぬくぬくと權勢を獨占しやうとする。その他、等、等。それがいつまで續くか。それを破壞するための新勢力が興り、既成政黨が滅亡の豫感におのゝく。この闘爭狀態が、生みの陣痛が、國民をして、客觀的不安におちいらしめる。

天産物の稀少、人口の增殖、耕土の缺乏、要するに、貧乏が國民を不安にする。社會不安と云つたところが、引きくるめて政治が、經濟を政治し得ざる不安から來る。政治の戰線は立て直されねばならぬ。

他の不安は、悟性と知識の進展が、過剩であるまでに、産額を豐饒にし、多岐にして居ることである。主義（イズム）の大量生産である。どれにもそれぞれの眞理はある。少くとも半分の眞理はある。それでありながらそれ自身にはみな正反し、或は排反する理論を含んで居る。どれについて行つたものか、弱い羊に惑は

さるを得ぬ。しかも一つ一つの主義が、この主義の旗印の下にわれ劣らじと行動に移る。見界のつかぬ思想と行動の白兵戰は、現代人を多大な不安に陥らしむるに充分な價値がある。

更に他の一つは、現代人の神經組織が、無用であるまでに、病的であるまでに敏感なことである。アンテナが微風に鳴つてすらも、或は大地震の襲來を幻想させる。風車を人間として戰つたところの、ドン・キホーテが現代人に宿つて居る。幽靈のやうに、暗示に誘惑される。不安の姿を見きわめずに、不安におびいて死滅に忙ぐ。世紀末の現象であり、一時代末期の表象を語つて居る。

不安は決して好もしい對象ではない。けれども、知識の泉が地下から湧き出した以上、活動は知識の本能であり、また、社會が進化から進化へ引きつゞくものである限り、そして、知識の流動と、進化の開展が、必然に不安の假象を來し、そして、その不安が、安定と、正しい建設の理想を目ざまして進軍するものである限り、そして除かるべきものが取り除かれぬ限り、自分は、この一切の不安を、已み得ざる宿惡として認識する外はない。

所謂政局の安定によつて救はれず

藤井悌

一

去る二月末總選擧の結果が明かになつたとき、イタリアのファッシスティの機關新聞には、次のやうな趣旨の論說が表はれた。曰く、日本に於ける政局の不安定の情態は、恰もファッシスティ蹶起直前のイタリアの其れに似てゐる、即ち絕對多數黨が一つもなく、政局の鍵が全く中間の少數黨に握られてゐる云云と。まことに絕對多數黨を造らんがためには、ムッソリーニはその執政以來爲さざるところがなかつた。その熱心な努力の結果、一九二四年以來ファッシスタ黨は議會で絕對に動かないところの絕對多數を占め、翌々二六年にはファッシスタ黨員以外の議員は全部議院から驅逐せられて議會は單なるファッシ

ステイの委員會となり、今やイタリアには議會といふものは全然なくなつてしまつた。最近更に、法規上だけ尙ほ存してゐる議會制度をも廢止しようとしてゐる。そこで最近の外電の傳へるところによると、この憲法を全然無視した餘りに橫暴なムッソリーニの態度に對して、さすがに引込思案のイタリア皇帝も憤慨し、遂に退位の決意をしたとかしないとかいふことである。とにかくイタリアの政局はかくして安定した。政局安定の落ち着く先は議會制度廢止の外にない。故あるかな、政局の安定を何よりも念とする鈴木内相が、第一回の普通選擧による投票日の直前に、議會政治否認の聲明をしたことや。

二

思ふに今日世界の比較的强大國中で、二大政黨の對立してゐる國はアメリカ合衆國の外にない。他年二大政黨でやつて來たイギリスさへも、今世紀にはいつてから第三黨たる勞働黨が絕え間なく而も確實に發展して、近來は全くの三黨鼎立の狀をなしてゐる。將來假りに二大政黨に歸るとしても、それは過去に於ける如きブルジュワ政黨の對立ではなくて、階級的に整理された有產無產二黨の其れであらう。そして現に絕對多數黨が支配してゐるのは、議會制度を有する國ではアメリカとイギリスだけである。而もアメリカに於て第三黨が擡頭しないのは、經濟上社會上に於けるアメリカ獨特の事情によつて、未だその勞働階級が獨立の政黨を形成しないために外ならない。而もこの特殊事情は早晩推移しなければならないと共に、第三黨擡頭の日も餘り遠い將來ではあるまいと思はれる。またイギリスに於ける目下の保守黨の絕對多數も、一九二四年十月の總選擧直前に、例のジノヴィエフ書簡事件といふ突拍子もない問題が持ち上つて、保守黨に奇勝を博されたので、現にその前年一九二三年十二月の總選擧では保守黨は敗北したのだ。而も同黨は政權を握つてから、その絕對多數を濫用して（といふよりも其れに必然的に誘惑せられて）資本家階級に都合の宜い政策を頻りに而も露骨に行つて來たので、（例へば一昨年から昨年へかけての炭坑ストライキに於て、組織的に資本家側との共同戰線を張つて、權力を以て勞働者側を慘敗に導いた如き、また昨年七月勞働組合法を改正して、組合運動や勞働黨の活動に對する徹底的彈壓を試みた如き）、次第に民衆の同情を失ひ、其の後の補缺選擧ではいつも敗け氣味である。次期總選擧の形勢は決して同黨に有利でない。

右の二國を外にしては、今日ヨーロッパの諸大國では孰れも多數の政黨が分立してゐる。從うて政局は孰れも或る程度に不

安定である。而もこれらの國の多くは、大戰の痛手を最も深刻に受けてゐながら、その多難の時期を何うにか泳ぎ切つて復興の途に上りつゝあるのである。そして現在一政黨が絶對的に優越してゐるといふ意味で絶對的に政局の安定してゐるのは、議會制度を絶對的に否認してゐる二國、即ち北にロシア南にイタリアあるのみである（尤もロシアに就いては、少くとも從來の意味に於ける議會といふ斷り書きを附けなければならないが）。然らば今日我國の政局安定論者は、ロシアの眞似をしようとするのか、イタリアの眞似をしようとするのか。それともイギリスの現在の保守黨のやうな、また我國に於ける原總裁時代の政友會のやうな絶對多數黨を夢みてゐるのか。

三

私は右の最後に示したやうな有産者政黨の絶對多數を、現在の我國に於て可能だと思はず、また社會不安の問題から見て望ましいとも思はない。先づ有産者政黨のみによる政局の安定は、前に述べたイギリス保守黨の執つた態度でも分るやうに、また政友會の絶對多數黨時代の實例でも分るやうに、決して民衆の生活に對して有利なものではないのだ。大政友會時代には、その以前から提唱されてゐた社會立法は悉く無視された。普通選擧法も議會のクーデター的解散によつて蹴散らされた。物價の低落は人爲的に引き留められて、無産大衆の生活は通例の經濟法則の要求する以上に脅かされた。利權は漁り放題に漁られ、中産以下のものの沒落によつて資本の集中と其の基礎の堅固・勢力の强大は購はれた。而もそれら一切の遣り口が極めて露骨であり挑戰的であつた。然しこれは恐らく政友會そのもののみに特有の傾向ではなからう。權力の味は甘い。凡そ權力を握つた者に取つて、何よりも最先の關心事は其の權力を失はないことである。また權力は權力者を誘惑して、その痛快な使用を求めるものである。兵は凶器なりといふ、或る意味に於て一切の權力は凶器である。然らば有産者政黨の基礎が有産者社會にある以上、他に妨げられない强力な地位にある有産者政黨が、有産者の利益のために露骨痛烈な態度をとるのは當然であらう。たゞかゝる態度は無産者のためには望ましからず、同時にまた社會不安を激發若しくは深刻化するものである、といふだけのことである。

次にかゝる多數黨の出現が可能でないといふことは、最近の總選擧の成績に見ても明かではないか。議會解散後の當時に於て、政府は現在の政黨の分野を不自然なりとした。そして總選擧に於て勝利を得るためには政府及び與黨の力を總動員した。

人事行政に於て無前の非違をも敢てした。軍資金に關する醜聞とか、怪文書事件とか、投票買收や選擧干渉の噂は暫く措いて問はずとしても、とにかく與黨の信頼した『腕の喜三郎』の腕は極限まで揮はれたに相違ない。しかも民衆は彼等の思ふやうには踊らなかつた。そして政局は彼等の豫期に反して不安定になつた。

然らば政府は今や倒行逆施せんとするか。

四

一體『腕の喜三郎』とは何であるか。苟くも一國の大臣に市井無頼の徒の如き綽名をつけて、與黨自ら得意になつてゐるのは何たる低劣な趣味だ。而も其れは其の『腕』の不公正にして有效なる振ひ方を期待してゐるから起つたとすれば、そのさもしさにも呆れさゝれる。そして其の折角頼んだ腕が案外利かなかつたといふので、總選擧後になつて手の掌返すやうに罵倒するとは何たる醜態だ。

それは扨措き、例の投票日直前の内相の議會政治否認聲明には、二重の動機が推測される。その一は、民政黨に危險思想の名を被ひることによつて、民衆の投票を自己の方に奪取する策としてゞある。そしてそれはイギリスの前回の總選擧に於けるジノヴィエフ書翰事件にいくらか似通つた投票間際の奇襲である。然し民衆はてんで問題にしないのみならず、却つて反撥した形さへある。その二は、選擧の結果が或は敗北に終ることのあるべきを危惧して、その場合に於ても政權を離さないための伏線としてゞある。この第二の動機には何となくファッシスト的强權政治の色合がほの見える。(餘談ではあるが、問題となつた民政黨の政綱中の文句も何だか變だ。田中首相も今年正月、各新聞を通じて國民に送つた年頭所感の中に、『國務萬端帝國議會を中心として云々、議會中心時代とでも申すべき新局面が展開せらるべきである云々』と言つてゐるので、民政黨の『議會中心政治の徹底』も之と同樣の政治運用上の實際に就いて取るべき態度を示したに過ぎないことは、成心なしに常識を以てさらりと見れば疑ひを容れる餘地がないのだ。異樣なのは却つて其の上に冠せた『天皇統治の下に』といふ文句である。これこそ少くとも公認政黨の政綱としては言はずとも分りきつたことである、そしてこれあるが爲めに下の本文までが一種の敏感な人々には異樣に見え得ることになつたのである。思ふに『議會中心政治』といふ文句が不熟なので、何となく氣になつてあゝいふ餘計な文句を冠せたのであらう。不洗練の譏りは免れない)。そこで問題となるのは現在の日本國民がファッシズムを受

け容れ得るか否かである。

先づ田中大將は在鄕軍人會長である。彼は平生から同會の獲得に熱心であり、且つ同會の活動に多大の望みを囑してゐたらしい。そして選擧運動の最中に、反對黨を攻擊した純粹の自黨候補應援演說を吹き込んだ蓄音器を、政治敎育の名目の下に地方靑年團や在鄕軍人會に送つた。そして大抵刎ねつけられた。これらの閣僚も彼の笛吹くまゝに踊るものではなかつた。

現内閣の閣員中にファッシスティ謳歌者と目すべき人が一人ならず見出され、また現内閣乃至田中首相乃至政府與黨乃至與黨内の有力者と密接な關係があるか、少くとも之に好意を有する團體には、公然たる且つ熱心なるファッシスティ謳歌者が幾つかある。ムッソリーニ禮讃、ファッシズム鼓吹の文書や講演は、豐富な資力で地方に行き渡つてゐる。然し地方の靑年は、一時政治的に感激しても忽ちけろりと醒めてしまふ。

資本家の間にはファッシスト・レヂムの出現を本氣で翹望してゐる向きが少くないが、具體的に手を出す機會を見出し得ない。

高級軍人の多數は反動的强權政治を好んでも、兵卒は歸鄕すれば直ちに小農や小作人の子弟である。

ムッソリーニの活動寫眞は、劍劇を見るに類似した興味を女小供に與へるだけである。

要するに日本にはファッシズムの成功すべき素地が缺けてゐる。現政府の一部には、思ひ切つてクーデターをやつてみたい空氣もあるかも知れないが、そこまでやれないのは民衆が忍容しないからである。イタリアのファッシスティ擡頭時代には、少くとも小ブルヂュワ階級からは其の道德的意義を認められ得る事情があつた。今の日本の既成政黨が新興階級を彈壓することに、どの角度から見ても何の道德的意義が認められ得るか。當時イタリアの民衆生活を脅かし、政治經濟を麻痺せしめて、社會不安の根源をなしてゐたのは、輕率にして無經綸たる左翼社會黨と、定見なくして徒らに消極的急進論を唱へた群小政黨であつた。今日日本で社會不安を除去するに全然無能であり、逆まに之を助成するものは既成政黨ではないか、中でも保守的反動的の政黨及び之を支持する諸勢力ではないか。イタリアのファッシスティの功罪はこゝには述べない、たゞ民衆を瞬間的に惹き付けるだけの道德的意義すらをも、今日我國の既成政黨や特權階級は持ち合はせてをらず、また其れに適した何等の客觀的條件も我國には備はつてゐないのである。

傳へるところに依ると、政府及び與黨の一部には議會再解散の口實の作製に忙しいといふ。その口實として發明せられたものの中には、無産黨と民政黨との內閣不信任案に關する共同動作や、いはゆる新共産黨事件などを絡みつけて、危險思想を云々しようといふのさへあるさうである。それかあらぬか前述の議會否認聲明書に就いても、政府又は與黨と特別の關係ありと看做される幾つかの團體から、近來遽かに猛烈な逆襲的聲明が數個の新聞に大廣告として現れた。

一體再解散をして何うしようといふのであらう。それこそ如何なる手段を以てしても『政局の安定』を贏ち得ようとするのであるか。誤つて不測の不祥事を喚び起さなければ幸である。

思ふに社會不安の原因は、政局の不安定にあるよりも强ひて之を安定せしめんとする努力にある。また既成政黨の一つが絕對的優勢を占めること、無産黨や開明的中間黨を度外しても政局の安定を保ち得ることにある。これらの中間黨に遠慮をすればこそ、有産者的大政黨も幾分か外面を糊塗するところがあり、幾分か民衆生活を顧慮するのである。そしてこの點に普通選擧の（少くとも過渡期に於ける）一面の効果があるのである。

近來世界的反動の勢はやゝ下火になつて、除々に正常の方向に歸らうとしてゐるに拘はらず、我國に於ける大資本閥階級の反動的攻勢は愈々露骨尖銳なるものがある。彼等は二三年來頑强に婦女の坑內勞働禁止に反動し來り、昨昭和二年には實施後間もなき健康保險法に對して後退的改正を主張し、勞働組合法案に對しては殆んど驚嘆すべき結束力と精力とを以て反動的修正を强要した果てに遂に之を葬り去り、最近また本年度の國際勞働會議の議題となるべき最低賃金制度や賃金協定制度に對して反對意見を發表してゐる。恰かも彼等は苟くも勞働立法社會立法に對しては運命的に、また反射的に反對するものの如くである。

（それは當然だといふ人があるかも知れない、然し現在の餘裕なき無遠慮な態度には一種の特色がある。）また近年に於ける勞働爭議は多く傭主側の挑戰によるものであつて、中にも其の挑戰の目的が勞働組合の破壞にあるものが著しく目立つ。最近半年に亘つてまだ解決を告げない野田醬油の爭議の如きに於ては、この點に於て傭主側の態度は極めて露骨險惡である。而して會社側には政府乃至與黨の尻押しがあるといふ噂さへも、滿更嘘らしもなく聽かれる。勞働組合の破壞には全資本家階級の精神的後援があり、その意を迎へざるを得ない政黨が同じく勞働組合の發達を喜ばないのは當然であるからである。

小作爭議に於ても最近地主側が勢をもり返したのみならず、到るところに於て彼等は攻勢に移り、舊來の純自由主義的の一般私法の規定を楯に取つて、立入禁止や立毛差押の手段によつて小作人の死命を制しつゝある。權力階級者はこれを見て善意公然に『善い傾向』と稱し、一方に於て政府は新事態に應ずべき小作法の制定に極めて冷淡である。

失業問題は殆んど拋棄せられてゐる。中小企業者や知識階級者は、何人にも顧みられないまゝで急激な勢で沒落しつゝある。

社會不安の原因は數へ立てれば際限がない。そして此等一切は既成政黨による『政局の安定』によつて緩和されもしない。大體彼等は無産者の實際の生活と感情に就いては、ほんとうとは思はれないほど無知であり、また知らうと欲しないものだ。別して若し今日の政友會が絶對的優勢を占めでもしようのもなら、その成功するとしないとに拘はらず彼等は一切の前進的社會運動を根こそぎ覆さうと試みるかも知れない。

それにしても腑甲斐ないのは無産者運動陣營内に於ける際限のない内輪揉めである。

天然資源の補充

大河内正敏

一 天然資源の定義

天然資源と云ふ言葉は何を意味するか適確な定義を下すことは困難であるが、經濟價値を有する天產物を指すものと見て宜しい。即石炭石油岩鹽金銀銅鐵等の鑛石類や森林の如き人類に有用なる天產物を指す事勿論であるが、必しも天產物に限らず動力或は熱等の源泉となる水の如きも亦天然資源と稱へることが出來る。水其物は一般に資源に非るも是を以て動力となし、或は電氣を發電し得る形にある場合は水力として有力な天然資源となり得るのである。或は地味豐沃なる原野の如き多くの水產物を包容する海面の如き亦資源の一として數へ得る。此の如く適確なる定義を下すことの出來ないのは其國々により地方により狀況によつて變る爲めである。例へば潮の干滿を利用して動力を起し得可き地方にありては潮流其物は又一ツの天然資源と稱へることが出來る。或は別府の如き溫泉地方に於て地下熱を利用して蒸氣を作り夫れを動力にして發電を爲し或は其他の工業を營むとすれば、地下熱其物は大切な天然資源であつて現に以太利の火山地方に於て行はれて居る。和蘭の風車は農村に於て製粉其他の動力に用ひられて居て風車は和蘭の田舍の風景に一情調を添へて居る。それは同國の氣象が風車の利用に適して居る爲めであつて、同國に取つて風は一種の天然資源と申して宜しい。

此の如く大なる意味に於ては水、風、地下熱の如きは一種の天然資源であるが是等のものは唯普通の狀態にあつては何等資源の價値がない。人類の考案發明や努力によつて始めて資源化されるものであつて懶怠なる國民、思慮の足りない國民に取つては用を爲さない全く其價値が發揮されないのである。文化の遲れた國民は有望な水力發電も何等利用せられずして見逃され

て居るのである。

鐵、石炭、石油や金銀銅錫の鑛山又は自然の大森林の如き天然資源は丁度國民が其祖先から受けついだ遺産である。此遺産は寸毫も利子を生まない財産であつて採堀し利用するに從つて漸々に減損して行くものである。如何に大きな鑛山でも何年かの後には採堀し盡して廢鑛にしなければならぬ。幸にして次から次ぎと天然資源が發見されても決して無限に續くものではない。或時期には絶へて仕舞ふ。天然資源の豐富を誇る國民は利子を生ぜざる親の遺産を坐食しつゝある遊惰の息子と撰ぶ處がない。勤勉なる國民は努力により考察により研究發明發見により天然資源を見出し或は其補充方法を考へ出すのである。

二　本邦天然資源の少きを憂ふるに足らず

本邦の天然資源は支那や米國と比べて如何にも貧弱であるから、我國には容易に產業が起り得ないと悲觀論をなす者があるが夫れは丁度親の遺産を坐食しつゝある遊惰の息子を見て其境遇を羨む樣なものである。今日の天然資源は、科學の應用により一面に於て從來知られざりしものが新しく發見され、一面に於ては天然資源に代る可きものが見出されるのである。無爲徒食の國民は如何に天然資源に惠まれて居ても遂には民族として滅亡の憂目を見て居る。昔しは牛乳湧き蜂蜜流ると歌はれた天然の樂土に住みし人々も耕さずして衣食し得る南洋の土人も何等民族として發展し得ざるのは彼等が勤勉と努力とを欠き科學に近づき得なかつた爲めである。今日の產業は悉く其基礎を科學に置いて居る。科學の應用によつて始めて生產費を低廉にし、生產品の品質を優秀に爲し得るのであるから如何に豐富な安價な原料を擁して居ても、原始的の產業は近代產業の向ふ處には一堪りもなく潰へて仕舞ふ。今日の科學の進步は所謂無より有を生ずること必しも不可能でなくなつて來た。科學は遂に天然資源を生み出さなければ止まない。我國天然資源の貧弱を歎く者は親の遺産の少きを訴ふる者と謂ふ可きである。

三　瑞西の例を見よ

科學の進步は所謂無より有を生ずること必ずしも、不可能でなく科學は遂に天然資源を生み出さなければ止まないとは決して一學究の大言壯語ではない。私は其好箇の例として瑞西を擧げたい。

アルプス連山を包む山間の一小國としての瑞西、歐洲大陸の山嶽國としての瑞西程天然資源に惠まれない國があらうか。昔は國內大森林で蔽はれて居たであらうが、今は歐洲第一の山國

でありながら一般に林は頗る淺い。山骨稜々として聳へ立つ間に僅か平地は若や牧草に彩られて風景絶佳と云ふ外に殆何等の鑛産物がない。唯水力電氣は瑞西全國で約百五十萬馬力計り發電されて居て歐洲の水力國と謂ふことが出來る。併我日本と比べれば其半分にも及ばない。日本は毎年着々として開發される水力電氣が相當にある上、現在でも已に瑞西の二倍三百十萬馬力以上を發電して居る。面積は日本の約十六分の一、人口は東京大阪の兩都市を合せた四百三十萬人よりも少く、約三百九十萬人であるに係はらず産業の盛んなのは驚く程である。昔から有名な時計類特に懐中時計の製造に掛けては殆世界獨歩の國であつて、日本が一ケ年時計類輸入約一千萬圓であるに對し同國の輸出は邦價約一億一千三百萬圓に達する。米國が大量生産式大規模の工業で懐中時計の優秀なものを廉價に生産し様と企てても、如何にしても瑞西の時計工業に及ばない。其精密の程度に比較して價格が廉な爲めである。語を換へて言へば他國で瑞西の時計程精密なものを造ると生産費が高くなつて競爭出來ないのである。精密の程度と價格の相異に關する一例を擧げれば瑞西のパツチツクフイリツプ會社の銀側懐中時計は同國でも最精密なものゝ一であるが二十四時間に一秒以内の狂ひのものを一等品とし邦價千數百圓であるが二等品は二秒以内の誤差で已に價格に於て幾百圓の差異があり、三等品は二十四時間内に四秒以内の誤差であつて材料其他が凡て同じものであるに係はらず價格は其半分の僅かに六百圓内外である。

此の如き時計類製造の原料は殆全く瑞西に産しない。何等天然資源の庇護を受けて居ないのであるが、時計の如きは僅かの原料で大部分が加工費であり、運輸についても其賃銀は謂ふに足りないから原料豐富な國の工業と競爭を爲し得るのであつて、敢て異とするに足らないが驚く可きは大機械類の工業である。日本が約一億圓の機械類を輸入して居るに對し瑞西は邦價約七千四百萬圓の大機械類例へばタービン内燃機水力機械を輸出して居る。日本へも大發電機や船用大内燃機關が瑞西から輸入されて居る。

一塊の石炭、一升の石油も瑞西には産出しない。一噸の鐵も自給し得ない天然資源の貧弱な瑞西で、而も此の如き重量容積の大きな大機械類を運賃高價な外國の鐵道によつて他國の海岸迄持出し外國船舶に依頼して日本や米國に迄も輸出して居る其努力の跡を見る時は實に惰夫をして立たしむるものと申して宜しい。一ケ年三千二百萬噸の石炭を産出し二百萬噸の鐵及鋼を生産し彼の二倍の水力電氣を發電しつゝある日本は燃料に於て原料に於て動力に於て天然資源に惠まれ過ぎて居ると申すも過

苦でない。

機械工業に於て驚く可き成績を擧げて居る瑞西は、又化學工業に於ても實に能く其危局を掌握して居る。化學工業は機械工業よりも一層原料價格の高下に支配され易い工業であつて、廉價な豐富の原料を必要とする。從つて天然資源の貧弱な國では化學工業の發達は困難であるが、近來合成化學の發達は段々此傾向を改めて來た。科學の研究は原素と原素とを結合し若しくは一つの物質を夫れ〴〵の原素に分離することに成功した。故に從來原料とならなかつたものが立派に化學工業の原料となるのである。例へば空氣の如き二十四五年前未だ窒素固定工業が盛んにならない時代には、是れが大化學工業の主要な原料とならうとは思ひも寄らない事であつた。夫れであるから科學の進步は、特に合成化學の進步は天然資源の貧弱な國でも大化學工業が有望になつて來る。其大切な合成化學工業の眞髓とも謂ふ可きものは染料工業である。實に染料化學は近代合成化學の代表的のものであつて、又學術的に見ても最も進步したものである。故に染料工業を助成發達せしむることは合成化學工業を進めるのみならず延いて一般化學工業を隆盛ならしめ其寶庫を開く鍵となるのであるが、瑞西の染料工業は獨逸の夫れを凌駕せんとして居る。今日世界で最も染料工業の發達して居るのが獨逸であること何人も知つて居る事柄であるが、其染料工業を量に於てよりも寧ろ質に於て凌駕せんとして居るのは瑞西の染料工業である。化學工業の原料としては岩鹽の産出する外殆何等の資源がないから原料は先悉く輸入品である、と謂つて宜しい。天然資源の貧弱な彼は科學を以て是れを補充し、或は科學によつて新しき資源を創造しつゝあるのである。

國は山に圍まれて一尺の海岸線もない瑞西は又水産物に惠まれない。併し淡水魚の養殖事業は頗る盛んであつて年々一億八千萬圓から二億の魚苗を河川湖沼に放養して彼れは科學によつて水産物の增産を圖つて居る。

四　天然資源と科學

科學の研究、科學の進步は其國の天然資源を補充し或は新しく創造して行く。瑞西が如何に科學的努力によつて天然資源の貧弱なるに打勝つて行くかは其最も良い例であるが、那威の空中窒素固定工業も亦科學が天然資源を創造した面白い一つの例である。

吾々の要求する人造窒素肥料の原料とし、或は硝酸の製造や火藥の原料として天然産の硝石は殆凡て南米智利の供給する處であつた。智利硝石の産地は、今から丁度百二十年前に發見され

たもので、智利の大切な天然資源であるのみならず殆世界唯一の窒素資源であつたと申して宜しい。それが、今世紀の始めに於て那威で空氣中の窒素と酸素とを電氣火花によつて結合し空氣より硝酸を製造する窒素固定工業が成功したのである。智利硝石に代つて那威硝石が市場に現はれて來た。是は智利の天然資源に取つては一大脅威であると同時に那威に新しく窒素資源が科學によつて創造せられたと見ることが出來る。此空氣より硝酸を製造する工業の根源即ち空氣硝工業の基礎は今から百四五十年も以前に於て、英國の有名な化學者カベンヂッシの發見に基いて居る。イギリスに於ける科學の一發見は昔數十年の歳月を經て始めてビルケランドと云ふ一那威人によつて彼れの祖國の大切な天然資源となつたのである。

空氣中の窒素を直接水素と結合せしめてアンモニアを作ることは世界戰爭の直前に獨逸で成功し、同國のオッパウに工場が出來た。有名なハーバー、ボッシ法と名けられるものがそれである。已にアンモニアが出來れば更に是を空氣で酸化して硝酸とすることは是亦百數十年以前に科學的に發見されて居た。さうして今世紀の初頭に獨逸の化學者オストワルドによつて軍需關係から工業化せられた。故に那威硝石が智利の天然硝石に對し第一擊を喫せしめた後、獨逸の化學は更に其第二擊を與へたものである。後佛のクロード人のカザレー等によつて第三第四擊が加へられた。今や智利は官民共同で硝石販賣組合を作り、其販路擴張に非常な努力を振つて居るが、何時かは堀り盡される運命にある天然資源と科學を生みの母とし空氣と云ふ無盡藏の原料の上に立つ窒素固定工業とは到底競爭にならない。此の如くして天然資源は一步一步科學によつて征服せられて行くのである。

世界戰爭の當時英國の化學者は智利硝石に關し面白い觀察を下した。獨逸をして英國に對し宣戰布告の決心をなさしめたものはハーバーの發明であると謂ふのである。火藥製造の原料としても或は國民に食糧を供給する肥料としても戰前の獨逸は智利から遠く海上を運んで硝石を輸入して居たのである。故に兩國開戰の場合英國の大海軍力で海上權を掌握されゝば何としても獨逸は戰を繼續することが不可能の狀態にあつた。それがハーバーの空中窒素固定によつて硝石輸入の必要がなくなつたから、英國海軍の封鎖は獨逸に致命傷を與へ得ない爲めである。昔は他國の領土を侵略することが天然資源を得る唯一の道であり、從つて侵略主義は一つの民族が生存し得る爲めの不得止手段と老へられた場合もあつたが、今日は科學主義によつて凡てが解決せられる。

豐沃なる廣野の平野は無限の米麥家畜を生產する能力がある。併し幼稚なる耕作法や科學を離れた農業では十分の收穫は得られない。科學の應用は狹き地積磽确な地味からも多量の收穫を得る事が強ち困難ではない。例へば地方地方の土壤に適當した肥料を撰擇すれば從來全く不毛の地と考へられた處より多くの收穫が得られた實例も乏しくない。優良なる肥料を廉價に生產する爲めの科學的研究は一定の地積より更に多量の收穫を得る最も早い近い道である。それと同時に肥料の撰擇、施肥法の改良や土壤の化學的研究も同じ田畑より一層多き收穫が望まれる。若し根本的な動植物の研究が進歩すればする程優生學の應用により一定の地面から優良な而してより多量の收穫が得られる。榮養學の研究は家畜に迄も其應用の途を求めて居る。例へば綿羊の食餌中に羊毛の生長を促進する榮養劑を加へ、若しくは羊毛生長に必要な榮養に富む食餌を與へるが如き。豚の養殖に對しては多產を促す榮養劑を研究するが如き其一例である。

農業に電氣の照明或は放電を應用して生產を增し成長を速むる事も亦狹少なる地積より多くの收穫を得んとする一ツの努力に外ならない。現に麻生博士の試驗は豌豆の成長が普通のものが僅七寸八分延びる間に夜間電燈の照明によるものは一尺九寸八分の成長を示して居る。同樣に大麥では六寸六分對一尺一寸の成長を示して居る。英國では四十町步の耕地に電氣應用を試み十一割八分の大增收を舉げ而も設備費も電力代も頗る僅少な額であると報告されて居る。或は僅かな電力で水銀燈を點じ紫外線を出してそれを鷄卵に數十分間當て、後孵卵器に入れ孵化させると孵化率を增進するのみならず强健な雛が得られる。同じ紫外線を毎日僅々十數分間雛に當てると其成長頗る速く骨格强固な鷄が得られると云ふ。

土木工學、機械工學の農業に對する應用は謂ふ迄もなく不毛の地を一朝にして沃野と化すること容易である。河川の治水は水害を防止し湖沼の干拓は美田の出現となる。一草も生へざる涸渇した地味に機械力で灌漑して沃野となす事は吾々の食糧の資源が新らしく出現したと申して宜しい。科學及其應用である工學とは互に相俟つて天然資源を創造し若しくは開拓する。

五 科學による食糧の合成

吾々人類の食糧は今後も全く天產物に依らなければならないであらう。少くも今日は天然物を補充する爲めに化學的に合成された食糧が漸く增加して來る傾向にありと言ひ得る。人類の到底口にすることの出來ない物質が合成化學の進歩によつて飲

料となり食糧となりつゝある。例へば石炭瓦斯中に含有せられる揮發成分であるベンゾールの如きは臭氣鼻を衝くが、是から合成によつて非常に甘味のある林檎酸が出來、最上の淸冷飲料水を作ることが出來る。或は臭いアセチレン瓦斯から酒精も出來れば食酢も合成され又アスピリンの樣な風邪藥も出來ると斷定して誤らないと思ふ。

米を原素の合成によつて生産することは決して化學者の夢とは謂へない。何時かは實現する秋があると考へるが、間接に米を原料として造る物を化學的に合成して生産すれば、米の足りない今日少くも米の消費の節約となり其効果は偉大なものである。鈴木梅太郎博士が多年の研究は遂に合成によつて殆淸酒と變りのない淸酒代用飲料が出來上つた。國民の主食物である米を原料として淸酒を造りつつある日本では、此合成酒が用ひられる程夫れ丈け米の節約となり、國民の主食物が新しく生産せられ合成せられたと異らない。日本は現在大約一ケ年に六千七百萬石の米を消費して居る。其内約七百萬石は朝鮮台灣等から移入されたものであり、二百萬石乃至五百萬石位は外米を輸入したものである。即ち國民の食糧として平均四百萬石内外の米の不足を訴へて居る。然るに國民飲料とも申す可き淸酒を釀造する爲めに毎年約四百五十萬石の米を潰して居るから、若し合成によつて淸酒代用飲料が出來れば四百五十萬石の米は浮かんで來る。日本國民の主食物は自給自足が出來、食糧問題は解決されたと謂へる。元來國民の主要食物を潰して國民飲料を造つて居る國が世界の何處にあらうか。東洋にも西洋にもない唯日本あるのみである。さうしてその國民は主食物の不足を訴へて食糧問題に苦しんで居る。如何にも思慮の足りない國民であると罵倒されても吾々は實に一言の辯解の辭がない。斷乎として禁酒を斷行するか然らずんば淸酒代用飲料を採用して食糧問題を一日も早く解決す可きである。理化學研究所は此信念の基に鈴木梅太郎博士の研究になる合成酒を生産して世に問はんとするものである。已に酒專賣法を施行せる台灣總督府は一昨年より此擧に贊し毎年數千石の理研合成酒を賣出して居る。夫れに反して內地の酒稅法取締規則は淸酒保護に立脚して居るから米を用ひない合成酒は實に意外な迫害を受けるのである。然れ共國民の保健と食糧問題とを考慮するならば吾人は如何なる脅威壓迫に對しても勇往邁進する氣慨がなくてはならぬ。何處何處迄も所信を貫く決心を持つ者である。

六　製鐵問題と天然資源

製鐵に對しては從來大に天然資源の貧弱が訴へられて居る。

日本には製鐵に適した鐵鑛石が無い。石炭も良質のものが少い。其量は相當に採掘されて居るが一般に灰分の多い爲めに是を製鐵用コークスに燒いても燃料經濟の上に不利がある。日本は製鐵工業に適せない國柄であると謂ふのが所謂技術家の最普通な月並の議論であつて、此說は一寸世間の耳に入り易い爲め意外の邊に迄深く浸み込んで居る。それに丁度今日は何處の製鐵所も又は鋼材製造所も悉く經營難に陷ち入つて居るから、此議論が現實に證據立てられて居るかの樣に思はれる。併し夫れは全く皮相な觀察であつて、製鐵業を能く理解して居る專門家は皆日本に於ける製鐵業が必ず成立ち得るものと確信して居る。今後適當の時期に至れば日本の製鐵業は關稅の保護に依らずとも、或は又補助金助成金等の救濟を受けなくとも成立し得るものと信じて居る。現在の經營難の重なる源因は製鐵業の生產費を如何にして引き下げるかの技術上の研究が足りなかつたのが大源因である。製鐵業を能く理解した經營者が不足した爲めである。それと同時に例へ立派な經營者があつて改良方法や設備改善の備慮が明白に判つても今日は最早資金の出處がないのである。

戰後の產業戰で最苦痛を味つたものの一つは世界の製鐵業者であると申して宜しい。併し歐米の製鐵業者は大資本ではあるが、生產品一噸當りに計算すると非常に廉價な經營費少額な資本で經營して居る爲めに日本の製鐵業者よりは遙かに苦痛が少い。のみならず彼等は戰後直ちに製鐵業の經營方法に於て先第一に其生產費を低廉ならしむる點に努力を集中し尠からざる成績を擧げた。それに反し日本の製鐵業は最近に到る迄生產費低下問題には殆改良改善が加へられて居ない爲めに、今日の苦境に陷つたのである。勿論歐洲の產鐵國殊に英國や獨逸の爲換關係も日本の製鐵業に大影響あることと申す迄もない。此の如く仔細に吟味するならば日本の製鐵業が天然資源不足の爲めに苦痛を嘗めて居るのではなくて、生產額に比較して莫大な資本を投じた事と生產費低下の技術的研究や經營法の劣つて居た爲であつて、今日となつては設備改善の資金も得られない狀況にあるのである。現に歐米の製鐵業は外國から鑛石を輸入し若しくは可なりの遠方から是を運搬して來て居る工場の例が幾らもある。それでも經濟的に成立して居るのであるから鐵鑛石が不足して居る國は製鐵國になり得ないと云ふ議論は成立たない。英國にしても獨逸にしても一部の鐵鑛石を輸入して居る點に於て日本が支那南洋から輸入するのと大差がない。要は邦價十圓內外で良質の鐵鑛石が製鐵所渡で得らるれば何れの國の製鐵所でも今日の鐵價にて引き合ふものと申して宜しい。

然らば鐵鑛石丈けは日本は輸入に待たなければならないか。製鐵上の他の天然資源は日本には得られないかと云ふに決してさうでない。最必要な石炭の如き日本に不足してゐるとは申されない。製鐵用コークス製造の研究は近來餘程進歩して洗炭による灰分の除去の如き機械的施設と相待つて化學的の改良、例へばコークス乾溜方法の改善等は從來到底製鐵用コークスを製造し得ずと思はれた石炭から、今日は立派なコークスが造り得られる様になつた。其一例は以前は滿洲撫順の石炭が製鐵用コークス製造の原料としては不向きであつた。止むを得ず他處の石炭と混合するか若しくは他處の石炭のみを原料として製鐵用コークスを造つたのである。夫れが爲めに甞て問題迄も引き起したのであるが、今日はコークス製造の研究が段々に進んで殆ど撫順炭のみで製鐵用コークスが造れる様になつた。

製鐵用の鑛石石炭に就ても以上の様な狀況にある。吾々は天然資源に惠まれて居らない等と唱へるのは半可通の議論である。悲觀する者は努力を惜む者に非れば研究方法を知らない者と申して宜しい。鐵鑛石が無いと謂つても砂鐵、黃土、沼鐵鑛硫化鐵鑛の如き内地丈けでも幾億噸、幾十億噸が埋藏されて居る。何故吾々は是から鐵を造り得ないであらうか。否出來る。造ることは容易であるが現在の製鐵方法では經濟的に引き合はない。採算が困難であるのである。幾十億噸の鐵鑛石を擁して居ても其經濟的價値がない爲めに天然資源と稱し得ない情けない境遇にある。奮勵努力若し現在の製鐵法に依らずして新しい方法で是等の鐵鑛石利用の途が發見されゝば、忽然として幾十億噸の製鐵用天然資源が吾々の眼の前に湧いて來る。決してそれは夢ではない、甞ては燐の含有量の多い鐵鑛石は製鐵原料とならないと謂はれ經濟的價値の無かつたものが一度ベッセマー法の發見によつて立派な鐵製原料となつた立派な實例が獨逸にある。砂鐵や沼鐵鑛の如きものが今日殆經濟價値のないのは製鐵法の研究が足りない爲めである。硫黃の含有量の多い爲めに製鐵原料となり得ない鑛石も必ずや何時の世にか立派の原料となる望みがある。遠き未來とは思はれない自信を著者は以て居る。悉はしくは理科學研究所の研究報告を參照されたい。

製鐵問題に就いては尚大いに議論の餘地があるが、それは本論の天然資源とは關係が淺くなるから他日に讓ることにし、唯一言此機會に申述べて置き度い事は、今述べた通り日本には經濟價値の無い今日の製鐵法では利用し得ない鐵鑛石が約十億噸死藏されて居る事である。若し是れが新しき製鐵法の研究の結果利用し得らるゝ事になれば其處に經濟價値が生ずる。假りに一噸一圓の價値が出たとすれば立所に幾十億圓の富が生れた事

になる。百萬圓や二百萬圓の研究費を投じても數千萬圓の研究費を消費しても夫れが成功すれば眞に廉い僅な犠牲と謂て宜しい。さうして武力に依らず侵略主義に頼らずして平和の内に無盡の天然資源が獲得されるのである。著者自身が研究に從事して居るから此く申すのは如何であるが、使ひ樣によつては研究費位馬鹿氣た高價なものはない代りに十分に見込みをつけて使へば世の中に此位有利なものは無い。英國が印度を侵略して其處の天然藍の生産と商權とを一手に掌握し世界の藍市場を獨占して居たが、千八百七十八年に獨逸のバイエルが藍の化學的合成に成功し、それを馬獅子會社が尚二十年間の時日と邦價壹千萬圓の試驗費とを投じて工業化するに到り、當時邦價壹千萬圓以上の藍を輸入しつゝありし獨逸は藍の製造開始後二十年後には英國を驅逐して世界の市場を獨占し一ケ年に邦價二千七百萬圓の輸出を爲すに到つた。研究費と謂ふものが如何に廉價なものであり、武力主義の侵略は已に過去のものであり時代錯誤であつて到底科學の前には何等の權威が無い一例である。産業立國を叫ぶ政治家諸君よ、軍備充實を高唱する愛國の士よ、卿等の目的事業は科學の振興によつて始めて達せられる。而して夫れが唯一無二の根本義であることを著者は深く堅く信じて疑はない。(丸ノ内工政會發行拙著「農村問題ト科學」參照)

七　アルミニユーム工業と其原料

現代の鐵と銅に取つて代る可きものはアルミニユームであると謂はれる位アルミニユームの需要は年々に增加して行く。昭和元年の輸入は前年よりも五割を增して七百三十餘萬圓であつたから昭和二年は數千萬圓を突破して居るであらう。若し其價格が今日の半分になつたとしたら需要は恐らく五倍も增すと見て宜しからう。何分鐵材が一噸九十圓乃至百圓の市價であるのに、アルミニユームは其十倍以上の價格である爲めに未だ鐵鋼に取つて代るには相當の距離がある。併し早晩アルミニユームは一面に於て鐵鋼の領域に入り一面木材の代用として人類の生活に頗る重要な地位を占めて來ると思ふ。

然るに何故に今日アルミニユームが高價であるか、其生産費が高いのは何の爲めであるかと謂へば、現在の精煉法では他の金屬と比較にならない位多量の電力を要する爲めである。例へば銅や亞鉛の如き金屬を電氣分解によつて精煉する場合の電力は數百乃至數千キロ時で宜しい。一キロ時の電力代を一錢とすれば一噸を精煉するのに數圓とか數十圓で宜しい。それがアルミニユームの場合には一噸の精煉に普通四萬キロ時を要する。熟練の者で三萬乃至三萬五千キロ時の電力を使用する。獨逸に於

ては最近努力の結果二萬五千キロ時迄漕ぎ附けたと謂はれて居るが何れにしても一噸の精煉に電力代丈けで二百五十乃至四百圓を要する。故に一キロ時一錢の電力代金ではアルミニユーム精煉には適しない。出來得れば一キロ時五厘内外の電力代であると始めて工業として成立つ望みがある。アルミニユーム工業には先づ第一に電力が最緊要な資源である。

是に加ふるに精煉の原料となるアルミナ礦石の良質のものが限られた地方にのみ產する。日本にもアルミナ含有量の相當に多いアルミナ礦石が諸處に發見されるが、何れもシリカの含有量も亦多い爲めにそれから純アルミナを精煉する場合の生產費が高價になる。幸にしてシリカの含有量の少いアルミナ礦石が發見されると立派な天然資源となるのであるが日本には未だ一箇處にも發見されない。歐洲でもアルミナ礦石の良質のものボーキサイトと呼ばれるものは殆其產地が佛國に限られて居る。アルミニユーム精煉には此ボーキサイトから鐵分とシリカとを取り去つて殆純粹なアルミナとなし此アルミナを乾式電氣分解によつて精煉して始めて金屬アルミニユームが出來るのである。

此の如くアルミニユーム工業には二種の天然資源を必要とする。低廉なる電力と原料ボーキサイトとの二つである。世界戰爭に際し、獨逸は原料のボーキサイトを佛國より輸入することが出來なかつた爲めにアルミナ含有量の比較的多い粘土から金屬アルミニユームを精煉した。併し前にも述べた通り此者はシリカの多い爲めに、生產費が高價になる。故に戰後は再以前に戻り、止むを得ずボーキサイトは矢張り佛國から供給を仰いで居る。國交斷絕の危險多い兩國の關係は獨逸のアルミニユーム工業をして原料を約一ケ年分貯藏せしめて居る。さうして其一ケ年間に全工場は再び粘土を原料とする製造組織に變換される用意が出來て居る。

フランスの天然資源によらずして、アルミニユーム工業を成り立たせ樣とする努力は決して獨逸の科學者にのみ止らない。粘土を原料として金屬アルミニユームを作らんとする研究發見は日本にも頗る多い。例へば商工省の東京工業試驗所に於ける數多の發明の如きそれである。何れにしても、他日必ず工業として採算し得る樣になると思ふ。唯時の問題である。理化學研究所の研究に成る方法は先づコークスと粘土を電氣爐で高熱に加熱し粘土中の不純分たる鐵とシリカを結合して珪素鐵となし粗製アルミナが得られる。是れに鹽素を通じて其中の不純分の鐵は鹽化鐵とし珪素は四鹽化珪素として共に發散せしめ純アルミナが殘る。それを普通の方法で電解して金屬アルミニユームとするのである。

八　石油の資源

石油資源の爭奪は戰備に忙しい國々の間では異常の緊張を示して居る。併し夫れが何時迄續くかは科學者の眼からは疑問視されざるを得ない。軍備に怠りない所謂世界の强國の中で亞米利加を除くの外は何れも軍艦の燃料である石油の供給を何處から受けるかに苦心して居るのである。亞米利加夫れ自身ですらも今日こそテキサスやセミノール油田の增産の爲めに不足は感じては居ないが、何時此石油の資源が盡きるかと云ふ事には、脅威を感じ心痛せざるを得ないのである。凡ての天然資源の內で石油の如きは最其埋藏量の判定に困難なものであつて、海軍力を有する國々は大小となく石油資源には常に不安を感じて居るのである。從つて其資源の爭奪には軍國主義の國程熱心な譯である。

石油に代る可きものが科學の力によつて生産せらるゝ望みがあるか否かを吾々は先吟味して見る必要がある。液體燃料であつて貯藏に故障なく同じ重量のものを燃して石油に等しい發熱量があればそれで宜しい。それが石油の代用品である。斯く申せば頗る簡單であるが實際は仲々そう容易の問題でない。併し大別して其處に二つの方法がある。吾々が液體燃料を得るのに二途ある。卽一つは合成によつて造り出すのと一つは破壞によつて生産するのと全く相反した二ツの途がある。

合成によつて造り出すのは比較的新しい製造方法であつて原料としては矢張り石炭を用ひなければならぬ。それは石炭と水素瓦斯とを高溫高壓の下に化合せしめ合成せしめて液化せしめるものである。さうすると殆人工的に石油の如き液體燃料が得られるが今日は尙未だ經濟的には引き合はない。併し石油の市價が騰れば必ず工業として成立つ筈である。石炭を直接の原料とする代りに一度瓦斯の狀態とし是れに水素を化合せしめて液化せしめるのも一方法である。例へば石炭或はコークス若しくは木炭を高熱の下に石灰と化合せしめてカーバイトを作り水を加へてアセチレン瓦斯を發生せしめ、是れを原料としてガソリン代用の液體燃料を作るが如き其一例である。或は石炭木炭等を全然使用せず俗に沼氣と呼ばれるメタン瓦斯に酸素を化合せしめてアルコールとしガソリン代用燃料とするが如き研究等數へ來れば枚擧に遑がない。而して其何れもが悉く合成によつて液體燃料を得るのであるが今日市價の關係から何れも燃料製造工業としては成り立たない。

第二の方法は合成と反對に行くのであつて其適例は石炭或は頁岩の低溫乾溜である。低溫と申しても何百度と云ふ高溫であ

つて只自身が燃へない様に蒸し燒きにするのである。即ち蒸溜によつて液體燃料が得られる。已に滿鐵の計畫で撫順の頁岩の乾溜によつて一ケ年約三十萬石の油が得られる筈である。頁岩は殆無盡藏であるから設備さへ增加すれば何程でも多量の油が得られる譯である。或は魚油、植物油の如きものは乾溜によつて其一部をガソリンとし殘りを重油とする事が出來るから吾々は農作物からも又液體燃料を造ることが出來る。馬鈴薯や薩摩芋或は糖蜜からアルコールを作りガソリン代用燃料とする事は已に能く知られて居て敢て珍しとするに足らない。

此の如く科學の進歩は色々の方面から人類に液體燃料を供給する樣になるから、今日の如く油田を獲得するに非れば廉價な液體燃料が得られないと云ふ事實が何時迄續くかは問題である。今日でこそ先油田を開發するに非んば決して液體燃料が得られない。從つて經濟上國防上燃料政策を論議する者は先油田の發見開發を第一とすること勿論であるが科學の進歩は凡ての天然資源を補充して行く、新資源を發見して行く、今迄資源でなかつたものが資源になつて來る。石油一人が此原則から免る可き筈のものではない。何時の世にかは天然の石油と人工の石油とが相並んで人類の慾求を滿す樣になると考へなければならぬ。其時こそ侵略により奪略により若しくは買收によつて石油資源を獲得せんと焦りつゝあつた軍備に忙しい國々の所謂燃料政策は平和な科學の曙光によつて霧散し去るのである。

（昭和三年三月理化學研究所に於て）

社會時評

無產黨の對議會策

吉野作造

一

總選擧の結果二大政黨の勢力殆んど相如き際どい所で對手方を陷れ樣と暗中飛躍を競うて居る樣な險惡な政情の下に在て、國民大衆の多大の期待と嘱望との許に送り出された無產政黨の當に執るべき態度は、本來なら之等朝野兩黨の醜き爭奪戰に全然足を踏み入れず獨自の立場を押して少しでも彼等を牽制する事であらねばならぬ。更に詳しく云ふならば、（一）無產黨は先づ所謂不信任案を中心として相鬪ふ政民兩黨の政爭から斷然超越することを必要とし、（二）次には之等の兩黨とは絕對に何等事前の協定に入るを避け以て原理的に既成政黨に對しては無條件的に不信なる旨の態度を明示すべきであり、（三）但だ國民の與望を負うて議會政治に協動すべきの任を託せられた以上個々現實の問題に就ては自家の立場に照して贊成すべきは贊成し反對すべきは反對すべきである。（此場合例へば政府の提案が偶然に自家の持論に合するの故を以て之に贊成したりとせんに、之を以て政府の政策を贊けたと觀るのは正しくない。結果に於て政府を贊けたことにはなる。併し動機に於ては自家の所見を正直に表示せるものに過ぎず、換言すれば端的に國民の意向を代辯せるに外ならずと謂ふべきである。又之を逆に、斯うした眞純率直な動機に基く限りに於て、無產黨議員の行動はその結果の如何に拘らず無產黨人たるに愧はしいものと認められ得るとも云へる）。

議會政治を否認するのなら格別、此處に地步を占めて結局理想實現の日を近きに期する以上、無產政黨の何よりも先に心掛くべき卑近の目標は一日も速に有力なる大政黨として自らを發

展さすことであらう。之が爲には大に彼等の自重を必要とするは云ふまでもない。目標の到達の容易ならざるに業を煮やして輕擧妄動するは固より愼むべく、又其の優勝なる地位を利用するに急いで既成政黨の誘惑に乘り知らず識らずの間に自家の本領を沒却するが如きは最も警戒を要するものであらう。議會政治に現實の貢獻を捧ぐるを心掛けつゝ本來の理想と使命とに忠實なれば、今日の無産黨は始めて多少の努力を以てして漸次國民大衆の間に其勢力を擴張し、遠からずして大に政界に雄飛するの素地を作ることが出來るのである。

二

近く開かるべき特別議會に於ては、多分政府不信任案が最も著しく國民の耳目を聳動することであらう。之に付て私は前段に無産黨は本來なら超然的態度を執るべきだと述べた。玆に本來ならとことわつたのは、今度の場合は必ずしも道の原則に依り難いことを暗示したかつたからである。換言すれば、私は今度の議會では特別の理由に依り寧ろこの原則に依らざることを至當と信ずるからである。

然らばどうすればいゝか。私は無産黨の人達に向つて要求する、現政府を倒壞する爲に最も有效なる方法を執つて貰ひたいと。之は決して民政黨をして代り立たしめたいから云ふのではない。結果に於て民政黨を喜ばすことになるのは氣持のいゝ話ではないが、併し之を懸念して政府の徹底的糺彈を疎略にするは亦餘りに對價が高過ぎる。私は今日此際無産黨の諸君に事後の結果の如何に拘らず現政府打倒の目標に向つて邁進せんことを要求するに、相當の理由あるを信ずるものである。

第一の理由は、現政府に對する國民の精神的支持に缺くる所あるを看取するからである。政友會の人達は云ふだらう、解散前よりも黨員は殖へたと、又差數は小さいが兎も角俺は第一黨だと。成る程形だけから云へば政友會の最大多數黨たるに間違はない。故に外の國なら民衆は敢て政友會に引退を要求せぬであらう。所謂現代の憲政は一人でも多い方に天下を取らすと云ふ仕組みの裡に動かすべからざる眞理の伏在を信ずるものだからである。併し我國にはこの原則の其儘に適用さるるを許容し難い事情がある。何となれば我國に於ては由來選擧に不正手段が公然として行はれ、投票の結果が必しも國民の意思の正直なる表白だとは認め難く、殊に政府側の陰陽兩面の干渉が毎に大なる效果を現はし一方には野黨の數を不當に減じ他方には與黨の數を不當に增すを例としたからである。人はよく云ふ、我國では議會に多數を制したが故に政府を乘取るのではない政府を乘

る、現政府を擁護する爲に[illegible]

取つた旨に議會に多數を制し得たのだと。又云ふ、政府側の選擧に於て政府は與黨の多數を期待し得るは勿論、中立と稱するものの中にも單に政府に味方する丈けの議員を一二三十名作ることは譯はないと。今度の選擧は普選の實施を見た結果として事必ずしも從前通りには運ばなかつたらしい。それにしても政府の干渉壓迫の露骨で且つ猛烈であつたことは隱れもない事實であり、それが亦著しく選擧の結果を動かして居る筈だから、若し政府黨側の人達の云ふが如く天下の輿望果して未だ政友會を去らざるものならば、その當選數はもツと〳〵多くなくてはならぬ道理だ。傳ふる所に依れば、當初政友會は自黨當選數を二百二三十位に見込み相手の民政黨には百八十位の見當を立てたと云ふから、準政友會の中立議員には三四十の當選を豫算したものだらうと思はれる。事實斯うなつたとして、成る程政府の壓倒的大勝利は爭はれぬ譯になるが、國民の良心と緊密の關係のない「數」に重きを置かぬ我々の眼からすれば、六七十の差があつて始めて兩者に對する國民の精神的支持は先づ〳〵相等しいと想像してもよからうと思ふのである。故に今日の政局が明に示す樣に、政府が幾多の利器を擁せるに拘らず野黨に對し辛うじて五分の勢を保つに過ぎざるは、また以て國民の精神的支持が如何に政友會を離れて居るかを證するものと謂ふべきである。

實は今度の選擧に中立團體の不振であつたことも、甚だ私の前說を裏書する一項目たるを得まいかと考へて居る。今度の選擧の結果を表面的に受け容れて、我國政界の將來に所謂第三黨第四黨の發達の可能性を疑ふ人がないでない。無產黨のことは姑く措くとして、我國の政界がこゝ暫くは政民兩大政黨の角逐に委せらるる形勢に在るを前提としその是否得失の批評を爲すものを聞くのだが、實業同志會革新俱樂部其他の中立議員の運命が今度の選擧ではツきり決まつたかの如く說かるるのは如何かと思ふ。私は二大政黨が今日の如く腐敗墮落し全然國民の信賴を失つて居る以上、中立團體の發達する餘地はまだ〳〵あると考へる。尤も二大政黨に代つて國民の利害休戚を有効に代辯するものとしては更に一層將來に好望を寄せらるる無產政黨がある。無產政黨の外に所謂自由主義團體と云ふが如きものの存立すべき永久的基礎ありやは大に疑なきに非るも、兎に角目下の所無產政黨は僅に搖籃時代を脫したばかりであり、この先き海のものとも山のものとも分らぬのだから、少くとも其が十分の發達を示して呉れるまでの間は、中立團體は仍ほ相應に活躍し得るものと見なければなるまい。之等の點は尾崎氏の運命並に鶴見氏の將來等の考察と共に詳しく述ぶるの必要を見るも、論いたづらに多岐にわたるを恐れて他日に讓ることにする。要

するに私は中立と云ふものの將來に付ては差當り左程悲觀はしない、從て今次の選擧に於て中立の悉く不振なるは臨時特別の變態的現象であると考へるものである。

そんなら何故今度に限り中立候補は不振であつたのか。私の考ではその最も主要なる原因は國民の最大關心事たる現內閣の運命の問題に付き彼等が甚だ曖昧なる態度を示したからに外ならぬ。政友會內閣の存續を許すべきや否や、之が國民の前に置かれた大問題なのである。不都合なのは政府黨ばかりではない既成政黨はひとしく皆排斥すべきものであるとの論には、私も固より始めから同感である。併し今はそんな事は閑問題となつた。故に既成政黨には困つ乍ら愛想をつかして居る國民も、特に今度の選擧では、現に提起された實際問題につき的確の態度を示さざる限り、毎も〔ら〕の樣に中立候補の理想論に耳傾くる遑がなかつたのである。是れ中立候補不振の主なる原因ではあるまいか。果して然りとすれば、これは他の一面に於て如何に國民が現政府の存續を苦としたかを語るものと觀てよからう。いづれにしも政友會內閣の今日民間に不人氣を極むるの事實は掩ひ難い。

第二の理由は選擧に對する現政府の不當なる干涉である。尤も之は理論上無產黨のみの八釜しく云ふべき問題ではない。併し民政黨は勿論、他の中立議員にした所で、自分自身が選擧に後暗いことをして居るのだから、眞に心の底から勇敢に選擧の公明を叫び得るものは、實はわが無產黨を措いて他にないのである。故に無產黨はこの點に於て堂々と國民大衆の要望を代辯し得る唯一の政團として大に任ずる所がなくてはならぬ。

今次の選擧に於て現政府が如何なる措置を取つたかは今更說くまでもあるまい。政友會の抱持する政見の頑迷固陋なるは無論無產黨の容認し得ざる所である。併し無產黨の敵として戰はんとするものは、獨り政友會に限るのでない。民政黨だつて同じ事ではないか。是れ無產黨が既成政黨をひとし並に排斥して常に獨自の階級的立場を主張せんとする所以である。只無產黨は已に議會政治を主義として認め自ら之に協動するの積極的態度に出でた、從つて彼は思想的には日常如何なる場合にも戰線を布くを辭せざるも、政治的には挑戰の機會を專ら議會に於てすることに限局した。既に斯うした態度を執つた以上、無產黨が適當に議會に代表さるることを要求するのは當然である。換言すれば、彼れには選擧に際し無產黨に對する國民の投票が何人に依ても妨害せらるること勿らんことを要請するの權利がある。無產黨の權利といへば輕く聞へるが、之が實は憲政の正しい運用の根本原則なのである。之が若し不當に歪められる樣で

は、特定の選手に不當のハンデイカップを附すると、假令競技としての上の種々の諸規則が如何に嚴格に守られても、結局に眞の優劣の判斷のつくものではない。先づ根本をたゞせ。否らざる限り、その上に發生せる一切の現象は全然合理的基礎を缺くものと謂はねばならぬ。この點に於て現政府が國民の良心をふみにじり憲政の正しき發達を阻害したるの罪は案外に大きい。特に彈壓干涉が無產黨に對して甚しかつたから爾く云ふのではない。

現政府を政策の上から非難し之を不信任の理由に算ふる者がある。政友會が政策の上で無產政黨と相容れざるは云ふまでもない。併し之は政友會の根本的立場に着眼しての話だ。個々の問題を取れば無產黨の所見と偶然的一致を見ることの必しも絕無なるを期せぬ。只根本論としては政友會の所謂既成政黨としての本質が到底新興無產階級と相容るるものでないことを認めない譯には行かない。が、此事を云ふなら民政黨だつて同じ事だ。之も亦既成政黨としての本質に於ては毫も政友會と異る所はないのである。政友會と民政黨とがどんなに烈しく互に政權爭奪の鎬を削つても、無產黨から視れば要するに同じ穴の狸に過ぎぬ。故に政策の點を以て議論の中心とするなら、吾人は特にひとり政友會を斥くべしとするの理由を見出し得ぬ。この點だけを着眼する限り、[illegible]に超然たらんとするのも正しい態度だと云へる。

併し今日我々の眼前に置かれた問題はそんな枝葉な事柄ではない、もツと根本的な處に批判の利刃を振はんことを國民は要求して居る。是れ今日の民衆が尾崎氏の態度を壯としつゝも之を以て迂愚の見と格印し、一歩を進めて現內閣の倒壞に無產黨の全的協力を求めて熄まざる所以である。但し之を國民が民政黨の大政掌握を希望して居るの證左と誤解されては困る。結果は民政黨の進出の實現となりて現はるゝかも知れぬが、國民大衆としては只現內閣の失行に對する秋霜烈日の批判を表明すればいゝので、結果の如きは初めから顧慮する所ではないのだ。

三

現內閣の打倒が當面の急務だと決まれば、特別議會に於ける無產黨の活動の大方針は、無產政黨としての本質を傷けざる限りに於て、右の目的を到達するに最も有效なる凡ゆる手段を執ることでなければならぬ。この點に於て無產黨の人達が民政黨の或は提出することあるべき政府不信任案の通過に合流助勢すべきを第一に協定したのは、最も聰明なる態度だと謂へる。

之より先き無產政黨の陣營內には所謂「獨自の不信任案」說

なるものがあつた。曰く我々は政友會にのみ反對なのではない、既成政黨とは悉く相容れないのだ、故に政友會を倒さんとして民政黨に追隨するのは面白くないと。乃ち彼等は廣く既成政黨と相容れざる階級的立場を固守して獨自の不信任案を出さうと云ふのである。併し乍ら若しその所謂階級的立場を固守するに忠實ならんと欲せば、須らく朝野兩黨に鋒を向くべきではないか。民政黨に追隨するを肯とせざる迄はいゝが、特に獨り政友會内閣を斥くべしとする根據はない。故にこの論は一見無產黨的良心の正直なる發露の如く見えて、その實全然政治的規道を逸脫せる迂愚の空論である。加之議院內の式例から云ても、獨自の不信任案なるものの成立し得べきものか否かは初めから分つて居る。斯かる机上の空論が結局完全に葬り去られたのは私共の大に滿足に思ふ所だが、假令暫くの間でも、斯かる妄謬の見が若干有力なる人々によりて主張されたことは、無產黨の名譽の爲めに大に遺憾とせざるを得ない。

序ながら云ふ、無產黨內に於ける「獨自不信任案」の說は實は政友會側の策動の結果に外ならぬと云ふ風說があつた。政友會が果して斯かる巧妙なる魔手を弄したか否かは知らないが、所謂「獨自不信任案」說の採用が政府倒壞の大潮流を分裁し、結局に於て不信任案を不成功に終らしむべきものであることは疑を容れない。故に一時社會民衆黨の一角に這の謬說の行はれたとき、世人が一齊に之を難じたと同時に、或は政府との間に隱れたる連絡あるに非るかを疑つたのは、強ち理由のないことではない。

四

無產黨が民政黨の提出することあるべき政府不信任案に贊成するのは元その獨自の見地よりするものであつて、斯くて現政府を倒すに成功せば完全に所期の目的を達せるを喜ぶべく、不幸にして成功しなかつたとしてもそが當然に爲すべきを爲せる點に於て些か滿足するを得べきである。而して無產黨が、既成政黨に依て舉げられたる當面の政爭に概括的に干與すべき限界は、之を以て盡き、それ以上に深入りすることは無產黨の無產黨たる本領を傷ける恐れがある。個々の具體的提案につき無產黨の結論が既成政黨の所見と偶々一致せるの結果、その贊否の票決が時に或る一方の黨派の立場を有利に展開することはあらう。之を外にしては無產政黨は差當り既成政黨の双方を同樣に敵とし戰はねばならぬ地位にある。之等の點を更に一層細かに論ずるなら、極端なる階級觀を持する者と否らざる者との間に多少意見の隔りあるを認めねばならぬが、其の孰れの立場を執

るにしても、差當りの方策として無產黨は現下の與野兩黨の攻撃に對して斷じて同類の態度を示してはならぬ。議論としては云ふまでもないことだが、最近の實狀を見て私はこの點に多少の懸念をもたぬでない。

無產黨の一角に政友會と何等か連絡あるらしいとの風說を聞くは私の最も不快に思ふ所である。政友會の勝手がどれ丈け動いても、之が斷じても政界に實際的效果は斷はすべしとは無產黨の名譽の爲めに之を信じたくない。且つそれが無產黨の側から働き掛けたことにしても、既成政黨を狎み得べしとすることが既に一つの大なる錯覺たるを知らねばならぬ。此點に於ては對手の政友會たると民政黨たるとは問ふ所でない。故を以て社會民衆黨が野黨聯合協議會を提唱せるが如きも亦、一部の推測の如く動機の不純をまで疑ふは失當ならんも、決して時宜に適した措置とは云へない。無產政黨は未來永劫既成政黨と何等の連繫を爲すべからざるものか否かは人に依て異見があらう。少くとも今日の所では、既成政黨の過去の經歷と業績とは極めて明白にそが斷じて無產階級の友たらざることを示して居る。此點では、理由は別だが、日勞黨や勞農黨の駁議に現はれた結論の方が正しい。猶ほ序を以て、野黨聯合協議會といふが如きは實際政治の見地からすれば實は出來ない相談だといふことを

も、一言丈け附けておく。

政界小言

○

民政黨では總括的の政府不信任案にするか又は內相一人に對する不信任案にするか未だきまらないと云ふ。國民大衆に取て、信任を與へ難しとするのは政府そのものだ、一人の內相の如きはどうでもいゝ。政府不信任の大勢に合流することを決意した無產黨は、既成政黨の御都合に依て歪められた內相不信任案にまで果して贊成するだらうか。政府そのものの信任を問題にしないのなら、內相一人はどうなつても構はない筈である。

○

政友會に籍を置く一友人は、無產黨の議員諸君でも本當の內心は解散を怖れてゐるんだらうナと私に訊ねる。之に由て觀ても、解散回避の底潮の如何に力強いかを看破することが出來る。所謂少壯派などの馬鹿に强がつて再解散論を强調するは、由て以て他派を威嚇し又誘惑するの手段に過ぎぬと見るべきであらう。朝野兩黨の幸は極めて尠い、それにこの秋には御大典に陪するの光榮もある。之でも政府が議會に多數を作り得なか

つたら、それこそ本當に信望の全然彼を去つた證據になる。餘談はさて措き、右の質問に對し私は、「能くは知らぬがそれ丈けは無からう」と答へた。碌な金を使つたわけではなし、人氣もよかつたのだから解散があつても一向平氣だと思つたからである。併しよく考へて觀ると、案外さうでもなかりさうに思はれてならない。

○

無産黨の人達が寧ろ再解散をよろこぶことは申すまでもない。現に勞農黨の如きは早く既に再解散の斷行を要求して居る。併し之等の人達と議員として選出された人々との立場は必ずしも同じきを得ない。貧困時代に急進的の考を有つたものが、金持ちになつて保守的に隨すると同じく、代議士となつて多少その地位に執着するは人情の免れ難き所であらう。私は今日の無産黨代議士諸君が輕々しく特殊の誘惑にかゝり易いとは思はないが、代議士であると云ふことと其自身がまた一つの誘惑であり、永く代議士でありたいと云ふことが更に一層大きい誘惑であるを顧みて、彼等に向つて一段の内面的反省を要求するの徒爾ならざるを思ふものである。無産黨の代議士に取て特に必要なるは捨て身になることとだ。

○

捨て身になるのと其外形を同うして其實質を異にするは、代議士たる地位を弄ぶことである。そが何等かの目的に出づると否とを問はず、議場に於て我儘勝手を働かれては、啻に國民が迷惑を感ずるばかりでなく、無産黨の聲譽を傷くることと夥しいものがある。生れたばかりの赤ン坊が見事な發育を將來に期するには何よりも先に自重が大切だ。一旦獲たものに戀々たるも困るが、之を不當にぞんざいに取扱はれても困る。與へられた地位に據て大衆の利福増進に貢獻するの目途を有たない人には始めから罷めて貰つた方がいゝ。

經濟時評

金本位制への復歸

牧野輝智

最近金解禁の問題が財界政界の論議の一問題となつてゐる。金解禁問題も可なり久しい間の問題であるから、讀者諸君の耳にも恐らくたこが出來てゐることゝ思ふ。併しながら問題は我が幣制の根本たり、財界の基調たる可き重大問題である。問題に新鮮味が缺けてゐるとて是を閑却する譯には行かない。否、私は世界の情勢と我國經濟界の現狀とに鑑み、今日こそいよいよ此の多年の懸案を解決す可き時機であることを考ふるものである。

今日の貨幣制度にありて金本位制は世界の幣制を通じての本則である。尤も大戰前と今日とは、金本位制の意義に就て幾分の變化が生じたことを看取するのであるが、それにしても今日依然として金本位制は世界を通じての幣制の本則である。如何なる點に於て戰前と今日と金本位制の意義が變つたかと云ふと戰前の金本位制は自國内に金貨を流通せしむることを得る金本位國の理想とし誇とした。英國の幣制が金本位國の手本と稱せられたのは之が爲であつた。我國の金本位制が金貨の流通しない金貨國などと歐米の人々に嘲笑されたのは、金貨本位國と稱しながら、國内には金貨が流通しないからであつた。然るに大戰後の金本位制では、各國の貨幣思想が一變し、金本位國でも國内に金貨を流通せしむる必要はない。金本位制の眞の意義は專ろ國際間の決濟關係に存してゐると考へられるやうになつた。英國は一九二五年四月に金本位制に復歸したが、是は國際間に於ける金の自由決濟を趣旨とするもので、國内では依然としてカレンシー・ノートや英蘭銀行券の類のみが流通し金貨は姿を潛めてゐる。米國は歐州大戰の爲め正貨を蒐集し、今日では世界の金存在高約九十億弗の半額は、米國だけで領有してゐるに

拘らず、國内に於ける金貨の流通は著しく減少し、其の抱擁せる巨額の金貨金塊は主として對外關係に於て偉効を發揮してゐる次第である。

◇　◇

斯の如く今日に於ける金本位制の意義は、主として對外的の關係に存してゐるのであるから、金の自由輸出を禁止してゐるに於ては、金本位制の最も重大なる意義が全く沒却されてゐる譯である。如何に一部の人が『我國は依然金貨本位國である、日本銀行の紙幣は兌換券である』と強辯しても、金の自由輸出を禁止してゐる我國の幣制が、紙幣本位國であり、日本銀行の所謂兌換券が、不換紙幣であることは、是を否認すべく餘りに明瞭なる事實である。紙幣本位國、不換紙幣國などいふことは、戰前の我國の政治家實業家其他一般國民の思想として、最も耻辱とす可きものと信ぜられてゐた。然るに今日にありては此の耻づ可き變ふ可き變態現象に慣れて、寧ろ是をノルマルの狀態ででもあるかの如く誤解し、金解禁は容易に實行す可きことではないといふ思想が實業家政治家等の間に瀰漫して其の解禁の機運を作らんとする努力心さへ缺けてゐるのである。是は甚だ憂ふ可きことであると思ふ。

私は貨幣學の純理からいえば、金本位制が必ずしも理想的の貨幣制度であるとは思はない。英國のケインズの提唱するマネージド・カレンシー・システム（管理通貨制）や獨逸のベンヂリセンが提唱した金屬準備を離れたる保證紙幣制度等には純學理論として大に傾聽す可きものがあり、遠き將來に於て貨幣制度の向ふ可き針路を示してゐるものと考へられるが、それは理想論である。今日の現實の問題としては、正貨を離れて通貨の國際的信用を支持することは出來ない。第一に金本位國の貨幣には爲替の暴落といふことがない。それは金本位國にありては所謂ゴールド・ポイントを離れて暴騰暴落することはあり得可きことでないからである。それが紙幣本位國となると暴騰は期し難いが、暴落は際限ないものである。最も顯著なる例は、獨逸の對外爲替が一九二三年十一月に、平價の一兆分の一に崩潰したことである。我國でも大正十三年秋以來對外爲替が約三割暴落したことは我々の記憶に新なる事實である。金解禁の第一義は對外爲替を平價附近に安定させ、自國貨幣の對外價値を恢復することに存してゐる。爲替相場の安定、通貨價値の恢復が如何に緊要且つ重大であるかは、歐洲諸國が痛切に體驗した事實であつて、ゼノアの國際經濟會議が各國に對して『金本位制への復歸』を慫慂する決議をなしたのは之が爲であつた。歐洲各國では何れも國を擧げて幣制の改造爲替の恢復に努力した結

果として、今日では佛蘭西・西班牙・葡萄牙・希臘・墨西哥等を除く外は、各國とも通貨價値の維持、爲替相場の安定に成功した。私は其の最近の例として昨年末決行した伊太利の幣制改革（リラの安定策）に就て少しく陳べて見たい。

◇　◇

最近まで伊太利は佛蘭西と共に、通貨混亂の代表國として稱せられた國であつた。然るに首相ムソリニは萬難を排して通貨の價値切下（デバリユエーション）を斷行し、米貨一弗對十九リラ、英貨一磅對九二リラ四六の比率にて、金本位制（金爲替本位制）を採用することになつた。伊太利政府は金爲替本位制採用に就て、英蘭銀行、紐育準備銀行等の中央銀行と特約の下に、七千五百萬弗のクレヂットを設定し、更にロスチャイルド商會ベヤリング商會等からなるシンヂケートの間に五千萬弗のクレヂットを設定し、新制度實施後の爲替相場維持に備ふることになつた。而して紙幣リラは三六六リラ對一〇〇金貨リラの割合にて金貨と兌換されることにしたから、紙幣リラの價値は、法律にて三六六分の一〇〇に切下げられた譯である。法律による通貨價値の切下の斷行が、如何に重大のことであるかは改めていふまでもないが、斯かる外科手段を敢てしてまで金本位制への復歸を斷行したのは、不安定なる爲替相場の產業貿易に及ぼす害毒は眞に堪え難いものがあつたからである。

斯くて今日多數の國は或は完全なる金本位制の恢復により、或は變則的の金本位制採用により、爲替價値の安定に成功してゐる。米國・瑞典・英國・南阿聯邦・濠洲・和蘭・瑞西・丁抹・蘭領印度・加奈陀・墺地利・露西亞・獨逸・匈牙利・白耳義・伊太利等は其の例である。伊太利の金本位制への復歸に刺戟され、佛蘭西も亦近く、幣制の大改革を斷行し、爲替相場の安定を實現せしむるであらうと一般に噂されてゐるが、斯くなれば、世界の主要なる國として只だ我國のみが、爲替不安定國、紙幣本位國、不換紙幣國として取殘される次第である。

◇　◇

或は此の世界的現勢に對して世界は世界、日本は日本、我國が果して金解禁に適するや否やは、日本の經濟事情を愼重に考慮して決定す可きものであると辯解するものが多いであらう。云ふまでもなく日本の金解禁には日本の特殊事情を十分に考慮しなければならないが、それにしても今日の經濟は國際經濟時代であるから、世界の主要國が、而かも日本よりも遙に財政經濟上の難局にある國々が、萬難を排して金本位への復歸を試みたことは、此の場合に我々の大いに考えなければならない事實である。外國は外國などと稱して看過し難いことである。

然らば我國の特殊の事情即ち我國の現在の經濟事情は果して金非解禁論者のいふが如く金解禁を許さざる程の事態であるであらうか。實は私も世界各國の實例よりか、我國の特殊事情に更に重きを置いて金解禁非解禁の是非を攻究したのであるが、私は我國の經濟事情から見て今日は金本位問題の解決を急ぐ可き時機であることを痛感するのである。私自身過去の主張を回顧すると、大正十四年三月、帝國議會にて金解禁決議案が論戰された當時には金解禁の決行の尙早を痛論したことがある。其の意見は當時の新聞紙上で發表し、又拙著『爲替問題十講』の内にも掲げて置いた。其の當時爲替相場は、四十一弗台で、平價よりか八弗以上の安値であつた。而かも國際貸借は依然として甚しい逆調であつた。金解禁をして爲替をパーに引戻しても、それが引續いて維持され得るか聊か不安なきを得なかつた。又外國の實情を見ても金解禁を行ふてゐる國は米國と瑞典のみであつた。英國ですら一九二五年四月の金輸出禁止期滿了と共に、果して解禁を實施し得るやは疑問とされてゐた。我國の經濟事情といひ、外國の正貨政策といひ、斯の如くに變態的であつた場合に、輕々に金解禁を行ふことの不可を力說したのは當然であつたと私は今も尙ほ確信してゐる。

◇　◇

然るに今日は國內的にも世界的にも事情が一變してゐる。世界的に見た金解禁問題、金本位制復歸問題の狀勢は旣に說明した通りであるが、國內的に見た特殊事情も一變してゐる。金解禁の實行に際して、第一に考慮す可きは爲替相場の現狀はどうかといふことであらねばならぬ。爲替相場が二割も三割も激落してゐる場合に、金解禁を行ふことは、爲替相場を人爲的に激動せしむるものであつて、財界に憂ふ可き惡結果を與ふることを免れない。故に英國の如きは金解禁に先ち、暴落してゐる爲替相場を平價附近に復歸せしむることに深甚の注意を拂ひ、而して其の相場がいよ〳〵平價附近に接近したのを見極えて、金解禁を決行したのである。瑞典・和蘭・加奈陀等皆同樣である。獨逸・墺地利・白耳義・伊太利等の如く、爲替の低落甚しく、到底其の恢復の見込なき國は、前述のやうに價値切下の非常手段を斷行して、爲替價値を平價附近に落付かせたのであるが、我國の通貨事情は是等の諸國の貨幣混亂とは全然程度が異つてゐる。大正十三年秋圓價が三十八弗半の底値に慘落した當時でも、低落の率は平價に比し二割七分程度に過ぎなかつた。歐洲の戰禍國とは勿論同日の談でなかつた。從つて我國では通貨價値の切下などは固より問題にならなかつたのである。而して幸にして圓爲替は漸次恢復し、昨年春四十九弗まで恢復したものが、金融恐慌の

爲め再び低落歩調に轉じ、一時四十五弗台に低落したけれども、金融恐慌の眞相も日から了解され、昨今の爲替相場は、再び四十八弗見當に昂騰してゐる。昨春の最高値よりかまだ一弗程安いが、兎に角平價に對して一弗八分ノ七の開きといふ所まで接近した次第である。私が今日金解禁の解決を急ぐ一つの有力なる理由は此の爲替の恢復といふ事實に存してゐるのである。

◇　◇

次に金解禁に際して考慮す可き問題は國際貸借の實勢である、近年我國の國際貸借は漸次改善され、昨年の如き入超額は一億八千萬圓程度であつた。(大正十二、三年頃は一ケ年の入超額が五億圓六億圓に達した)、而して本年に入りて實に貿易の狀勢は改善されたやうに感ぜられる。試みに本年三ケ月間の貿易實績を見ると、貿易總額は昨年に比し輸出入とも增加してゐるが、入超額は四千萬圓ばかり減少してゐる。即ち本年四半期間の輸入額は六億一千百萬圓、輸出は四億七千四百萬圓、入超額一億三千七百萬圓で、昨年同期の入超額よりも四千萬圓減少した計算になる。而して輸入の增加四百萬圓に對して輸出の增加は四千四百萬圓である。云ふまでもなく每年上半期は入超季節で後半年が出超季節である。然るに本年は上半期にありても入超が著しく減少し、恐らく二億三、四千萬圓の入超であらうと觀測されてゐる。下半期に於て一億二三千萬圓程度の出超があつたなら一年を通じて貿易の入超は一億圓程度に止まり、是に貿易外の受取超過を差向ければ、大體に於て今年の國際收支は過不足なくして濟む概算となる。勿論是は豫測であつて的確を期し難いが、それにしても本年の貿易情勢が餘程改善されたと稱せられた昨年中のそれよりも、更に改善されつゝあることは疑ひ無い事實である。爲替相場は平價に比し一弗二弗と云ふ所まで恢復し、國際貸借の實勢も亦斯の如くに改善されてゐる場合に、尙ほ且つ金解禁の不利を云ふ人は、今日の貨幣制度の本則を忘れたる謬論である。

或は曰く昨年の金融恐慌により如實に摘發されたる我財界の實相は可なり不堅實である。斯の如くに不堅實なる財界を其のまゝにして、金本位制への復歸を急ぐは危險であると。此の論は今日の非解禁論者の殆ど異口同音に主張する理由である。成る程我財界の現狀には整理改善を要す可き幾多の問題が存してゐる。是を改善することは固より必要であるが、それが何故に金非解禁の有力なる理由となるのであるか。金の輸出禁止、金の兌換停止は變則的の手段である。歐洲大戰が終了して既に十ケ年に垂んとする今日、依然此の變態的制度を維持し、只だ眼前の偸安をのみ貪らんとする人こそ、實に財界の眞の改善を阻止

する人々である。私は我國の財界を根本から樹て直すことは、金解禁を行ひ通貨制度を本則に引戻し、爲替相場を平價附近に安定せしむることにより始めて求め得べきことと信ずるのである。歐洲の各國が餘程の無理をしてまで金本位への復歸を斷行した趣旨亦此の點に存することは既に陳べた通りである。

幼稚なる金非解禁論者の中には、經濟事情の如何に關係なく正貨を少しでも多く保有してゐることが、經濟的優勝なる所以であると誤解してゐる者も少くない。假りにそれが眞理であるとするならば、今日世界中にて米國に次で經濟的に優勝なる國は佛蘭西である可き筈である。と云ふのは米國に次で正貨を多く保有してゐる國は佛蘭西であるからである。然るに此の佛國は現在通貨の混亂爲替の慘落に苦しみぬいでゐる國である。如何にして金本位への復歸を實現さす可きか。是が佛國を擧げてのこの數年來の第一の重大問題である。金輸出禁止を行ふて國力不相當に正貨其のものを保有した所で、それが決して國の經濟的優勝を示す所以でないことは此の佛蘭西の例だけでも明白である。一般國際間の收支は金輸出禁止を行ふてゐると否とに關係なく、何等かの手段により決濟されなければならないものである。從つて金の輸出禁止を繼續してゐるに拘らず、我國の正貨は年々減少し、一時二十二億圓を超過したものが、昨今は十二億七千萬圓（昨年末現在）に減少してゐるのである。若し此の減少すら阻止せんとするならば、それだけ外債を增加するより外に道はない譯である。我國は正貨の現送と外債の增加とにより、戰後今日まで國際收支を決濟して來たのであるが、今日は此の變則手段を廢棄し、通貨制度をノルマルの常態に恢復せしめ、堅實なる基調の上に產業貿易の發展を期す可きである。而して私は金解禁の時期として本年下半期の貿易轉換期を選ぶことが適當であると信ずるのである。英國といひ白耳義といひ伊太利といひ、歐洲の各國は金本位への復歸に際し、米國其他に於て相當巨額のクレヂットを設定したが、我國に採りては其必要はあるまいと思ふ。といふのは金解禁を行ふたからとて國際貸借の實勢上巨額の正貨が流出することはあり得ないからである。私が今日を以て金解禁を決行し、金本位制への復歸を實現さす可き時機となすは、是等の理由に基いての結論なのである。

――昭和三・四・八――

『共産黨檢擧と勞農黨解散』事件

起り得る四五の問題についての私見

吉野作造

四月十日の東京諸新聞の夕刊は、久しく報道を禁ぜられて居た三月十五日の日本共産黨檢擧事件と此日の閣議できまつた勞働農民黨外二團體の解散命令とに關する記事を滿載して、世人の耳目を聳動した。之はいろ〳〵の意味に於て我々の今後の政治思想の展開と大衆運動との上に甚大の影響あるは論を待たない。締切間際で緩つくり評論するの遑がないから、玆には簡單に之に關して起り得る四五の問題につき私の見解を述べて置く。

一、勞働農民黨（同時に解散を命ぜられた他の二團體のことは暫く措く）の解散を以て、政府が來るべき特別議會をうまく切拔ける爲に企らんだ窮策に過ぎずと觀るの說がある。或はさうかも知れぬ。併し政府がさうした意圖でやつたとしても、事實之れが毫も政府の議會切拔策に資する所なかるべきは餘りにも明白である。或は曰ふ、この解散命令に依て無產諸黨の足並は亂れるだらうと。之は飛んでもない錯覺だ。之に依て他の無產黨が毫末の痛痒を感ぜざるべきことは後にも述ぶる通りである。又曰ふ、この騷ぎの爲に無產黨一般に對する民間の信望は挫け、由て以て之と連結することに汲々たる民政黨を威嚇することが出來ると。成る程無產黨といへばピンからキリまで過

激兇暴なものと思ひ込んで居る頑固連中の頭にはさうも映ずるだらうが、野黨の方から云へば、無産黨にしても民政黨にしても、最左翼無産黨の一時表面から引つ込むことに依り、寧ろ却て政府不信任の旗幟を一層鮮明にし得るの利益があるとも云へるのではあるまいか。

要するに之は議會切拔策としては何にもならぬ。政府の意圖の何處に在るかは今更詮索するの必要もあるまい。只我々としては今次の出來事を單純にさうした輕い意味のものと觀てはいけない。

二、解散命令は種々に臆測さるる所謂裏面の魂膽と離してそれ自體を文字通りに受け取つても相當の理由はあると思ふ。この事は猶ほ後に説くとして、更に斯う云ふ揣測をする人もある。政府は之を手始めにして今後所謂過激思想の防壓に邁進するだらうと。即ち之は今度の事件を以て一層廣汎にして深刻なる思想取締のほんの手始めの一表現に過ぎぬと觀る説である。いろいろの意味に於て反動內閣の稱高き現政府に對して這の懸念なしとは何人も言ひ得ぬ所ではあらうが、たゞ斯うした先き走つた揣測に基いて「だから今度の彈壓にも反對せねばならぬ」と性急に力み返へるのは輕卒であらう。政府が之を切つ掛けに、或は一般無産階級の各種の運動に新なる拘束を設け或は青年學生等の思想的活動に不當の彈壓を加ふるが如きことあらば、之れ正しく我々の默過し得ざる所だが、今度の事件を單に一つの孤立した事件として取扱ふ以上、之を一般思想取締の問題と關連して論ずるのは正當でない。漫りに思想を取締る可からずと云ふ原則を以てしては、今次の事件の不合理性を確定し得ぬのである。斯う云へばとて、私は解散命令を失當でないと輕々論斷するものではない。この命令の當否は思想取締の原則以外の他の觀點から別に論ぜらるべきものだと云ふまでである。

三、然らば解散命令それ自身に與へらるべき評價は如何。勞働農民黨の人達は一概に之を不當の彈壓と叫んで居る。斯く叫ぶ心情には私も多大の同情を寄せぬではないが、公平なる局外の讀者を納得せしむるには、只不當を呼號するだけでは不十分だ。この點に關して私共は、原告たる政府に對つても又被告たる勞働農民黨に對つても、一樣に先づ次の諸點に付ての詳細なる說明を聞きたいと思ふ。

(1)勞働農民黨と日本共産黨との關係　共産黨員にして兼ねて勞農黨員たる者の數如何。其中の幾名が勞農黨の幹部の地位を占むるか。以上の數字に拘らず勞農黨が共産黨に指

遵せられし意見の何点（政府に向ては其の肯定の立場を要求し、労農党にはその反対の態度を要求する）如何。

(2)日本共産党の正体に関する見解　之に付ての政府側の見解は已に司法省から発表された。この発表の通りだとすれば、日本共産党が国法と相容れざると見做さるるは致方がない。労農党の諸君は果して吾人とこの見を同うせらるるや否や。若し夫れ右の見解を吾人と同うして而も猶ほ日本共産党の行動に国法抵触の廉なしと云はば、それは一転して事實の問題にある。

日本共産党なるものが一體何を目的とし又今日まで何をやつたかは、結局裁判の確定を待たねば分らない。裁判確定を待つまでもなく彼の行動に不都合はないと責任を以て云ひ切るのなら、労働農民党が無條件に解散命令を失當とするのは理の當然である。但ださうすると彼は自ら自家の立場の日本共産党と殆んど異る所なきを自認した事になる。之に反して労農党と共産党とは別物だと云ふ二三幹部の陳言を信ずべきものとすれば、労農党は解散命令の失當を論ずる為に、先づ自党と共産党との内面的無交渉を明證せねばならぬ。同じ様な事は政府にも云へるのだが、要するに問題が斯んな風に與へられた以上、我々國民としては、兎にも角にも前述の諸點を明白にして貰つた上でないと、何とも申し[illegible]出来ない。[illegible]必要に思ひ及ばぬ[illegible]、[illegible]局外の我々の去就に迷つて居ることも少しは察して貰ひたい。

ついでを以て一言労農党の諸君にお願する。既成政党では所属員に悪い事をした者があると、頻りに種々の運動をしては之を庇護するに狂奔する。之に由て党人は『我党には一人も悪人は居ない』と國民に信ぜしめ得るものと考へて居るらしい。斯んなさもしい見え透いた態度はせめて無産党だけには取つて貰ひたくないものだ。況んや今度の事件の如きは、少くとも諸君の立場からすれば、市井日常の背徳行為と全然その選を異にするに於てをや。假りに労農党の範囲内に在て巧に共産党の仕事をして居つた者があつたとする。労農党は有耶無耶に之を庇護するの態度に出でず、之に對する自家獨自の評價を明白にすべきである。但しさうした事實の有無に就て根本の疑あらば、裁判廷に於て之を堂々と政府に爭ふがいゝ。

四、日本共産党と労働農民党との関係の説明に関する後者の特殊なる責任と云ふことにつき一言したい。私はさきに両者の関係に付ては政府と労農党との双方に對つて明確なる説明を聞きたいと云つた。形式上原告たる政府に先づ之を質すは當然だ

が、實質的には寧ろ勞農黨の方に之を明白にする多分の責任があると考へる。何となれば勞農黨が最近所謂極左共産主義派の動かす所となつて居るは公知の事實とせられて居つたからである。社會民衆黨は申すまでもなく、自ら左翼を以て居る日本勞農黨ですら、單に右の點を理由として勞農黨と氷炭相容れざる仲となつて居るのではないか。否、勞農黨自らが最近の幹部會に於てこの事を暴露しても居るではないか。それだけに今度の事件に際しても、世間の評判から云ふと、氣の毒だが勞農黨の方が至つて分がわるい。從つて政府の方から云へば、丁度いい機會を捉へたと云ふことにもなるわけである。

　私共の觀る所では、勞農黨が依然としてあゝした態度を續ける以上今日の厄運に遭遇するは免れ得なかつたと思ふ。私一己の見解として勞農黨を解散するがいゝと云ふので はない。寧ろ私は根本的に治安維持法の必要をすら疑ふものである。尤も私はいろ／＼の意味に於て例の共産主義的改革意見には同じ得ない。現に今日まで屡々之と戰ても來た。從てその排斥すべき部分に對しては今日なほ其絶滅を喜ぶの情をいだくも、國權を以て之を抑壓すると云ふとには仍然として反對である。この私の立場は、今度の解散命令に對しても私の理論的良心を唆つて斷じて之を承認せさらしめて居る。只善かれ惡かれ治安維持法の儼に存する以上、敢て之を顧慮せざるの不謹愼がやがて自ら厄運の襲來を招ぐべきは致方がない。況んや現政府は之等の點に關しては格別反動的なるに於てをや。故に單純なる事實の觀測として勞農黨の今日あるは決して怪むに足らぬのである。

　故に勞農黨が一無産黨として永くその存在を持續せんとせば早く已に分解作用を起すべきであつた。勞農黨員は皆が皆まで所謂共産主義者でもなからう。にも拘らず黨を擧げて共産主義派の跳梁に委したのは（姑く政府の聲明を是認するとして）彼等の怠慢である。若し夫れ別に分解作用を起すの要なく又さうした事情にあつたのでもないと云ふのなら、今日の政府の下に在て解散の嚴命に接するは初めより其の覺悟する所でなくてはならぬ筈だ。

　但し日本共産黨と勞働農民黨との對立が實質に於て勞農黨自身の內部に於ける最近の二派對立と全然同一のものなりや否やは、自ら別問題だとも見られ得る。此點に關し勞農黨自身には固より相當の辯解はあらう。只世間一般は、最近諸般の事實に依て、勞農黨と共産派との關係につき先入の見を抱かせられてしまつた。是れ私が特に釋明の一層强き責任を勞農黨に歸した所以である。

五、今日の事態は最早勞働農民黨と日本共產黨との關係を無條件には許さぬが、さりとて前者に屬する者がすべて後者の傀儡であるとは云へない。故に取締上勞農黨の存在を絕つのは已むを得ないとしても、該黨所屬員個々の活動を併せて拘束すべきだとする理由は毛頭ない。當該個人が別にまた共產黨員として刑律に觸るるのなら格別、單に勞農黨員たるの故を以て之に特殊の待遇を與ふるは正當でない。この見解は勞農黨代議士水谷山本兩君の處分に關する一二の疑問に對し自ら明了なる答辯を與ふることにならう。詳しく云へば

(1)山本水谷兩代議士を議院自ら除名すべき理由は毫末もない。念の爲め兩氏に釋明を求むるのはいゝ。その釋明に基いて除名の問題が或は別に起るかも分らない。勞農黨の解散が直に且つ當然に兩氏の除名問題を引き起すべき筋合は斷じてない。

(2)假りに兩氏が共產黨に關係があつたとする。それでも直ぐ除名の理由とはならない。さうした處置を取るのはすべて裁判確定の後でなくてはならぬ。但し議院自ら兩氏に釋明を求め、その釋明の內容に基いて除名問題の起り得べき餘地は勿論ある。

[illegible]共產黨代議士の選擧に於ても、兩氏に[illegible]代議士としての待遇の與へらるべきことに、[illegible]はない。

六、勞農黨に對する解散命令は如何なる[illegible]影響を他の無產黨(又は各種の無產團體)に與ふるだらうか。一部の人は、政府の斷乎たる處置に怖れて他の無產黨も暫くは鳴りを鎭めるだらうと觀て居るさうだ。無產階級の運動內部に理論の左に基く分解作用の未だ行はれなかつた昔なら、甲に加へた彈壓は其儘直に乙を威嚇するの效を有ち得たに相違ない。併し今日の無產階級の諸運動はまるで面目を一新した。善かれ惡かれ理論の異同に由る離合集散は頻繁に繰り返され而も對立各間の爭鬪は昨今尖銳を極めて居る。この事實を正當に認識せずしては今日無產階級諸團體の動きを洞察することは出來ない。多くの場合に於て今日の彼等は最早、甲に加へられたる彈壓を其儘我身に引き當てて無用の畏怖におのゝく樣なことはしない。

社會民衆黨も日本勞農黨も、今度の解散命令に對しては一樣に猛烈なる反對の聲を揭げて居る。友黨の災厄を弔するの言葉としてはさう無くてはなるまい。併し乍ら彼等は他の一面に於て斯くなることの已むべからざる所以を言外に漏らして居るではないか。多少這般の內情を聞きかぢつて居る私共には、ソレ

見た事かと云ふ肚の裏がアリノ\と見える樣な氣もする。實は政府が解散命令に依て勞農黨に迫つた戰ひは、社會民衆黨と日勞黨とは前々から闘つて居つたものなのである。但だ彼等は對手方が今度の樣な方法で咎めらるることには無論極度の不滿を感じて居るに相違ない。現に彼等は口を揃へて烈しく政府の權力濫用を咎めて居る。併し之が丁度從來彼等も亦戰つて來た點に向けられたので、這の權力濫用が何時かはまた自分達に向けられるなどとは毛頭考へてない。故に言葉を極端にして云へば、今度の事件につき、他の無產黨は殆んど痛痒を感ぜぬと謂てもよからうと思ふ。

但し政府が抑壓の手を更に不當に伸ばして他種の無產運動を拘束し又は思想言論集會の自由を一層制限するが如きことあらば、議論は自ら別になる。

七、勞農黨の解散を機として學校取締上に重大な權力的活躍を見るべしとの說がある。勞農黨解散の原因となつた日本共產黨の檢擧に依つて、多數の青年學生が之に關係して居ることが分つた。依て或は教授の誰れ彼れに退職を迫るとか又は學生の集會等に一層立ち入つた拘束が加へらるるに至るだらうと云ふのである。私の聞知する限りに於て、直轄學校以下に於て從來之等の取締は既に可なりに嚴重であり、官立大學に在ても今度の事件と關係なく種々の事情に促されてモ少し積極的の態度に出づべきの必要が感ぜられ既に諸般の準備が進められつゝあつたと云ふ。その結果として新しい取締の現はれるのは已むを得ぬとして、今度の事件を機とし政府が高壓的に種々の處分を諸學校に命ずるが如きあらば、假令その處置が當を得て居るものにしても、形に於て既に一種不當の抑壓たるを免れない。特に學校に警戒を訓令するはいゝ。如何なる處置を教師學生の間に布くかは全然學校當局に一任すべきである。況んや大學等に於ては既に自發的に種々の攻究を重ねて居ると云ふに於てをや。

最後に私は繰り返して云ふ、政府が今度の事件を單にそれ丈の事件として取扱ふ限り國民は之を諒とするに吝かでない、けれども之を切ッ掛けに更に一步を進むるが如きことあらば折角の骨折りも終に忌むべき「不當不法」の汚名を冠らるるの恐れがあると。

圓タク型のムッソリーニと幼稚な勞農黨

中野正剛

勞農黨が突如として解散を命ぜられた。今まで存立し、今まで活動し、殊に總選擧には二名の代議士まで當選せしめて來た勞農黨が解散さるゝと云ふには、新に解散せらるべき理由が發生したと推定せねばならぬ。

其の指導原理、其の綱領、其の政策、之は久しく天下に提唱し來たものである。此等が惡いと云ふことが解散の理由とは成り得ない。鈴木內相も現にさうではないと明言して居る。

煎じつめると國體の變革を企て不逞の志を抱く共產黨と云ふ秘密結社が存在し、此の共產黨の主要部の人々が同時に勞農黨の主要部を占め、共產黨と勞農黨とが血肉相通じて居るからと云ふのである。それならば今回の檢擧に於て其の共產黨一味は全部捕へられた筈であるから、其後に殘つた舊勞農黨の人々は共產黨には關係がないと云ふことにならねばならぬ。鈴木內相や田中首相の肚の中では、それ等の共產黨一味と同じ穴に巢食つて居た奴共は、どうせ臭いにきまつて居ると云ふのであらう。併し臭いと云ふ丈で日本國民の結社の自由を奪ふことはどうであらうか。臭いと云ふのなら田中首相も機密費の臭ひがする、鈴木內相もムッソリーニばりの暴力主義の臭ひがする、それが臭いのがよくないから我々は政治的に其の退決を要求するが、臭い丈では國法を以て其人を處分するとは出來ない。勞農黨の臭氣は吾人も大に嫌ひである、それで指導原理を以て、政綱を以て、政策を以て、之と抗爭し之を打倒するとには吾人も亦大に熱心であるが、證據もないのに國法で處罰するのは變なものである。

鈴木內相は勞農黨の指導精神も政策も政綱も惡くない、共產黨系を除外して、新に同じ主張で結社するとは差支へないと明言して居る。それなら解散は無意義である。共產分子の除名を要求するとならまだ意味があると思ふ。

自分個人の見る所では寧ろ勞農黨は其の不文の指導精神に於て頗る怪しいものではないかと思ふ。成文にはどう書いてある

か知らぬが、現に先般の總選擧にも代議士を當選さするのは目的でない、選擧運動によりて大衆に宣傳し、當選した代議士の口を通じ議政壇上より更に大衆に宣傳し、大に天下の空氣を鼓動して無產階級獨裁への途を開拓すると云ふやうなことを宣傳して居る。さうするとあの人々はマルキシズムによりレイニンの行つたやうな革命を實行するのが理想でないかと思ふ。そんな理想は危險千萬なものであり、且又人間性と社會性との複雜を解せぬ馬鹿氣たものであるが、それが單に理想であり思想であるなら、之は法律を以て彈壓するとは出來ない。唯こんな思想を實現する爲に如何なる行動をなしたか、如何なる準備をなしたかをつきつめて後、始めて國法を以て處罰し得べきものと思ふ。

鈴木内相の御陰で大山さんが大層えらい人になつてしまつたが、あの人などそんなレイニン見たやうな陰謀家でも實行家でもあり得る本質の人でない。あの人は最初クリスチヤンだつた、衣肝に至り袖腕に至る當時の早稻田の學園から巣立つた頃から無產者の氣に入りさうにない磨かれた紳士(ポリッシュドゼンツルマン)であつた、自分は嘗て大山君が坪内士行君等の文士劇を見るのにタキシイドを着て白の手袋をはめて居るのを見て、此人は表面的西洋文明(貴族文明かブルジョア文明)の崇拜者でないかと恐入つて居たこともあつた。

それが巴里媾和會議の時はウヰルソンの媾和十四ヶ條に心醉し、ウイルソンを盲目的に崇拜して、例へば日本の國運を賭する重大外交問題を論ずるにも、全く米國の言いなりに盲從せんことを提唱して、吾人をして齒の浮くやうな感じを抱かしめた。自分は弱輩ではあるが當時主幹して居た東方時論で毎號此等のウヰルソンニアンと抗爭したから今によく記憶して居る。

此の大山君が最近はマルキシスト(?)である。レイニズム(?)の崇拜者である。基督教から無宗教否宗教排撃のレイニズムへ、さうして米國主義から露國主義へ、さうした正反對の立場に生れ替りもしないで、子供でもなく齡不惑を越えて早替りし得る人である。それが惡意の早替りでもなくて、善意の早替りである。あの人は其の時代に一ばん澤山出版せらるゝ新著述の主張の流行の中に卷き込まれ、淺く、併し良心的に白熱する人でないだらうか。丁度燕尾服、白手袋で文士劇に敬意を捧ぐるやうに、無條件でウヰルソンニアンになり得るやうに。

此頃は西洋でも社會主義が下火となり、マルキシズムが深刻に批評せられて來たから、大山さんも書齋に居ればソロソロ改宗すべき時期であつたかも知れぬが、生憎く勞農黨の頭目であり、小兒病者の喝采が湧くので、丁度嘗て教會で女學生の讃美歌でよい氣になつた調子で、段々自己陶醉に深入するのではあ

るまいか。

こんな人に勞農黨を率ゐさせて置いて、別に國法を厳正に活用し陰謀の徒を處分して置けばよかつたらうと思ふ。勞農黨其者に不都合がないなら解散せずともよからう、又解散せねばならぬ危險性を帶びて居たら、同じ指導精神で同じ政綱で再び結社を許すと云ふは矛盾であらう。

鈴木内相や小川鐵相が、大威張りに、威張つて過激派膺懲の神樣を以て任じながら、半面に於て自己自らが過激派（反動過激派も過激派の一種）になりつゝあるのは許し難い。我等が血を以て血を洗ふつもりなら、鈴木君なども縛つて仕舞はねばならぬ、內務大臣をして議會否認を聲明さするやうな政友會には解散を命ぜねばならぬ。尤も之は血で血を洗ふならと云ふ前提の下に斯く云ふので、生憎我々は鈴木や小川とは違ふから、腕力ではやらぬ、國法ではやらぬ、政治的に擊破すべし打倒すべしと叫ぶ丈である。

田中君、鈴木君、小川君、等々々、日本には小型タキシーの流行のやうに、小型にして輕便簡易なるムツソリーニの流行には、大に惱まされる。ムツソリーニはえらいかも知れぬが、ムツソリーニに彈壓されねば、國民自ら國民生活を按配し得ぬやうな伊太利國民は餘り名譽な國民ではない。伊太利國民は最早や段段翻覆して居る。國難に逢着して時代錯誤の英雄を求め、其の英雄の奇蹟を求むるやうでは、情けない次第である。丁度未熟な露西亞がマルキシズムに縋りつき、其の經文の奇蹟を求めたと同樣である。幼稚な露西亞、老いたる伊太利、北と南とに形式こそ異るが奇蹟を求め、奇蹟に憧がれ、空を仰ぎながら足元を踏みしめ得ない二つの國民があり、二つ共に求むるものを得ずして、一層苦惱の底に陷りつゝあるのは可哀相なことである。

日本人はレイニンなどに成功させぬ、ムツソリーニなどに跋扈せしめぬ。田中君鈴木君小川君等は小型タキシー式の簡易ムツソリーニとも見ゆるが、大山君は纎弱なレイニンとまで行かぬ。田中、鈴木、小川等が威張るのは滑稽な丈であるが、餘り憎長すると日本は伊太利でない、本物のムツソリーニが出れば打ち殺すだらうが、田中、鈴木、小川でも自重せぬとよくないぞ。大山君に至つてはセンチメンタルで痛々しい所に世間の同情はあるが、其の思想が行動になり、成長すると法律がなくとも、世間が存在を許さなくなるだらう。

我國民は先般の選擧を見ても、可なりコンモンセンスがある。それほどくだらぬ國民でもない。マルキシズムのお作先にも、輕便なムツソリーニにも、そんなものには支配されぬ。共產黨の彈壓は之を徹底せしむべし。政府の淺薄なるムツソリーニズム

は深く戒心せよ。

理性の解放

杉森孝次郎

現在の社會は、なにも日本に限つたことではないが、しかし日本は日本で、多少は他と共通的に、多少は特有的に、それの政治組織、經濟組織、教育組織、慣習的道德組織、家庭組織等等に於て、多少反理性的存在だ。

政治組織そのものが、現在、多少反理性的だ。しかも獨斷的、決意的、宗教的にさうである部分と場合もある。

一つのものが、現にどんなに反理性的であつても、それが獨斷的にでなく批判的に、決意的にでなく實驗的に、宗教的にでなく學術的にさうであるならば、それは教育によつて、論證によつて改過、遷善される。

政府だから、殊にも、いまの政府だから完全に理性的だとも、反理性的だとも斷ずべき先驗的理由はない。同樣に、反對黨だから、殊にも、いまの左極的反對黨だから完全に反理性的だとも、理性的だとも斷ずべき先驗的理由もない。官必ずしも正ならず、野必ずしも邪ならず、その逆もまた然り。いはんや「合法」、「法治」必ずしも合最善道德則、合眞正道德律、またそれを條件とする治ならず。その時に問題とされる現當の「法」の道德的價値が、その法を條件とする思想及び行動の道德的價値を決定する。しかも、その道德的價値そのものは理性を唯一の主體とする。然らざる場合、その假定された道德的價値は眞、正物でない。

偶然か、必然か、その邊のことばはどちらでもいいが、ただ當然といふことばをば避けることとして、現在のわが政府當局と今度解散を命ぜられた團體とは、批判的から識別される獨斷的、實驗的から識別される決意的、學術的から識別される宗教的特徵を、相反する兩極の形式に於て、現在の日本としては比較的に代表的に示す。

それだけに、その兩勢力間には、教育、論證といふ方法は極

度にすくなく機會を持つ。

政治は、善政であれ、惡政であれ、社會を行動的形式に於て統整することを、否認することを身上とする。合意が待てない場合にはそれは强制する。統整が目的で、合意と强制とは方法上の選擇及び便宜に屬する。政治がある限り、斷絶しない限り、その社會には、善なれ、惡なれ、とにかく行動的統整がある。

されば、十分に理性的でない、また傾向に於て最もすくなく理性的であり、最も多く宗教的である二つの相反する、兩立しえない政治的意思が同時に一つの社會内に出現、存在、發展するときには、その兩者間には力の科學及び技術が解放されるだけだ。そしてそこには破壞的犠牲が必然生ずる。

いはゆる中間と、いはゆる穩健とは、多くの場合に於てすくなくとも、最も消極的だ。緩衝機は汽車を走らす原動力でもなく、緩衝機に人や物が乘、載することもできない。いはんや、政治界の中間體には緩衝機能をすら持たないものも容易にありうる。

理性は中間黨、穩健黨と現に普通に呼ばれるものの所有では恐らく、あるひは確かに、ない。理性の一特徴は强烈にある。理性は一面に於て分析を飽かず求め、他面に於て綜合を飽かず求めるが、即ち理性は最も細密的であると同時に最も包括的だが、受動、薄弱、不徹底ではなく、正確にその反對だ。

いまのわが政府、内閣、與黨は、決して現在の日本が有する政治的最高聰明、最善良心を代表するものではない。國務大臣ともあらう人々の時々の、新聞紙上の發表される、言說を見ても、あまりにも悲觀、失望、絶望させる材料に富んでゐるではないか。思想的、いなむしろ原則意識的無能、低能、缺乏の公的有力者に於ける、こんなにも甚だしい、そして目にして多なる存在は實に國民的大深憂事に屬する。

最近のいはゆる極左運動に、その思想に、しからば、現在の日本が持ちうる政治的最善意思が十分に反映してゐるかといふに、これは保守的でなく、進步的方向にむいてではあるが、進步主義的反動としての制限があまりにも明確に、著大にそれを、内から、拘束してゐるやうに概察される。

進步的方向に於ける熱、行動的有能、及び集中的意識は極左的人口の功績だが、そのすべてが一層綜合的、立體組織的、原則意識具備的であることが餘地として注意される。

人性、社會にとつて最も必要なものは經濟以上のもの、最深遠的最廣義に於ての藝術であることを確信するがゆゑに、即ち

積極的意義に於ての内であることを明信するがゆゑに、それの條件である經濟を先づ絶對に必要とするといふ意識を、一つには、最も象徴價ある一例としては、社會的單位の見地から確實に所有、把握することが必要な餘地即ち責任だ。

深全なる人性的、社會的意識にもとづいての諸般制度の改正がいまや最も現實に必要とされる新意識、新運動、新行動だ。

われらは犧牲者の餘果をだけ享樂してはならない。必要な犧牲をばみづから拂ふ方針を取つて、理性主義の政治を新たに開始すべき時位にある。

全無産黨の合同と統一へ

麻生久

一

田中反動內閣は、突如として、日本共産黨事件に口をかつて勞農黨に解散命令を下した。そして、與黨たる政友會中には水谷、山本二代議士を議會より除名すべしと云ふ陰謀をめぐらしつつある者もあるとの事である。

我々日勞黨は、勞農黨の中に巢食ふ宗派主義者に對しては、其指導精神を非なりとし、其運動方法を非なりとして今日まで痛烈に戰ひ來つたのである。

今回檢擧せらるゝに至つた所謂日本共産黨なるものが、官憲の云ふ如く組織せられてゐたか否かは、裁判の結果を見なければ分明しない事である。

併しながら、斯くの如きものが存在してゐたとするならば、日本の現下の狀態に於て、即ち治安法の存在下に於ては、明かに秘密結社としてより他に存在の道なく、一度それが發露せらるるに至れば、今回の如き檢擧となり解散となるは止むを得ざるところである。

そして之れに關係せる諸君も亦豫じめ斯くの如き覺悟を以てやられた事と思はれる。

たゞかくの如き秘密結社と關係なき大多數の大衆より成立す

る勞農黨がその側杖を食つて解散の厄に出合した事は、それ自身痛惜に堪えない事であると同時に、官憲の態度を不當とせざるを得ない。

政友會内閣は、其口に種々なる云ひ譯をなしつつあるけれ共、普選を機會にして澎湃として擡頭し來つた無產階級の政治的勢力に對して、此際一大彈壓を加へて、其伸張を阻止せんとする意圖のある事は明かである。即ち彼等は斯くの如くして、一面には無產黨の分裂政策を緻織し他面に於ては、無產黨全般に對して、民衆に恐怖の念を與へんとするは蔽ひがたき事實と云はなければならない。我々は斯くの如き反動政策に對して斷乎として反對するものである。

二

彼等は、口に協調を說き、平和なる社會の進化を說き、英國の立憲政治を讚美するのであるが、併しながら、衷心抱く思想は反動的であり、專制的であつて、其實際に行ふところも亦露骨なる反動政策である。

平和なる進化は、言論思想の眞の自由の存するところにのみ存するのである。英國の如きは附に其好き例證である。一つの社會は、完全なる自由を與へらるる事に依つて、必ず其社會に適合する思想を吸收して、健全なる、平和なる發達をなすものである。自由を與へず少數者の放心的專制を以て、其自由を抑壓するならば、社會は徒らにこれに刺戟せられて變態の狀態を呈し、病的に流るるは必然である。古今の歷史は明かにこれを示してゐる。

自ら此社會進化の法則を無視して、反動的思想を所有し、言論を壓迫し、一にも二にも法律に依つて之れを禁止し、之れを抑へるに權力を以てしながら、平和なる社會的進化を希ふならば、木によつて魚を求むるに等しい事と云はなければならない。

三

小山檢事總長は、意識してか、せずか、今回の事件の感慨を述べて、

眞面目なる青年が斯くの如き思想を抱き、而も一同徒に其數を增すを見る時、單に法律が存在してゐると云ふ事丈けでは無意味である。法律は、之れを罰する事は出來ても、之れを絕滅する事は出來ない。斯かる法律の存在に拘らず眞面目た青年が漸次多數にかゝる思想に共鳴するに至る事に對しては、何か今日の社會に欠陷の存する事を認めなければならない。そして

先づ其欠陥を直すに非されば、斯かる思想を撲滅する事は出來ない、と云つてゐる。

今玆に、其社會的欠陥の何ものであるかを詳述する遑はないが、今日の支配階級が社會進化の法則に信頼し得ずして思想の自由、言論の自由を奪ひ、何も彼も法律づくめにして、之れを抑止し、加ふるに、其法律をさへ超越して權力的彈壓を恣まゝにする事も亦、明かに法律の社會的欠陥と云はなければならない。

口に國家をとなへながら、其實行に於て、自黨權力の維持のためには何ものも犠牲にして顧みない既成政黨が、何を變へんとするのであるか。選擧に失敗すれば、議會否認の口吻をさへ敢てしてはばからない政友會内閣が、何處に、國を變ふると云ひ得るか。

勞農黨の解散は、單に勞農黨の不幸ばかりではなく、全無産階級の不幸であるが、併しながら、我々は、半面今回の事件に對し、我々も我々の運動の方策の上に充分の批判を加へ、之れを機會にして、宗派的分裂主義の清算を行ひ、全無産黨の合同と統一とに躍進しなければならない。我々は殘れる勞農黨幹部諸君に深き同情の意を表すると共に、更によき甦生に向つて進まん事を切望するものである。

反動政治家の悲喜劇

赤松克麿

所謂日本共産黨事件は、最近社會運動界の一大センセーションであつた。今日まで我國社會運動の極左翼に立つて目覺ましい活躍を續けてきた勞働農民黨、勞働組合評議會、無産青年同盟の三團體は、此の事件の飛沫を蒙つて壓殺されてしまつた。

果して政府の發表するが如き秘密結社日本共産黨が存在し且つ活動して居つたか否か、これは少し事實の審理を俟たなければ解らないことだ。若し斯くの如き事實がありとするなら

ば、我々は遺憾ながら運動手段に於て見解を異にする。我々のやうに何處までも大衆の民主的發達を期するものは、必然的に運動方法の公然性を主張する。少數獨裁主義は如何に組織と統制とに能率を發揮しても、結局に於て大衆の自主的發達を沮害し、大衆の反抗意識と物理力とを利用するに過ぎないところの新型の專制主義であつて、大衆運動の正道ではないと信ずる。而して專制主義を排して民主主義を取るものは、常に大衆の意志の自主的綜合と發展とに努めるから、勢ひ運動方法は公然性を帶びざるを得ないことになる。從つて秘密結社的な陰謀的な運動方法は凡て正しくないと云はなければならぬ。

しかしながら若し政府が、かほどまでの事實が存在せざるに拘らず、色眼鏡を以て不當に事實を捏造したものとすれば、實に許すべからざる反動政策である。一體、こうした秘密結社的な運動は、極端な反動政治の行はれる處に必ず發生することは、從來の社會運動史に徴して明かである。舊ロシア然り、支那然りである。支配階級の極端なる專制政治に對して、民衆運動に與へられたる唯一の運動形式は陰謀的な秘密結社以外には在り得ないと云ふことも出來るのである。とにかく今回の日本共產黨事件は、まだ其の内容の確實性を掴み得ないが、最近の政治史に於て最も反動的だと銘を打たれて居る現政友會内閣は、政治道德上、此の際、自ら戒飭する所が無ければならぬと信ずる。

政府は、日本共產黨の外輪であるといふ理由を以て、勞働農民黨、勞働組合評議會、無產青年同盟の三團體に對して解散を命じた。果して政府の言明の通りであるか否かは、これも事實の審理を待たなければならぬと考へるが、我々の主張からするならば、如何に極左翼の團體といへども、公然たる存在を示して居るものに對しては、これを彈壓すべきものではない。今日、歐洲諸國に於ては、極左翼の政黨や勞働組合といへども、立派に存在を許されて居る。極左翼の運動が、現實に發達し得るものであるか否かは、大衆の判斷に任すべきであつて、猥りに政府がこれに干渉の手を下すべきではないと信ずる。我々の考からするならば、健實なる社會運動の發達した社會に於ては、いかに極左翼の運動が活潑であつても、決してそれが順調に成長し得るものではない。要は、反動政治を排して、無產大衆の運動が合理的發達の過程を辿るやうにすることが肝腎であつて、極左翼運動に對して、恐怖し狼狽し彈壓するが如きは、社會の進化を理解せざる爲政者の悲喜劇でなければならぬ。

分裂、合同、スパイ

堺　利　彦

目下、私はまだ、病後（或は病中）の身の上であるのだが、強いて求められるまゝ、謂ゆる共產黨事件につき、何か少しばかり書いて見る。

×　×　×

政府の發表した事件の內容はまだ極めて漠然たるものである。然るに其の極めて漠然たる事實を基として、政府は早く既に勞働農民黨の存在を禁止し、その再組織を妨害し、更にその所屬議員二人の除名をすら揚言して居る。

民政黨が、まさかに此の除名說に贊成させられるほどの、馬鹿でも阿呆でも意久地なしでもあるまいとは考へられるが、兎にかく政府は、そこまでの、ずいぶん大膽に頭から人を食つた議會切拔策を講じて居るのである。

×　×　×

政府は、西園寺公をして、この際、國家社會主義の採用せらるべき事を公言せしめて居る。政府は又、檢事總長をして、かゝる事件の發生は社會制度の缺陷より來るものであることを承認せしめて居る。

政府は斯くの如く、國家社會主義を云々して、少なくとも或種の社會主義を許容し、若しくば存過するの意あるが如く裝ひ、又大いに自分の過失を慚謝するが如き殊勝らしさを裝つて居る。そして一方には、この事件の起訴について、少しの戰術的意義もない事を樣々に陳辯して居る。そこに又却つて、彼等の議會切拔策の一端が、最も露骨に見すかされて居る。

×　×　×

西園寺公の國家社會主義、檢事總長の自責。如何にお人よしの無產黨員と雖も、まさかそれに對して極少の希望も信任も持つ事は出來ない筈である。

然し無產黨の種々なる分裂と對立の結果は、どうかすると、そこまでの墮落、そこまでの反動化を生じないとも限らない。

×　×　×

兎にかく政府側の陰險なる小策は顯然である。他の諸黨派も亦た固よりそれに劣るものではない。然るに、若し我が無產諸黨派が、更にほゞそれと同じ樣な小術策に陷るとするならば、その結果は實に測り知るべからずである。

禍を轉じて福と爲す。無產黨は全體として、今や正に禍の淵に沈みかけて居る。之を一轉して福と爲すの道があるのではなからうか。

× × ×

勞農黨は兎にかく今、被難者であり、犧牲者である。被難者に對しては同情を有すべきであり、犧牲者に對しては敬意を表すべきである。

勞農黨に幾多の過誤失策があつたとして、それを改めるのは實に今の時である。然し躓いた者に對して、他から石を投げつける樣な態度は、誠に卑劣である。諸黨は彼の手を取つて引起し、その傷をつゝみ、その埃を拂ひ、そして更に相携へて進むべきである。

故に、此の際に於いて、無產諸黨派の分裂を更に甚だしくしてしまふか、或は巧みに此の機會を利用して、合同促進の機運を作り出だすか、そこが大切な別れ目である。

× × ×

今度の事件について、スパイの問題が又頻りに論議されて居る。種々なる風說が盛んに流傳されて居る。

誰か、彼か、或は彼女か。一人もしくは數人のスパイは必ずあつたに相違ない。多くの人々は今左樣に考へて居る。

昔から我々の運動に幾回ものスパイ事件があつた。自白して引退した者もあつた。同志間の交際から遠慮させられた者もあつた。曖昧の中に自然の絕交となつた者もあつた。少々の刃傷事件を起した事もあつた。前回の秘密結社事件に於いては、或種の證據書類が奇怪な方法に依つて米櫃の中から發見された。今度もそれに似た樣な事實が既に新聞紙上に傳へられて居る。

昔し我々の間で、殊更らしい奇激な言葉を吐く者は、彼スパイと目するといふ、不文憲法の出來て居た事がある程だつた。スパイ研究は今少し專門的に行はるべきだと思ふ。

海外近事

資本主義全盛の米國に失業問題の惱み

繁榮を以て鳴る米國に、失業問題が現はれて來た。米國ではそれが朝野の深甚な注意を惹いてゐる。

◇

米國が如何に資本主義的に深い根を張つてゐるかは、こゝに說くまでもない。ことにクーリッヂ政府は所謂プロスペリチーを一枚看板に掲げてゐるだけあつて、近頃の米國の好景氣振りは、プロ國家の羨望の標的であつた。金貨の五割五分までが米國にある。三月の終りにはニューヨークの株式市場は一日に四百九十萬株も賣買があるといふ狀態で、世界の景氣を一手で買占めてゐるほどの豪勢振りであつた。その米國に失業問題が起るといふのだから、春の眞中に雪が降つたほど驚いたのも無理がなからう。

米國では一九二一年——あの戰後の大不景氣の際に、失業問題が暫らく問題となつたことがあつたが、これも極めて一時的のことで、彼等はこの問題についてだけは、嘗て心を痛めたことはなかつた。その證據には、米國は元來が統計の國といはれるほど統計好きの國民で、犬猫何疋國內にあることまで統計で割出さねば承知しないほどであるが、失業者の統計だけは何處にもない。今度議會やら新聞やらの問題になつて、勞働省や商務省が慌てて、その手配をしたといふ一事が、この邊の消息を語つてゐよう。

◇

米國の失業問題の興味ある點は、英國やその他の國のやうに、不景氣であるから仕事がなくなつたのではないことである。尤も反對黨である民主黨などでは、現政府が繁榮一點張りで國民の人氣を買つてゐるのを面憎く思ひ、失業者のあることが、政府の云ふやうに繁榮でない證據ではないか、といつてゐる。併しこれは將來は兎に角、現在では一寸首肯しにくい說で、米國が好景氣であるといふことは如何なる點からも否定出來ない事實なのである。

その第一の證據には米國たおける產業界の生產は每年增加して行つてゐる。一九一四年即ち世界大戰開始當時を假りに一〇〇とすれば、昨年度の平均は一七〇であつて、七割の增加になつてゐる。またこれを農產物にみても、一九一〇年から一九二四年までの間に二割八分も增加してゐる。生產品が多くて、これが需要あり、更に外國に貸しつけた金の元金や利子が這入つて來るにおいては、どう見ても米國が不景氣だといふ理由はつかないのである。

しかも何故米國に失業者の數が增して、それが問題になり得るのか。それは機械の發達によつて、人間の手を必要としなくなつたのが最大の原因である。例へば昨年の五月における米國の生產額は、前述した通り一九一四

年に比し七割の増加だが、併しこれを就職者の數からいへば、その間に僅かに一割五分だけ増加したにすぎぬ。また農業においてもその生産が總額において二割八分だけ増加したに拘はらず、勞働者の人手はこの間に僅かに六分増したのみである。

即ち生産がドシドシ増加するに對して、その勞働者數は餘り増加しないのである。人手を省く機械が發明されゝばされるほど、この傾向が著るしくなるといふのがその一つの説明である。

◇

この事を詳しく説明する前にまづその失業數を紹介してをかう。前述したように全國的な調査はまだ出來てゐないが、米國勞働統計局が工場産業だけの就業狀態を調査したものによると、一九二三年度の勞働者就業狀態を指數一〇〇にすると、一九二七年度のそれは八八・五である。更にこれが本年度に入つて減少して、本年一月には八四・二となつて居る。これは米國としては驚くべき數字で、かの大恐慌だといはれた一九二一年よりも少ないのである。

この事は他の統計でも證據だてられる。ニューヨーク州では失業問題に篤き、早進産業局長ハミルトン君をして調査せしめたが、これによると『五十萬人を使用する一千六百五十個の工業會社より達した報告によれば、その使用人數は漸次減少し、一九二七年十二月においては就業數は一九二一年十二月よりも少なく、更に一月に入つて二%減少し、一九二一年一月の下にある』と報告して居る。

然らば失業者の實數は何程あるのか。これについては前述の通り詳細の統計はないが、私設の勞働局（Labor Bureau, Inc. of New York）の調査によれば四百萬に達してゐるだらうといふ。そして米國全體の勞働者數が約四千萬人であるから、これは約全數の一割に當るわけである。同局の一部的の調査は左の通りである。(單位千)

就業減少概算

	一九二三年(勞働者數)	一九二七年	増減
製造工業	八、〇七八	七、〇七六	(減)一、〇〇二
鐵道(一級)	一、八八〇	一、七八〇	(減)一〇〇
石炭坑	八六三	七六三	一〇〇
農園より都市へ移動			(減)一、〇〇〇
建築工	一、四二六	一、七二六	(増)三〇〇
總計	一四、九七七	一三、〇七七	(減)一、九〇〇

右によつて就職勞働者數の増加したのは建築界だけであつて、他は悉く減じてゐることが分る。これに加へてこの期間内に勞働年齡に達して増加した人口數が三百萬人と見ることが出來る。これと前記の減少數百九十萬人と合せると、四百九十萬人になるが、併し米國の内で事業が發達して就職者が増加したものもある。自動車、公共事業、專門家、興業物等がそれだがこれ等を合せて百八十五萬人の増加とする。これも差引けば殘るものが約三百萬人である。この三百萬人に從來如何なる場合でも存在して居つたであらうところの百萬人を加へれば、四百萬人の失業者が現存するわけである。

以上が米國の失業者數を四百萬人とする數字の根據である。

◇

この數字を示されて驚いたのは米國の朝野である。失業問題などといふものは、貧乏國にこそあれ、繁榮を以て一世に鳴る米國にある筈はないと決めて來たところである。

一部からは社會主義雜誌などといはれるニュー、レパブリックすら『かりにその四百萬人といふ數字を半分にして、二百萬人と計算せよ。この巨數の人々が、他人の慈善乃至は借金によつて生活して居るのである。これは大問題ではないか、或は狀態は既によくなつたといふかも知れない、けれどもそれは又逆つて來るのである、われ等は須らくこれに備へねばならぬ。況んやこの失業問題の解決は今のところ必ずしもその曙光を認められぬにおいてをや』とて、始めてこの問題の重要性に氣がついたことを述べてゐる。

ニユーヨーク・タイムスも、この原因の明瞭でないことを自狀して『現在の失業問題は、昨年度の產業界及び商業界の反動と共に、困難な問題であつて、未だ何人も明瞭に說明したるものがない』と述べ『石炭のストライキ、フオード自動車會社の生產中止、ミスシツピー河氾濫による購買力の減少等は、いづれもこれに影響はあらう。併しながらその反動が大であり、かつ國內の總べての方面に響いてゐる深度から押して、これだけの原因によるものだとは考へられない。殊に問題の說明を更に困難にすることは、一九二五年、一九二六年頃には、米國は今や人爲的に經濟的現象を統制し得て、將來の景氣、不景氣、物價の高低、失業問題などは現出しないものだとの信念が一般に持たれて居つたからである。』と、問題の說明を持て餘してゐる。

◇

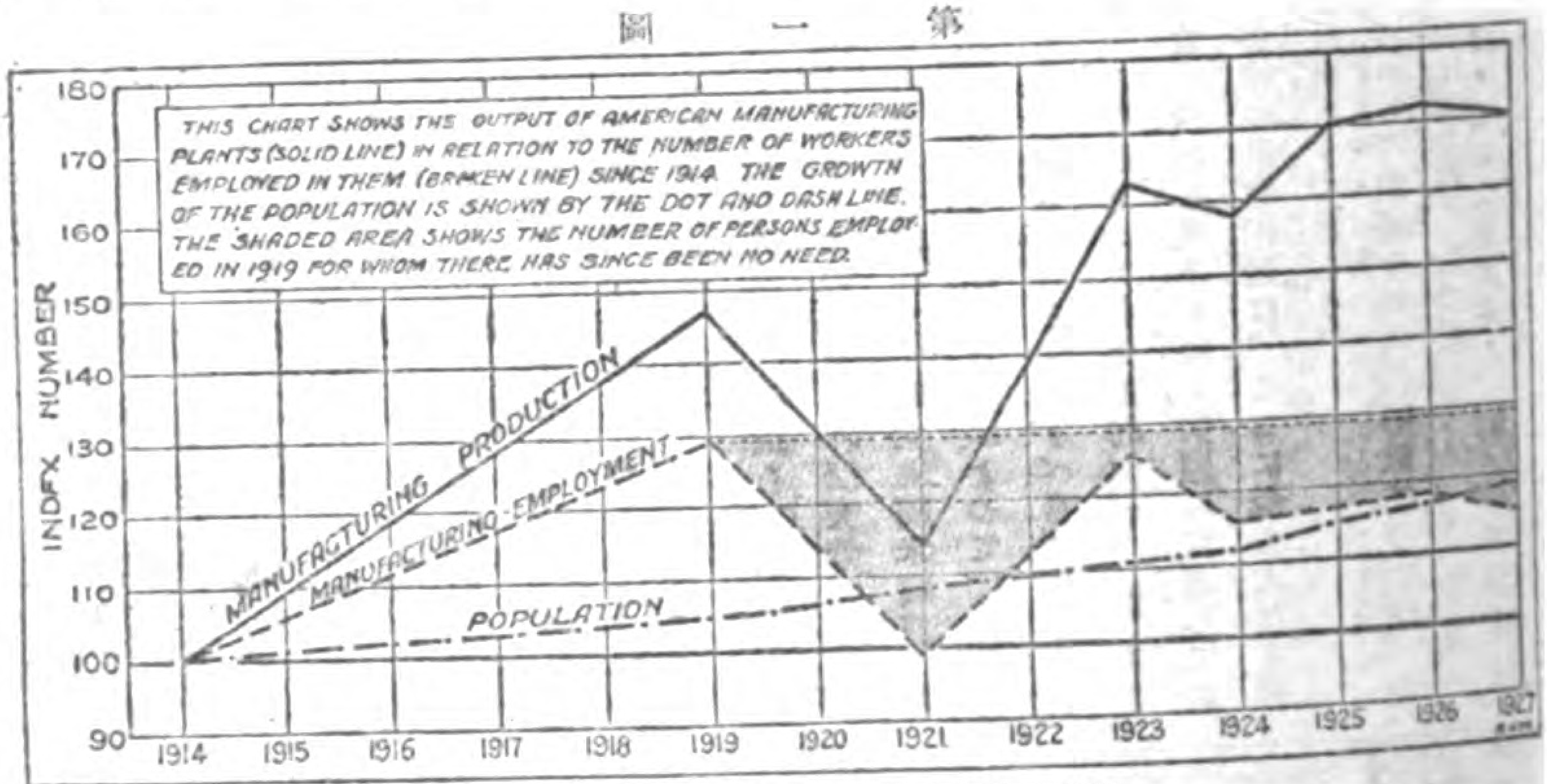
かうして米國の經濟學者が、この失業問題の原因に對し說明をすらなし得なかつた時に、比較的によく問題を解剖したのはニユーヨーク・タイムスに現はれたエヴアンス・クラーク君の說である。

同君は米國の失業問題が、その不景氣から發してゐるといふ事實を否認して、米國の景氣は少しも惡くないといつてゐる。卽ち曰く『從來景氣が惡ければ、その工場は人を減らす、併し景氣がよくなれば再び職業を與へるといふ狀態を繰り返すのを常とした。併し今回の失業問題はこれとは明らかに異なつて居る。景氣は以前ほどよくないのは事實である。併し一九二一年度のやうな不景氣の徵候は少しもない。大飛躍を準備してゐるのはゼネラル・モーター會社ばかりではない。經濟界のバロメーターを以て見られるユー・エス・スチール會社の如きも、昨年末の運轉狀態は全能力の六割であつたが、今月（本年二月末）は八割九分に達してゐる。また同じく經濟界のバロメーターである電氣の使用率も、昨年の本月に比し七分の增加である。石炭と織物だけには多少の暗影が認められるが、併し一般の經濟界の狀態は堅實である。』と云ひ『何人も失業者が多いと聞くと、生產工場が不振だと考へるであらうが、事實はその反對である』と論じてゐる。

然らばその原因は何處にあるか。同君によると機械が發達して、勞働者の數を多く要しなくなつたことをあげてゐるが、この邊の說明が傾聽に値すると思ふ。同君の說くところでは、嘗て產業革命があつて、英國に織物機械が出來た頃、それまで手で造つてゐた織物業はこれに抗することが出來ず、失業者が澤山簇出したけれども、併しこの機械文明は結局他の需要と供給を生んで、勞働者は却つて幸福に生きることが出來たのである。併しこの事は永遠に可能であるか。否、米國の現狀は然らざることを示してゐる。卽ち機械文明が最高峠に達すると、不用に歸した勞働者は他に吸收されざるに至るのである。

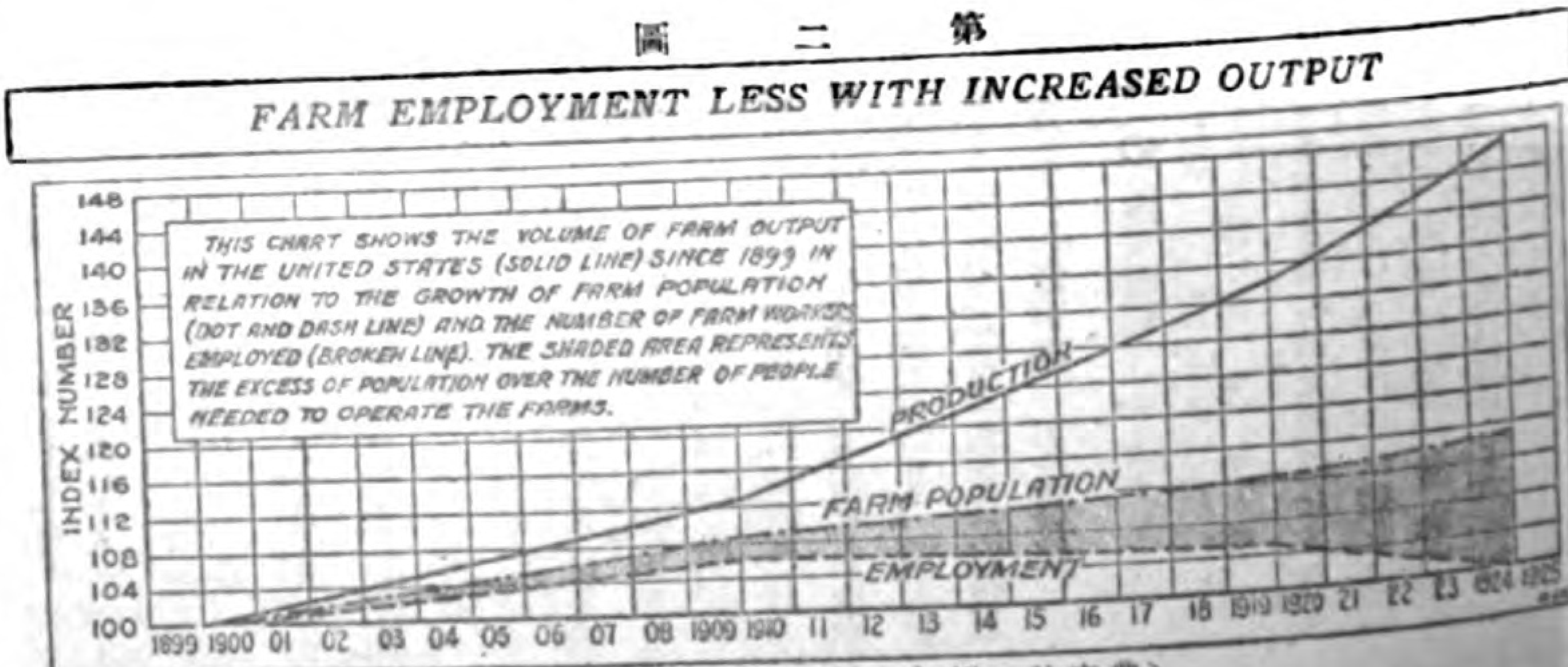
この事は、こゝにかゝげる圖を見ても分る。(第一圖)工業生產は一九一四年を一〇〇として每年增加し、今や一七〇に達してゐる。然るにこれに要する勞働者は一九一九年を頂上として漸次減少して行つてゐるのである。そこで圖にあるように、その時の就職者の數と、減少した線の間のスペース(小點で現はしてある)だけが現に失業問題を形成し

第一圖



INDUSTRY CARRIES ON WITH FEWER HANDS
The Nation's Factories Have Been Turning Out More Goods Than Ever While More Men Look for Work.
(生產量と就業人員の比較圖)

第二圖



(農產物の增加と就業人員の比較圖)

てゐるので、これに生長する勞働青年が加はるわけなのである。

同じことが（第二圖）農園勞働者についてもいへる。一九〇〇年を一〇〇としてその生産は絶えず増加して行つてゐるが、就業者は同じく減少してゐるのである。しかも農村人口は増加して行つてゐる。この差違が同じく失業者になるのだ。

◇

これは少しの例で直ぐ分る。例へばニューヨークの近郊電車は、かつては扉を開閉するために一人人間がついてゐたものだが、これを自動開閉にしたゝめ人員が二割五分減つた。また切符切りも自動的な機械にしたゝめ、人員が一千五百名から四百七十一名になつた。しかもこの間に客の方は五割も増加したのである。

更に他の例を以てすれば紙巻などでも從來悉く手で巻いてゐたのであるが、これを機械にした結果生産量において五割三分増加したに拘はらず、勞働者數は一割三分の減少を見たのである。この事は建築界でもそうである。種々の機械の發明によつて、これを一九二三年に比すると、一割五分の人間が儉約されて、しかも一割一分の能率が増加してゐる。石炭でもそうで、今や七割一分までは機械で掘つてゐるが、過去四ケ年の經驗でみると、以前より澤山の註文に應ずるに、一割五分がた少ない人手で充分なのである。鐵業も過去四ケ年間に、生産量は八分多くて、勞働者數は九分少ないのである。

かうした例を引用すれば幾らでもあるが、われ等はたゞこの傾向を知れば充分である。そして世界の徹底的な資本主義國米國が、その最高峰に達した機械文明によつて、自から試みられて居る事實を注意すべきである。共産國たる勞農ロシアも失業問題で、悩まされ、資本國たる英米も同じ問題に當面して居る。將來の社會問題は、こゝに最も大なる難關を見出だすであらう。

米國がこの問題を如何に解決するかは、われ等の注意を惹く點である。

新刊紹介

少年保護の法理と實際

少年保護婦人協會編

宮城大審院検事、植田鹿兒島檢事正、長島大原木村の各判事、鈴木東京少年審判所長の諸氏が各専門的見地より少年保護の根本精神、少年少女に關する諸法及び其刑事政策等を簡明平易に講述し、其保護事業に從事する者の必要なる法的知識を網羅せるもの。近時同問題が世界的に論議されつつある際眞に有意義な刊行と云ふべく少年保護に從事する者の指南車であり、苟も社會事業を論ずる者の必讀書である。（定價一圓八十錢　東京神田駿河臺　刀江書院）

東洋の再建

津田光造著

本書は著者多年修養の結果體得せる農本日蓮報德の教法を掲げて東洋の再建を提唱せるものにして、著者の熱意が溢れてゐる。（定價一圓五十錢　東京麹町下六番町　平凡社）

島崎藤村氏と長篇物語

吉江喬松

島崎藤村氏が長篇物語に着手せられたといふことは、以前武藤直治君から聞いてゐた。父と自分と子との三代に亙る時代の描寫、即ち明治の革新創設時代から、明治大正へかけての盛熟期、及びまさに開かれんとする新時代と、島崎氏の體驗と解釋とによつて描き出さうとせらるゝものと思はるゝ。個人生活と直接環境の生活と、更にそれを取卷く時代相の必然の推移を、内的には體驗に於て、外的には解釋に於て、綜合具體化して描き出さるゝことと思ふ。長篇物語が現代歷史といふ形に於て初めて展開せらるゝものと思はるゝ。自敍傳體と歷史體との一致ともなるであらう。

假に長篇物語がグレエト・ロマンスに相當するものと見なすならば、何等かの意味に於て歷史體であつてよいわけである。たゞその歷史を書く觀點が問題になるのである。現代歷史といふ場合に於ては殊にこの觀點がより多く問題になるであらう。島崎氏の場合に於て考へて見るに、情熱的な現實主義者たる氏は、單に傍觀的な現實描寫では滿足せられないに異ひない。更に時間といふ觀念のなかに出沒する現象を一種の詩的哀感で眺めやつて居るのでないのも勿論のことであらう。少くも科學的に必然的に發展推移する社會相を、比較的身近き現象に痛感して、それを取卷く時代相に展開せしめて

居らるゝのであらう。

十九世紀の三大長篇物語として、ユゴオの「レ・ミゼラブル」と、トルストイの「戰爭と平和」と、ロメン・ロオランの「ジヤン・クリストフ」とを擧げてゐる論者もある。けれど以上の三篇をのみ代表作とせずとも、更に大げさな企劃でなされたものであるならば、バルザツクの「人間劇」でも、ゾラの「ルゴン・マカル」でも擧げることは出來る。アナトオル・フランスの「現代歴史」と題する四卷の物語でも、「ジヤン・クリストフ」と併せて見れば一層意義を加へて來る。ユゴオの「レ・ミゼラブル」にせよ、これはユゴオの三部作の一部であつて、「ノオトル・ダム」と「海の勞働者」とを併せて初めてユゴオの思想的意圖は明かにせらるゝのである。文藝の形態論者にいはせると、これ等の長篇物語は希臘以來の大敍事詩の發達變形したものであつて、歴史的な要素と文藝的な要素との集成せられたるものである。

このグレエト・ロマンスに對する日本の明治以來の文藝家の解釋は多少偏してはゐなかつたか、そして近來論ぜられてゐる諸家の長篇小說論にいたつても徹底しない點が多くありはしないか。「奇異譚とは何ぞや、英國にて羅マンスと名づくるものなり。羅マンスは趣向を荒唐無稽の事によりて、奇怪百出もて篇をなし、尋常世界に見はれたる事物の道理に矛盾するを敢て顧ざるものにぞある。小說即ち那ベルに至りては之と異なり、世の人情と風俗をば寫すを以て主腦として、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料とし而して趣向を設くるものなり」(小說神髓)とある。これは少くも當代までの英國文藝に當てはめては正當な解釋であるに異ひない。そしてこの「小說神髓」が明治初頭廿二三年頃までの唯一の組織立つた文藝論であり、當代の小說家等にとつては極めて意義ある指導の語であつたに異ひない。事實明治二十二三年頃までの外國小說の飜譯は凡そ百六七十種ほどあつて、フエヌロンや、スコツトや、リツトンや、チユマ・ペエルや、ヂヨルジユ・オネや、最も種類の多いのはジユル・ベルヌである。それ等のものが一般に外國文學として紹介せられてゐる時代には、ロマンスとノベルとの區別を前述の如く論じて、當時の新文藝の方向形式及び態度をきめしめる必要があつたであらう。

併しその後の凡そ四十年間の日本の文藝に於ても、ロマンスとノベルの區別は凡そ前者の如き解釋を浪漫として受け入れて來てゐるのではなかつたか。或時代には、或る觀點を定めて社會事象を取扱ふ文藝を傾向小説と呼んで寧ろ排除せんとし、併に傍觀的な現實主義を徹せしむるのが文藝の使命の如く考へては來なかつたか。それ故、最近になつて長篇小説は必然的な通俗小説なりやといふやうな問題が論ぜらるゝやうになつて來たのである。傍觀的現實主義はいかに精緻に徹しても通俗小説の範圍を脱することは出來ない。風俗史の材料を提供するかも知れぬが、それ以上のものにはなり得ない。言ふまでもなく、文藝は歴史ではない。歴史に何物かゞ加はらなければならない。作者の社會觀か世界觀か、主義か主張が、或種の要求が加はらなければならない。それでなければ、文藝は表現にはならない、再現に終る。再現は歴史のすることである。

現代歴史の文藝的表現といふことが長篇物語の大切な意義の一つであるとするならば、單なる傍觀的現實主義は排すべきである。現代歴史の必然的に到來すべき姿が地平線上にそれは單なる好奇心に現はれて來なければならぬ。それに到來する必然の順序が首肯せらるゝ事を要する。傍觀的現實主義なるものは單なる好奇心に過ぎない。十九世紀初頭の歴史的ロマンスが所謂荒唐無稽な事柄に空想を樂ましめてゐたと同じく、現代の事相の變遷推移を表現的に傍觀的に好奇心を走らせてゐるだけでは、所謂通俗小説たるに過ぎぬ事となるであらう。

島崎藤村氏は熱情的な現實主義者である。氏の觀點はコレクテイヴイスムに置かれてないにしても、集合生活を痛感し得る人である。氏の從來の作品はこの痛感したるものを個人的見地から取り鎭めて描き出したものである。決して傍觀的な現實描寫はない。恐らく今度書かれる長篇物語に於て個人生活の戸を開いて内から跳り出らるゝ事であらう。

ブルジョワジスム、キヤピタリスムの萠芽發生期と、その成熟期と、及びその崩壞轉廻期と、日本の現在までの過去六十餘年は、現代歴史的文藝にとつてはまことに好乎な題材である。丁度時代から言へば、佛蘭西の第一帝政が倒れて、第

三共和政が建てられ、世紀末の惱みから世界大戰を經て今日にいたる時代である。同一の思潮は世界の各國を浸潤してゐて、その基調の上に立ち現はるゝ現象は樣々な環境關係に於て異なつた姿を呈してゐる。殊に日本のやうな比較的單期間に歷史の歩みを進めた國に於ては、結成も崩壞も典型的な際立つた姿を見せてゐる。相當の年齒の人ならば、その人一代に於て、日本の現代史の發生成熟轉回を親しく痛感してゐるに違ひない。その痛感のなかに必然性を見出し、その部分的現象から演繹して考へ、普遍性を導き來る科學者的態度、それが島崎氏の長篇物語を作らしむる態度ではなからうか。

新興文學者のなかに新らしき意味の長篇物語を書く可き人を求むれば、今までのところでは前田河廣一郎氏であらう。氏の總括力と統率力とは氏の社會的觀點と相まつて、博大な物語を作らしむるに十分な素質を示してゐる。實を言へば、眞の意味の長篇物語は前田河氏等その他の新興文藝家等の手によつて初めて日本へ示めされるのではないかと思つてゐる。從來の日本文化の歩んで來た跡を振返つて批判し、近き將來を我々に啓示するには、全く新らしき觀點によつてなさるゝ事が一層的確な一層鮮明な姿をとるからである。或は新興文學の新領土は今後寧ろ長篇物語といふ廣大なものとなつて現はれて來るかも知れぬ。その中では、調査も研究も、批判もなさるゝであらう。或場合には、多數者の合作的發表をも必要とするであらう。

兎に角く長篇物語には、時代を批判し、時代を導くための、經濟觀、政治觀、社會觀の綜合性を必要とする。嘗て情熱の抒情詩人であり、現實主義の小說家であつた島崎氏の長篇物語は、氏の熱情が精進せしめずには置かない文藝上の正當の發達を當然そこまで導き來たつた點に多大の期待を持たしむるものである。氏の如きは眞に生きて、自然が暗默の間に不斷の活動をなしつゝあるが如く、伸展してやまぬ藝術家である。氏の存在は人々の意を強ふする。

島崎氏の長篇物語は現代が要求してゐる時代の清算を何よりもよく果たしてくれるに異ひない。恐らくこの時代的清算の要求が氏の情熱を動かしてこの物語を着手せしめたことであらう。清算のなかゝら新たなる萌生が生れる。島崎氏の歩んで來た道と、島崎氏の前に開かるゝ地平線と、それが現代の歷史となつて開展せらるゝであらう。



恠談牡丹燈の源流

日夏耿之介

由來、怪談と艶話とは、人間の本能に根ざしたふたつの好話柄で茶前酒後落ちゆくさきは必ずやこゝに集る浮世話の一大テーマであり、若し、これに犯罪探偵譚を加へれば、まさしく大衆好尚の三幅對が出來上るわけである。

こゝには年來些か心掛けて蒐集してみた德川恠異談說考の材料のなかから、一般的に面白かりさうな題目をとり出して、その價値と源流とをさつと訊ねて見よう。「恠談牡丹燈」としたのは、單に「牡丹燈籠」のみでなく「牡丹燈記」にもかゝはつてゐるからにすぎん。

明治二十五年七月の歌舞伎座は、月の十四日にふたを開け、新味のある外題をかゝげてお芝居好きの興味をそゝつた。すなは

ち、「怪談牡丹燈籠」と「枕慈童」の新狂言の初上場である。

五代目は、當時大阪名古屋の旅興行をすましてかへつて來て、七月狂言の評議にかゝつたが、結局その年の正月狂言に當りをとつた縁起をかついで再び同じ圓朝物を出さうといふ事になつたのである。

序でだから、その正月物の事を書いてをくが、三遊亭圓朝得意の續物「鹽原多助」を新七が脚色した一月歌舞伎は、箱根の宿屋の對面を中幕に擬し、對面場を居所替りで小兵衛が輕井澤の宿屋で夢にみる趣好や、切の階子乘の梅幸得意のケレンなど當つて、當り振舞をするさわぎ、十九日には三遊派が圓朝初め數十人「多助連」と誂した半天を羽折つて總見をしたものである。

その前例もある事だから、菊五郎は福地櫻痴の手で作の圓朝怪談を補綴させ、それを新七や其水などが加筆して通し狂言としたのであつた。

しかも、前回の興行が五月末から「繰女房染分手綱」と「太鼓音智勇三略」と所作事「加茂容也運動競」であけて團十郎が竹村定之進井伊忠縱乳人重の井傳導師團阿彌を引受けたが不入で大味噌をつけたので、田村將軍が千葉勝と申合つて盆芝居に牡丹燈籠はどうだといふ話が出て、折も折り團十郎は菊五郎の子丑之助（今の六代目）に[illegible]をならした[illegible]に上出來だつたといふので可愛がつてゐる事實につけ込み、兩優を結び付けようと策謀怠りなく、將軍が名古屋へ出かけて五代目と相談の上一決して、いよいよ初日をあける事となつた。ところが、團十郎は六月興行の失敗で些さかひけを感じても居るし、五代目は吾子を可愛がつてくれる親情もあるので、その間がうまく行つて、こゝに音羽屋一座でふたを開ける段取となつた。

役割は

飯島平左衛門山本志丈（松助）　萩原新三郎下女おます（菊之助）　若徒孝助後相川孝子孝助根津伴藏後關口屋伴藏お米の亡靈（菊五郎）　仲間源助良石和尚（彦十郎）　仲間六藏惡者六藏（菊四郎）　夜番吉兵衛門翁堂勇齋笹川鄉太夫（幸十郎）　飯島の娘おつゆ同亡靈（榮三郎）　飯島の妾お國宮の邊の妻お國伴藏女房おみね（秀調）　仲働おきみ（梅枝）　下女おたけ（秀世）　吉兵衛女房おさく（あやめ）　宮ノ部源次郎鎌之丞實は源次郎（八百藏）　所化隨念（尾二松）　貮婆々おくろ惡者臨藏（扇藏）　石屋の作三太（百太郎）　門番の伜與吉酒屋の丁稚升吉（鯉字作）　ごぜんたきおかめ丁稚新吉（梅助）　百姓勘太郎女おきめ（菅藏）　馬士久作（猫太郎）　茶屋女おてふ（山調）　同およし（梅之助）　同おつる（[illegible]）　[illegible]

（音五郎）　手代久助（八百蔵門）　同仁蔵（紫蔵）

といふ顔ぶれ、所作事の「牡丹燈」は在来の菊慈童を大体もととして新らしく新七が作つたもので、いつもは長唄斗りであるのを清元を加へて掛合にしたのである。表看板の牡丹燈籠は山田年貞が書いた。舞台や茶屋へは牡丹の造花の盆燈籠に重扇の紋所と作者の名を書き五百個以上もつるし、東京市中の氷屋へも盆燈籠数百個を送り、十五十六兩日の藪入には牡丹の書團扇を景物に出す、二十三日の兩國の川開きには牡丹燈籠二千個を大川筋へ流すといふ宣傳振りであつた。これが牡丹燈籠の最初の上場である。あたつた事いふ迄もない。これは田村成義の「年代記」によるものである。

翌二十六年の盆興行にも、當つた圓朝物の味は忘れず圓朝作「榛名の梅香」を新七が脚色したが一向評判にはならなかつた。「怪談乳房榎」とか「嵯峨奥妖猫奇談」とか「播州皿屋敷」とか「四谷怪談」とか「累井筒田夜話」とかその頃相當に上場せられた怪談ものが多かつたが、牡丹燈籠は、累やお岩のやうに汚穢醜陋でなくて、何處までも清くうつくしく、ロマンティックである處がとり得であつたが、狂言として見れば不備粗雑はいふまでもない小芝居の盆興行物であるから、當時目星しい評判もなく、その後も小芝居が上演した三十七年頃までは大芝居でこれを上場したもの絶えて無く、僅かに三十六年の七月興行に新富座で又五郎左團次などの一座が手に掛けたにとどまるやうである。

大正の初め三年七月の淺草宮戸座にて偶然伊井蓉峰一座と共にこの芝居を見た。その印象記を雜誌「假面」に書いた事があるが、その一節を抜くと「○大阪上り七賀之助の新三郎にはウンザリした。アレでは活動芝居だ。コンナ利發た男は早く敗地へ歸すがよい。鬼丸のお露は聲がいやだ。誰やらのお米もなつてない。○名優桃三が伴藏はコッケイなものだ。此男は早く地位を下つてホントの處から熱心にやり出さなきア出世の見込みがない。○その女房は矢張り見丸がした。之れは素的だ。一寸之丸丈けたツしやにやる男はないと云つてよい。桃三は老作になつてからの方がうまかつた。○捌五郎の平左は舞台の上で何か考へたからボンヤリ座つたり立つたりする丈けだがそれでも面白い。此人を見ると無暗に氣持がよくなる。モ一ツ誌朝の露背が又面白い、こんな傾倒趣味はどうしても中々目ッからない。有難い（字の通りの）うれしい男の一人だ」云々。

芝居の牡丹燈籠がもてはやされた其以上にも圓朝の原作は讀まれた本である。「怪談牡丹燈籠」は明治十七年七月上梓、日木村文事堂の出版で、筆記者は例の若林玵藏、十九年七月までに

に五版を重ねてゐる。坪内逍遙の序文が面白い。全文を引くと「およそありの儘に思ふ情を言顯はし得る者は知らず〳〵いと巧妙なる文をものして自然に美辭の法に稱ふと士班釵の翁はいひけり眞なるかな此言葉や此ごろ詼談師三遊亭の叟が口演せる牡丹燈籠となん呼做したる假作談を速記といふ法を用ひてそのまゝに謄寫しとりて草紙となしたるを見侍るに通篇俚言俗語のみを用ひてさまで華ありとも覺えぬものから句ごとに文ごとにうたゝ活動する趣ありて宛然まのあたり萩原某に面會はするが如く阿露の乙女に逢見る心地す相川それの粗忽しき義僕孝助の忠やかなる談來れば我しらず或は笑ひ或は感じてほと〳〵眞の事とも想はれ假作ものとは思はずかし是はた文の妙なるに因る歟然り寔に其文の巧妙なるには因ると雖も彼の圓朝の叟の如きはもと文壇の人にあらねば操觚を學びし人とも覺えずしかるに倚よく斯の如く一吐一言文をなして彼の爲永の翁を走らせ彼の式亭の叟をあざむく此好稗史をものすることいと訝しきに似たりと雖もまた退いて考ふれば單に叟の述る所の深く人情の髓に穿ちてよく情合を寫せばなるべくたゞ人情の皮相を寫して死したるが如き文をものして婦女童幼に媚むとする世の淺劣なる操觚者流に此燈籠の文を讀て圓朝叟に耻ざらめやはと感せし所をのべて序に代はるまゝに記して與へつ。春のやおぼろしるす。」而一つ古道人といふ人の序もあるがそれは堅苦しい短かい素人文章である。

圓朝の牡丹燈籠は第一回兒漢泥醉拔佩劍 壯士慎怒斬禍本にはじまり、第廿一回正邪共盡慈母之義 辛苦初復愚人之仇に畢る二百八十六頁の小冊子だが、果して圓朝が粉本をもととして單獨で創作し上げて口演したものであらうか。假令んば、その樣な創作魂はあつても閑暇のない職業の事であるから、あるひは序をものした古道人なるものゝ大凡の組立てによつて圓朝が細部に工夫を施して口演したのではなからうか、がこれはひとつの憶說を提出してみたにすぎない。

寛保三年四月十一日、湯島社頭の聖德太子祭禮日に、本鄉三丁目藤村屋新兵衞といふ刀劍商の店頭を仲間を供に伴れて通りかゝつた年の頃二十一二の少し糊粹持ちらしい色白の武士、ふと刀に目がついて亭主と掛合つてゐると、通り掛りの醉漢が供の仲間に喧嘩をしかけるに初まり、その醉漢は丸山本妙寺中屋敷に住む黑川孝藏といふ惡侍で、擧句の果てに黑川が斬り仆されて若侍飯島平太郎おかまいなしとなる。後、この平太郎が家督を繼いで平左衞門となり、水道端の三宅といふ旗本から妻を迎へてその間に出來た女子がお露といふ國色で、十六の春を迎へた時、母親が死んで父親は婢女お國を妾として、その妾がお露をなぶる。翌年、出入の封間醫者山本志丈の知人に[illegible]

水谷に住む美男の浪人萩原新三郎といふ二十一才の[illegible]つたがその許を訪ねた志丈が、龜戸歸りに飯島別莊へ寄つて別嬪の嬢樣を見せようとてそれから兩人で出かけ、下女のお米を手引きに新三郎おつゆを逢はせると忽ち戀中となつて了ふ。飯島本郷の平左衛門は草履取孝助といふて新規に雇ふとこれが昔殺した黒川の忘れがたみと分り時を見て打たれてやらうと決心する。萩原は戀人お露忘れかねクヨ／＼してゐるとそこへ孫店の伴藏が訪ねて來て氣晴しの釣に誘ひかけられ、ゆくりなくも來た飯島別莊へ一人で入り込みお露と嬉引し香箱を貰ふ處へ父親が出て來てバッサリ斬られたと思ふとたん夢がさめて身は依然として釣舟に臥てゐたが不思議や香箱の蓋許り手許にある。一方、飯島の妾お國は隣家の次男源次郎と通じて飯島を亡き者にしようとの相談を孝助に立ち聞かれ、源次郎に攻め切斷させる。萩原は志丈におつゆが戀わづらひの上句死んだときき念佛三昧で暮してゐると、盆の十三日に「カラコン／＼と」駒下駄の音をさせて生垣の外を通るものを見ると、三十位の大丸髷の年増が縮緬細工の牡丹芍藥の花のついた燈籠を提げ、十七八の文金高髷に秋草色染の振袖、上方風塗柄の團扇を持つた娘と歩いて通るので、ふと見れば娘はかのおつゆであり、年増は婢女のお米である。話をしかけて見ると、親父や妾が八釜しい[illegible]それからは、二人の戀情が[illegible]結ばれて七日に及んだが、萩原に住む伴藏が夜中に怪しき[illegible]るをいぶかり萩原の家を覗いて見てハツと驚き近所の易者白翁堂勇齋の許へかけ込む。

飯島家では、相川新五兵衛といふ者の娘のお徳が下僕の孝助を見染めたとて養子に貰ひに來るので、孝助は考へた末に[illegible]つて平左衛門に種々忠告をして出て行く。この段は筋を運ばせるために無理に拵へた話で實に拙劣きはまる。作藏は、勇齋に新三郎が幽靈と懇ろになつてゐると語るので、勇齋は萩原を訪ねて、死相を現じてゐるから二十日を待たずに死ぬといふてさとすので、新三郎は三崎から新幡隨院へ通り拔けようとすると、御堂の後ろに新墓があり高塔婆の前に牡丹燈籠が雨さらしになつてゐる。庫裡へ廻つて住僧に墓の主を訊くと飯島の娘と判り、「（新）そうですか夫では全く幽靈で、（僧）なにを、（新）たんでも宜しう御座いますな樣なら。」などといふ講談師や落語家特有の惡洒落れで無知な聽客のゲラ／＼笑ひを豫想する[illegible]なセリフもやつてゐる。それから、勇齋の世話で新幡隨院の大僧良石和尚に金無垢の死靈除け海音如來の守りを貸して貰ふ事となり、雨寶陀羅尼經文も借りてくる。家へ歸つて「傳通院の夜の八ツの鐘がボーンと忍ケ岡の池に響き」わたる頃、「駒下駄の音

高くカランコロン／＼とするから一念佛を唱へて小さくなつて隱れてゐる。飯島では、妾と情夫とが孝助を邪魔にして相部屋の相助といふ薄馬鹿をそゝのかし、時藏、龜藏といふ惡徒を誘つて相助は孝助を道に要して殺さうとするが反つて孝助に散々打ちのめされる。作藏は幽靈に萩原の窓下の御札を剝がしてくれれば百兩やると賴まれて承知する。飯島が泊り番の留守中、妾お國が目をさますと、襖がスウとあき地袋がカタ／＼して錠をあける音がする、「ハテナと思ふ內にスウートンと襖をしめピシヤリ／＼と裾を引く」あんばいで出て行つた者があるから行つて來ると手文庫の胴卷の百目の金子が紛失してゐる。この邊高座では凄からう。狡猾なお國はその胴卷を孝助の文庫に隱しておいて飯島がかへると訴へて詮義が初まる段取となり、とど孝助の申譯が立たず手打になることにきまる。一方、作藏は、女房おみねを談らつて新三郎の目をかすめて海音如來を盜み出し、夜になつて幽靈が來ると百兩を受とつて札を剝がしてやつて勇齋と後から見にゆく。飯島は孝助をもとより殺したくないから胴卷をやつて堂忘れしてゐた事にして許す。孝助は源次郎を殺して死ぬつもりで夜隱に忍んで鎗で突くとそれは意外にも飯島で、愕いてお國源次郎不義の仔細を物談ると、飯島は孝助の父黑川を殺したのは拙者であると今迄の秘密を明かし、孝助義憤の情誼を知悉してゐてわざと打れてやつたが、早く養家へ歸れと無理にかへし、庭にゐる源次郎を突殺さうとして反つて殺される。お國はそこで源次郎と驅落ちして了ふ。で、相川は孝助を飯島の仇打ちに出立たせる。勇齋と作藏は新三郎の家內へ這入つてみると一個の髑髏が萩原の首に嚙みついて萩原は虛空を摑んで死んでゐる。で、作藏は惡事露見を怖れて郷里の栗橋へ移り妖婦お國（驅落した妾の後身）にうつゝを拔かして女房お峯を殺してすましてゐると召使のおますに亡靈が憑くので醫者を賴むとそれが昔間醫志丈で、結局作藏の白狀では、彼が新三郎の肋を蹴殺して、新墓の髑髏を出して來て屍體にくつつけておいたのだといふ。處へ、源次郎が出て作藏をゆすると、二十五兩やつて歸す。さて、孝助は源次郎を探して知らずに歸つてみると、相川娘お德の腹に子が生れて孝太郎となつてゐる。新幡隨院へゆくと和尚が劍難の相があると戒める。歸途途中で勇齋を訪ねると其處へ來た宇都の宮の女といふが孝助の實母と判明、その實母りゑに黑川家離緣後桶の口屋五兵衞に緣付くと八ツになるお國といふ先妻腹の娘があり、それが性惡故、三宅といふ旗本へ奉公に出した處、先達て源次郎を伴れて來て賴まれてかくまつたといふ。孝助は天の助けと宇都の宮へ乘込

みせようとするに伴は後方にかくされて[illegible]分に死んだと悟る、後を追つて同人に助太刀の[illegible]新相助[illegible]しにして歸京、新三郎のため讀佛を造立したのが新幡隨院濡れ佛の緣起だといふ段でこの物語は終つてゐる。

さて、長々と梗概を書いてはみたが、怪談牡丹燈籠として傳へられてゐる物語も、實は作者圓朝には一向怪談の興味そのものが深刻でなく、草紙作者並みの怪異の味付け程度である上に、わざと作爲の怪事に事を片付けてしまつてゐるし、前の筋もあり來りのややこしい、有りふれた仇討話に怪談をとり交ぜた世話風の緣起物で、なかに潜んだ圓朝の會話にも落語家流の低級性がとれてないとすれば、實はさして注目するに足る假作物語とも思へないと誰も感じるに相違ない。實際、おなじ圓朝ものでもモウパスサンにもとづいた「名人長次」の方が名人氣質の描寫などははるかによく出來てゐるのである。たゞ素人がこれ迄にからくりをよく作り上げたと感心すればする迄である。

牡丹燈の怪を怪事とせずに實は惡事であつたと解釋したところに、明治開化時代の圓朝の卑俗なる自然主義があるのだが、事實は、そのために折角詩興滿溢のロマンティックな物語を殺なし物にしてしまつてゐるのである。

櫻痴居士の脚色になる脚本の「牡丹燈籠」では、芝居といふものの性質上、[illegible]ことであるので、通り一遍の怪談劇にすぎないに係らず、見た目になんとなく異つたやうな、お露のやうな[illegible]味がなくて[illegible]しい浪曼的超自然詩情を感じさせるところに興味がある。圓朝のにしても、實際にこの高座を聽いたならば、巧妙なる話術の技術によつて、怪異出現のあたりは讀本としてのあの圓朝物を讀むよりもはるかに興味がふかいに相違ない。カランコロンの下駄の音は日本のひとを特に戰かせて、この怪談の獨得の凄味である。

いづれにしても、話說の中心興味は、牡丹燈を携へ一[illegible]てくる二麗人と美男とのからまり合ふところに存するので、怪談牡丹燈籠の興趣は、すなはち、圓朝獨自のものでなく、芝居の牡丹燈籠劇そのものでもなく、むしろこれ等の話のもとになつた牡丹双燈をめぐる一篇の古說話にあると云はなければならぬ。たゞ、今日迄怪談といへば牡丹燈籠といふ程人口に膾炙してゐるのは、圓朝の創作的才能のためではなくて、一に下手に仕組んだ草双紙風の筋を通る彼の獨得の話術と、脚本牡丹燈劇の浪曼的容姿美とによるもので、文學としても、戲曲としても、その不自然と筋の運びの拙劣と[illegible]たる性格と作者本領の低劣と、何れの見地から見ても立派な出來の作物ではな

い。圓朝が單獨で創作したにしたところが、それは單に圓朝の創作的小才の證左になる位のもので、もとより明治文學史初期の文藝作品として優位に置くほどのものでは勿論ない。あの程度の草双紙染みた脚色手法の所有者なら、當時幕末この方殘存した戯作者文人にいくらでもその人は居つたのである。怪談牡丹燈籠の興味は、であるから、どうしても、直接には圓朝の話術と小芝居向きの面白い、暢氣な、美しい幽靈出現場とにあるので、間接には支那の原話が有する、牡丹燈を携へたる美女の怪いうつくしさに存するのであるから、この一種の怪異譚の價値を糺すには、更に溯つてその原型に到らなければならない。

富山房の名著文庫本「雨月物語」の緒言に、校訂者芳賀矢一博士は「吉備津の釜磯良の亡靈は、圓朝の牡丹燈籠の本になつた聊齋志異の怪談その儘である。」云々と云つてゐるが、これは、勿論、博士の誤りで、牡丹燈籠は「剪燈新話」の翻譯である。が、直接にその粉本となつたのではなくて、淺井了意の「伽婢子」によつたものにちがひない事は、既に「列傳體小說史」以來世間周知の事實である。

しかし、牡丹燈怪奇を扱つたものが「伽婢子」のみでないことも亦事實である。その最も近くに存するものとして明治二十二年版石川鴻齋の「夜窓鬼談」二卷を舉げる事が能きる。この書は、ラフカディオ・ヘルン（小泉八雲）の著「日本妖怪志」In Ghostly Japan に於ける「情痴の業」A Passional Karma と前後してかゝれ、一は漢文一は英文であるのも好い對照である。「夜窓鬼談」は「斯編多係虛譚。」といひ、又「古談或改更原文。」と著者がことはつてある通り、さまざまの材料からの雜然たる蒐集で、說話學上の純一性は有たないけれど、讀んで興味を掬からず感じる漢文體の戲著である。上卷に四十五篇、下卷に四十二篇を收めてある。その内の「牡丹燈」はすなはち圓朝本によつたもので、

「享保年間。江戸有二飯島某一。數世事二幕府一。館二於牛門之外一。家亦小康。女名二阿露一。」にはじまり、「其夜二更。又入二生之室一。明朝作藏告二白翁一。要レ之與二作藏一訪レ生。生未レ起。開二室生已死矣。」に畢つてゐるが、その文末に「此事當時記二於土佐某氏所畫横卷一。書間以二和文一録レ之。然生死後皆省レ之。」云々とあるから、あるひは土佐派の畫人でも之れを繪卷物にしたものが殘つてゐるのかも知れない。現存すれば一見したいものである。鴻齋は當年の漢文家としてもとより「剪燈新話」の原話は知悉してゐたに相違がないから、わざ〳〵剪燈の作文によらずして圓朝物によつたのは、當時親ら圓朝の高座を聽いてその話術に感じ、その說話から取つたのかも知れない。この「夜窓鬼談」の

板本は、平幅穩晦の筆になるものであるが、牡丹燈の話に韜晦としては甚だ出來榮えがよろしくない。一向に幽氣の拔けた尋常婦人のそゞろなる夜行にすぎないのである。

例のカランコロンの凄場を鴻齋は「忽聞二牆外履聲一。生意二許レ之一、竊從二籬隙一覰レ之、乃島氏婢。携二牡丹花紺燈一。冉冉與二娘子一來。」と書いてゐる。畢竟、開朝本の平凡な漢文抄譯にすぎないのである。支那原文を知るものは一層その感を深くする。

しかるに、ヘルンの牡丹燈はどうかといふと「情痴の業」の勞頭を譯して見ると

「東京の舞臺で、いつも人氣のおとろへない芝居は、名優菊五郎一座の“Peony-Lantern”すなはち牡丹燈籠である。この氣味のわるい芝居は、前世紀中葉に場面をとつてあり、もと支那說話から考案したものだが、圓朝といふ小說家が日本語の口語體で創作した日本生粹の地方色の出たロマンスを脚色したものである。わたしはその芝居を見に行つて、恐怖の快樂の新種を菊五郎によつて視しませて貰つたのである。」

斯く書いて、ヘルンは東道の日本人のすゝめでこれを翻譯する事となり、牡丹燈籠の中で特に幽靈譚のみを詳しく書いて外の草双紙興味の騷動場面は略いてゐる。これは誠に賢こい方法である。その幽靈描寫は中々詳しい。いや、かへつて原作（圓朝の）よりも詳しいところがある。お米には：[illegible]：の意[illegible]（朝露）の意である。旗本は：Banner Supporter：の意[illegible]には

と註し、又「全く君に焦れ死をしたと云ふ事です。貴女には罪造りですヨ。男も餘り美く生れると罪だネー」（原文マヽ）

I'm sin to have been born so handsome that the girl die for love of you. といふセリフを「西洋讀者には變に聞えるかも知れんがこの會話は寛實で行つたものである」云々と註釋してゐる。幽靈出現の場は

「ところが間もなくこの靜寂もカラコン、カラコン kara-kon, kara-kon と近づいて來る下駄の音に破られて、件んの音は急にだんだん近附いて來て庭をとり圍んだ生垣のもとまで來た樣子。新三郞は何心たく物好きに趾頭き立つて垣の上からさしよいと覗いてみると女が二人通つてゆく。一人は牡丹花を描いた美しい燈籠を手に持つてこれは腰元らしい、いま一人はすじほどの背のすらりとした娘さんで、秋草色染の振袖を着てゐる」云々と書いてゐる。ヘルンは尙、圓朝本では俗惡な勇猾や淫靡たる作藏の性格を自分で創作的に解釋して東方的性格の一方の代表に仕立てゝこの怪異の顚末だけを出來るだけ密詳に描いてをる。終りに、ヘルンは日本の友人と新幡隨院へ親しく宮垣見分に出かけ、その友人に「西洋的に、考へると新三郞は見下げ果

てた奴である。身は前世後世に百萬の生命存するを信ずる佛徒でありながら、冥界から男のために還つて來たこの女人のためにその儚ない命さへ棄てるをようせぬ我利我利亡者であつた。我利といふよりも臆病な男であつた。」といふと、友人は「日本風の立場で考へても新三郎は卑劣な人間ですが、作者はかういふ弱い性格を使用しないと事件の運びがつかないので點出したのです。私の好きな人物はお米です、古風な忠義一圖の良い婢女の型で……」と云つた。それから墓地へ行つてみると芋畠になつてゐて汚ない水溜りや手足のもぎ取れた佛像がある。近所の女にお露とお米の墓を訊いてみると地藏樣の隣りだといふので其處へ行つてみると、ひとつは

「寶曆六年【一七五六年）丙子三月十一日

Eleventh day, third month—Rat, Elder Brother, Fire Sixth year of Horeki【A. D. 1756】……

根津邊の宿屋の亭主で吉兵衞といふ者の墓らしい。今ひとつは

演妙院法縈意貞顯志法尼

尼さんの墓らしい。この法名はヘルンの譯名によつて假りに還元させてみたのであるから、寺内の本物とは大分文字がちがふかも知れぬ。ヘルンは「馬鹿をした。あの女にいゝ加減一杯喰つた。」といふと友人は、「折角感慨に耽らうと思つていらしたので、あの女が骨折つて恰ばせてくれたのぢやありませんか。こつちが不可ないのです。あの怪談をまさか事實だとは思つて、ゐらつしやらないでせうね。」と答へた。

こゝでヘルンの文章は終つてゐる。ヘルン文は例によつて佳麗であり巧妙である。この支那說話の純日本化ロマンスに於て、ヘルンはたゞエキゾテイツクな東方的詩情を樂んだにとどまるが、日本化せる支那說話の情痴の業因談は、多くの怪談物――「新著聞集」や「お伽百物語」や「玉帶木」や「百物語評判」や「お伽婢子」や「玉すだれ」中の騎談怪說と共に彼の東方浪曼主義の原泉になつた點で再造說話の眞面目な世界に提出してゐるのである。

牡丹燈綺譚の直接の粉本が「伽婢子」であることは前に云つた。伽婢子による牡丹燈が明治にあらはれる迄に、なほ多くの感化影響を與へて來たことは、この說話が「伽婢子」全篇のなかでも出色の材料で、恐らく伽婢子なる名前は牡丹燈記中「明器婢子」のそれによつて與へられたに相違ないと考へられる點を見ても悟られるが、その部分的の感化または分裂の跡は山口剛君が既に之れを拾ひ上げてゐるからこゝにはその一切には言

及しない事にしてをく。たとへば都賀庭鐘の「英草紙」一卷三「紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話」や、佐治隱士吉久の「怪醜夜光魂」卷四「山田半七亡妻の貞を正しく見る事」や、秋成の「雨月物語」卷三「吉備津の釜」や、京傳の「小幡小平次」や、南北の「阿國御前化粧鏡」その他である。すなはち、冥府の係りや死靈の係りや符文の係りや道人の係りや牡丹燈の係りその他である。これらは、それぞれ牡丹燈談の怪異談としての重要性と、同時に庭鐘や秋成などをのぞく他の怪談作家の獨創性の貧弱とを裏書きする事實と見てよい。

しかし、凡そ怪談の構成條件となる大道具小道具は、いちじるしい魅惑力を有した牡丹燈の明りが最初にハッキリと目についたればこそ、大家小家爭つてこれを粉本とし、大道具小道具ともしたのであるが、同じやうな道具立てが他に全く存在しなかつたわけではない。むしろ、怪異を長襲とするケレン好きのオリヂナリチイー缺しき諸作家にいたつては、憑持ゐる文獻から幻怪と畸異との場面と道具とを時々に借用してくるばかりか、普通並みの作家といへども、怪異のシーンになると、元來かさう譯由に創見を提出することのむかたい性質のものでもあるが、ともすれば前人の結構や許想を手とり早く模倣たがる[illegible]げたら夥しい例に及ぶことであらう。就中、日本の人情にふさはしく、日本化され易い構成や趣向をもつ[illegible]人性の本然に觸れた道具ほどよく用ひられたことは申すまでもない。「奇異雜談集」や「怪談全書」や「伽婢子」や「英草紙」のやうな翻案を長襲に用したものは例外として、西鶴、秋成、馬琴等さへ落想の上の先人追蹤はまぬかれないし、又追從はしても單なる輪廓の使用の上に尨大なオリヂナリチイーの殿堂を築き上げたのであるから、沙翁が古代記の材料に依つたごとく、デカメロンが佛伊古文獻から受けて更らに後代の諸作篇に資材を供したごとく、もとよりとがめ立てには要せぬのみか、かへつて出典の考證から創作的技能の檢用を指くべき符合のものではあるが、化政度前後から後の亞流作者の一夜漬小説になると、構想や小道具の借用方があまりに無才で露骨で**いけぞんざい**で、讀者を小馬鹿にしてゐるやうな氣のするものが多いので、[illegible]る性質の作品やその部分品の創意性の貧弱はいふ迄もない、これらの作家は爭つて牡丹燈又はそのやうな特異の内容と結構とを有する先人の文章から案想やヒントを得たのであらう。而も、更にも徳川初期怪異談の文學史價が存するのである。

が、古怪異談の性質は、大體に於いて[illegible]、民俗的な[illegible]と漫合との[illegible]上から、又、[illegible]作品としての批判興味の上から[illegible]、牡丹燈の[illegible]

婢子」によつて一般的になつた。先づこの冊子の内容を檢して見よう。

「伽婢子」十三卷、淺井了意著、寛文六年上梓に係る。六十七篇の小話の收錄である。主として「剪燈新話」及び「剪燈餘話」よりの飜案から成る。よつて此著に窺ふべきものは翻案小說としての價値と傳說上のそれとであるが、後者は題目でないから略き、先きに原本の輪廓をみると、「剪燈新話」四卷二十篇及附錄一篇は明の世の學吏瞿佑字は宗吉の著である。この人存齋と號し「歸田詩話」「存齋詩集」の著者であるが、もと「剪燈錄」四十卷を撰したのが亡佚してゐたのを四川の浙江の升胡子昂といふ者その一部分を「剪燈新話」四卷として拾ひ上げ爰に世に出るに至つた。「剪燈餘話」の方は、同の廬江の人李禎字は昌祺の撰。博問を以て稱せられた官人であつた。新話餘話ともに眞正面から勸善懲惡を一枚看板にしては居るが、方便としての鑑戒文章として以外に絕對に怪奇に對する興味がなくてこの種の綺話が出來るものでない、勿論作者等は、豐富に浪曼的感懷を寄せて書いたものにちがひなくかの「夷堅志」「搜神記」「太平廣記」「異苑」「述異記」の類とともに支那古文獻中豐富なる怪異談說集のなかでの佳作として最も注目に値ひする一種である。

その卷二第四話「牡丹燈記」は今その劈頭原文を假りに和譯してみると、「方氏の浙東に據りけるころ、歲ごとの上元の夕、明州にては五夜にわたりてともし火を張り、城市の士女こぞりて見物に出かけるならひありき。至正二十年庚子の年のことなり喬生といふ人あり、鎭明嶺のふもとに住ひしたりけるが、はやく耦を喪ひ、鰥居のわびしくて、そぞろに遊びいづる事もなく、たゞ門に身を凭れて佇むことなどありたりしか。さても、十五夜の小夜更けわたり、遊びありく人かげも追かに稀れとなりし頃、ひとりの丫鬟雙頭綺もやうの牡丹燈をとり揭げてさきにたち、美女ひとりしりへに隨へるがありき。年の頃は二八か二九か、紅の裙、翠の袖、婷々にいと娟々なる女のつらなりて西の方指して去りゆきぬ。月かげにすかして觀るに、韶顏よにい若くげに絕世の佳人なり。心そゞろにときめきて抑ふる能はず、女を追ふて喬生は」云々にはじまり、生がこれを留めて泊らせてみると「態度妖姸。詞氣婉媚。低幃暱枕。甚極歡愛」(原文)となりの老人疑ひ窺へば一粉粧髑髏と坐してゐるので、生は翁にさとされて湖心寺の西廊の盡くるところ小暗い部屋に來てみると、旅櫬があつて「故の奉化符州判の女麗卿の柩」と白紙の帖り札がしてあり、雙頭の牡丹燈が懸けてあつて、その下に一明器婢子を置いてあり、その背の上に金進の二文字がある。明

器婢子は葬具人形の意である。驚いた喬生はそつと立つて寺をとつかはと走り出で、あとをも見ずに逃げ出して玄妙觀の魏法師といふ道士に救ひを乞ふて朱符二道を授けられるが、一月あまり後に、友人の家で酒を飲んで心亂れ戒を忘れ寺内に入つて行くと女迎へて生の手を握り柩の前へゆくと、怪しむべし、柩の蓋が自らパツト開いてその中へ生を抱へ入れて美女の姿が見えずなると自然にハタリと柩は閉ぢて了ふ。この後、どんよりと曇つた日暮や月かげ黑き宵には喬生と美女と手を携へて歩いてゆく、その先きに丫鬟ひとり雙頭の牡丹燈をとり揭げて東道いてゆく姿が折々見へる事がある。これに遇つた人は屹度大病に罹つて高熱惡寒になやまされる。村人困つて魏道士にたのむと自分ではもう叶はぬから四明山の頂に住む鐵冠道人にたのむがよいといふ事なので、けはしい山を攀つて道人に會つて賴むと「魏法師のおしやべり奴が。お前達に厄介かけたなう。」といつて山を下り、西門の外へ來て方丈の壇をきづいてそこに端坐して呪符を書いて燒くと、神人來つて命を乞ふので喬生麗卿金蓮三人を伴れて來させてはげしい訶責糺問に及び、牡丹燈は毀つて燒きすて、三人は九幽の獄に閉ぢこめられて了ふ。道人はたもとを拂つて山へ入つて了ふ。次の日に村の衆がまたお禮に出かけてみると、もう居ない、草庵があるばかりである。

[illegible]に迫つて[illegible]住つてみると、法師は[illegible]に[illegible]てもう[illegible]見出す事が出來なかつた、といふに結つてゐる。

行文勁健かつ暢達であるが、鐵冠道人の一擧一動が短文の間に奇拔嚴正をきはめて、よく道教眞人の眞面目があらはれてをる。美しく妖艶な死靈美女のおもかげと、嚴く剛い道士の面目とがコントラストの妙を形成するところが、この文章の魅力の骨髓である。

この原文によつて、了意は、天文戊申の歲、五條京極に荻原新之丞と云ふ者あり、近き比妻に後れて愛執の涙袖に餘り、戀慕の焔胸を焦し、獨淋しき窓の下に、ありし世の事を思ひ續くるに、いとゞ悲しさかぎりもなし、聖靈祭の營みも、今年は取わき、此妻さへ無き名の數に入ける事よと、經讀み回向して、終に出ても遊ばず、友だちの誘ひ來れども、心唯浮立たず、門にイ立て浮れおるより外になし、

いかなれば立もはなれぬ面影の
　身にそひながらかなしかるらむ

と打詠じ涙を押拭ふ、十五日の夜いたく更けて、遊び步く人も稀になり、物音も靜かなりけるに、一人の美人其年二十許と見ゆるが、十四五許の女の童に、美しき牡丹花の燈籠持たせ、

しも徐やかに打過ぐる。芙蓉の眥あざやかに、楊柳の姿たをやかなり、椎の鬟、碧の髮いふ計りなくあてやか也、萩原月の下に是を見て、是はそも天津乙女の天降りて、人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫の渡津海より出て慰むにや、誠に人の種ならずと覺えて、魂飛び心浮かれ、自らをさへ留むる思ひなく愛で惑ひつゝ、後に隨ひて行く、」言葉をかはしあつて「女と手を取組つゝ家に歸り」ともに酒をくんで、

「また後のちぎりまでやは新枕
　たゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ひければ女とりあへず

　ゆふな〳〵まつとしいはゞこざらめや
　　かこちがほなるかねごとはなぞ

と返しすれば、萩原いよ〳〵嬉しくて、互に解る下紐の結ぶ契や新枕、交す心も隔なき、睦言はまだ盡きなくに、早や明方にぞ成にける、」それから二十日あまりたつて「隣の家によく物に心得たる翁の住ひけるが」怪しとおもつて覗いてみると、「一具の白骨と萩原と燈火の下に差向ひて坐したり、萩原物云へば、彼の白骨手あし動き髑髏うなづきて、口とおぼしき所より、聲響きて出て物語りす、」翁愕いて翌日萩原を强くさとすので、「万條を西へ、萬里小路より此處彼處を尋ね、」日も暮がた萬壽寺の浴室のうしろを北にゆくと古びた魂屋があつて「棺の表に、二階堂左衞門尉政宣が息女彌子吟松院冷月禪定尼とあり、傍らに古き伽婢子あり、後ろに淺茅といふ名を書たり、棺の前に牡丹花の燈籠の古きを懸けたり、疑ひもなく是ぞとおもふに、身の毛よ立ちておそろしく、跡を見返らず、寺を走り出て歸り」翁に敎へられ「東寺の卿公は行學兼備て、しかも驗者の名あり、」とききき、卿公を訪ねて符をたまはり門に帖ると女が來なくなり、五十日許りの後、「萩原東寺に行て、卿公に禮拜して酒に醉て」かへるさに女戀しくなり、寺門の前まで來ると女が立つてゐて恨みつらみの怨言あつて「萩原が手を取り門より奥に連れて行、召連れたる萩原が男は、肝を消し恐れて逃げたり、家に歸りて人々に告ければ、人皆驚き行て見るに、萩原已に女の墓に引込まれ、白骨と打重りて死してあり、寺僧たち大に怪しみ思ひ、やがて烏部山に墓を移す、其の後雨降り空曇る夜は、萩原と女と手を取組み、女の童に牡丹花の燈籠ともさせて出て歩く、是に行逢ふ者は重く煩ふとて、あたり近き人は怖れ侍べりし、萩原が一族是を歎きて、一千部の法華經を讀み、一日頓寫の經を墓に納めて弔ひしかば、重ねて現はれ出ずと也、」で終つてゐる。

圓朝本の萩原新三郎が了意本の萩原新之丞から出たことはい

ふ迄もない、この假名草紙の通俗なストーリイだ、かの草双紙の複雑さはまる筋となつて、單なる怪異のモティーフ以外に、圓朝本では義理やら忠孝やらが加はつてゐるが、彼はそのやうなものは蛇足で、異國人ヘルンも他の一切を切り棄てゝ幽霊の條り丈けに目をつけた通り、飽く迄も牡丹燈怪異に終始する一篇である。了意は上元を七月盆祭とし、美女の年十七八を二十許としたが、圓朝は了意が十四五許とした女の童を大丸髷の年增の下婢に直してをる。月下に初めて美人に逢ふ條りの了意の描寫は平凡で非力である。原文の簡勁にして印象づよきに遠く及ばない。和歌を多く挿んだのも翻案の効果をつよからしめようとした手段であらうが、短歌そのものは甚だうまくない。燈下に髑髏と談るところだけは、原文よりも了意の方が怪異のけはひあつて勝つてゐる。圓朝本は、「(伴)ところがネー其女が唯の女じやア無のだ(勇)惡魔か(伴)なにそんな譯じやアない骨と皮ばかりの痩た女で髪は島田に結て鬢の毛が顔に下り眞青な顔で裾がなくツて腰から上ばかりで骨と皮ばかりの手で萩原様の首たまへかじりつくと萩原様は嬉しそうな顔をしてゐると其側に丸髷の女が居て此奴も痩て骨と皮ばかりでズッと立上ツて此方へ來ると矢張り裾が見へないで腰から上ばかり恰で繪に描た幽靈の通り夫れを私が見たから怖くて齒の根も合ず」云ふと對話の中に出てゐるが、[illegible]つた變にすぎない。これを生かすものは圓朝の描寫に於ける手法である。又、了意は神公といふ人を出してゐるが、これは原文の間ながらさつぱり活きてゐない、それのみか頼みを命じた當人が訪ねて來たとて酒を出す、その酒に心が亂れて幽靈に再會するといふ段取は自然でない。圓朝本の勇齋も良石も俗物のうごめくにすぎない。これらに比較すると原話の鐵冠道人にしても魏法師にしても悉く活きてその大小出世間人の面目紙上に躍如たるものがある。呪符の機力の不可思議も原文では細かに傳へてゐる。むしろ、この方が主であろうと思はせる程に作者の出て來るあたりから、「黄巾錦襖、金甲雕戈、皆長丈餘、堦下に屹立し躬身して命を請ふ。」といひ、「況んやこの清平の世、坦蕩の時にして、乃ち形體を變幻し草木に依附し、天陰り雨濕すの夜、月落ち參横はるの晨、梁に嘯いて聲あり、其室を窺へども睹ゆるなし。蠅營狗苟、羊狠狼貪、疾きこと飄風の如く烈しきと猛火の若し。喬家の子生きて猶ほ悟らず、死すとも何ぞ恤へん。符氏の女死して倘ほ貪婬なり、生ける時知るべし。況んや金蓮の怪誕なる、明器を假りて以て矯誣し世を惑はし民を誣ひ、條に違ひ法を犯す。狐綏々として隨ふことあり。鶉奔々として良なし。惡貫已に盈つ。罪名宥さず。」この條りのあたり秋霜烈日

の觀あつて、一面作者の道義感の烈しきをうかがひ見るべく、かへつて怪異の情のけし飛んで了ふ感さへあるほどである。總法師を楷にした逸人の嚴正もこの話の終りに興味を添へるものである。了意文では法華經の功德で幽靈がやまつた事にして、鈴木正三の「因果物語」風の結末になつてをるが、これも飜案に和風をつよめようとした手段の一であらうが、「元亨釋書」や「砂石集」以來少からぬ因緣談の一になつて、道家の香の高い原文の味と異るものになつたのは止むを得ぬことだが遺憾であつた。「因果物語」に序を書いた雲歩といふはその書が「元亨」「砂石」よりも「詳撰正しくして、初心の人の爲に大幸ありといへども只今現在する人の假名有之を以ての故に」云々などと吹いてゐる位、この種の物語のきゝめも強かつた頃であるから此の結末も當年としては當然であらう。實際は「因果」本中の說話も、經文功德は別にして、實事から出たと思しきものが少くなかつた。こゝに一つの價値が別存する。

「伽婢子」では世に知られた牡丹燈籠以外に「眞紅のうち帶」(「金鳳釵記」の飜案)や「十津川の仙境」(「天台訪隱錄」の飜案)等作文が少くないが、總じて「連歌初心抄」をはじめ「東海道名所記」「百物語」「京雀」「北條九代記」「武藏鐙」「狗張子」「替唱利生獻唄」等多き種類の假定、眞作うち交ぜた著作を見てこの「一向の粹僧」の多面性と博聞と以外に近代怪異談作者としてその情趣豐かなる妙文の製作者であつた點に注目を要する。

了意も正三も緇衣の出で、假名双紙作者として佛教の寓意を挿んで子女讀者の稚き胸に訴へた。「因果」は五年前の寛文元年に出たが、「お伽物語」や「百物語」(萬治二年)とともに德川怪異談說の事實上の先驅となつた。その「怪談」といふ小語も化政度すぎからはカッキリした獨得の意味と語感とを有するに至つたが、初期頃は怪談も異聞も殆ど同じ意味で、特に怪談好きの林文會堂が了意の「狗張子」(元祿四年)續集に擬して「玉櫛笥」(元祿八年)を出し、「玉箒木」(同九年)を出した頃は時尙既に大にこゝに傾いてゐて、十一年には林羅山撰と傳ふる「怪談全書」あり、その一昔前に西鶴は貞享二三四年にわたり「諸國咄」や「懷硯」を出してゐるのを見てもわかるが、正德六年京都版「本朝怪談故事」などを見るとなほ異事奇聞集の義にとつてゐるから、「英草紙」や「登志男」の出た寛延前後(即ち「空穗猿」「お伽櫻」を前にし、「怪談帳」「とのゐ袋」を後にする)から漸くこの概念がはつきりして來たと云つて大差はなからう。かの凄味と俗氣とたんまり湛えた所謂「怪談」は南北と正藏とに代表せしめれば事すむが、われ等の興味はあの現實興味

のりとすぎる「怪談」でもない、むしろそれ以前の[illegible]に對する強い興味の時代である。剪燈[illegible]の此卷一の「[illegible]」に物語るところ吾國の怪は「[illegible]」より出たものだが、これすなはち民俗學的興味の河童類說話の一であるが、さらいふ學問的關心を外にして思へば、異事奇聞の超自然事に就ての好奇心である。「怪談故事」卷四第十四「湖水蓮花祭」のごときは「古老實談」に見えたりと書き添へてある亦竹生島六月十四日祭事の短かい記事で、これも亦土俗的興味のものであるにすぎぬ。「怪談藻鹽草」(享和元年)五卷に、タイトル・ペイヂに小書きして「此書は諸國の怪談奇事を僞作せず土地も名も顯然に出せしものなれば文花無して實虛ある故人心を樂からしめて後前の例となるべき書なり」とあるが、枕探しや尼長頼、後悋や品長の口締さへ入れて評判半分の怪と眞の怪とをとりまぜにした中に眞の怪異談らしいものを收めてあるが、文壇作者の妖怪は職業意識が強すぎて人目を樂くことばかり考へるから事實に即した興味の方向が皆無となり、只、怪のための怪に走つて丁度英吉利ゴシック・ロマンス中の凡作のやうなものになつたから妖術興味も學問上意味もなくなつてしまつたのである。

話は外れたが、まだいふ事がある。牡丹燈籠はいまひとつ古書に出てゐる。「奇異雜談集」がそれである。この書は現在たこれでミニユスクリプトとの間に十年の開きがあるとの事であり、刊行の年も[illegible]氏山口剛氏によると寛永年中頃との事であるが、予の見た故藤野古白氏藏本には卷末に元祿年日とあるのみでデイト不明であるから詳かには判らない。室町作者[illegible]の時分から天文年ば頃迄の記事である。中村豐後守の息子[illegible]に係る事はその序に、「昔江州佐々木屋形幕下中村氏豐前守者其裔某所撰而錄唐土本朝怪異之說以遺後人」云々とあるのと本中に挿んだ作者の文中から推測するにすぎない。この室町末期の怪異談が先づ近世怪談小說の値を作つたものだといふ事は、それも[illegible]氏が書いて後に三四の人が唱和してゐる說だが、内容の性質と著作の推測時期と刊行の時日とから見て現在の世では先づ顯著といはなければならない。

さて、此書卷六第一話「女人死後男を棺の内へ引込ころす事」は純然たる「剪燈新話」牡丹燈記の自由意譯で「唐には正月十五日の夜。家々の門にともしびをあかし。種々いぎやうのとうろをはりて。門にかくるゆへに。男女諸人是を見て。晩にいたるまで。あそびありく事。日本の盆のごとくなり。是を上元下降の日といふ也。」云々にはじまり「元朝のすゑの。至正年中の事なるに。明州の府明者のもとに喬生といふものあり。妻をうしなひて。常も獨にして正月十五日の夜にいたりて。

人みな出て燈籠を見てあそび行といへども。喬生はひとり門にたゝずみて、みちに出あそばず。夜半のすぎになりて。道に人もなく。月のみあきらかなるに。丫鬟の童女一人ありて双頭の牡丹灯をかたにかゝげてさきにゆけば後に。窈窕たる美女一人したがひて、西にゆく。喬生これを見てやむ事をえず。すなはち出行て、ちかくみれば。はなはだすぐれたる美人なり。年に約せば十七八。くれなゐの裙。みどりの袖にして、ゆるやかにあゆむ。氣たかき糢。まことに國をかたふくべき色なり。喬生心もまどふばかりにて。」云々とあり、やがて「こよひのにゐまくらわするべからず。鳥なき天あくるといふて出さるなり。喬生ゆめのさめたるがごとくして。」云々「隣家の老翁これうたがひ、壁の穴よりこれをうかゝひみるに。粉をぬりよそほひしたる髑髏の女一人。ともしびの下に。喬生とならび居るを見る。」云々。「喬生湖心寺の門に入て東の廊架をゆきつくして。西の廊架にうつりてゆけば。らうかのつくる所に。一の小堂あり。内に柩あり。白紙にその名をかきて貼たり。文にいはく。故奉化符州判のむすめ麗卿の柩と云。前に双頭の牡丹灯をかけ。下に一の丫鬟の童女を立たり。そのうしろに金蓮の二字あり。喬生これを見て身の毛だち。鳥はだ立てはしりて寺を出て。後をかへりみずしてかへるなり。」云々。「こののち雲のくもるゆふべ。月のくらき夜往々に。喬生と女と手をたづさへて。おなじくありく。一の丫鬟双頭の牡丹とうをかゝげてさきにみちびき。ゆくをみるなり。是にあふものはすなはち重病をえて。寒熱往來す。いのるにくどくをもつてし。祭に牢醴をもつてすれば。粗いゆる事をえ。いなやのときんばいへさるなり。」云々。「すなはち童子と山をくだり。行歩かろく。すくやかにして。たゞちに西門の外にいたりて。一丈四方の壇をむすんで。むしろをのべて。端坐す。符をかきて。これをたけば。たちまちに符のつかはしめ、数輩化現す。符の煙より出たり。すなはち是道人の吏。護法のたぐひなり。」云々。「翌日衆みな山にのぼりて。謝せんとすれば。たゞ草庵のみありて。道人なし。又玄妙観に行て。魏法師に謁すれば瘂にして物いふ事。あたはざるなり。けだし鐵冠道人の。なせるところか。」で終つてゐる。

大綱に於て意譯の體をなし、かつ了意よりはある所は力あつて原文の勢を傳へてゐる。これは了意のは飜案で和風に更へてしまつたためであらう。故事を澤山引いた三幽縣の供言や、道人の百年の判の演舌はこれにも全く略かれてをる。到底完全に意譯する事が不可能と考へたからであらう。

この牡丹燈籠の意譯文が我邦に最初に渡つた牡丹燈籠の物語であつて、たゞ出板の時期が了意よりも約半世紀おくれたのと、

了意ほどの才名ある文人の著作とならなかつたために、一般的に流行し、俗化を與へたその程度は、到底了意にはおよばないが、原文をもととして云へば、この文章がとにかく唯一の「翻案物語」の面影を傳へたもので、他は翻案であり換骨脱胎であるにすぎないのである

さらに、近世日本文學史上怪異談の系統を引いたものが、「靈異記」、「今昔物語」のむかしはこゝにしばらく問はず、徳川初期假名草紙文學の隆興時代から、了意、羅山、西鶴、庭鐘、秋成を經て化政度、南北の徒に接するまでの間の歴史にあつて、文學史價値に豐富なる産物を出してゐる事實を考へ、その先驅文學としての文獻として「奇異雜談集」を先驅として、「お伽物語」、「百物語」(これは純怪談ではないが、後につながる事實の上からこれをも合せ考へる必要がある)と「因果物語」、「伽婢子」の四種をあげて來てみると、學者既にいふごとく百物語系統とお伽婢子系統とに分たれうるにしても、その分類は形式分類にすぎず、事實に於て假名草紙時代怪異談說の特色は、延寶時代より元文時代に及ぶ浮世草紙の元祿文學時代と、それより寬政に至る青本時代とに於ける怪談文學の先驅としてスューパナテュラルなる事象に對する異常の興味とその事象に對する歸結的解釋より生じた教訓的心向とが主體となつた說話文學で、この價値に依つて[illegible]文學の一[illegible]。[illegible]文學として特殊な地位を占めたる[illegible]とする[illegible]。文學の一[illegible]に存する。

「[illegible]さんげ物語」、「二人比丘尼」にしても「恨の介」、「[illegible]物語」にしても、「露殿物語」、「浮世物語」にしても、後の[illegible]小說の先驅としての特色の意外に、とかく[illegible]らしき[illegible]の口吻をさへ如示されず、名所記や軍記類はこれを別として「仁勢物上」や「可笑記」、「祇園物語」の類に於ける[illegible]の一とき著しき事例あつて、純文學としては[illegible]との[illegible]に劣れるは、はじめて文學の[illegible]にもよるが、徳川三代の[illegible]、凡そ、創業時代の啓蒙的性質にもよる。

萬治寛文のその代表期に出た「伽婢子」のスューパナテュラリズムは、教訓物、名所記、好色物、軍記等同時代の他の種類に比して劣つたものでない。すべてが創成翻譯期の未熟と稚拙とを示してゐる事、明治初期開化文學と同一軌にある。これに對するわれ等の興味は、從つて土俗品興味、ゲテ物興味が先づさきに立つは止むをえないが、その中に、時代精神をよく現はした[illegible]あるは看過しがたい。當時[illegible]文學の[illegible]化[illegible]に[illegible]物の「棠陰比事物語」とともに[illegible]物の「伽婢子」[illegible]に

出てゐるので、その飜案文學中に當時の平民の擧措と士民の主觀とがにじみ出てゐる事を注目しなければならない。「牡丹燈籠」の飜案文中に窺はれる世相の調子は、明治開化文學中モオパスサン飜案文たる同朝の「名人長次」中に窺はれる世相の調子と類例ひとしきものがある。それが「奇異雜談集」の古朴な文章になると、意譯文を通じても明らかに室町末期より安土桃山時代かけての士人の簡素朴直な感情の一部の調子を垣間見る事が能きる樣な氣がする。宗教觀、世相觀の片鱗を窺ふ事が能きるやうな氣がする。洪武・永樂の頃の錢塘の學士が蒐めた古說話を通じて、日本德川初期（明成祖永樂元年から數へて寛文六年迄に二百六十餘年ある）の士民の意向と感情とを推知する事が出來る。原話の面影を知りうるのみか、その可なり巧妙な飜案の腕前を見る事が出來る。飜案せられた短話世界のなかに京洛情痴生活のひとつの型を悟る事が出來る。法華經一千部誦讀の効果は、佛教教訓文學の一種たらしめてをるが、今日の人が教訓文學（ダイダクテイク・リテラテユア）に感じる不快な頑迷と枯燥と以外に、當時の大衆は、信樂と救援とに發する悅びと樂みとをよく享樂したのである。山岡元隣が「孔なき笛に太平のうたを吹けば、耳よりほかに其音遠く、指ならさるを以て無何有の月を指せば、ひかりかげを忘れたり、山を山といふとも、そもまたせしむるものはたぞ。隨筆「他我身のうへ」序）の禪味と教訓とにまつはる情味は、「しめやかにふるよいの雨に、おふとの油ちらめくほかげに、ひとり過ぎこし方のうれしさもつらさも、いまのさびしさにとりそへ、又長き行末のかなしさ迄思ひおくれば、袖は猶かはきあへるいとまもなく」）とその第六の中に書いた感傷や人情味で、すなはち假名草紙時代の文學は單なる枯禪林の教化を眞似る教戒文學ではない、凡そそこには教訓文學といふ範疇にあつて味はひうる人性の洞察と感情の豐富とが文章の句法の間に短かい乍ら活潑に動いて居る。「伽婢子」六十餘篇のテイルズにもこの價値あり、「牡丹燈籠」はその一つであつて、晚近の描寫小說に慣れたものは、措辭の深意義に案外鈍感であるが、この頃の小話にしても「英草紙」「雨月物語」にしても文章の句法の間によく著者の觀察も神經も鋭くあらはれてゐる事實を注さなければ、テイルズ小說の妙味は判らない。「奇異雜談集」のそれは、別に簡古蒼勁な意譯文章として支那文學の早期の紹介として室町文學史から見て獨特の位置を占めうるものであると思ふ。

ジャッズ音樂

秦豊吉

ジャッズの足並

朝日新聞の土岐哀果氏が欧米歸朝談の中で、米國に於ける生活がすべてジャッズ音樂の基調で進みつゝあると云ふ事を、ラジオの放送で話された。米國人は足どりまでジャッズの調子で歩く、とまで斷言されたのは同感である。さう考へると僕なぞも紐育の百何丁目かの曲り角で、危く黄色いタキシイに引掛けられさうになつたのも、どうもあの時の足並がジャッズの調子でなかつたせいかな、と今になれば思ひ當る。僕も遅まき乍らもう少し、ジャッズの勉強をしておかうと考へた。

ジャッズ國

何が「亞米利加」か。西部の印度人か。東部の清教徒か。南部の黒んぼか。紐育の猶太人か。さうではない、この黒と白と赤と茶色の四の人種を合せたものが、亞米利加である。この四の人種の爲の音樂がジャッズ音樂である。

ジャッズ音樂は黒んぼの惡戯から生れた旋律である。然しこの四の人種から造り上げられた亞米利加の生活の旋律は、もはや黒んぼのものではなくなつた。我々はリズムを持つてゐる。我々は感動を持つてゐる。我々は熱狂に至る節奏に生きてゐる」。言ひ換へればそこに新鮮なる生活力がある。原始的の熱望がある。生理的の享樂力がある。無謀な表現力がある。自由がある。解放がある。之を以てジャッズの王と呼ばれたポオル、ホワイトマンは、米國生活に於けるジャッズの偉大なる價値だとしたのである。

從つてホワイトマンはジャッズ音樂に於ける最重要な點は、各樂員が米國人である事だと言つてゐる。更にもし米國の土地に生れた純粹の米國人ならば尚ほ好い。然し最好い事は兩親の

一人が米國の土地に生れた事である。さうなれば親子二代が米國の空氣を吸つてきた事である。これがジヤツズを演奏する上に尠くべき助けになるとホワイトマンは言つてゐる。少くともジヤツズの樂員は、米國の都會に生活し、米國の言葉と習慣を我物にしてゐるものでなければならぬ。これが伯林や巴里のジヤツズ、オオケストラが少しも發展しない最大原因であらう。

僕等が米國を以て、藝術の無い國とし、生活を持たない國とした考へは、實は餘程昔に捨てなければならなかつた筈である。紐育は新しきメトロポリスに成りつつある。カリフオルニアは新しきカナンの地である。米國の今日の生活の律動は、ジヤツズ音樂そのものの律動である。これこそアメリカニズムの律動である。一切の古いロマンチツクはない。一切の氣難しいセンチメンタルはない。すべてが哄笑だ。皮肉だ。快活だ。性急だ。明晰だ。正直だ。動的だ。變化だ。迅速だ。新鮮だ。單純だ。ユウモアだ。突飛だ。無作法だ。愛嬌だ。すべてが紐育のビイフステエキの大きさだ。五十階までのエキスプレスだ。ホテルの聖書だ。牛が罐詰に入る瞬間だ。何億メエトルの映畫だ。市俄古の往來の紙屑だ。デツトロイトの自動車の車輪だ。赤い火のトマトオ畑だ。住む人間は赤だ。黒だ。白だ。茶色だ。「バナナは今夜お生憎。」「殿方は金髪がお好き」。

ジヤツズのリズムは、アメリカニズムのリズムである。

ジヤズとは

ジヤツズといふ不思議な名前はどこから生れたものであらう。之は第一の疑問である。異說は紛々とあるやうだがどうでも好い。フイラデルフイヤのある船員相手の酒場で、ジヤツク、ワシントンといふ黒んぼが酒場のオオケストラの打樂器に雇はれたところが、この黒んぼの叩く太鼓がとても狂的なおもしろいものである爲に、大に人氣を湧かせてジヤツクの太鼓を打つ處になると、客は狂喜して「ジヤツク、ジヤツク」と呼ぶやうになり、ここからジヤツズといふ名が出來たと說く人もあるやうだ。この氣違ひじみた太鼓は、忽ち近所の酒場に多くの模倣者を拵へ、遂に全世界に流行するやうになつたが、この狂燥音樂こそジヤツクの氣紛れではなくして、黒んぼといふ種族の血から來た黒んぼ精神の世界だとは、僅かの人が考へただけであつた。

黒んぼの王子ジヨオ、トワフ、フエンの巴里訪問は、プリンス、オブ、ウエエルスよりも大騷ぎであつた。黒んぼ小說「バツラ」はゴンクウル賞を得た。バツトリング、スキイは歐洲拳闘選手權を握つた。今日ジヤツズ音樂からフイラデルフイヤの

黒んぼジャックの太鼓を模倣する者にあるさい。然し今日の欧米諸国で迫害の中に益々発展してゆく黒人の世界を見る者に、黒んぼの血が次第に欧米芸術界に流入してゐる事に驚くであらう。黒んぼの旋律は、黒んぼの生活は、世界今日の生活に確に侵入し来てゐる。ジャッズの発達も歴史も實はどうでも好い。黒んぼの血はジャッズの音楽によつて既に僕等の血と成りつつある。

ジャッズ、オオケストラ

まづ僕等が蓄音機のレコオドで聞き、或は稀にラジオで放送されるジャッズ、オオケストラはどういふものか。まづその人数からいふと、これはその時の都合次第で何人とも成らうが、最低十二人から十四人は無くては淋し過ぎる。最少限度の楽器の数を挙げるとこの位である。

ピアノ　二台
バンジョオ　二挺
サクソフホン（及クラリネット）　二個
喇叭　二個
テノオル、トロンボン　一組
スウサフホン　一個
ヴイオリン　一挺
ジャッズ打楽器　一組

或はこの外セロを入れ、日本の横笛[illegible]へ、フレックス、ア、トオヌを入れる。各楽器の数を殖やす事も勿論勝手である。フレックス、ア、トオヌといふのは金属製のカスタンエットの種類で、振つて鳴らすと籠鈴のやうな音を出す。又あるジャッズでは「鋸」を使ふ。それは歯をつけた鋸のやうな鐵板で、弓でこするか、小槌で打つか、指で弾くかすると、淋しい深い鐘のやうな音を出すのである。

又人数が少くて楽器の多い場合は屢々ある。ホワイトマンのオオケストラでは、二十三人の楽員に三十六個の楽器を使つた例がある。六人の楽員から成り立つたあるジャッズ、バンドで、サクソフォン八挺、木管楽器二挺、管楽器三個、絃楽器ピアノを込めて七個、その外太鼓類の打楽器、大小の手風琴を揃へた例があるから、この楽器をどの位忙しく取り換へ引き換へ、吹いたり弾いたりしなければならぬ事が分る。千九百二十五年に出たあるチヤアレストン、フオツクストロツトの楽譜によると、ヴイオリンとピアノの弾き手がサクソフホン二挺を、又ある者はクラリネット一挺とサクソフホン一挺を、打楽器の楽員がアルトのサクソフホンを、喇叭が、つでその一人が

ノを叩けるといふ極めて交錯し[illegible]した編成であつた。

この急燥動的な樂器と樂員の關係も、實は道路と自由のジャツズ精神が溢れてゐるのである。僕等は伯林のフイルハアモニイ樂堂で、ベエトオフエンやシユウベルトの大交響樂を聽く度に、振られる指揮棒の下に熱心にヴイオリンを彈く白髮の老人の姿を見ては、その安らかな一生を念じたものであるが、これはヴイオリン一挺にその青春と老年を捧げ盡した人達である。ジヤツズの樂員は青年を求める。悦びと力に溢れた青年を求める。一人が一の樂器に停滯しない。一人は多くの異つた樂器を支配する。これはベエトオフエンを彈く白髮の老人には不可能である。ジヤツズの樂器は若者だ。若者でなければいけない。若者萬歲。

これを今日までのサロン、オオケストラの第一第二ヴイオリン、セロ、バス、ピアノ、オルガン、喇叭、トロンボオン、笛、クラリネツトに比較すれば、外から見た丈でも甚しい違ひである。そこでこのオオケストラの編成になんの特色があるか、ジヤツズはどういふ樂器の叫喚か、といふ事になると、これは發電機としてのピアノの力と、媚かしきバンジヨオの秋波と、更に破裂する打樂器の爆音とが、他のオオケストラに見られない編成である。

爆發する打樂器

ジヤツズ音樂團の向つて左の奧に座を占めて、大太鼓、小太鼓、龍を描いた支那太鼓、木太鼓、ぶら下げたシンバル、アルプスの牧牛の首につける鈴、カスタニエツト、その外僕には名も言へない不思議な樂器を前後左右に備へつけて、その眞中に構へてゐる樂員こそ、この一座の最危險で最愛嬌のある打樂器の魔術師である。

この打樂器からいつどんな音がいつ鳴り出すか。これは指揮者も知らない。この魔術師は足と兩手を自由自在に使ふ。兩手に五本のばちも持ち兼ねない。手で打ち、足で鳴らし乍ら、その爆彈の音の中に急にひしやげたシルクハツトを頭に載せて立ち上る。挨拶をする。皮肉に笑ふ。と思ふと隱しから小さい笛を出す。吹くと時鳥の鳴き聲で、笛の先の鳥が羽根をはた〱やる。座る。太鼓の爆發。小太鼓の機關銃。硝子屋根をぶつ潰したと思つたのはシンバルの横面を張つた音。俄にもうもうと牛の聲。魔術師はズボンの隱しから牛の首の笛を出す。火山の破裂。自動車の警笛。太鼓の蔭から現れた悪魔の面。びりびりと吹けば、尖端が無限に延び縮みする紙の笛。

これこそ不思議と交錯と無禮の樂員である。この男の即興的

幻想はどこまで發展するか更にわからない。この男の性格は音の山にある。喫煙と音樂の間にある。雷神だ。暴雨だ。ジヤツズの機關車だ。エトナ山の火だ。手品だ。魔法だ。墓場から死人を引張り出す。空中に怪鳥を飛ばす。地中の鐘を鳴らす。モオトルの歌。小鳩の呟き。牧場の匂ひ。プロペラ。日光。爆音、々々。

酒場のミキサアが得意のコクテエルを交ぜやうとして、コルクを抜いて、これから一滴、あれから二滴、交ぜて、振つて、嗅いで、入れて、又搖すぶり廻すあの敏捷正確な動作位しか、この打樂器樂員のばち捌きと比較するものはない。この樂員こそジヤツズ、オオケストラの樂者であり、惡戯者であり、我儘小僧であり、危險人物であり、暴力團であり、樂員であると同時に役者であり、オオケストラ全體を散々に飜弄して、手玉に取つて氣味惡く笑つてゐる、近代管弦樂の反逆者である。

媚かしきバンジヨオ

バンジヨオは英國の民俗音樂に時々顏を出した樂器であるが、これがジヤツズに用ひられて以來、あの媚かしいすが掻きの音色は、若い人の心に女の肌に戯れる怪しい思ひを起させる。これは日本の月琴に皮を張つたやうな形をして、五本の弦をG、C、G、H、Dに張つてあるが、固い余韻の無い音色であるに拘らず、僕はなぜか妖艶な曲線を聯想させてくれる心持がする。オオケストラとしてはセロかあるいはヴイオリンのやうに中音の伴奏者であるが、その清新と華麗な調子は、反つて神經を淫らにする律動を與へるものである。

僕はこの樂器を見る毎に聽く毎に、昔の西洋人の東洋旅行記の插繪にあるやうに、日本の武者が奇怪な髷を結ひ、帶をはだけ、脛を僅に現して、座敷でこのバンジヨオを彈いたら定めて面白からうと空想をする。

泣き笑ひのサクソフホン

「ジヤツズの王」のホワイトマンは、この樂器サクソホンを「オオケストラの王」だと言つてゐる。もう古い話である。千八百四十二年にブリユツセルから巴里へ一文無しの男がやつて來た。アドルフ、サクスといふ名前であつたが、たつた一つ持つて來たものが、父親の小な樂器工場で拵へた眞鍮製のクラリネツトで、構造はまるで違つてゐた。サクス君はこの妙な樂器を持つて、ハレヰイとかオオベルとかいふその當時の巴里音樂界の主なる人々の前で吹いてみたが、中にもこれに感心して聞いたのが、驚くべき器樂編成の怪人であるベルリオズである。

早速サクスの爲に金を拵へてやつて、大小各種の七つの型の樂器を造り上げ、之を自分の名前からサクソフホンと名付けたのである。これが大に巴里樂壇の人氣を得て、この時すぐに佛西軍樂隊に採用された。今ジヤツズの大動脈であるサクソフホンは、八十年前にかうして初めて吹き鳴らされたものである。

そこでこの樂器はどういふ風に使はれたか。まづオオケストラの中ではヴイオリンの外には、クラリネツトが最廣い音界を持つてゐるが、クラリネツトは二つの音を同時に聞かす事は出來ない。その代りには最高の音から低い音に飛び下りる事は樂である。然しクラリネツトの欠點は、第一が大い音が出せない事、第二は表現の力に乏しい事であつた。この點を改良してサクス君は、七種類のサクソホンを拵へて、コントラバス、サクソフホンで最低い音を、ピツコロ、サクソフホンで最高い音を出した。

ベルリオズは千八百四十年の樂器論の中でこの新しい樂器にから感心してゐる。

「高い音は柔く且心に食ひ入らうとする。低い音は嚴で且力強い。中音は極めて表現に富んでゐる。セロの音からは離れ、クラリネツトとイングリツシユ、ホルンに似てゐる質に不思議な樂器だ。低い音のサクソフホンの高い調子は、訴へるやうな咽び泣きだ。その低い調子は偉大な宗教めいた安らかさを與へる。殊にバリトンとバスのサクソフホンは音を膨らし且ぼかして消す事が出來る。後世巧妙なる作曲家が現れたら、今日想像も出來ない驚くべき效果を獲る事が出來るであらう」。

ベルリオズの八十年前の豫言は、實に今日に於て實現したのである。しかもおもしろい事は、この樂器は歐洲では殆ど見捨てられてゐたに拘らず、米國では素人の樂器として愛用されて、遂にオオケストラに侵入して、作曲家はサクソフオンの爲に音譜を改作し、倚音を入れ、美しい旋律を加へ、獨奏を交ぜたのである。ジヤツズでサクソフオンを吹く人は、常にその演奏中に即興の旋律を吹き出す事が多い。ここにこの樂器の演奏上の特色があつて、ジヤツズ音樂が聽き手を最自由に翻弄し得る奥の手である。ジヤツズの初期時代には、サクソフホンは寄席の道化の程度で笑はしたが、次第に鼻を鳴らすやうな、不平をこぼすやうな、泣くやうな、俗氣たつぷりの音梯は、今は立派な喜悲劇役者になつてしまつた。ジヤツズの中のユウモアとグロテスクの受け持は喇叭である。その息を詰まらせる恐ろしい喇叭の響をくぐつて、サクソフホンの抒情詩は、うらめしく遣る瀬なき泣き笑ひの趣を見せてゐる。

ピアノは發電機だ

ジャッツで、オオケストラの眞中に、黒い獸のやうにうづくまるグランド、ピアノは、この狂奏樂のモオトルだ。

ジャッツのピアノはこのオオケストラの指揮者の位置にある。オオケストラに一切の動力を供給するピアノ發電機だ。唯その彈き方は、お孃さんの彈き方とはまるで違ふ。まづ左の手は太鼓の代りになる位に強い打樂器の役目をする。右の手は旋律の方をヴイオリンかサクソフホンに任せておき乍ら、特に狂燥な急速連續の調子を彈奏する。いづれにしてもサロン、オオケストラのやうな上品なせせらぎの音でない代りに、もつと大事な役目を受け持つてゐる。

見る音樂ジャッツ

ジャッツは聞く音樂ばかりではない、同時に見る音樂である。打樂器の樂員が演奏中に面を冠り、飛び上り、帽子を投げて踊るのは、聞く人の心を一層恐怖させる目に見る音樂だからである。千九百二十二年にホワイトマンが紐育のカアネギイ、ホオルに二百人のジャッツ樂員を集めて演奏した時は、全員を梯段形に並べて、すべてに白い服を着せ、これに音樂の情趣に[illegible]して、赤、青、紫などの[illegible]ライトを[illegible]つてゐる。或は演奏者を目もくらむ[illegible]に面白く[illegible]し、その[illegible]の樂員を輝く蝶か[illegible]これを[illegible]な[illegible]式と[illegible]ふ人があるならば、見る音樂としてのジャッツを理解してゐない。

羅馬巴のあるジャッツバンドでは、ス[illegible]ヤングの構、[illegible]其他にラヂウムを仕掛けて、演奏中に一切の燈火を消した。樂は闇の中から湧き出づる音樂の外に、點々として螢の飛ぶが如くに飛躍する青白いラヂウムの光を親しく樂む事が出來た。

ホワイトマンはジャッツの樂員に對して、決して音樂の心得と腕と丈では滿足してゐない。交響樂では指揮者がこの演奏の代表者である。けれどもジャッツ、オオケストラでは各樂員が夫々聽衆に向つて自分自身を賣るに十分な腕を持つてゐなければならぬ、他の言葉でいへば、樂員夫々が好い見世物師でなければならぬ、と言つてゐる。管弦樂史未曾有の言明である。

ジャッツ王

ジャッツの名を知る者で、ポオル、ホワイトマンの名を知らぬ者は有り得べからざる事である。ホワイトマン自ら書いた清新な「ジャッツ」といふ本は、この世紀の祝ふべき勇ましい

米國開拓の精神を盛つた産物の一つであらう。

ホワイトマンはジャッズを即興的ダンス音樂から交響管弦樂の雰圍氣へ持つてくる試みを初めてやつた人である。ホワイトマンの懐疑と精力を以て、ジャッズをオオケストラ化し、發達途中のジャッズを踊り場から音樂堂まで引き上げた功績は、世界の音樂史に殘さるべき仕事である。

ホワイトマンは米國西部の音樂家の家庭に生れて、ジャッズの初期發達時代の千九百十五、六年頃はある交響樂團で働いてゐたのであるが、その頃踊り場から湧き立つあの未完成な、粗野な、亂暴なジャッズの中に、無限の生活力と、快活と、正直と、眞實とを感じたのである。そこで現在の地位を捨てゝ、若い人達を七人集めてごく小規模なジャッズバンドを造つたのである。もとより怪しい冒險であつた。戰時中は海軍々樂隊長になつて軍艦に乘り込んでゐたが、戰爭後は紐育やロスアンゼルスの映畫方面の人達と手を組んで、大に技能を洗練した。殊にこの間チヤアレス、チヤプリンの後援を大に得てゐる。千九百二十二年に倫敦に招かれた演奏旅行から歸つて來た時は、紐育市は王者の禮を以て迎へたと稱されてゐる。その晩の歡迎會は米國一切の音樂關係者を網羅して、「ジャッズの王」といふ金の冠までかぶせられた。

これに勢を得たホワイトマンは、千九百二十四年の二月に初めてエオリアン、ホオルでジャッズ交響演奏會を催したのである。二十三人の樂員が三十六個以上の樂器を使つたといふのはこの晩の事である。あの剛膽不敵な米國魂を持つたホワイトマンも、一生涯にこの夜の演奏台位恐ろしく感じた事はない、オオケストラには自信がある、然し聽衆が何と言ふであらうか、と言つてゐる。演奏が初まる十五分前に、さすがのホワイトマンもじつとしてゐられなくなつて、タキシイドの上にオオバアコオトを引掛けて、エオリアン、ホオルの入口へ秘に忍び出てみた。外は雪が降つてゐる。その紐育の夜の雪の中を、續々と男女の聽衆は入口に集つて來て、そこはまるで喧嘩も起りさうな騷ぎであつた。その群集の中にホワイトマンの目に入つた人は、「ナトナ」その他四十篇以上の喜歌劇を作つて紐育の人氣を集めてゐたギツククア、ハアバアトであつた。それがホワイトマンの先輩でもあり親友でもあつた。ホワイトマンは秘に力を感じた。

この夜のプログラムはジャッズの發達史的に並べられたもので、原始的ジャッズから、ジャッズ改作曲、ジャッズ美化曲・といふ風に組んであつた。その中には「ジャッズの正しい形」としてベエルの「パパはママがお好き」も加へられ、「喜劇選

蝶」の中には有名なシルヴアの「バナナは今夜お生れしたね」エネチアの謝肉祭」から直したトォマスの「ここはヴエネチア」が入り、「エブリボディ、ステップ」の作者として有名なバアリンの作曲も「カリホルニアのオレンヂの花」その他二曲が加はり、「朝のカタリナ」の作者として評判なジョオヂ、ゲルシユヰンはジャッズ、オォケストラの伴奏で、黒んぼの旋律を作曲した「狂想曲のブリユ」を弾いたのである。

この夜の出來榮を翌日の新聞は批評して、「紐育ヘラルド」はこのシイズンの最興味あるものとし、「サン」は「唯一の長い音樂のコクテイル」だと言ひ、「タイムス」は多少亂雜で無趣味であるが、その大膽と生活力と跳躍には敵ふものがない、と褒めたものである。

新聞で無作法なジャッズに藝術の形を與へようと試みた作曲家は、米國にもいくらもあつたけれどもその多くは失敗した。失敗の原因は外でもない、すべての作曲家はジャッズのダンス音樂の形式を離れやうとしたかつたからである。ホワイトマンの成功はジャッズに交響樂の形式を與へたところにあつた。僕はこの功績をシユトラウスにもシエエンベルヒにもストラヰンスキイにも比較して見たいと思ふ。唯僕等のどこまでも忘れてならないのは、ジャッズはどこまでもジャッズであつて、交響樂のものではないがーーある。ジャッズの作曲家が與へたということである。

シンコペエション

ジャッズの音樂的特色は、まづその律動（リズム）にある。所謂シンコペエションによるリズムである。自然のリズムの流動を阻止し又は中斷する形式である。シンコペエションとは「無氣力」とも「失神」ともいふ意味であるが、音樂では誰も知つてゐるやうに、弱拍部の音符が強拍部よりも大い時長によつて、アクセントを取つて機械的アクセント法を破壞する事である。ジャッズはこのシンコペエションを思ふが儘に利用した音樂である。もとより豫期しない處にアクセントがある。律動的な均齊の感情と、技巧的な曲折の間に、普通ならざる刺戟が作れる。このアクセントが僕等の血行の平靜をかき亂す。思ひがけない處にリズムが裂き破られる。置かれたものがすぐ投げ出される。他の樂器がおとなしいアクセントを守つてゐる間に、一人の樂器は氣紛れに、我儘勝手に、他の友達の傍を離れて思ひ付いたまゝに即興してゆく。リズムの情緒が纎細になればなる程、作曲家はシンコペエションの狂ひを敢てする。

このシンコペエションは作曲の上から見れば、感情表現の古

い方法である。バツハの「英佛風組曲」の中にも有名なこの方法がある。然し今日までの音樂で、ジヤツズ程この方法を活殺自在にしたものはない。この無遠慮と氣輕と大膽とこそ、實に米國生活であり、米國人の自信である。そこに一刻の靜止もなく一瞬の感情もない今日の米國精神がすぐ見られる。

シンコペエシヨンといふ言葉はジヤツズと共に一種の流行語になつた。「スタア、シンコペエタア」といふジヤツズバンドも出來て、「今夜は水瓜をわたしの女に持つてゆく」などといふフオツクストロツトも作つてゐるし、フアスト、ナシヨナル社でも「シンコペエテング、スウト」といふジヤツズ映畫を作つた「相殺奇縁」といふ日本名で映したコオリン、グリフイス孃の名畫である。

ジヤツズ製造工場

そこでかういふジヤツズ音樂はどこで出來上るものか。紐育のチン、パン、アレエがその製造工場である。この通りは昔は紐育の第五第六通りの間西二十八町目にあつたのであるが、今はブロオドヱエの兩側に散つてしまつて名ばかり殘つた音樂商の一團と思へば好い。そこは一日幾百のピアノが小突き廻され、幾百の「ソング」が試驗される處である。全米國八百萬の蓄音機と九百萬のピアノと八十萬の自働ピアノを動かし、二十萬人以上のジヤツズ演奏家を「ジヤツズ」する音樂製造家と卸し問屋の住む處である。

千九百二十六年の「サタデイ、イブニング、ポスト」によれば、千九百二十四年に樂譜と樂器の取引高は六億弗に上つてゐる。その内八割即ち四億八千萬弗は實にチン、パン、アレエの手を經て、ジヤツズ樂譜とジヤツズ樂器の爲に費されたものである。

そこでかういふ驚くべき樂譜の大洪水がどうして起るかといふと、それは決して單なる作曲家と出版屋丈の仕事ではない。一篇の「ソング」にしても、フオオドの自動車が造られると同じ過程を經なければならない。まづこのチン、パン、アレエのジヤツズ音樂工場には、重役がゐる。支配人がゐる。會計課長がゐる。秘書がゐる。無數の電話交換手と、無數のタイピストがゐる。それから忘れてならないのは、作曲家のゐる事である。そこで原稿の樂譜を前にして、散々に會議をやる。つまり原稿の選定から印刷發賣まで、チン、パン、アレエは殘らずやつてのけるのである。作曲はまづ大部分この仲間の作曲で、外からくるものはごく少ない。原稿の選定には音樂技術、販賣、宣傳の各重役各部長が相談をする。どういふ曲を作るかといふ

事は、やはり異質、技術、作曲の各部長へ係を新しい「ソング」の一定の作曲の用曲を申請するのである。

作曲もよし、文句も面白いとなつて、印刷が出來上ると、一部は納本をする。後は宣傳係の音樂家、歌ひ手に渡される。この宣傳係といふのがジヤッツ工場の仕事の上に實は最大事な役目なので、餘程冒險的な魂と河馬のやうに厚い皮膚を持つてゐないと勤まらない。そこで之を持つてゆく先は、寄席、活動小屋、慈善バザア、園遊會、競馬場、サアカス、その他出來る丈多くの人の耳に出來る丈大な聲で紙に留めさせて入れれば好いのである。かうしてゐる内に、レコオドにも入つて、日本の僕等の耳にも入つてくるのである。

今日まで現れたヂヤッツの曲は實に夥しい。ビクタアのレコオドに入つてゐるホワイトマンのジヤッツバンド丈でも九十枚以上の數に上つてゐる。そこでよくメロデイの種が盡きないものだといふ疑問が起る。さすがにジヤッツ作曲工場でもこの種は盡きると見えて、實は古い名曲の作り直しを盛にやつてゐるのである。ジヤッツかバナナかと思はれる「バナナは今夜お生憎」といふ世界に流行したこの曲は、實は恐れ多くもヘンデルの聖譚曲中最も世に知られた「救世主」のハレルヤの主題を取つたものとされてゐる。其の外バッハも、チヤイコフスキイも、今現に生きてゐるクライスラアのミニユエットも、「トスカ」も手に作されるに至つた。ショパンのあの綺麗な幻想即興曲作品六十六」は「わたしはいつも虹を追ふ」と名前を變へ、「紅のドナウのワルツ」は「イロラ」に成り、グロオフの「ロシアの薔薇」は「ヴルガの舟唄」の作り變へとこれはちやんと斷つてゐる。

これは燒き直しといはれるかも知れない。ホワイトマンはこの點を辯解して曰く。米國人は古典音樂といふものを分らないものに決めてゐる。分らうとも又しない。けれども之をジヤッズにかけると、決して難しいものでないと覺る。その證據には「ロシアの薔薇」が世に出ると、あの美しい「ヴルガの舟唄」のレコオドが忽ち賣れ出し、かういふ例は自分の「印度の歌」にもある。ジヤッツは米國を眞に音樂的國民に成すといふ說は、決して我田引水の議論ではないと。ホワイトマンはこんな無邪氣な辯解をしなくつても好い。ジヤッツが古典の名曲の變奏曲をいくら作つても構はないではないか。ジヤッツは米國の國民音樂である。ジヤッツの綺麗はヘンデルの崇嚴にもショパンの華麗にも無いてはないか。

ジヤッツの人

ジャツズ音樂を以て「音樂の伏魔殿」と名付けたのは、アアビング、バアリンである。米國に於ける最有名なジャツズ作曲家の一人であり、新しくチン、パン、アレエの仲間に入つて大な樂譜出版業を開いた男である。金の無いのが不思議な米國で、ジャツズが世界の熱病になつた以上、ジャツズ成金が出來ても不思議はない。バアリンは若い時分にポオランドの猶太人町から移住して來た男で、「朝起きは大嫌ひ」といふ文句を繰返しにつけた歌を作つて大に當り、戰爭に行く兵隊の行進曲にもなつて盛に唄はれたのである。放浪者のバアリンも之で一躍金持になつた。バアリンはジャツズ作曲の天才だが、自分では樂譜を讀む事も樂器を彈く事も出來ないと言ふ人があるが、事實は知らない。バアリンの作曲は七十幾種にも上つてゐるが、その傑作は「エブリボデイ、ステツプ」と「パツク、アツプ、ユウア、シンス」だと言はれてゐる。その外「黄昏の女」、「太陽の輝くある日」、「カリフホルニアのオレンヂ」、「メロデイでお話し」等、いづれもギタタアのレコオドで日本にもお馴染である。

この外ジャツズの名曲は黑い材木を積み上げたやうに山をなすレコオドで、日本にはみな知られてゐる。米國で有名なジャツズバンドは、ホワイトマンの外、ヴンセント、ロオペツツと、テツド、レヰスとがある。外國のものでは之もレコオドでお馴染の倫敦サヲイ、ホテルの十六人バンドが誰も知る處である事は云ふのも野暮である。

日本にジャツズバンドがあるか。八木節を日本の國產ジャツズといふ人があるが、僕のいふのは眞面目な意味である。僕は嘗て報知講堂で、若い學生諸君のジャツズバンドを聽いた事がある。人數は五人で、ピアノ、ヴイオリン、打樂器、サクソフホン二個といふのであつたが、之は問題にならぬ哀れなバンドであつた。歐州のジャツズバンドが到底米國の血と熱をたぎらす事が出來ないやうに、アマチユアのジャツズバンドは當分無理である。第一がジャツズ精神である。第二が技術である。ジャズは全く個性的音樂であつて、樂譜は單に主題に過ぎない。常に新しい表現と新しい變化にジャツズ精神を採さなければならぬ。これはジャツズ精神を持たないアマチユアの仕事ではない。僕の見た若い學生の打樂器は、氣の毒な位に息を切らしてへなへなに弱つてゐた。

悲みの曲ジャツズ

ジャツズは快活と生活力の音樂である。けれども悲痛と崇高を現す事が出來るか。悲みの曲を演奏する事が出來るか。

これを出來ると答へたのが、米國の若い作曲家として名ある爲

しこれがルイス、グリユンベルヒである。グリユンベルヒはジヤツズをどこまでも一般の藝術品にしようと努力する作曲家である。「ダニエル、ジヤツズ」の一曲は哀れな黒んぼの心に映じたダニエルの物語をテキストにし主題にし、八人の樂員と一人の歌で、純粹のジヤツズの精神で演奏されたものである。グリユンベルヒはジヤツズの中に一切の藝術に必要なる手法を含んでゐるとして、この手法によつて哀悼曲を作り上げる事は可能である、唯作者の感激によるのみ、と言つてゐる。ジヤツズの中に柔みと無智と宗教の精神を求めて、「ジヨルダンの波」とか「何人も知らず唯基督のみ」の歌のやうに、ネグロ精神の深い悲痛を感じるのが、グリユンベルヒの全く他の作曲家と異る行き方であり、ジヤツズの將來に一層深い藝術の生命を與へるものは、この作曲家ではないかと思はれるのである。

ジヤツズは今日の米國なくして、しかもダンスと映畫の生活なくしては發達しなかつたかも知れない。然しジヤツズの將來は今日の米國精神から原始の米國精神を求める事になるかも知れない。ダンス音樂としてのジヤツズは、新しいダンスに單純な行進曲の性格を與へた。あの賑かなジヤツズは將來の音樂にこの單純と宗教とを暗示するものかも知れない。

世界の怪物共産黨の正體

――ロシアを知らぬAとロシアを知るBとの對話――

大竹博吉

A。ロシア共産黨のことを聽きたいと思つてやつて來た。

B。君は、民政黨と政友會の勝負にだけ興味をもつてゐるのかと思つたら、共産黨の問題なんぞにも興味を有ちはじめたのか。

A。うん、此頃は共産黨問題ぐらゐ多少知つておかないと話が出來ない世の中になつた。

B。誠にお氣の毒だが、ロシア共産黨なんていふ政黨はもう地球の上には存在しないよ。

A。そんなことは無いだらう。今度の總選擧の時にも、ロシア共産黨が日本の左翼無産政黨に選擧費用を貢いだとか貢がないとかいふ噂があつたぢやないか。

B。噂だけなら化物でもこの世の中に生存權をもつてゐるやうだ。だが、ロシア共産黨といふのは、慥か一九二五年の暮の第十四回黨大會で『全聯邦共産黨』と改稱してしまつた。

A。何だ、さういふ意味でか。僕はまた、ほんとうに跡方も無くなつたのかと思つて、建國會へ電話でもかけてやらうかと思つた位だ。すると、ロシアといふ名を全聯邦といふ名に擴大した譯ぢやないか。

B。さうだ。ソヴエト聯邦はロシア、ウクライナ、白ロシア、高架索、ウズベキスタン、トルコメニスタンといふ六つの社會主義ソヴエト共和國から成り立つてゐる。その各共和國内の共産黨の組織が統一されてゐるのだから、ロシア共産黨といふ名稱ではその實に添はないといふ譯さ。もつとも其うちで、ロシア共和國は一番大きいし、聯邦の盟主となつてゐる位だから、黨員の數も一番多いのだが。

A。そこで先づ聞きたいのだが、その全聯邦共産黨の黨員とい

ふものゝ現在どの位あるんだね。

B。正黨員と准黨員、つまり正黨員になるまでの候補者を合せて百萬人以上だらう。詳しい數字は、共產黨年鑑を見ればすぐ判る。

A。一つ詳しい數字も知つておきたいものだね。

(そこでB、一九二七年度の共產黨年鑑を繰つて、次のやうな表を示す)

全聯邦共產黨員の數（一九二六年七月一日現在）

各共和國別	正黨員數	准黨員數	計
ロシア	四八九、七八六	二八八、二八四	七七八、〇七〇
ウクライナ	九七、七五二	六八、二〇一	一六五、九五三
白ロシア	一〇、七〇九	八、三三七	一九、〇四六
高架索	三六、三三四	二四、二七一	六〇、六〇五
ウズベキスタン	一三、七七一	一四、六〇五	二八、三七六
トルコメニスタン	三、五七二	三、九五七	七、五二九
合計	六五一、九二四	四一七、六三五	一、〇六九、五五九

B。併しこの數字の中には赤軍に勤めてゐる共產黨員と、ソヴエト政府の在外機關、つまり大公使館とか通商代表機關とか、その他一切のソヴエト政府の外國にある機關に勤めてゐる共產黨員は勘定に入れてない。その方の數字は………

	正黨員數	准黨員數	計
赤軍內	四九、九九一	三四、二二二	八四、二一三
在外機關	一、三〇三	六八	一、三七一

といふことになつてゐる。これを全部あはせると、最近の全聯邦共產黨員の總數は百十五萬五千餘人だ。この中で婦人の黨員は約一割二分ある。この他に『全聯邦レニン共產黨靑年同盟』といふものゝ會員が約百七十萬人ある。

A。ちよつと待つてくれ給へ。するとこの在外機關に勤めてゐる千三百何人といふ共產黨員がロシア……ではなかつた、全聯邦共產黨の在外宣傳員といふ譯なのかい。

B。そんなことは無いよ。その中には、例へば日本へ來てゐる大使や、大使館の館員もはいつてゐるのだ。一般に全聯邦共產黨といふのは、ソヴエト聯邦といふ一つの國內の共產黨なので、外國に自黨の宣傳機關を持つなどゝいふことは組織の上から言つても考へられない。この間も、田中總理大臣の車中談が新聞に出てゐて、新任のソヴエト大使トロヤノッスキー氏に、日本の無產政黨に選擧費を供給するやうなことはないかと聞いたら、もし本國政府からそんな命令をして來れば、自分は大使の職を棄てゝ引揚げると言明したから安心したと、大に安心してゐたぢやないか。各國の共產黨や勞働團

體は、ちゃんと自分の組織をもつてゐる筈だ。その國際機關としては共産黨インタナショナルもあれば、赤色國際勞働組合もある。それに加盟してゐる黨や團體は、それへ自分の代表者を送つて國際的な指導統一の機關をもつてゐる。だから、全聯邦共産黨が外國に宣傳機關をもつてゐたり、直接に他國の黨に干渉したりすると考へるのは、世界の共産黨運動のイロハを知らないためのお門ちがいの邪推だと思ふね。先頃も上海で造られた反ソヴエト僞造文書には『ロシア共産黨南支宣傳本部』といふ厳めしいスタンプが押してあつた。そのために一層僞造文書たることが明瞭になつた、といふエピソードがある。

A。その共産黨インタナショナルと各國の共産黨との關係についても、時間があつたら聞いて置きたいのだが……今の全聯邦共産黨の百萬人以上などといふ黨員は何時の間にどうして出來たのだね。まさか革命前から、そんなに澤山の黨員が居たわけではないだらう。

B。無論さうだ。一九一七年の三月にロシアで革命が起つた。それから一ケ月の後、瑞西のチューリッヒ市に亡命生活をしてゐたレニンがペトログラードへ歸つて來た時に開かれたボルシエヴイキ派の大會へ集つた代表者は、約八萬人を代表してゐたゞけだ。それにしても地下運動、つまり秘密結社であつたボリシエヴイキが、革命と同時に八萬人といふ黨員を糾合したのは、レニン等がそれまで約二十年間帝制政府と戰ひながら植えつけてきた潛勢力だ。その潛勢力を最も強く植えつけさせたのは、日露戰爭當時に起つたロシア第一革命の騷亂だ。だから戰爭もうつかり出來ない。それはそれでいいとして、レニンがペトログラードへ歸つて來た時には、ボリシエヴイキ派よりは他の社會革命黨だのメンシエヴイキ派などいふ革命政黨の方が勢力が強かつた。それから半年を經て一九一七年の十一月七日に、レニンがトロツキー等と一緒にケレンスキー臨時革命政府を顚覆して政權を奪取した時、ボリシエヴイキ派は既に約二十萬人になつてゐた。ケレンスキー政府は、聯合國と一緒になつて對獨戰爭を續けやうとしたが、レニン等は始めから即時媾和論を唱へてゐたので獨探説などが起つたが、戰爭に疲れた人民の間にだん〳〵ボリシエヴイキの味方が殖えて行つたのだ。このボリシエヴイキ派が中心になつてロシア共産黨を組織したのは革命の翌年、一九一八年三月だ。それから一九一九年には二十五萬人、二〇年には四十三萬人、二一年には五十八萬人といふ風に激増した。共産黨が天下を取ると風をのぞんで雪崩れ込んできた俄

か生立の共產黨員の中にに、可なり多くの不良分子がはいつてゐたらしい。一九二一年から二年間にわたつて黨内の大掃除が行はれた。淸黨運動である。それ以來新入黨員の入黨手續も嚴格になつた。一定期間、黨員候補者、即ち准黨員として人物試驗をしてから正黨員にするといふ風になつた。この淸黨運動で共產黨から追ひ出された者は二十萬人以上にも達した。それほど不良分子が多數にはいり込んでゐたのだから、一時共產黨員といふものが世間から誤解され、ごろつき扱ひにされたのも無理はない。その後、一九二四年の春から、レニンの死を紀念するために黨員の大募集をやつた。勞働者や農民の中から新入黨員を採用した。この時代には勞働組合や農民組合の中で、共產黨の指導のもとに活動をして居たがら共產黨には入黨して居なかつた「共產黨共鳴者」といふ連中が全國内に多數にゐたから、その中から選拔して黨は二三年のうちに倍數にもなり、忽ち百萬人を突破するといふ盛況を示したのだ。

A、黨員の社會的構成は？一番多いのは勞働者なのか、農民なのかそれとも智識階級出身たのかね。

B。無論勞働者が一番多い。これも共產黨年鑑を見るのが早判りだ。一九二六年七月現在では、勞働者が六割四分强、農民が一割八分七厘、官公吏その他が一割[illegible]。この官公吏その他がその智識階級に屬する者だらう。然し勞働者出身の者でもソヴエト政府の新しい教育機關で大學教育をうけた者も相當にゐるし、獨學で立派に學問を修めてゐる者もある。大臣に相當するソヴエト政府の人民委員長中最も若手の錚々たる働き人で、新たにジノヴィエフやトロツキーが追ひ出されたあとへ共產黨の最高幹部とも見るべき政治部員九人のうちへはいつたルズタクの如きは、純然たる勞働者出身だが、立派な學殖をもつてゐるやうだ。

A。全聯邦共產黨は少數の幹部の手で高壓的に指導されてゐるといふ話だが……一體どんな連中が主として勢力を振つてゐる。

B。全聯邦共產黨ばかりではない、各國とも共產黨といふ政黨は二つの根本的な指導原理をもつてゐる。その指導原理の履行といふ點では他の政黨と違つて餘ほど嚴格なやうだ。そのために動もすると高壓的指導といふ言葉で表現され易い。第一が民主主義的中央集權主義だ。ロシヤ語では「デモクラテイチエスキー、ツエントラリズム」と言つてゐる。つまり、一切の黨機關は例外なく選舉制度を基礎とする。總て指名だの幹部一任だのといふ用語は共產黨にはないやうだ。同時に、

黨の下級機關は徹底的に上級機關に服從することになつてゐる。このことは黨則の中に詳しく書いてあるが、要するに黨の下級機關は上級機關から一度命令を受取つた以上は、たとへそれに反對の意見をもつてゐても、先づその命令を履行することが先決問題で、之にたいする意見は意見で別に規定の手續によつて上申することになつてゐる。この邊は一寸軍隊式で、自由主義政治家が見ると高壓的指導と言ひたいところだ。第二に、黨の多數の決議は全黨員が無條件で服從するといふことだ。あらゆる問題についての意見の發表、論爭は自由だ。が、その問題が當該機關の議に附せられ、決議となつて確定すると、誰でもその決議にもとづいて行動をせねばならぬ。自由問題などいふものは絕對にない。黨員の個々の仕事もその通り。そこに獨特の規律があるやうだ。有名な話だが、一九一八年の春、ソヴエト政府と當時のドイツ帝國政府とがブレスト・リトウスクで單獨媾和會議をやつた。この時ドイツが揭示した屈辱的な媾和條件に調印するかしないかの問題で、黨の中央委員會が二派に分裂した。レニンはドイツ軍隊の馬蹄の蹂躪からロシア革命を救ふためには、たとへ屈辱的な條件でも即時に媾和を締結しなければならぬ、と主張した。が、最初の委員會ではレニンの意見は少數で敗れ、ドイツと革命戰爭を起せといふブハーリン等左翼共產黨の意見が勝つた。これを聞いてドイツ軍が進擊をはじめ、ロシア軍隊が革命戰爭どころか雪崩れをうつて潰走をはじた時、また此の問題で中央委員會を開いた。その時は、戰爭もしなければ條約に調印もしない、といふトロツキーの意見が勝つて、レニンの即時調印說は再び一票の差で敗れた。それでもドイツが進入をつゞけて來たので第三回目の委員會で最後にレニンの說が漸く多數を制したが、レニンといへどもこの第二回委員會の時の一票の多數意見を如何ともすることは出來なかつた。この點では徹底的な會議制度だと言へる。そこで全聯邦共產黨を指導する最高機關の問題だが、それは每年一回開かれる黨大會である。が、この大會と大會との閉期の間は大會によつて選擧される中央委員會が最高機關となる。そして黨務の常時機關として政治部、組織部、書記部、その他の委員が選擧される。この中央委員會の成員は黨員の增加に伴つて次第に增員し、現在では百人餘りになつてゐる。この百人餘りがまづ全聯邦共產黨の幕內格なのだが、最高政策の根本をまづ決めてかゝるのは現在九人から成つてゐる『ポリト・ビユロー』――つまり政治部だ。この政治部で定めた政策が中央委員會の決議を經て全黨に傳達され履行されるといふ組織

だ。だから、强いて言へばこの九人のメンバーが共產黨內のもつとも有力な政治家だといふことになる。トロツキーやジノヴイエフやカーメネフも此の九人の中へはいつてゐたのだが、この三人が追出されてからスターリン、カリニン、ルイコフ、ブハーリン、ヴオロシロフ、モロトフ、トムスキー、ルヅタク、クイブイシエフといふ連中が、そのメンバーになつた。

A。トロツキーやジノヴイエフやカーメネフといふロシア革命の功勞者を、どういふ譯で黨から追出したり流刑などにしたのだらう。ヨツフエが自殺したのを幹部派の冷酷を悲觀した結果だといふことだが……。

B。こいつは一寸簡單には說明は出來ない、といふのは、おこりは政策問題や組織問題の意見衝突から來てゐるのだから、その意見の相違に遡つて說明をしないと判らない……が、あゝいふ酷い目にやりつけられた直接の原因は極めて簡單だ。つまり此の連中は、前に言つたやうにレニンでさへどうにも動かしやうのない黨の多數の決議に服さずに、多數派に對抗して黨中に分派を作るやうな行動を執拗に固守して、秘密謀計畫までやつた。トロツキーはまだロシア革命が起る前に、外國に亡命中にもレニンと盛んに論爭をしたし、共產黨へはつてからも屢々レニンと爭つたことがあるが、ジノヴエフやカーメネフは、元はレニン直系のボリシエヴイキ派の元勳で、黨內に分派を立てゝ共產黨の統一を破るといふことは、革命ロシアの破滅の基だといふ精神を充分に摑みとつてゐた筈なのだが、その鐵則を破つた。ジノヴイエフの一派は最初一九二六年に新反對派として多數派の政策に反對して起つたのだが、それが黨の多數によつて排擊された後に黨の機密書類をタイプライター刷りにして諸方へ配布したことがある。元來共產黨の機密書類といふものは非常に嚴密に取扱はれてゐて、黨外不出といふことになつてゐる。それを黨外の者にタイプライターさせた。その上に森林の中で秘密會議を開いたり、反幹部運動を激成するため秘密機關を設けたりした。これは共產黨員としては非常な黨規紊亂だ。それと同時にトロツキー派と連絡をして外國の共產黨の間に合聯邦共產黨現幹部の行動を非難するやうな宣傳をしたことも判つて來た。昨年の秋に一度多數派の意見に屈服するといふことを誓つたが、その後も相變らず幹部攻擊をつゞけてゐた。革命の元勳だからといつて之を棄てゝおいては黨の統制がつかなくなるといふので遂に幹部派の連中も黨規に照らして馬謖を斬つたといふ譯らしい。

A。その政策問題の意見の相違といふのは、どんな問題なのか

簡單に言へまいか。

B。トロツキーは既に一九二三年の秋以來黨の幹部派にたいして反對運動を起してゐた。その時の旗印は黨內の民主々義といふのであつた。つまり共產黨へは新しい分子が澤山はいつて來たから、此の分子をもつと重要な地位に就かせる途を講ぜよといふのだ。この新しい分子の中には革命前までボリシエヴイキでなかつたトロツキー自身もはいつてゐる譯なのだ。この意見が否決されると一九二四年の八月になつて、自分の論集『一九一七年』の序文として『十月革命の教訓』を書いて黨內に大問題を起した。この序文の主旨も同じく、革命の功績といふものは古いボリシエヴイキだけに冠せられるべきではないと言ふのであつた。共產黨には一定の年限黨員としての經歷を經た者でないと、黨の重要な役員には就けないといふ規則がある。今でも黨の中央委員になつてゐる連中の九割までは、革命前の地下運動時代からのボリシエヴイキだ。それがトロツキーには氣に喰はなかつたらしい。この問題ではトロツキーは全體としては少數であつたが、學生や軍隊內の若い新入黨員の間に相當な共鳴者を得た。そこで棄てゝ置くとトロツキーがナポレオンに化けるかも知れないといふので、その時にはジノヴイエフやカーメネフが先立ちになつて、レニン主義の擁護運動をやり、トロツキーは軍務委員長兼革命軍事會議々長といふ要職を追はれることになつた。後で明瞭になつたことだが、ジノヴイエフやカーメネフはその際トロツキーを徹底的に黨から追出してしまへと主張したさうだ。が、スターリンやルイコフ、ブハーリンなどはトロツキーをなだめるといふつもりか、間もなく、その時までトロツキーがはいつて居なかつた政治部のメンバーの中へ彼を引き入れた。その頃からジノヴイエフやカーメネフのレニングラード派、または新反對派と稱せられるものが結成しはじめた。つまり當時レニングラードに居たジノヴイエフを中心とするから此の名が起つた。この新反對派の運動の皮切は一九二五年に黨の幹部派が採用した、國內の經濟生活の實際に適應するために中產農民を共產黨の味方に引き入れるといふ所謂新々經濟政策にたいして、右傾的だ、革命の墮落だ、と言つて攻擊をはじめた。もつともその頃ブハーリンは農民に向つて『富めよ蓄積せよ』といふスローガンを出して、これはあんまり極端な右傾だと非難され、即座にそれを清算した。ジノブイエフ等はそれを楯にとつて執拗に攻擊した、が、大會で敗れた。それに引續いて對外政策や、共產黨インタナショナルの政策、殊に支那革命問題や國際勞働運動の統

二戰線の目的で組織されてゐる共産委員會の問題を捕へて新反對派は次から次へと盛んに幹部派攻撃に焦心した。それが一九二六、七年の二ケ年にわたつて黨内の大きな論爭問題となつた。その間、曩には犬猿も啻ならざるやうに見えたトロツキー派とジノヴイエフ、カーメネフ派の幹部派に對立する聯合が出來あがつた。トロツキーには元來彼れ一流の『永久革命論』といふ持論がある。農民といふものは徹底的な社會革命には共鳴し得ない階級だ、最初の革命では、勞働階級は農民と提携して革命を起したとしても、今度はまた農民を相手に革命をやつて行かなければならぬ、つまり一つの革命の次へすぐ續いて次の革命をやつて行かなければ社會革命は達成されない、と言ふのだ。だから中産農民の私有經營にたいして讓歩をするといふやうな幹部派の政策には元々反對すべき素質をもつてゐる。ところが、レニンの生きてゐる間は、熱心にこのトロツキーの永久革命論を排撃してゐたジノヴイエフ、カーメネフも何時となしにトロツキー流の永久革命論の口眞似をするやうになつた。これは、彼等の戰法としては誠に不手際であつた。この點で幹部派から逆襲され、黨の大會や會議の度ごとに新反對派もトロツキー派もひどく敗北した。敗北して潔ぎよく承服すればそれで濟んだらうが、秘かにやられてゐるやつたりのだから、彼らとしてもあるやうより外に黨の統一を保持する方法はなかつたらうと思ふ。或る人はこの事件を、レニン死後のトロツキー派およびジノヴイエフ＝カーメネフ組とスターリン＝ブハーリン組の三者三つ巴の勢力爭ひともいふが、何にしてもジノ、カメ、といふ組合せは、スタ、ブハの組合せより人物から言つてずつと見劣りがする。スターリンとしてはレニンの死後最初にぶつかつた大きな試練に及第した譯だ。また苦はなかつたが、いま全聯邦共産黨の幹部派のうちの大立物はスターリンなのだ。

A、スターリンが全聯邦共産黨の中の勢力家だといふ話は聞いてゐた、が、彼はどんな經歴をもつてゐる男だね。

B。高架索のチフリスの農家に生れたジョルヂヤ人だ。彼の風貌は純然たる東洋人だよ。本姓はヂユガシウイリといふ。ジヨルヂヤ人は帝制ロシア時代に、他の少數民族と同じやうに非常に壓迫をうけてゐた。その關係からロシアの革命家の中にはジヨルヂヤ人やユダヤ人のやうに少數民族の中から有力な連中が相當に出てゐる。見かけでは人民委員會議々長のルイコフなどより若く見えるが二つ三つ年上であらう。一八七九年生れだから日本風の數へ歳にすると軈て五十だ。十八ぐ

らゐの時から高架索の革命團體に加入して間もなく中央のペテルブルグへ乘り出し、終始一貫ボリシエヴイキとして常に地下運動に活動した。革命後民族人民委員長や、勞農監督委員長のやうなソヴエト政府の要職にもついたが、主としてレニンを輔佐して、黨の書記長として組織問題に執掌した。從つて、レニンの死ぬ頃には、スターリンの名は外國へはまだ餘り聞えて居なかつたが、黨内では既に非常な勢力であつたのだ。彼の强味は理論家としてよりは寧ろ實際家としての優れた手腕と、問題にたいする極めて明快な回答をもつてゐること、それから黨人としての組織力であらう。そして天才的な理論家としてのブハーリンを自分に引つけて唇歯輔車の役をさせてゐる。この二人を合せてレニン一人の模型（コッピー）に見立てゝゐる人である。トロツキーには絢大な筆の力と辯舌の雄とがある。が、實際家としての才能と組織力とが缺けてゐたやうだ。一八九〇年代の末頃に、青年トロツキーが始めて外國へ亡命して筆をもつて革命的な新聞や雜誌へ進出した當時には、古い亡命革命家の筆では彼をレニンと一對にして『新らしい鷲が現はれた』と評判されたものだ。が、それ以來彼は文筆上の論戰などには何時でも華やかに登場したが、レニンのやうに組織的方面では殆んど之といふ根づよい仕事をしてゐない。革命後ペトログラードへ歸つて來た時、レニンは前にいふやうに八萬人のボリシエヴイキ黨員の基礎の上に立つてゐた。が、トロツキーは米國から歸る途中でも、どの派と行動を共にすべきかの決心がついてゐなかつたといふのは有名な話だ。こゝに彼の大革命家としての悩みと悲哀とがあつたかと思はれる。よくロシア人の評する所だが、レニンとトロツキーの書いたものを讀むと、一讀たゞちに花と實との差を感ずる。トロツキーの書いたものは花やかだが、レニンの書いたものは質實だ。演説の調子もその通りだ。そこに此の二人の性格の相違、行動の相違、運命の相違があるやうだ。ジノヴイエフ、カーメネフとなるとまた少し人物が落ちるやうだ。

A。幹部派のいはゆる實際政策なるものによつてソヴエト・ロシアは結局社會主義から次第に資本主義に還元してしまふだらうといふやうな說を聞くが……。

B。觀やうによつては慥かにさう見える。現にトロツキーやジノヴイエフの意見の中にもさう言つた表現がある。然し幹部派の見るところは全然ちがふ。彼らは現在の資本主義世界の重圍の中では、先づソヴエト聯邦を經濟的に强固にし、内外の政治的立場を强固にするのが急務だ。でないと、いつ内外

の敵から襲擊されて折角の世界唯一の勞農政權がたちまちもなくなつてしまふかも知れない。この世界唯一の革命政權だけは萬難を排して持續しなければならぬ、といふのがレニンの遺志だ。レニンが新經濟政策を採用したのもこのためだ。ジノヴイエフやトロツキーが攻擊してゐる幹部派の右傾政策といふのは新經濟政策の延長にすぎない。大規模な經濟機關、つまり大工業、交通機關、鑛山、銀行、貿易などいふものが依然國家の獨占となつてゐる。この國家資本と、現在ソヴエト政權が社會主義經濟の軸としてしきりに發達を促進してゐる協同組合とは、私有資本の成長よりも急激な速度で伸びつゝある。人民の全體が國家經營や協同組合經營の方が有利だといふことを知り、それが徹底的に發達すれば私有資本は自然と存在の餘地がなくなつて消滅してしまふ。つまり政治的強制にはよらないで經濟的競爭で私有資本を驅逐する。さうして他の國では革命が起らなくてもソヴエト聯邦といふ一國內で人民共和のもとに社會主義國を建設することが、相當の時日を要するだらうが、兎も角も可能だ。かういふ譯でソヴエト國家資本主義の原則をしつかりと保持してゐる以上は、國民經濟の發達といふ大局のために私有資本や私有中產農民に多少活動の餘地をあたへたところで、さうやきもきと心配をして革命の目的だ、などと騒ぐことはない。――これが幹部派の見るところだ。

A そいつは少し實際家らしくて、しかも空想ではないかな。さうしてどの位かゝつたら、その社會主義國が實現するといふんだい。

B。いつまで實現するなどと紺屋が注文をうける時のやうな約束を彼らはしてはゐまい。四圍の情勢と人民の意識がすゝんでゆく速度によるのだと言つてゐる。が、窮局において大資本の優越性が小資本を征服し消滅させるといふマルクス主義の見地に立つ以上は、それ以外の結論はない筈だ。なぜならソヴエト經濟組織には一定の埒があつて私有資本は大資本的能力といふか實力といふか、兎も角も自由に力を發揮することが出來ないやうになつてゐるからだ。この問題ではまた『共產主義のABC』の共著者として世界に知られてゐる幹部派のブハーリンとトロツキー派のプレオブラジエンスキーがソヴエト新經濟學といふテエマでこの二三年來猛烈な理論鬪爭をやつてゐる。そこで君の――空想といふ言葉はボリシヴイキにたいしては迂濶にあびせられない言葉だ。さういふ場合に彼らはすぐに、しからば我々が革命をおこした時、一九二八年以後まで政權を持續すると斷言したら、それを空想

だと思はない者が世界ぢうに何人あつたらう』といふ式の皮肉をいふ惡癖をもつてゐるから。

A。ボリシエヴイキは相變らず世界革命政策を盛んにやつてゐるのかね。

B。僕もレニンの書いたものをちよい／＼讀んだが、客觀的に革命の條件のない時に、いくら革命運動を起さうとしたところで、それは燃燒物のない所へ火をつけると同じだ、と彼は見てゐる。革命が起るとか起らないとかいふことは、その國の社會狀態や、したがつてその國の運動の成熟やの、一切の客觀的條件によるので、外部からの作用によつて起るものだ、とは見てゐない。ボリシエヴイキは世界各國の共產黨の模範黨をもつて任じてはゐるが、時を選まず世界革命の夢を見つづけてゐる者ではないやうだ。自强持久政策だの、一國社會主義建設說だのといふのは、大戰後の不安動搖時代のヨーロッパ全土における革命高潮の波が沈靜して、いはゆる資本主義安定期にはいつたといふ見透しから生れた政策なのだ。世界の不安が高まれば彼らの昂揚も高まるだらうが、昨今では資本主義の反動の國際的な節がソヴエト政權や支那革命運動を壓殺したりするのを防ぐために世界の勞働運動の單一戰線を固めることが肝要だと考へてゐるやうだ。つまり資本主義反動の世界的聯盟の攻勢にたいする勞働の世界的聯盟による守勢といふ形に見える。

A。この頃はあまり聞かなくなつたが、ロシア共產黨はユダヤ人の世界征服の道具だといふ說があつたが……全聯邦共產黨には餘程澤山のユダヤ人がはいつてゐるのかね。

B。ロシヤの反革命團體がボリシエヴイキの國際主義にたいして各國の國民主義を嗾しかけるために反ユダヤ主義を結びつけて宣傳してゐたのだから、ロシヤ反革命運動が消滅すると同時にボリシエヴイキを對照とするユダヤ禍熱も消散したのだ。ユダヤ人といへば全聯邦共產黨の巨頭連のうちのトロツキー、ジノヴイエフ、カーメネフ、ラデツクなどいふユダヤ人が枕をならべて失脚した。かうなるとボリシエヴイキ即ユダヤ禍論者は聊か戶まどゐをしてゐるだらう。ところが、この政治方面における猶太禍說がやゝ下火になつたかと思ふと、昨今では米國一の大成金ヘンリー・フォードが經濟的ユダヤ禍を說いた立派な本を出版し、これが世界各國語に反譯されるといふ始末だ。大概のインサイクロペヂアの『反猶太主義』(アンチセミチズム)といふ項をよんで見たまへ。そこには『時として資本家がユダヤ人との商工業上の競爭に反ユダヤ主義を利用すること往々なり』と書いてある。フォードの反ユダヤ書と辭典

の[illegible]との間にとんだ[illegible]ことではないのだが……。全聯邦共産黨にはいつてゐる各種の民族は九十以上に達する。ユダヤ人はその中の三番目だ。これは一九二五年の調査なのだが、七十四萬人の黨員のうち大多數は大ロシア人の五十三萬五千餘人で七割二分以上を占めてゐる。ユダヤ人は二萬八千九百人あまりで百人中三、九といふ割合で大して多いとは言へない。

A。全聯邦共産黨の存在は世界の脅威だといふんだが……。

B。現在の世界ではソヴエト聯邦を除いては共産黨が政權をとつてゐるといふ國はない。が、世界各國のうち或る國では公然と、また或る國では秘密結社として共産黨が組織されてゐる。それがソヴエト聯邦の首都モスクワにある共産黨インタナショナル本部に結合してゐる。この共産黨インタの本部は各國の共産黨にたいする國際的指導權をもつてゐる。その中へ代表者を送つてゐる各國の共産黨のうちで全聯邦共産黨は一番大きい組織だし、あれだけの大革命をやつた經驗をもつてゐるので勢ひ指導的地步を占めてゐる。そこでまた各國の共産黨が、この共産黨インタナショナルに結合してお互ひに支持し合ひながら機會さへいたれば各自の國の現在の政權にとつて代らうとしてゐる。それが民政黨が政友會にとつて代[illegible]つて、今の[illegible]革するといふ綱領をもつた共産黨がとつて代るのだから、現在政權をとつてゐる『世界』にとつては、さういふものゝ存在は氣持のいゝ筈がない。が、同時にこれに同情をよせたり喜びを感じたりしてゐる世界もあるのだ。

A。いつそのこと世界ぢうの權力をもつてゐる連中が總がゝりで全聯邦共産黨を叩き潰してしまつたら善さゝうなものだ。

B。君よりは世界の一流の政治家たちの方がその點では遙かに敏感だよ。彼らは、ロシアで共産黨が政權をとつたひこばえのうちに既にこれを充分に試みたのだ。そして美事に失敗したのだ。君は聯合國の對露武力干渉といふ歴史を知つてゐるだらう。あれでは英國やフランスが主役を演じ、日本も尻馬に乗つてシベリア出兵などをやつたのだが、主役の英佛が一番先に撤兵をしてしまつたのだ。今いふ二つの世界の一つである國内の無産階級の反對が強くなつて自國内の實行が怪しくなつたからだ。その頃、英國では勞働組合が『ロシアから手を放せ』といふ會を組織して、若し此上にロシアを壓迫するなら總罷業をやると、政府に最後通牒を送つた。フランスではロシアの黒海沿岸へ派遣してゐた艦隊が、いはゆる赤化の危險に陷つた。そこでロシア共産黨の政權たゝき潰しの計

畫を半途で放棄せざるを得なくなつた。日本ではその頃漸く勞働運動が芽をふきはじめたばかりだつた。そのお蔭で日本の軍隊は一番最後までシベリヤに駐まつゐたのだが、それで現在日本のシベリア出兵を成功だといふ者は誰一人ないやうだ。昨今また英國の保守黨內閣はソヴエト聯邦と斷交などをやつて、役者さへ揃へばソヴエツト、ロシア總攻擊の續篇を演出しやうとしてゐるやうだが、どこの國も前に手を燒いてゐるから、筋書だけ出來て役者が足りないといふ有樣だ。

A。一たい世界ぢうに共產黨員の數といふのはどの位ゐあるんだね。

B。一番大きいのがソヴエト聯邦共產黨の百萬人、その他の國では公然たる政黨として合法的に存在してゐる國と、法律で存在を禁じられてゐるために、非合法的秘密結社として存在する國とがある。從つて正確な數字は判然しないが、最近の大會にモスクワへ集つたのは三十二ケ國の代表者が約二百五十萬人の黨員を代表してゐると言はれてゐる。ドイツの十五萬人、チエツクの十三萬人、フランスの六萬人などがソヴエト聯邦を除いては大きい共產黨だ。これらの國では公然たる結社が許され堂々たる機關新聞をもつてゐる。ドイツはたしかヒンデンブルグ元帥が大統領になつた當時一旦禁ぜられたが、何しろ三十萬以上の讀者をもつてゐるローテ・フアネ(赤旗)といふ機關紙があり、法律では禁じても實際ではどうにも取締りが附かないので、また許した。伊太利もフアシストの政權をとつてから秘密結社になつたが四、五萬人はある。ブルガリア、洪牙利、芬蘭などの共產黨を大戰後の動搖期に短期間ではあるが、いづれも政權をとつた經驗をもつてゐるが、今は彈壓されて地下へもぐり込んでゐる。英國と米國は比較的少なく各一萬人內外だが、その代り英國には勞働組合の英露委員會といふのがあつて、共產黨インタナショナルから離れて、英露勞働階級の提携を計つてゐる。その他、スカンヂナヴイア諸國、ベルギー、スイス、南米諸國のうちの二三の國を除いては、大抵秘密結社のやうだ。東洋諸國のうちでは、支那、日本、高麗、インドネヂア、土耳古、シリア、波斯、チユニス、埃及、印度、等があるやうだが、支那の一部分を除いては何れも秘密結社だから、一寸と黨員の見當がつかない。

A。おやもう終電車が無くなる。左樣なら。

B。左樣なら。

街頭黄塵録

GO・STOP!

池谷信三郎

GO・STOP!

成程これは人が多過ぎる。等比級數と云ふものは馬鹿に出來ないものだ。マルサスと云ふ男は頭が良い。天然痘が流行つてゐるさうだが、今に種痘を禁じる時が來るだらう。幼稚園を入れれば僅に廿年、その間有爲な青年があらゆる生産を犠牲にして、大學を卒業すると四割七分の失業者だ。親父が桃畠を賣つて學費を工面してくれたこの俺が、今、かうやつてこの賑やかな街角に立つて、扨て、GO・STOP!とは!?

いや、これは立派な職業だ。交通の安全を計り、人民の生命を保護し、それに何よりも、この四辻の數百の車馬が、俺の一擧手一投足の支配下にあるとは何んと云ふ愉快な事であらう。

GO・STOP!

それ、それ、動き出した。電車、青バス、自動車。圓タクの小倅が俺に敬禮したではないか。たゞ、獨步者の歩行者だけが無禮にも氣儘な行動をとる。だが、これは仕方がない。あらゆる法律にも善意の違反者は免れないものだ。

親父が桃畠を手離したのは惜しい。あの故郷の村の桃の苗木は、日本でも指折りのものだつた。お盆前に市場に水蜜桃を出す苗木は、初めてマルクスを紹介した男より珍重されるのだ。だが、そんな事はどうでもいい。俺は今、故郷の桃の景色を想ひ出してゐたのだ。もう花も盛りを過ぎただらう。街にも春の外

季だ。婦人の肌から春の匂ひが漂つて來る。あ、あれだな。最新式の斷髮、フインガ・ウエブと云ふのは。もう斷髮も珍らしくはない。コセットの母親や、オ・ヘンリのコントに出て來るやうな髮を斷る事の悲劇は幕を閉ぢた。今では、却つて、文金の高島田でこの街を歩く方が、遙かに多くの勇氣を必要とする。あすこに立つてゐる令孃はよく見る顏だ。いつもボンボン容れからチョコレートをつまみ乍ら歩いてゐたが、今日は花束だ。もう少し待たしといてやれ。それに、この大通りの通行はどうせ退屈をつぶす漫歩者だ。この直角の横通りは、蒸がれいを包んで家路へ歸る人々だ。こつちの方を餘計に早く通してやれ。これが社會的正義だ。あの令孃はきつとチョコレートの中に製菓女工の汗の味がしたので止めたのだらう。あの花に何をしやべらすつもりなのかしら。彼女にとつて花や水蜜桃はお米以上に必要なのだ。お蔭で俺の村の田地は皆んな果樹園と花卉畠になつて了つた。

この街には、自分の生産以上に消費する人々が多過ぎる。その癖、その不合理をお互ひに咎め合つてゐる。ニユーヨーク衣服商クラブ總會で、恥しくない男子一人前の服裝は、いくらかかると云ふ事が問題となり、次のやうに定められた。洋服、外套代二千三百九十圓、靴二百卅五圓、帽子百廿圓、シヤツ、ネクタイ八百五十圓、合計四千八百九十九圓、と新聞の雜錄に出てゐたが、その十分の一の服裝も餘り眼につかない。葉卷は葉卷でもあすこの煙草屋で賣つてゐる十七錢の葉卷が街に溢れてゐる。月賦と云ふものは便利なものだ。

おや、あの令孃は急にもぢもぢし出したぞ。失禮な想像をめぐらしたなら、失禮であらうか。とに角、取敢えず。

GO・STOP!

綺麗な足をしてゐる。丙午を境として日本の女の肢の美しさはたしかに一變した。これは椅子のお蔭と、小笠原流の輕蔑とに基因してゐるのだらうか。もう直き日本の男子も靴下に戀愛を感じ出すであらう。こんな穢いフオードに乘せられて、ホテルへ花束を撒き散らしに行く女は馬鹿だ。

あすこの夜店の男は一晩中、格子戸の鈴を鳴らしてゐる。その隣の男は炭ばかりつまんでゐる。光線が廿八通りもさしてゐる油繪の額椽、詰將棋に至つては言語同斷だ。

電車の監督さん、今の音は何んですか。そろそろ軌道(レール)に油をさしてくれませんか。サキソフオンの音にしては少し散文的だ。ジヤツズは生活のテンポですか。成程、だが、かう云ふ不

調和音を音樂と感じるのは僕の耳は余りにクラシカルなんですよ。ベトウベンは電車なんか知らなかつたのです。

ほら、あすこのラジオ屋からオーケストラが聞えて來た。靜かな曲だ。まるでこの雜沓にはそぐはないメニュエットだ。あのラヂオ屋の飾窓は構成派だな。構成派とか表現派とか、あんなに騷いでゐたのに、結局日本の大衆には『眼につき易い』と云ふ功利的なゲツプしか殘らないとは。

GO・STOP!

おい、おい、何んだつてこの忙しい中をマラソンなんかやつて逃るのだ。大して見せびらかす程のいゝ體格もしてゐない癖に。だが、まあいゝ、これもスポーツ精神の發露だ。それに速力の美だ。百米を一秒早く走れば世界的になれる世の中だ。日本人でフインランド人と云へばヌルミだけしか知らないだらう。リンドバークはコロンブス以上の偉人だ。まあ、大いに走つてくれたまへ。本官も幾分の力はかすとしよう。そら。

GO・STOP!

もう毛皮の襟卷も見えなくなつた。新柄のパラソルを衆の間で擴げてゐる女達も多い事だらう。今年はローズ系統はすたつたらしい。色調の流行程俗惡なものはない。

あすこの時計屋を覗いてゐる夫婦連れは新婚らしいが、旅行の途中で喧嘩でもして早く引上げ、まだ給料の二日分位殘つてゐるのだらう。あの嫁さんは俺の昔の戀人に似てゐる。春のやうに明るい顏だ。

春だ、春だ。俺も下の上げ方がうまくなつた。皆んなコールドドリンクを飲んで來たやうな顏をしてゐる。博覽會日當に縱續入京して來た掏拔の一團が、地下鐵は余り明るく、余り短いので、夜業にこの街にも現れるさうだが、これは俺の係りではない。あすこへ行く暗い顏の男は、よく見る顏だ。いつもこそこそ通り拔けるが、怪しい繪でも賣つてゐるのだらう。又見合ひをしてゐるな。中々淸楚な女だ。俺だつたら文句は云はんが、向ふで斷るだらう。總じて春の街頭の女は美しい。それに從つて、結婚一年あたりの男の顏は憂鬱だ。中學入學の祝ひにラヂオ屋が繁昌してゐる。

あゝ疲れた。早く交替の時が來て、あの角の額椽屋の飾窓が見たい。あの靜物の林檎は穩かだ。疲れた後の色彩は美しい。あの林檎には生活がないからいゝ。イデオロギーがないからいい

い。藝術は生活から分離したものゝ中にある。

GO・STOP!

GO・STOP!

GO・STOP!

あゝ、うるさい。もうどうでもいゝ。好きなやうに通つてくれ。秩序も何も要らん。藝術的に通つてくれ。さうすれば衝突なんか起りはしない。それで恐かつたら保險をつけてくれ。それよりいゝ加減家へ歸つて寢てくれ。あの青バスの小さい可哀さうな女車掌の疲れた顏が眼に入らないのか。

俺は故鄕の桃の畠が戀しくなつた。

銀座あたり

北村小松

「あんたはよく銀座へ出かけるが、何が面白いんだね……」學校にゐる時分下宿してゐた宿の主が私を捕へてよくかう云ひました。

「その邊をうろつき廻る樣な奴に、ろくな奴はゐない」田舍ではよくかう云ひます。むろん田舍の小村や山邑にすんでゐる人々は用もないのに日が暮れてからその邊をぶらつき廻りはしません。田舍などではお祭りかなどでもなければ第一着飾つて外へなど出はしません。お祭りでもないのに東京の人の樣によそ行きなどを着込んで日が暮れてから往來をほつつき步かうものなら狐つきか色氣違ひにされてしまふにきまつてゐます。

でありますが近代の都市の發展は人間の神經も田舍とは色々と變つた方へ發展させて行つた樣です。第一街では田舍とちがつて日が暮れたからつて急に店をしめてしまひはしません。しめる所か、ショウウインドウも店の中もひるまよりは人工的に美しく明るく輝き出すわけです。

蟲けらだつてあかりを見れば集つて來ます——魚だつてその通りです、だから珍らしい物を好きで元來がぶらつきたい氣のある人間が明るい街へ集つて來ないわけがないのです——街のあかりが都會人にすつかりぶらつき癖をつけてしまつた樣なものです。ぶらつく事が生活の一部にまでなつてしまつた連中が今ではづい分と澤山ゐる樣です。田舍の人から考へて見ればはなはだ妙な生活の一部でせうが、都會にゐれば別に妙でもないから不思議です。

たとへばぶらつくのもたゞぶらつくなら何の事はないのですが、女でゐて男刈りに髮をブッタ切ってすごい洋服でしかも若い男と一所に歩き廻る――などと云ふ事は田舍ではとんでもない事です。一九二八年の今日、なほ、とんでもない事なのであります。第一、髮にアイロンをかけると云ふ事でさへも、田舍にゐる私の母にとってはとんでもない事なのですから。

こんな風ななほ雜多な田舍の神經にはとんでもなくひゞいたり或はテンからひびかなかったりする樣なものや事がらが都會の往來には橫行してゐる樣なものです。

例へば私が田舍へ歸って友達と話を致します。

「……こんな事を考へて見給へ、いいか？一人の若い女をつれて銀座の松坂屋のテッペンに行くんだ。屋上庭園さ。そこへ行ってライオンの檻の前のベンチへ腰掛けるんだ。えゝ？そしてしばらく默ってライオンを見てゐるんだ。すると女がかう云ふ。『あたし、あのライオンが、日が暮れてから、アフリカかどつかの沙漠を一人でポコポコ歸ることを考へてるのよ…』――この氣持ち分るか？」

「分らん…」友達はさう答へます。

「屋根の上に庭があってライオンが居る」

さう云った所で田舍の老人等はそれがドンな風であるのか見當がつかないのです。田舍の老人には屋根の上に庭があってライオンのゐる光景が分らない樣に、田舍の素朴な私の友達には、戀人を連れて松坂屋のテッペンへ昇ってライオンを見なければならない理屈も、女がライオンがポコポコ歸る話をする神經も分らないのであります。

ましてこの私の友達などは、田舍から出て來て邦樂座へ活動寫眞を見に行っても、その歸り、あの（何と云ふのか名前を私は知りませんが邦樂座の傍の川へかかってゐる）橋のたもとで、タバコをくはへた洋裝のモダンガール風の女がマッチを探す樣子をしてチラリチラリと私の田舍の友人に秋波を送って見た所で、彼女が何を職業にしてゐて、何をしようとするのかテンから分るはづはないのであります。

こんな風な事實でも、パリから歸って來た若い畫家の諸君に云はせると「東京も事情が分って見るとパリより面白いね」になるのであります。

不幸にして私は東京がパリより面白いか面白くないか分りませんが、とにかく銀座でもほっつき步かうと云ふ人達の神經は、ルビッチの「陽氣な巴里っ兒」になったり、ロンドンのモダンな「紳士」や「淑女」の神經を、性に關する限りに於てもちはやめたのも事實だらうと思ひます。――これは勿論一つは

アメリカの映畫の教訓によるものである事は明らかです。行きつまつてゐる資本家階級のノラクラ息子や或は小市民階級の青年、それから、今なほ「幸福」だの「安逸」だの「成功」だの云ふ言葉を、アメリカ映畫式にダブルエキスポヂチュアにして錯覺を起してゐる職業婦人並びに女學生諸君に、何をなすべきかを教へてゐるのは千遍一律の學校や、お婆さん達のイデオロギーではなくて、アメリカ製映畫だと思ひます。

おかげで銀座をうろつく女の魅力の力點も變つて來ました。彼女達の美意識も變つて來ました。彼女等はパッカードやロールスロイスの自働車に興味をもち出してゐます。

例へば最近日本のある詩人が「空とぶ鳥に比して飛行機の何と醜い事よ…」と歌つたものであります。これは誰でも云ひさうな事です。所がこの詩人の神經は、もはや私の素朴な田舍の友達と同じである事を彼女達は宣告してしまひました。

「鳥に比べて飛行機がみにくいんですつて？――飛行機の美しさが分らなきや無論チャールス、ロヂャースのイットなんか分らないわ。詩人つたつて鈍感ね！」

だが惜しい事にロールスロイスやチャールス、ロヂャースは銀座を歩いてゐるわけではありません。私も時にリオ、デ、ヂャネイロのアベニダ、リオ、ブランコやボタフオゴの海岸通りのすばらしさを考へたりメニルモンタンのペーヴメントやガス燈の事を考へるのですが。銀座にはモザイクの步道も、古風な石だゝみの鋪路もガス燈もあるわけではありません。近代人がすばらしい勢で異國情緒にあこがれやうと。やれブルースだ、チャレストンだ、ブラックボトムだとステップをきざんで見た所で銀座通りが日本一の賑かな通りであるにすぎないのであります。

「近代人は何か求めてゐる。何か事があればいいと思つて步いてるんだよ」――去年だつたか私と一所に銀座を步いてゐたキネマの俳優のSがいかにも眞面目に云ふのです。「いいか、これを一つやつて見せよう」――彼は私に、彼の眞似をしろと云つて松屋の橫町の所で默つて松屋の建物のテッペンを見上げて立ち止つたものです。彼が何をしたがつてゐるか私はすぐさとつたので同じ樣に默つて松屋のテッペンを見上げて立つてゐました。

すると一人たち止り、二人立ち止り、三人立ち止り、皆私達と同樣な、松屋のテッペンを見あげるのです。ぢきに黑山と人がたかりました。Sは默つてさつさと步き出しました。私も步き出しました。が人々は後から後からと立ち止つては何もない松屋のテッペンを見あげてゐるのです。――およそ馬鹿馬鹿し

い話しですが、Ｓに云はせると、これが近代人が何事かを求めて銀座を歩いてゐる證據だと云ふのです。

何を求めて銀座を歩くか私にもはつきり分りません。がこの銀座を、ある青年が、母國觀光に來たアメリカ生れの日本人を連れて歩いたら、「早く表通りに連れてつて見れ」と云はれたと云ふ事であります。

なはり。

浪花枕草紙

渡邊　均

春は曙、やう〳〵白くなりゆく頃、宵からの酒に醉ひ痴れて、少しとろ〳〵まどろみたれど、小用に立ちなンどしてよりは、眠りもやらず、やがて、心にかゝる原稿締切も思ひ起されて、街頭黄塵錄大阪の卷の課題、心に浮ぶよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

げにや大阪は商賈の街。電車に乘るも町を歩むも、行き交ふ人の會釋は、『寒うおまんな。』『暑うおまんな。』の挨拶よりも、先づ、『儲かりまつか。』『ぼろいことおまへんか。』と口々に語り合へる、たとしへなくも胸つぶるゝわざなり。

先つ頃、四月朔日に、北濱取引所の創立五十年記念日、大阪に目ぼしき人きらびやかなる人とては、みなこれにかゝはりある人なンめれば、この日の北濱の賑はひは、官人紳商、ありとある人、姿かたち、心ことにつくろひ、したり顏に、君をもわが身をも祝ひなンどしたるさま、殊にをかしかりけり。

北濱一帶、立ち並ぶ家々、みな軒毎に提灯つるし、自動車は一丁目より二丁目にいたる間、折重なるがごとくに亂れ合ひ、餘興場、宴會場には、萬國旗、幔幕なンど晴々しく飾り立て、廓の老妓流行妓、一堂に集ひ會して立ちさわぎ、大阪のエッセンスはこれなンめりと見えたる、いとめでたかりしか。

こと〳〵なるもの

北濱、堂島、大每、大朝。

すさまじきもの

尻につかへつゝ續く圓タクの數。堺筋の通りなぽ、まつしぐらに走りさわぐ丁稚小僧が自轉車の列。

こゝろづきなきもの

大阪女の、聞きかじりたる東京辯をまじへて、ところ得がほに語り合ひたる、いと、こゝろづきなし。

『そんなこと言ははるさかい、駄目なんだわ。』

『何いうてなさる。』

なンど言はんよりは、

『そんなこと言ははるさかい、あかへんのやわ。』

といひたらんには、いかばかりつき〴〵しからめ。まいて、

『何いふてはんねやろ。』

藝者なンど、『あかへんし。』『そやし。』と、地の言葉丸出しにしたるを聞かまほしきものなり。さすが京女の、かゝるはしたなきもの少きこそ、めでたけれ。

電車などに、いときたなげなる老婆の、わが身一つに廣き席とりたる、または、狹き場所に大きなる尻もて割り込みたる、憎さもにくし。

大阪の市電に、若く美くき女の乘りたる、いと少し。

月は

淀川の堤防。十三橋。

雪は

中の島。大阪城。

花は

岡本の梅。造幣局の櫻。

道路は

梅田新道。

阪神國道を自動車のドライヴは、日本一ためれ。

橋は

難波橋。堂島大橋。

近ごろ、四ツ橋あたらしくかけかへられたれど、四ツ橋を四ツ渡りけり何とかといへる誰やらの句の味、更になし。市電なンど轟き渡りては、夏の凉みの風情にもならさンめり。

こゝろもとなきもの

大阪藝者の長唄、常磐津、淸元なんどに走るは、いまだよしとするも、地唄を忘れて、たゞいたづらに江戸早間の小唄なンど物眞似するは、いと、はしたなし。

山村の舞のすたれ行くさま、見るにつけても心もとなし。

春の踊は、木の花踊、蘆邊踊、浪花踊、なには踊。總踊の場のいよ〱少くなり行ける、春の踊のいはれを忘れたるかとさへおぼされて、あさまし。溫習會とは、そのいはれ、おのづから異るものぞかし。

京の都踊のみ、春の踊には、いとつき〲し。

にげなきもの

大阪の舞妓。船場のいとはんの斷髮。

社は

天滿宮。

寺は

天王寺。

祭は

天滿祭。

心にくきもの

春團治の落語。

總じて落語の味は、大阪落語なンめり。言葉のニユアンスは、大阪落語によりてこそ、めでたく覺ゆれ。

あさましきもの

三月の中座に、大阪にてはいとも珍らしき幸四郎の『暫』を出したりけるに、もとより『暫』の芝居を見たる人の少きことなンめれば、後の語り草にもとて、われも〱と見に行きけり。されど『暫』は、もつれ合ひたる筋とてもなく、悲しき話とてもなきものなりければ、

『何や、たよりない芝居やな。』

『筋も何もあらへんし、尻切れ蜻蛉見たいで、面白いことも悲いこともあらへん。』

『せうむない。』

『スカ見たいな芝居だんな。』

『高い木戸拂うて、えらい損した。』

など、口々に罵り合へるさま、いとあさまし。

新聞小說を仕組みたる安芝居見んとて、新聞の月極讀者に頒ちたる半額券もちて、朝よりつめかくる椅子席の客。

望ましきは

御靈境內への文樂座の再建。

めだたきもの

北の新地の老妓鶴助。

十四歳よりことし七十七歳にいたるまで六十數年のあひだ、いまだ一たびも妓籍をぬけしことなし。氣のむいた座敷へのみ出て、大酒を傾く。

『今ごろの若い妓は、お酒を大方盃洗の中へ流してしまふやうなもんや。もつたいない。わてらは若い時分から盃洗で飮んでたもんやがな。』

赤のモス裏つけたる鐵砲襦袢きて、得意の小唄『四條の橋』をうたひたるこそ、いとめでたけれ。

（昭和三年四月五日夜のあけ方）

塵中愚想

水島爾保布

大地震の年の春、そこらの町の表通りにテンやワンやで建て並べ、塗り散らかしたバラックの商店を見た時、何の事アねえ博覽會の賣店だ……と、いつたのは一人私ばかりではなかつたが、そいつを逆に思ひ出させるものに、目下開催中の御大禮記念博がある。何だか上野の山に丈大地震があつたやうな氣がして、どうも六十錢出して這入らうつて了見が起らない。

のみならず、あの切符賣場をはじめ、いやにシャツチコ張つた、出こま引こまの恐ろしくツツケンドンな、若しあゝいふ家を夢か活動寫眞かで見たとすると、きつと眼玉へ突通つて來るだらうと思はれるやうな、トンガラかりが、畜生！どんなもんでえ！てェ鹽梅式に、やけにノメリ出たり、フン反り返つたりしてゐるところ、近代感覺の高潮だか、昂奮せるモダニストだか何だか知らないが、どうもチャンバラ劍劇と、ストライキと、暴力團とによつて代表された今の世のさが人のさがを、まツその如く具體化し形式化してゐるかの觀がある。觀があるからいゝんだか惡いんだか、まだそこ迄は考へちやゐないが、中味だつてどうせロクなものは列んぢやゐまい。

それはまゝいゝが、一つ氣にかゝるのはあゝした後の慘憺狼藉さだ。例によつて家根が破れ壁が崩れブリツキがパクパクになつた三角塔や六角長屋や外構ひの塀が、丸一年も雨ざらし風さらしのまゝであの公園のそこら中におつ放り出されてあるん

ちやないかと思ふ丈でも自ら眉が顰んで來る。頭デッカチの福助がガランドウのバラックの窓に倒立ちをしてゐたり、大禮服が半分ちぎれ眼と鼻とが斜つかいに禿げチョロケた東郷元帥が吹きすさぶ木枯らしに煽られてゐたり、……考へる丈でもウンザリしちまふ。どうも彰義隊以來、上野の山にはロクな事はない。

十二階が無くなつて以來何だか淺草が淺草らしくなくなつた。あの滑稽な、一種稚氣を持つた塔の姿、陽に燒け埃にくすぼれた赤つ茶けた煉瓦の棒が、天の一方に、天邊に日の丸の旗をかざして、ニヨツキリと突立つてゐた頃には、何だかその棒が示似するやうな滑稽さなり稚氣なり、それから、歴史を背景にした一種穩やかな俗つぽさ、――といつたやうなものが、淺草全體の空氣のどこにも漂つてゐたやうな氣がする。さう思ふと、あのブツキラ棒な姿も一寸惜しい。そして空の具合も少し寂しい。

寂しいといへば、その十二階の下で、刀で紙を切りこまさいて、あれあれ春は三月落花の體なんてまくし立てゝゐた松井源水のゐなくなつたのも、それから、砂文字婆さんの吉原かぶりが消えて無くなつたのも、ひとしく、我等の淺草を寂しくする様だ。

十二階の二代目なんかはどうでもいゝが、あの砂文字婆さんの二代目位は、出來さうなものだと思ふ。春の街頭には殊にいゝ景物のやうにも思ふ。芝居の地がすりのやうな布を地面に敷いて、この上へチヨコナンと座つて、座の左右、幾つか置きならべた袋の中から、赤白青黃いろ取り〱の砂を摑み出して、それで、神祇釋敎戀無常、もろもろ樣々の色と形を描き出す。――お次は白井權八小紫、呂なし山谷の仲の町、夜の櫻は花吹雪、兩側のお茶屋には花暖簾、雪洞には赤い灯がともる。……なんてツラネのやうな事を喋り〱、スツスツト砂をこぼす、それが太くも細くも自由自在だ。一錢二錢の投げ錢を待つて、菅の根の長き春日を日がな一日、描いては崩し崩しては描いて暮らす。筆と墨とで紙にかいたのと違つて、一掃き掃けば才子も佳人も猫も杓子ももとの砂だ。私にはさうしたところが、ひどく面白くひどく氣に叶ふ。隣隣りでは連れ合の爺さんが、一つ長屋の佐次べさん、四國を廻つて、オヤ、さるとなると、……なんて唄ひながら、飛んだり跳ねたりでも賣つてゐるとなると、春日路傍の情景實にこの上もなく長閑なものであらう。

銀座の夜市、少閑の場所を選んで一張燈下に沙畫をかく人、あれもいゝ、が、私はあゝいふ往來の隅つこで、往年の砂文字

婆さんの流を亞いで、黑縮の靴下から透く豐よかな肉の色でも上眼づかいに偸みながら、五色の砂であぶな繪もどきの幾つかを御試見に供し際どいところですらりと逃げて、大いにお立ち合ひの衆の御機嫌を取り結んでも見たいものだ。なんて事を思つてゐる。それが許るされなかつたら、あすこいらの日當りのいゝところ、芽出し銀杏の根つこへでもかゞまつて、下駄の齒入れでもして見たい。と思ふ。

東京の影

上司小劍

都會は人類の作つた腫物のやうなもので、多くの人々がそこに集つて腐敗する。一そう恐ろしい言葉をもつてすれば、近世經濟制度が一種の癌組織を營んで、毒素を五體に浸染させるもとになるとも言ひ得るであらう。さうして、腐敗はたゞに都會ばかりでない。山青く水清らかな田舍の奧の方にまで及び、癌組織が至るところに出店を造つてゐる。

しかし、今頃そんなことを言つてみたとて、はじまらない。毒素と白血球とが、猛烈な鬪ひをつゞけてゐる腫物をば、美しい山とも、麗はしい丘とも見立てゝ、なるだけ安心してゐることだ。腫物の美化！……まアそんなものか。

都會をば、成るだけ美しいものと見て、そこに安住することを工夫したい。たゞに美しいものと見るばかりでなく、物質上、實際の美觀をば、十分に都市の上へ現はしたい。紅塵萬丈といふ言葉は、都會の混亂と雜沓とを言ひ現はしたものであるけれど、この言葉を長く使つてゐるうちに、都市の美觀を紅塵の中から窺ひ得るやうな氣もして來た。字典的に調べたら『紅塵』の二字には、いろ／＼の意味があるであらう。しかし、私は紅塵といふ文字が、うまく都會美を表現してゐるやうな氣がするのである。

『美しき東京！……』と、私は自分の長篇小說の主人公に、さう歌はせてゐる。實際美しい東京である。見やうによつては。……其の美しさは紅塵の美しさである。大都會の作る紅塵と、それから關東平野のもつ或る特殊の濃い色、それを捉へて、見事な都會藝術を成し得たものは、廣重である。廣重が紙の上に再現させたあの版畫の色は、江戶の空氣をさながらに美しく見せてゐる。物變り星移れども、あの色は不滅の色として、江戶から東京に傳つてゐる。試みに不忍池畔を描いた廣重

の古い版畫を取り出して、今日の不忍池畔の實際と比べてみるに、四邊の人工的情景はスッカリ變つて、安價な博覽會の塔や陳列館が、時を得顏にのさばつてゐるけれど、往年、廣重の掬びとつた江戶の色は、今も其のまゝ、そつくり東京の空……と言はず、土の上にまで保存されてゐる。これが舊江戶の美しさで、また新東京の美しさである。惜しむらくは、今日、廣重ほどに東京の色を掬びとる藝術家がなくて、東京の美しさは猶として現はれない。私はこの望みを石井鶴三君の上に屬して、君に『東京』の美を描かんことを求め、既に尠なからぬ作品を獲つゝある次第である。

去年だつたか、東京の郊外に蜃氣樓が見えると言つて、世間が騷いだことがある。あれも一種の東京の色で、幾千年間傳つて來たものである。曾つては武藏野の逃げ水として、草より出でゝ草に入る月影のやうに、荒涼たる原の上を走つたものが、今は人家つゞきの紅塵の上に現はれて、郊外の人々を騷がせたものであつた。

大都會東京。そこに住む人の數は、現在で四百萬を越えてゐるであらう。最近の統計が手元にないので、委しくはわからないが、人口四百萬は確かなところであらう。十二年の大震災當時からみると、著しく人口が增加してゐる。たゞ東京市は何十年來市域の擴張をやらぬので、法制上の市域は古い昔のまゝである。梨の實にたとふれば、殆んどしんのところぐらゐしかない法制上の東京市だけだと、大阪や名古屋よりも狹く、人口も大阪より少し尠いほどだが、それはたゞ法制上だけの話で、東京市が若し大阪、名古屋の程度に市域を擴張するとなれば、接近五郡は其のまゝそつくり市に編入するのが當然なのである。さうして、現在の東京市を語るには、接近五郡をば、純市內と見るのがほんたうなのである。法制の上で市と郡とを分つてみても、人間の眼には一向氣のつかぬ同じ町つゞきである。人口四百萬以上の世界有數、東洋第一の大都會が、私たちの前に展開されてゐる。四百萬からの人間が作り出す紅塵！それはもちろん恐ろしいもので、世界の毒瓦斯とも言へやうか。試みに東京を距ること十里、顧みて來し方を眺めると、晴れたる日にも、一團の濛氣が、クッキリと或る限界を作つて、さながら灰色の盆栽鉢を伏せたやうに見える。其の下が大東京市なのだ。もちろん法制上の市部、郡部といふ區別はない。紅塵か、黃塵か、將た灰燼か。とにかく私等は每日每夜、あすこに呼吸し、起臥してゐるのだと思ふと、全く恐ろしくなる。

夜と晝とで、著しく人口に增減のある傾向が、東京では、大震火災後いよ〳〵甚だしくなつた。試みに中央公論社のある丸

ビル一つで調べてみても、晝間は何萬の人がそこに働き、何十萬の人々が、そこへ出入してゐるけれど、夜になると、多くは郊外の住宅に歸つてしまつて、恐らくは百にも足らぬくらゐの人がそこに寢てゐるに過ぎない。かうした傾向は、丸の內はじめ、各所の商店街にあつて、大都會は大寂寥なり、といふ言葉を、夜半以後の東京は如實に示してゐる。されば午前一時といふ深夜の現在を標準とする國勢調査で數へて、東京市（法制上の市域だけ）の人口の尠くなつたのは當然である。大震火災後東京市の人口が激減して、なか〱震災前の數に足らないといふのは、これがためで、人口は增加しても、多く郊外に流れ出したのである。市の人口二百十萬、郡部の人口二百二十萬といふのが、現在の大體の見當で、この四百餘萬が即ち東京の總人口なのである。

鐵道省で調べた昨年中の鐵道乘客の最も多かつた停車場は、もちろん東京驛で、一日平均五萬六千餘、其の次ぎが新宿驛、上野驛、大阪驛、澁谷驛といふ順で、それから新橋、有樂町、神田、田町といふ風に、十四番までは、四番の大阪驛（一日平均二萬七千餘人）を除くと、すべて東京及び其の附近ばかりが最多數の乘客を扱つてゐる。これは高架線の電車客をも扱ふためではあるが、しかし、大阪は幹線鐵道（東海道線）の停車場が梅田のあの驛一ケ所だけで上りも下りも皆一ケ所で扱つてゐるが、東京では幹線鐵道の停車場が、東京驛の外に新橋、品川、上野の三ケ所もあるし、東京驛、新橋、品川の三驛は東海道線で、大阪なら下り即ち西行ばかりを扱ひ、上野驛が大阪なら上りに相當する東北行も扱つてゐるのだから、東京と大阪との汽車乘客數を比較するのなら、東京の四驛を合はした數と、大阪の梅田驛一ケ所との數を比べなければならぬ、大阪の湊町驛、天王寺驛に相當するものには、東京の飯田町驛、新宿驛（一日乘客平均五萬二千餘）兩國橋驛がある。即ち人間の動きといふ點だけから言つても、東京は全國各都市中に群を拔いてゐて、紅塵萬丈の巷をドッサリ作つてゐることがわかる。因みに最近の調査による東京の乘り物の數は、電車一千八百九十七台、自動車一萬五千八百四十四台、自動自轉車一千八百六十七台、自轉車四十二萬六千八百六十三台、人力車八千七百七十六台で、人力車はだん〱減るが、自動車はます〱殖えるとのこと。

僕自身—あの頃

高 田 保

思へば、僕自身が「黄昏」だつたのである。

モボ——とそんな氣の利いたんぢやない。たゞぐうたらの浮浪児だつたに過ぎなからう。折角大學まで終へて、さて満足に世の中の勤め人になれやうといふ時を、つい月並な青年期の煩悶といふやつで、ぐうたらに日を送つた末が、淺草公園に巣をくつたのである。——大正七年から震災の年まで。

その頃の日記に——

（六月二十五日）

八が七に喧嘩を賣つた。それでカルロスが僕を探しに歩いてゐて、ぶつつかるなりいきなり「歸つちやいけねえぜ」といふ。とんだ義理人情の板挾みだ。仕方がないからしばらく堂守りと決めた。樂屋へ行つてニイ坊にこの次第を話す。すると彼女、いやにいぢらしい眼付をして唇を嚙みやがつた。畜生！

ともかくも神様よ、こゝんとこ十日間ばかしは、どうぞ雨を降らしてくれ給ふな。レンコートはカルロスが持つてつちまひやがつたのだ。

僕は近頃よく銀座を歩く。だが結局銀座よりあの頃の淺草の方が懐かしい「都會」である。銀座ではたゞ單なる一遊歩者である僕だが、淺草では喰ひ込んだ「跡」だつた。

右の日記の中の、八も七も友達の異名である。みんな浮浪仲間の不良少年だつたが、友情にかけては仁俠だつた。カルロスもさうである。僕は八の宅に當時一月ばかり轉げ込んでゐた。

その間に七が僕の仕事口を探してくれるといふのだつた。この八と七とが何故喧嘩をしたかについては、別に殘つた記憶は無い。なぜならこの種の出入りはざらにあつた事だからである。がともかく僕は誰よりも板ばさみになつた、堂守りといふのは淺草觀音堂境内に起居することである、ニイ坊といふのは、あの頃隆盛だつた淺草歌劇の女優である。

八は後年改心して浮浪を止めた。が止めたと同時に病氣になつて半年ばかりすると死んでしまつた。知らせを聞いて仲間の者が棺を擔ぐことを決めたが、堅氣一點張りの八の父親が斷然としてそれを拒絶した。で僕等は參列さへもしなかつたが、その式の翌日に、みんなで一升の酒を買つて、「西村某」と書かれた新しい彼の標木へ頭から浴せてやつた。浴びるほど酒の好きな八だつたからである。——この標木を見るまで八の本名を知らなかつたのが五人ほどゐた。

七は震災からこつち未だに行方不明である。腕も強かつたが美男の點で一等だつた。咽喉がよく、それに器用で、オペラの唄など下手なコーラス役者よりずつと達者なものだつた。達者といへばカルロスのヴアイオリンである。月のいゝ晩だつた

が、あの公園の五重の塔の下で、みんなを前にしてトロイメライを一曲彈いて聞かせた事がある。その時巡回の警官が——これは僕等の集りを始終追拂ふためだつたのだが——默つて立停つたなり最後まで聽いてゐた。非常に氣のいゝ若者だつたが、これも震災以來、船乗りの樂隊になつて出かけて行き、今では上海にゐるらしい。

ニイ坊は素直ないゝ子だつた。僕等仲間の共通の姓だつた。そしてこの兄貴仲間はみんなして「ニイ坊、魂だけは持つてるんだぞ」と言ひ〳〵した。この言葉は浮浪人らしくないかも知れないが、浮浪人ほど美しいものゝ値打ちを知つてゐるものである。するとニイ坊はいつも「でも、もう駄目よ。」と眼を伏せた。アーク燈の明りが彼女の長い睫毛に濡れて光つた。時としてはこのためにみんながみんな妙に感傷的になり、默り込んでしまつたりしたのも覺えてゐる。すると七の奴がきまつてラ・パロマを唄ひ出した。それでまた急に元氣づく、快活になる。それから「一相談」がはじまる。

このニイ坊も、別れると言つてゐた昔の御亭主と今でも暮してゐて、もう三人のお母さんになつたさうだ。

以上の外にも澤山ある。みんな僕にとつては忘れられない昔の友達である。なかには全く名も知らずにたゞ見知り越しの顔といふだけの、それでゐて煙草などを遣つたり貰つたりし合つた仲であつたながら、妙に懐かしく、思ひ出して忘れられぬ顔である。がすべてあの震災以來ちりぢりに別れてしまつた。時折り淺草へ行くたびに探しても見るが、さまで親しくなかつた連中の顔は見つけ出しても、飛びつきたい思ひの誰彼にはついぞ合へぬのはどうしたものか。

銀座——僕はよくあそこを歩くが、しかし僕の感情のどこかには、あの雜踏の中に浸み込めぬものがある。ひどく上品な取澄ましたやうなあの賑かさでは、どこかに喰ひ足りぬものがあるやうな思ひである。なぜであらう？今なほ殘る浮浪人根性なのであらうか？おゝ仲間よ、例へば八よ、七よ、カルロスよ、ニイ坊よ。

ある日、僕は偶然銀座の雜踏のなかで昔の顔の一人を見つけ出した。同じ仲間ではなかつたが、とにかく親しかつた別な仲間の一人である。

「どうした？」僕は突嗟に、昔したやうに胸のつくまで近寄つて相手の帶の所を掴んだ。「やつぱり淺草か？」

すると彼は苦笑して一枚の名刺を僕の手に渡した。彼は立派にある會社に勤めてゐる！、しかし彼は苦笑を續けてから僕に答へた。

「あの頃に比べりや、今のこの生活の方が、ずつと人間の屑だよ！」

放浪病者の手記

里村欣三

一　放浪の貧兒よ

プロレタリアの放浪癖は、不健全なる思想であると批難されるが、しかしそれが如何に不健全極まる非プロレタリア性であらうとも、私の場合には、どうにもならない不治の病根である。癒える見込のない、魂の天刑病なのだ！

私は悲しいと思ふ。だが、どうともならないのだ！鉛版工が鉛毒に犯されるやうに、坑夫がヨロケに罹かるやうに、私の環境は私をさうあるやうに決定させたのだ！

放浪！とは言へ、それは私の場合には、自由の追跡であり、旅から旅に、苦難から苦難に、人生の光明を憧れてやまない熾烈なる理想である。

だが、その許された唯つた一つの理想すらも、遂ひには放浪者の個人主義的な滿足である以外の何物でもない。人生の卑怯な逃避である。集團に歸り、集團の精神を信ぜよ！と、批難され、或ひは忠告される。

それに違ひないと思ふ。――個人的な滿足、自己の陶醉、それに現實の回避！さう、その通りである。

だが、私が放浪に於いて、さういふ非プロレタリヤ的な追求に落ちやうとも、その反面に於いて私は飽くまで集團の理想を信じ、集團の精神を信ずる。そのためには、いつでも私の放浪の慾望を抹殺する決意は常にある！

だが、私は放浪せずにはゐられない。プロレタリアを信じ、その未來を信じて疑はないとも、またその努力と戰列に參加して彼々と働かなければならないと信じながらも、しかも私は放浪せずにはゐられない。

不幸な病ひである。今日から明日へ、また次の日から次の日へ、私は日毎に何物かに希望をつながずにはおれない。いや、その希望を幻想せずにはゐられないのだ。

人間は十年後の、或ひは二十年後の希望は持ち得るし、また時にはそれを忘れてもゐられる。だが、私には何よりも、今日から明日を引き出して行く、不斷に日新らしい、日毎に鮮洌な希望に幻想を持たなければならないのだ。――これはまた何といふ、儚い、しかも浮薄な慘めさであらうか？

放浪！その結果は常に、失意と絶望である。幻想は壞たれ、光明は掻き消される。しかも、それが日毎にである。「こんどこそは放浪を思ひ切らう」と決心する。そしてその苦慘な絶望の淵に、悶々と反省するのであるが、それもほんの束の間である。と、また性懲りもなしに、希望が湧き、幻想が成熟して來る。と、もう矢も楯もならなくなつて來るのだ。それは悲しいことに、この現實の社會が、どんな放浪者が一つの土地に、また一定の仕事に頑張つてゐやうとしても、彼の放浪の時より、さう數等も樂であり、自由であり、幸福であると、いふ具合に都合よく行かないからである。そこで彼等はまた候、いづくかに自分の希望が實現される世界があり、幻想が決して幻想でない社會が實在するものゝやうに、――そしてそれがまだ放浪したらなくて、捜し求められなかつたのだ――と、いふ風に　へて行くのである。それはいつもの移り氣の蒸し返しに過ぎないのであるが、そして若し理性のしつかりした人間であるならば「またか！」と一笑に附して辛抱するところであるが、放浪者の場合には決してさうではない。幾度も幾度も、この移り氣のために同じ轍を踏んで、失敗に失敗を重ね、苦痛に苦痛を積んでゐながら、すつかりさう云ふ過去一切の經驗を忘却の彼方に押しまくつて、新らしい勇氣と、未知な冒險に身ぶるひ立つて來るのである。するともう、燃え始めた鎔府のやうに我慢がならなくなつて來るのである。

あゝ、斯くて私は放浪の淵に、野倒れなければならない運命を背負つてゐるのであらうか？または永遠に流水の面に繪を寫さんとする、或ひは夢に夢を追ひすがつて、その徒勞を知る由のない痴け者であらうか？

私は生れ落ちた時に、旣にそこにある可き筈の父母が亡かつた。世間に初めて眼を開いた時、伯父と呼ばれ、伯母と名付けられる吝嗇坊な、まるで赤の他人よりも邪險な因緣の下に、疑の石よりも邪慳けな、窮屈な存在として、肩身の狹い自分に

氣付かねばならなかつた。

そのまだ生れたてに等しい、頭も腕も固まり切らない少年の私が、胸一杯にその頃から祕ひ込んでゐた一つの考へは、一日も早く成長して、この慘酷な伯父夫婦の家から、廣い世間に逃げ出すことと、世間は決して伯父夫婦よりも慘酷である筈がないといふ思想であつた。——

日が暮れて來る。そこにもこゝにも、温かな灯影が點き始めて行く。旨まさうな夕餉の匂ひが、たゞよつて來る。——と、いまのいままで夢中で散々に遊び呆けてゐた友達の一人々々が、いつの間にか姉に呼び込まれ、母親に連れ歸られて、たつたひとりぽつんと、すつかり夕闇の濃くなつた白壁に背中をもたせて、自分だけがそこに置き去りにされてゐる。「飯時を忘れて遊びやがる!」と、毆ぐりつけられこそすれ、決して優しい聲で呼び込まれた例のない私であつた!

これは私の忘れ難い、少年の日の一風景である。

かやうな境涯にあつた私が少年の日にすら、雲に見知らぬ土地の希望を夢み、華かな急行列車の窓に世間の幸福を空想しやうとも、そして更には伯父伯母一家よりも、世間の方がどれだけ恩愛に富んでゐるか——といふ思想に到達したとしても、それは決して無理でなかつた、と私は私の不幸な少年の日のために言ひ聞かさずには濟まされない!

では、世間は伯父伯母よりも慘酷でなかつたか?無論のこと決してさうではなかつた。伯父夫婦にせよ、またその憧れの世間にせよ、そのどつちもがこの私の一生を放浪の汗と埃で滅茶苦茶にせずにはおかなかつた程に、その何れもが甲乙なしに邪險で、慘酷であつた。

少年の時に、家出した私であつた。だが少年は、夢多いロマンチストである。だからこそ、私は慘酷な世間にぶちあたり、揉みたくられては來たが、まだその時慘酷な世間に對する抵抗力を持たなかつた私は、忍耐強く雜草のやうに頑張る意力がなくて、まるで水藻のやうに、決して實在する筈のない希望に希望をつなぎ、空想に空想を重ねて、世間の慘酷な迫害を避けて、だが決して避け得られる筈のなかつたために、その結果に於いてはその夢多い少年の日は、不幸にも薄汚い放浪性と共に根無草のやうな成長を遂げてしまつた。

私はその不幸を憐れむ!若しかりに私が、しつかり分別のつく年頃まで慘酷な世間に迫害されることなく成長してゐたならば、たとへその時出し拔けに世間の眞只中に拋げ込まれやうとも私は恐れなかつたに違ひない。充分に世間に抵抗して、生き拔く根を張りひろげたに相違ない。決して夢のやうな幻想に、一

希望をつなぐ放浪者になつてゐなかつたことを保証する。

錘はどんな大洋に投げ込まれやうとも、錘である。だが、まだしつかり固まり切つてゐない半固形物を大洋のなかに投げ込めば、忽ち波濤に容赦なく形の分らなくなるまで、揉みたくられて、遂ひには消え失せなければならない。丁度、私がそれである。固まり切らない少年の日に、私は世間の怒濤に抛り込まれた。そしてそのまゝ、迫害のまにまに浮され、流され、揉みたくられて、私の流浪は萍のやうに續いて來た。そしていまも再びまた續かうとしてゐる。――この放浪癖は、もう斷じて救はれ難い！

安住の地！一定の職業！それを希ふことは今では既に、私にとつては空想である。だが、流轉の涯に、雲の彼方に、それを得られない涙に泣きぬれ、夢見つゞけるであらう。

二 婆さんの握り飯

木の芽立ち時になると、惡瘡がふき出すやうに、私の病癖もまた性懲りもなく疼き出して來るのだ。だんだん暖かくなる。草が芽をふく。――と、もうじつと我慢して居れなくなるのが常だ。水氣をあげる大地。ぬるむ水。萌え出る自然の色。溫暖な太陽。私はもう我慢がならなく、羽叩く小鳥のやうに勇氣づいて來るのだ。

――もう何處へ行かうと、しめたものだ！

と、躍りあがつて叫ぶ。眼には、春の野景色のやうに浮かれぽい空想の翼が擴がり、勝手な幻影が氣儘な誘惑の手を伸ばすのだ。と、私はたゞ何かに魅せられた巫女のやうに、自分にだけしか見えない招きを感ずるのだ。そしてそれは決して違背してはならないし、また拒否を許さない嚴しい誘惑なのだ。誘惑の魅力！それはまた何んと美しさの限りであらうか！誘惑の美しさと、その幸福は、その魅力の手に乘る者にのみ開かれる秘密である。魔術者の呪文に陷ちた被術者のやうに、それは怪奇な夢幻に醉ひ痴れずにはおかない。

誘惑の秘密は理性では埒が開かない。判斷では解決されない。無我である。呆痴である。惑溺である。私は放浪に、この誘惑を感ずるのだ。殊に、早春のむづ暖い氣溫が、理性の働きを失はせ、判斷の光りを狂はせて、すつかり呆痴の狀態に落ち込んだ私に、誘惑の魔手が美しく手招くのである。

私はそれを拒む術を知らない。森が呼び、林が手招き、遠い都會が私に媚びる。そこには乳色の幸福が湧き、コヽア色の樂しみに溢れ、薔薇色の自由に漲ぎる――と、私は空想する。また、そこには宮殿のやうな生活が營まれ、女は美しく、しかも

快活で、勞働は野蜜のやうに樂しみに滿ち溢れてゐる——と、幻想する。そしてこの空想と幻想が勝手な成熟を遂げて、まるで現實との見境ひがつかなくなると共に、私の放浪はもうどうにも我慢のならないものになつて來るのだ！

だが、春が去り、夏が來、そして遂ひに落實の秋が訪づれずにはゐない。すると、私の空想は落葉と共に散り失せ、怪しい幻想は木枯と共に打ち壞れてしまはなければならない。勇氣は失はれ、希望は拋れて、失意と辣々しい絕望で、穴に潛ぐり損ねた蛇のやうに、冬のりん烈なる脅威の前に放浪の飢餓に迫まられて、就職口に血眼になつてゐる姿を曝さなければならないのだ。その姿の如何に慘めであることか！

夢は醒める。女郎に血道をあげて逼ひつめたお店者の結果よりも、放浪の結果は覿面(てきめん)である。

それは十七八の頃であつたと記憶する。落實の秋を、私は備後路を流浪してゐた。手足が自由にならない程に、朝晩の寒さが身に沁みて、時には霜をみる朝さへあつた。農家の生垣には菊が霜枯れ、だんだん畑には除蟲菊が刈り乾されてゐた。その地方に多い梅檀(せんだん)の落葉が、たゞさへ無氣力になりかゝつた流浪の私に、はらはらと雨のやうに脆く降り注いで、放浪の終末を告げ、限りない絕望に追ひ落さずにはゐなかつた。それに一錢の金もなかつた。朴訥な備後人には誰れ一人として、この流浪の垢によごれた見知らぬ他國者の私に、雇傭關係を結ぼうとする者がなかつた。その結果、私は餓死しかねない瀬戸際にまで來てゐた。空屋に菰をかぶつて寢たり、建築中の鉋屑に埋れて寒い夜を過し、或ひは焚火に芋を燒いて飢を凌ぎなど——困難な放浪を續けてゐた。が、私はまだそれでも乞食だけはする氣になれなかつた。人の眼さへなければ、盜みぐらゐやりかねなかつたが、それでもまだ乞食だけはする氣になれなかつた。髮は伸び放題に伸び、着物は破れ綻ろびてゐて、少しも乞食より上等であるといふ道理がないのに、それでも猶他人に食を乞ふ勇氣が出なかつた。

『人間並みな羞恥心を捨てろ。見榮を捨てろよ！お前は乞食以下な癖に！』

と、私は何度昏倒しさうな自分に怒鳴りつけたか知れない。だが、遂ひに乞食をする勇氣が出なかつた。その癖、人眼がないと畑を荒して大根を引き拔いて喰ひ、八百屋の掃溜めを夜中に漁つて腐れ芋も拾ひ出し、農家の軒から干柿をはたき落すやうな眞似は大膽にやつて退けたのだ。だのに、他人に憐れみを乞ふことが出來なかつた。哀れなる見榮坊よ！

私は糸崎、福山……と、痩犬みたいな恰好で、よろばひ步

いて遂ひに鞆の港に流れついた。その時、山陽本線から輕便鐵道の支線に沿ふて歩いたやうに記憶するが、いまはつきり思ひ出せない。その時、私はもうすつかり放浪に絶望しきつてゐた。

鞆の港は美しい眺望であつた。海沿ひの一筋町は鐵錆び臭い匂ひに滿ちて、小さな鐵工所が戸毎に並んでゐたやうに記憶する。船釘や船具を製造する鍛冶屋町であつたやうに思ひ出せる……私は何にもかにも一切に絶望し切つてゐた。だから町の風景を氣に留めなかつた。はつきり思ひ出せないのも無理はないと思ふ。

たゞ、海岸に沿つて料理屋や旅館があり、海の見える街路に蒲鉾の匂ひが強くたゞよつてゐたことを思ひ出すが、これも鞆の港の情緒ではなく、或ひは忘れ果てゝゐる何處か別の海岸町の光景を錯覺して思ひ出してゐるのかも知れない。だが、それがどう取違つてゐやうと、私がこゝに書き記してゆくことの意圖には重要な關係がないのだ。私はいまゝで多くの、實に數限りもなく多くの町に接してゐる。そして大抵は、その町の名も、風景も忘れ果てゝゐることが多い。或ひはまたその風景を、乙の町と甲の町と取り違へてゐる場合がしばしばある。現に私は糸崎から福山を經て直ちにこの鞆の港に流れついたやうに書いたが、實際は福山から小さな輕便鐵道が通じてゐる、坂路の多い街道を傳つて、藍汁が流れ放題の町全體が染料の匂ひでむかつきそうな山間の町、そして戸毎々々に織機の音がする町――福山から五里か十里ばかり離れた町に踏み込んで、それから鞆の港に引き返したのであつたが、生憎その町の名を記憶しないので省いたのであつた。――もう六七年も前のことである。さう、何にもかにも昨日のやうにはつきり覺えてゐる道理がない。それにその時、私は飢え切つてゐて、風景に眼を留める餘裕などなかつた。

だが、今でも鞆の港の海の色の美しさだけは、はつきりと思ひ出せる。町の裏に寺があつた。その寺の石崖は海のなかにそゝり立つて、ひたひたと深い波の色に洗はれてゐた。

私は三四日の絶食で疲勞しきつた體を、その寺に運び、御堂であつたか、鐘樓であつたかはつきり思ひ出せないが、兎に角さう云ふ場所に體を横たへて、凝つと海の色に眺め入つてゐた。紺碧の色――まるでさう云ふ形容がそつくり當嵌まるのは、その時の海の色であつた。深い、實に深い波の色を湛へて、鏡の面のやうに澄み切つてゐた。その海の色に長い岬が古い松の枝ぶりのやうにつき出て、廣茫とした海の一端と、石炭の破片のやうな島を抱きすくめてゐた。その島には四五本の古松が飄輕な

枝ぶりを秋晴れの空に翳し、古びた観音堂と白い石塔が、揺れる影を深い紺碧の波に落してゐた。

私はその深い紺碧の清澄な波の色に見入つてゐると、ふと出し抜けに自殺したくなつた。死といふ觀念が、何等の愛着も恐怖もなしに、崇厳な氣持ちで考へられて來たのである。何故いままで、かういふ氣持に囚はれなかつたかが、寧ろ不思議に感じられて來た。私の場合には、生きることこそ寧ろ不自然で、醜怪極りのない事實ではないか。そして現に今、野倒れないばかりに飢えに迫まられてゐる私に、どうして明日を生きる可能があらう。假へ明日を奇蹟的な救ひで生き得たとしても、その明日、來年……そのまた來年——私にはこの恵まれない人生を生き抜ける自信が全然なかつた。そしてまた過去に振り向いて見るならば「よく生きて來られたものだ!」と危なかしく感ぜられる以外には、そしてそれがまるで綱渡りのやうな危ない藝當であつた以外には、人生を生き抜ける自信はまるでたかつた。

鏡のやうに澄み透つた海の色!この深い色に浸つて死ぬるならば、死の姿は實に清淨無垢な姿でなければならない!飢え切つた腹に深々と紺碧の波を吸ひ込んで、ぽつかりと浮びあがつた自分の死體は、まるで人魚の肌のやうに放浪の埃と愛ひが洗ひ落されて、白々しい驚きに波の色を湛へてゐるであらう……。

恰度、その夜は月夜である筈だつた。死なば今夜、月光を波の面に亂して躍り込まなければならない。波の色を汚がさないためにも、そしてまた死の姿を清淨なものにあらしめるためにも、自分は放浪に汚れ破れ綻びた襤褸着物を脱ぎ捨てゝ、全裸の體に月光の注ぎを浴びて立たなければならない!と、さう決心した。すると、もうその決心が遠い日からの約束ごとでもあるかのやうに、當然過ぎる當然なことのやうに平氣に考へられて來た。恐怖も不安もなかつた。そして實に平靜な氣持ちで、遺書を殘して置かなければならないと、突嗟に考へた。平凡な、流浪の涯に行き倒れた人間に見られたくない——といふ慾望がその刹那の私を強く支配した。その衝動のまゝにそこに腹這ふと、私はすぐに懐から雜記帳と鉛筆を取り出して、一瀉千里の勢ひで私の一代記を書き始めた。この世界に二人と、自分のやうな不幸な、孤獨な存在があらうか!さういふ意識が常に私を支配してゐたためであらう。私は飢餓を忘れて、更にはもう何時間後に自殺しなければならない筈の決意すらも忘れて、私は私の不幸な遺書に沒頭したのである。

ふと、氣付くと私の周圍には黒い人だかりが出來てゐた。意

地の悪い漁師の子供達が、砂を投げたり、石を拋つたりしてゐた。それを胸をひろげた女房たちが、叱つたりなだめたりして、私を話題の中心にしてゐた。

『氣狂ひなんでせう。』

『勉强に夢中になつて、氣がふれてゐるんでせう。』

女房たちのこの話聲を耳にすると、私はがつかりした。實に云ひやうのない憂鬱な氣持が、鋭くぶり返して來た。死！死！死！それは遂ひに、世間の無智に對しては實に脆い敗北以外の何にものでもない！崇嚴な死、それも遂ひにこの現實にとつて一片の儚い幻影でしかない！

私の空想は、死に對する、絕望のどん底で描き出した最後の幻影すらも、女房の淫らな腥を弄ぶ落寞の秋風に、飜弄されなければならなかつた。私は泣くに泣かれぬ氣持で、無遠慮な黒い人だかりを喪心したやうに凝視めた。と、その私の眼の前に、溫かく湯氣を吹く握り飯が、皺くちやな手でつき出された。

『さあ、これを進ぜやう。勉强に凝つて氣がふれたんだ。まあ可哀さうに！』

老婆は涙脆ろさうな眼付をしてさう言つた。忘れてゐた飢餓が、溫かい握飯の匂ひに急に甦つて來た。何にもかにも、一瞬間前のあの自殺の決意すらが馬鹿げ切つたことに考へられた。その考へに、私はカラカラと思はず笑つた。そして老婆の手から握り飯を受けた。

『まあ、可哀さうに！』

老婆は再び呟くやうに言つた。思ひ切り遠く、暮れかゝつた空を映してくろずんで來た深い海の面に、私は自殺手記を引き裂いて拋げ込んだ。

生きなければならぬ！やはり私は死が怖かつたのだ。しかもその死をもすら幻影化せずにはおれない私は、何んといふ不運な星の下に生れた人間であらうか！

三　若草山の麓にて

姫路のある工場でのストライキに破れて、私は解雇された。即日工場の寄宿舍から警官立會の下に、まるで野良犬のやうに容赦なく雨のなかに叩き出された。賃銀增額の要求を起した程だから、一文の貯のあらう筈はないし、それに何處と云つて寄邊のある譯はなし、仕方なく五十圓ばかりの解雇手當を懐にして神戸の同志を賴つて、その夜のうちに姫路驛を發つたのだつた。

その同志は窮乏のどん底にありながら妻と母と二人の子供な

二

揃へて、しかもある工場の組合組織の運動のために全力を傾けてゐた。同志は私に神戸で仕事を求めて、自分たちの全力を盡してゐる組合組織の運動に參加してくれないかと、しきりに奬めた。無論、それに私は異議のある譯がなかつた。

遂ひに私は氣の毒だとは思ひながら、さしあたり身を寄せるところがないので、同志の家に寄寓して仕事口を見付ける決心をした。そして毎日、子守がはりに同志の長男を連れて工場から工場に仕事を求め歩いた。だが、どこでも成功しなかつた。四日、五日、六日……しまひには遂ひに憂鬱になり切つて、暇な毎日の大部分を公園にぶらついたり、活動を見て過した。子供は大よろこびだつた。

『おぢさん、おぢさん……』

と 子供は一刻も私から離れない程になついてしまつた。が、一方に同志の家庭の窮乏は見てゐられなかつた。私の解雇手當は、三圓五圓と無理矢理に同志の妻君の懐に捻ぢ込まずには濟まされなかつた。その結果、私はまた元の無一文に歸つてしまつた。

私はいまこそ眞劍に仕事口を漁らなければならなかつた。が無邪氣な子供はもう承知しなかつた。石炭殼をふんづけて工場の守衛所に潜ぐり込まうとすると『嫌だ！嫌だ！』と喚めき叫んだ。これに最後の恐怖を受けて、[illegible]やうにこらへていてゐる工場が、職工の首をこま切れ、この上新らたに職工を雇傭する見込などはまるでなかつた。

私は放浪しなければならないと覺悟を決めた。（この上、同志の迷惑にならないためにも！）

まだ秋には早やかつた。だが、今の私はそれを實行せずにはゐられないのだ。

早速大阪の三宮で桂庵に飛び込んだら、一圓の手數料を捲き上げられて、一本の紹介狀を奈良の旅館宛に書いて呉れた。

『もうぢき秋やさかい。辛抱しなはれ。たんと儲かりまはいな』と、眼付の陰惡な番頭が、嘲笑するやうに笑つて言つた。（客引き！）だが、いま仕事の撰り好みする餘裕は云つてゐられないのだ！私はもう懐に、その一圓を置いては幾らも殘つてゐなかつた。が、私は忽ち暗がり峠を奈良に越える決心をした。徒歩で、しかも足駄履きで——

奈良は始めてである。まだ見ぬ都雅な風景が、私に強い興味をもつて勇氣づけずにはゐなかつた。私は葉のついた木の枝を振り振り、鼻唄まじりの輕い氣分で峠を登つて行つた。奈良への路を訊くと、會ふ人毎に怪訝な眼で凝視められた。無理もない。大軌電車で行けば五十錢そこそこである。それに薄汚い着

物に足駄穿きである。風流とも氣まぐれとも見える道理がない。

　山をくだつて、遠く奈良の街の灯を眺めた時には、飢えと疲勞にぐつたり弱り抜いてゐた。水藻の匂ひのする池の水を鱈腹のんで、そのまゝ空家に忍び込んで寢た。都跡のどこかの貸家であつたと記憶する。

　翌ぐる朝、奈良の街に入つて、桂庵から紹介狀をつけられた驛前の旅館に行くと

『あほうらしゆうもない！そりや、あんたはん去年のことやな。今頃ひとはいりやへん。桂庵たらひどいことして儲けるもんやな』と、頭の禿げた主人に一笑に附されてしまつた。私はうかつに桂庵の手に乘せられたことを後悔したが、しかしまた再び山越えをして、桂庵に怒鳴り込む勇氣はなかつた。

　ぶつ倒れさうな程、腹が減つてゐたので、遊廓のある裏通りで羽織を賣り飛ばして、朝飯を詰め込んだ。そして人間らしい氣持になつて、若草山の麓に寢轉んだ。草はまだ芽をふいてゐなかつた。角の生え替らない、尻の汚れた鹿が、そこいら中を漁り廻つてゐた。流れる雲は暗かつた。陽は照つたり、影つたりした。茶店の縁台には、まだ春の用意がなかつた。それにも不拘、氣の早い連中が二組、三組と麓の陽だまりで陽氣な酒宴を開いて、法界屋の破れ三味線に踊つたり跳ねたりしてゐた。それは餘りに氣が早や過ぎる！どんなに喚めかうと、三味線をかき鳴らさうと、來ない春は來ないんだ。だのに彼等は踊つたり、跳ねたりする。春！春！春！春は何故に人間を、かうも待遠がらすのか？春が何故、そんなに嬉びなのだ。生活の轉換を望むでゐるのは、自分ばかりではないのだ。――

　私がふと頭をあげると、お客にあぶれた法界屋が、その娘らしい踊り子と二人で私のすぐ近くに坐り込んで、袂から焙豆を取り出して食ひ散らしてゐた

『姐さん！』

　私は出し抜けに聲をかけた。そして袂のなかゝら羽織を賣り飛ばして飯を食つた殘りの五十錢を、そこへ抛り出した。女は驚いたやうに顏をあげた。まさか、かういふ男から――春だと云つても名ばかりの寒む空に、羽織もなく顫えてゐる男から踊を强請れやうなんて！さういふ顏付だつた。

『一つ踊つてみないか。姐さん！』

『えゝ、おほけに……』

　女は不精たらしい味噌歯を見せて、迷惑さうに笑つた。眉を落した、のつぺりとした感じの、薄汚く白みきつた顏だつた。

『姐さん達は、冬中はどうしてゐるんだね』

『え、今年の冬は高松から丸龜の方に行つてきましてん』

『毎年春になると、こゝに歸つて來るのかね？』

『さうとばかり決つてまへんけど、去年は京都の嵐山に行つてました』

『まだ、春には早いぢやないか。花が咲かないと、儲けにはならないだらうね？』

『えゝ、でも今頃から顔を賣つときまへんと……』

女は踊り子を急き立てながら、洒蛙々々として言つた。かう云ふ溝にも等しい法界屋にまで、人氣といふものが存在するのかと思ふと、一寸あつけに取られずにはゐなかつた。

稚兒輪に結つた踊り子は、可愛いゝ顔附だつたが、早熟(ませ)きつた口許の色をしてゐた。

『お酒の席でないと、何んやらけつたいだす……』

さう云つて、私を盗み見て笑つた。だが、母親らしい女が、三味線をひき始めると、彼女は仕方がなささうに起ちあがつて、三味線の音に足調子を踏んで、長い振袖に可憐な藝をこぼしながら何やら舞ひ始めた。

まだ芽をふかない若草山。照つたり曇つたりする、肌寒い空。それに數奇な流浪の男の散財。――これはまた何んといふ慘めにも、道化けた風景であつたらうか！

だが、物見高い群集が、この風景を囲み始めた時、私は夢中になつて逃げ出してしまつた。――何故また、そのやうに逃げ出さなければならない踊りを、一文なしになつてまで舞はせなければならなかつたのか、その時の氣持が今に判らない。捨鉢！さう云へばそれまでであるが……お陰で私はその夜、公園内の建築中の空屋に一夜を明かさなければならなかつた。まだ荒壁をつけたばかりで、床板すら張つてなかつた。寒い夜風を防ぐために、入口に二分板を並べて便所に菰をかぶつて寢轉んだ。が、足さきや背中が、痺れるやうに寒さに痛んで容易に寢つかれなかつた。明くる朝、焚火をして温まらうと思つて起き上つたが、手も足も凍えて自由にならなかつた。無理に起きあがつて二分板の圍ひを破つて轉がり出ると、鉋屑を拾ひ集めてゐたらしい娘がキャアと叫んで逃げ出した。私の方こそ、寧ろ氣絶する程に驚いて逃げ出したかつた位ゐだ。

その日は、帽子と手袋を賣つて、燒芋を喰つた。そしてそれきりだつた。圖書館が開くのを待つて、半日ボーと眼が眩んでしまふまで小說を讀み耽つた。晝から若草山の陽あたりのいゝ中腹に、枯れた草を敷いて寢轉んでゐると、通りがかつた昨日の法界屋母娘が『おゝけに！』と云つて頭をさげた。そして通り過ぎてからも振返へり振返へりしてゐた。眼敏い彼女はき

つと、自分の體から帽子と手袋が消えてゐるのに氣付いたに違ひない――と思つたが、腹が減り切つてゐるので寢返へり打つのも大儀だつた。

その夜も建築中の空屋に寢た。飢餓が極端に進むと、思考力も判斷力も疲れ切つてしまふものだ。

奇蹟！奇蹟だけがこの窮地に陷ちた自分を救ひ出すことが出來るのだ！さう思つて觀念した。どう藻掻かうと、もうどうにも仕方がないのだ！

眞夜中になつて靴の音がした。二分板の圍ひ目に提灯の火がちらついた。

『開けろ！』

誰かゞ怒鳴つて、圍ひを蹴倒した。驚いて闇なかに起き上つた私の手首は、充分に食ひ足りた人間だけが持つ强さで、しつかり頑丈に摑まれてしまつた。警官だ！提灯を先きに翳して歩いて行くのは、今朝氣絶するやうに悲鳴をあげて逃げた娘の父親らしかつた。

『……物騷でおまして』

その男はさう言つて、警官に囁いてゐた。

遂ひに拘留二十九日！だが、私は救はれたのだ。腹さへくちくなれば、人間にはいゝ分別が湧くものだ！

四　修理婦

樹影や煉瓦塀に、熱い眞夏の陽ざしを避けて、丹念に襦袢や靴下の綻びを繕つてゐる女をばハルビンの街頭でよく見受ける。その傍には裸形の苦力が、シヤベルやツルハシを投げ出して假睡の夢を食つてゐる。――これはしばしば裏街の片隅に見出す情景で、襦袢や靴下が修理されるまでの幸福な、獨身勞働者の夢路である。

私はある年の一夏、ハルビンで苦力をやつてゐた。たつた獨り異國の人夫に混つて働くことの苦痛は、實に言外なものである。が、私は南滿での遊蕩亂舞の後なので、その苦痛を天罰ぐらゐに諦め切つてゐた。しかし、たつた一つ諦らめ切れないのは、習慣づけられた××であつた。殊に低廉な賃金なので、喰ふものは苦力と同じやうにマントウや生葱や蒜を喰らなければならなかつた。それで精力の昂進は、全く凄じいばかりで、性慾の惱みといふ奴を、私はその頃ぐらゐ恐怖をもつて感じたことはなかつた。

しかし苦力達の性慾を制する忍耐は實に偉大なもので、彼等は遠い河南や山東の生國に、その妻を殘してこの北滿の涯まで出稼ぎにやつて來るのであるが、しかしそれ等は冬が來るまで

の精々生活そこそこの忍耐であるからまだ辛抱も出來るが、一方には四十になつても五十になつても、またその生涯のうちには恐らく妻をめとることの出來ない惨めな者がゐる。さういふ种類の奴になると、女氣をミジンも知らないのだ。それでよく性の惱みを感じないでゐられるものだと、全く不思議に思はれる。だが、實際には彼等も人間である以上に、その惱みから超越してゐられる筈のものではない。

ある日であつた。若い苦力が煙をふかしてゐる私のところへ來て、含羞むやうに、かう囁いた。

『お前の國でも、また俄國（ロシヤ）でも、さうだと云ふが、ほんたうに妻をたゞで進上するのか？』

私は微笑みながら『さうだ』と答えて、そしてお前の國ではどうだと問き返へすと

『皆んな買はなければならない。親が金持なら何處からか買つて來て吳れるが、親のない貧窮なものは自分で買はなければならない。五十圓、百圓、二百圓、と幾らでもある。だが、金の貯へのない者はどうにもならない』

と、寂し氣にうつむいた。そしてまた再び、言ひ澁りながら私に

『お前には妻があるのか、ないのか？』

と訊くから、私は笑つて『こんなものはない』と答へると、彼は

『進上するのに、何故に貰はないのだ！』

と、不審な顏付をした。そして丁度その時、私達の前を内地の浴衣に、赤い腰帶の裾を蹴出して行く、若い潑剌たる日本娘を、彼はさもいと羨しさうに見送つてゐた。

私は苦笑のうちに、一抹の悲哀を意識せずにはゐられなかつた。

『進上と云つても、日本も支那と同じことさ。金か財産がなければ、女房がさう容易く手に獲られるものぢやないのだ。根本に於ては、やはり支那の賣買結婚と變りがないのさ。』

と、例を引き、たとへを上げてたどたどしい支那語で話してやつたが、彼れにはやはり『日本では娘を進上する』といふ不可思議と同樣に、私の言葉が理解されなかつた。

だが、彼が寂し氣に含羞んだ顏付は、性の惱みと悲哀そのものであつた。忍耐强いこと、まるで牛のやうた彼等ですら、無論この惱みからまぬかれる筈のあらう譯がない。それは當然すぎる話だ。

それからもう一つこれに關聯して、面白い老人の插話を物語らう。

ある時、私はまるで惡戲半分で、もうヨボヨボに老いた苦力を露西亞ビイの門口に引きずり込んで

『、、、、、、、、！』

と、云つた具合で、ひつこく嫌がる苦力を引張りまはしたものである。勿論、私は醉つてもゐたが……すると彼は必死になつて

『いけない！いけない！』

と、私の手を捥ぎ取らうとするのだ。

『馬鹿、金は俺が拂つてやるのだ！』

と、言つても彼は嫌だと叫んで、ドアがはづれるほど死嚙みついて離れない。

『馬鹿ー いい年をして嫌なことがあるか、子供ぢやあるまいし。、、、、、、、！』

と、醉拂つた私は、ロシヤの淫賣と一緒になつて、執拗に彼を引張り込まうとしたが、彼は飽くまでドアに喰ひついて、しまひにとうたう喘ぎ喘ぎ

『俺は生れて一度もそんなことをやつたことがない。きつとこんな年寄りになつて、そんな冥加に有りつけば、氣が狂つて死んでしまはなければならない』

と、喘くのだ。そして彼は青い顏をして慄え出したのである。その時、私ははツと思つた。氣の毒と云ふより何か慘酷な事實を見せつけられたやうな氣がして、云ふに云はれぬ痛慘な氣持になつた。支那には、そんな傳說みたいな話がザラに轉つてゐる。そして幾度か、さういふ話を戲談交りに聞かされたが、いつも「何を馬鹿な！」といふ位ひにしか思つて本氣にしなかつたが、いま眼前にその事實を投げ出されてみると、グウの音も出なかつた。

しかし私には支那人のやうに、性に對する忍耐力がない！

深い木立の森に蔽はれて、露西亞寺院の金の十字架が、青い屋根の尖塔に麗かな陽ざしを浴びて、燦然と輝いてゐた。その快晴のある日であつた。

私はトルゴワヤの裏通りを步いてゐた。何んといふことなしに、淡然たる心持を抱いてゐた。

その時、ふと私は街路樹の梱にもたれて、楡の青葉に青白む饑理婦を見つけ出したのである。いゝ女であるとは思はれなかつた。しかし私は突然に、それこそ一瞬の猶餘もなく、、、、、、、、感じたのである。それはまるで出し拔けで、私自身も吃驚りせずにはゐられないほどに、その衝動は發作的のものであつた。その時のことを、いま思ひ出してみると、あゝ云ふ際に忌はしい犯罪を犯すのではないかと、婦然とせずにはゐられな

い。

それは犯しておいて、私はその時、さう云ふ犯罪を犯さなかつた。が、その結果はそれ以上に計劃的なもので、その罪はより以上に深いものである。

私は嫉妬の衝動を受けると、それを忍耐してづかづかと女の前に歩み寄つて行つた。

「靴下やシャツの修理があるから、私の部屋まで來て呉れないか？」

と、私は平氣な顏で囁いた。そして修理婦を衆人環視の街頭から、悪い計劃を抱いて、崩れ落ちさうなビルデイングの三階の屋根裏である、私の部屋に引張り込まうと企んだのである。

女はもじもじと私の顏を讀んでゐたが、よちよちと纏足の足を痛々しく引きずつて、私について來た。——恐らくその日のパンにも差支へてゐたに違ひない。そしてその彼女は、その思案に餘つた身體を街路樹の柵にもたせかけてゐたのであらう。——でなければ、さう易々と異國人の屋根裏にまで、喰つついて來る道理がなかつた！

その私は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。(私はもうそれを再びこゝに書く氣にはなれない。私の亂暴な行爲に對する代償を與へたにするからであらう)

私は泣きぢやくる女の手に、幾らかの金を握らせて、ドアの外に突き出した。そして私は脱いだ上衣を、かき亂された寢台の上に投げた。悔恨が忽ち手を擴げて來た。女は口惜しまぎれに銀貨や銅貨を一つ一つドアの背に投げつけて、恨みがましい言葉を吐きかけてゐた。

女の顏の醜さが、その時はじめて意識の表面に現はれて來た。唾液を吐き棄てゝも、吐き棄てゝも、女の醜い顏が消えなかつた。淺間しい自分が、後悔された。

翌日、何氣なく仕事から歸つてドアを開くと、寢台の上に昨日の修理婦があぐらをかいて坐つてゐた。私を眺めると、にやツと笑つて兩手で顏を蔽ひ隱した。

私は慄然と顫えあがつて、ドアのところに佇んだまゝ、身動きも出來なかつた。だが、戰慄が憤怒に取つてかはのるは瞬刻の差である。私は忽ち女を、亂暴にもドアの外に引きづり出してゐた。そしてピツシリと鍵をおろしてしまつた。窓ガラスの割れ目に、怨みをたらべる女の口唇が、業々しい表情で痙攣してゐた。が、私はそれを威嚇することも、追拂ふこともできずに、良心を寸斷するやうな痛みを忍ばなければならなかつた。

私は翌朝すぐに、その住ひを拂つてしまつた。そして私は宿

罷に口を拭つてしまつた。

やうやく醜い修理婦に對する不倫行爲を忘れて、私はまたいつかのやうに漠然たる空虚な心を抱いて、支那街フウザテンの一角をうろついてゐた。きつと女を買ふには金がないし、南京蟲にせめられて眠むるのは辛いし、その持て餘した體を漫歩とシャレ込んでゐたに違ひない。さう云ふ時、誰れでもが擦れ違ふ行人に注意を拂はないやうに、私もその時流れるやうに行き違ふ支那人に眼も吳れないで、ひとり悲愁に似た心持の快さを、意識と無意識の漠とした堺目にぶらさげて虚心に歩いてゐた。と、

『おゝ！』

擦れ違つた女が、かすかに輕い驚きの聲をあげた。ぎくりとして振り向むく途端に、まつ黑い人影にひしと抱きつかれた。同時に私は

『おゝ！』

と、呻いた。女だ！修理婦だ！一體この執念深い女は、私をどうしやうと云ふのだ。彼女は犯された罪を、公衆の面前で訴え喚めかうとするのか。そしてこの私を民族的な復讐の刑台に据えやろと云ふのか！

（支那街フウザテンは、賊の都である）

私は眼がくらんだ。黑い戰慄の翼が、虚空をふさいだ。死！私刑（リンチ）！

私は女を振りほどいて逃げ出さうと焦つた。だが、女は私の戰慄と恐怖を不審がるやうに微笑みながら、頰をあからめた眼元に媚を忍ばせて、かう囁いたのである。

『お前は私を妻にしなければならない。操を破られた男に、どうしても從つて妻にならなければならないのが、私の國の習慣だ。さうでなければ私は婦道を守ることが出來ない。』

しかし、私は無理矢理に女の手を捥ぎ離して、行き交ふ群集の波を泳いで逃げた。何處までも何處までも逃げた。後悔！そんな生まやさしい言葉では、その時の氣持は表現できない。

政界裏面 白眼樓夜話

刀 吏 公

◇……田中が首相兼任のままで外相の椅子を離さないで居るのは離しそこなつたといふのが事實だね。內閣を拵へる時のこと、田中は大藏に高橋外務に犬養とこの二老人を引つ張り出せれば世間もアツといふし財界安定と外交刷新の二大使命で自分を推薦して吳れた西園寺にも義理が濟むといふので、高橋と犬養の門を叩いて入閣を勸めた。高橋はあの通り恬淡な男だから『だるま』が轉げるやうにコロ〳〵大藏大臣になつて吳れたが、犬養は老人よりは若い者にやらせたがよいぢやないかと言つて暗に女婿の芳澤謙吉を推薦し自分はウンと言はぬので田中もちよつと出鼻を挫(くじ)かれサテ誰にしやうかでとう〳〵專任外相を置く機會を失つてしまつた譯サ。だが今日となつては田中も外相の椅子に多少の愛着を感じそう〳〵手輕には手離したくないといふ氣持になつて居る。一體官僚といふ奴は妙に外務大臣をやりたがるもんでね。安達謙藏が大隈內閣當時外務省參政官になり横文字の書類を逆さに見て得意がつて居たのは御愛嬌として、寺內內閣當時にも後藤が自分で外相の椅子を買つて出て鼻川鈴ばかり光らせて居たぢやないか。田中にしたところで山縣、寺內の衣鉢をついだ男だから滿鮮統一の理想位は持つて居り、日本の外交問題と言へば支那と滿洲をいぢくり廻すこと位に考へて居るのだから此の點では外務大臣なぞ片手間にやつてのける確信を持つて居やうといふものだ。國策樹立といつては出先の軍人や外交官を大勢呼び寄せて大評定をやつたが、支那側に誤解されて手も足も出なくなつた。殊に滿洲で排日騷ぎを喰つたのには餘程閉口したと見えて田中もショゲて居るが、內閣を取つて丸一ケ年懷手で過して居るのは呆れた話ぢやないか。そこで周りのものが田中に向つていろ〳〵對支外交の更新を獻策して居るが田中には田中の考へがある。といふのは外の方面は姑く別とし少くとも滿洲外交では山本條太郎に命を含めて一仕事やらせやうとし居てる。山本も近頃は東京ばかりにへたばりついて居るので世間では滿鐵社長が嫌になつたのだらうと噂さして居るやうだが肝腎な內閣の基礎がグラ〳〵して居るので思ひ切つた立案も計畫も實行することが出來ない羽目になつて居る。そこで奴も大連で欠伸(あくび)ばかりして居ても仕方がないので、東京に歸つて來て居るんだらうが何れ特別議會でも

濟んで見なければ仕事は出來そうにないネ。

◇……對滿政策といふのは何かといふのか。そりやいろ／＼考へて居やうが問題は鐵道だヨ。鐵道の口もいくつもあるが、東支線の買收問題などは面白いネ。滿鐵の方は軌道の幅が四呎八吋になつて居るが長春は北の東支線は五呎二吋だ。そこでハルビンから長春に輸送して來た貨物はそのまゝ大連に通す譯に行かない譯だが、東支線を日本が買收して、軌道を同じ幅員にすると南滿洲の繁榮は大したもンだといふのださうだヨ。けれども之が露西亞にとつては大問題サ。といふのはシベリヤや北滿洲の貨物が大連に直送されるとなると、浦鹽の方は火が消えたやうになる。そこで露西亞が威勢のよい時にはこんな話はとても物にならなかつたが、近頃では相談の仕具合で露西亞は東支線の權利を賣り渡してもよいといふ風ににほはして來たんだネ。それなら露西亞から買つたらいゝぢやないかといふのでネ、山本などもたしか之をねらつて居るといふことだ。だが困つたことには、東支線は露西亞と支那のもので、露西亞だけがウンと言つても支那側の諒解を得なければならぬ。も一つ困ることはあの鐵道には佛蘭西の資本が澤山入つて居り、佛蘭西も今の露西亞からはビタ一文金が取り返へされぬが、若しその權利を日本が讓り受ければ、日本に向つて償還を迫つて來るに違ひない。それはまア算盤のはぢき具合でどうにもなるとして、近頃の支那は何でも國權恢復ばかりで日本が下手をすると、彼奴等の排日の材料になるといふんだ。支那人ばかりでなく、アメリカ人なぞも鵜の眼、鷹の眼で日本の滿蒙政策の遣り口を見てゐるから、切角の東支鐵道買收も國際的、猜疑の中心となつては台なしとなるといふので滿鐵も弱つて居るといふ話だヨ。之といふのも政府の腰がしつかりせぬからだ。

◇……政府の腰が据らぬと言へば、あの武藤山治抱え込みなぞ何といふザマだ。國務大臣の望月が大阪くんだまりまで出かけたり、大藏次官の大口を子供の使ぢやあるまいし二度も三度も差向けたりして武藤様々の妥協ぶりぢやないか。それも一網三十名四十名の大漁なら格別、わづか四名の實業同志會相手だ。四名といつても福井縣の松井とかいふ男は民政黨の方に走つたから武藤と其の一黨三人ぢや義經の奥州落ちよりも小人數ぢやないか。政策協定といふふれ出しが、營業收益稅委讓の方針とか、金解禁とか、社會政策とか空々漠々の名前だけの協定じやないか。それよりは政友會の實業同志會併呑、武藤山治の身賣りと言つた方が早わかりがする。九名の同志から四名に叩き落され、それも四十人の候補者を立てて一割の當選を見た武藤はすつかり失意の男になつてゐたものだヨ。その失意の男が二大政黨の勢力互角といふ事で、あちらこちらから引つ張り紙風になり、キヤスチングボートを握つた結果は大政友會と政策

鑑定といふワケなんだから、今が蓋し彼の得意の絶頂サ。武藤は慶應三年生れといふから今年六十三だ。あの男は鐘紡社長で鳴らしただけあつて商賣人としては一かどの見識を持つて居る。死んだ和田豊治と並び稱せられたが、多くの實業家連中と變つて馬鹿に自尊心が強い。大戰中に儲けた金を皆なが皆増資又増資と手を擴げて居る最中に武藤は自分の會社の中に積み重ねた。大正九年の財界變動で實業家達が青くなつて居る最中七割の配當をやつて得々として居つただけあつて普通の商賣人とは少し毛色が變つて居る。だから日銀總裁の井上準之助とも喧嘩をする。政治界にも飛び込むのだ。だが、彼は會社でも政界でも自分がお山の大將でなければ氣が濟まない。といふ性分を持つてゐる。自分の會社に使ふ社員は重役でも平社員でもヘイコラ／＼の連中でなければ決して重用しない。實業同志會でもその通りで、全く武藤とその一黨でなければ寄せつけない。だから非常な專制をやる。まあ當今の金持ちといふ奴は發狂ひをやるか骨董いぢり以外に藝當はないのだから、それらに比べれば武藤の政治道樂は上等な方とも言へやう。武藤は突つ張り既成政黨打破のお題目で實業同志會の旗揚げをしたが、選擧には金をブチまくので、阪神方面の既成政黨の連中は選擧相場をつりあげられて困つて居たといふことだヨ。その中でも地盤關係では舊憲政系の連中とかち合つて居たやうだネ。またあの男は議會に出ると演口や何かに喰つてかゝつて一かどの財政通を氣取つて居たので、今の民政黨には少しバツが合はなくなつて居る。一時は床次と接近して「政治更新聯盟」とかいふものを拵へて居つたが、床次が不評判となり本聯盟で民政黨に這入つてしまふと、床次のトの字も言はなくなつた。

◇……第五十四議會が開かれた時には、民政黨の連中が武藤と一緒に不信任案を叩きつけやうとたくらんだが、武藤の腹は民政黨の尻馬に乘ることを好まなかつた。そこで實業同志會の方から政府に議會を解散せよといふやうな決議案を提出して政友會内閣と妙な眼くばせをしたもンだよ。今でも仲が好いやうだが、武藤はいつの間にか尾崎とも手を握つて財政的援助までしてやつたといふことだ。だが、尾崎や田川位と仲善くして居たんでは彼の政治的野心を遂げることが出來ないので今度は政友會の方に接近し出したと見るがホンとうだらう。政友會も議會で二百四五十名も持つて居れば、武藤などには鼻もヒツカケなかつたらうが、何しろ民政黨と二三名の差といふことになつたのだから、あわて出して武藤に水を向けたのサ。魚心あれば水心、武藤も内心政友會に色目を使つて居るところに例の望月が眞面目くさつて大阪下りをやり、武藤をサン／＼おだてて置いて『どうぞよろしく』と手をついて見せた。それぱかりではない、政府筋と思はれるところから「拓殖大臣の椅子も空いて居る」とか『望月や秋田あたりが遞信大臣や政務官を辭めて黨の幹部になり、そのあとに武藤とそのこぶんを大臣次官にする』と

か眞しやかに宣傳させたものだから、罪のない武藤は年増女が厚化粧をはじめるやうなあんばいで一生懸命になつたのだョ。

◇……近頃世間では怪文書怪文書といつて騒いで居るので、先達つて內務省の役人に會つた時、『一體怪文書ツチのは何だい』と聞いて見たら、何內容は實にクダラないものサ。皆んな選擧關係のことでネ。その內特別議會でも初まつたら、世間にブチまかれるだらうが、やれ政友會內閣がどうしたの、民政黨がかうしたのと言つて騒いで居る。第二怪文書とかいふ奴も乃公はちよつと讀んで見たが、あんなものを隱しだてするから可笑しんだョ。鈴木はあれを隱して置いて答辯材料を集めて居るやうだが、案外あの男も氣が小さいネ。どうせあることはある、無いことはないときつぱり言つてのければよいのぢやが物事にこだはる癖があつていかん。議會中心主義の否認とか言つて攻撃された居るやうだが、あれにしたところでダ、言葉が足りなかつた、あの聲明は取り消す、といつて男らしくさばいてゆけば何も問題になるほどのことはないではないか。それに一旦言ひ出したことを引つ込めるのは體裁が惡いといふ考へで、いろ／＼なことをやらせるもンだから世間からからかはれるのだ。今の政友會內閣には死んだ野田のやうな男が居ないものだから、つまらぬ問題をこぢらかす風がある。どうせ世帶が左り前になつて來るとザワ／＼するもンでネ。外で騒げば內も騒ぐことになる。中橋や水野なんかは世間と一緒になつて鈴木の惡口をついて居るやうだョ。何も鈴木が政友會の後任總裁にきまつて居る譯ではないが、あれを弱らして置けば後任總裁問題に便利だといふ譯で、自稱總裁後任どもが鈴木の總攻撃だ。水野なども官僚だから役人が好きで、文部大臣にも飛びつくやうにしてなつたが、もと／＼內務大臣は乃公でなくてはと思ひこんでゐるだけに、鈴木が早くヘタばれかしに振る舞つて居るやうだ。『困つた』『困つた』と言つて內閣の連中や政友會の幹部どもが飛び廻つて居るので、ほんとうに困つて居るのかと思ふと、何に腹はいろ／＼さ。今頃內閣改造でもやらかさうものなら高橋內閣の二の舞だョ。田中にはそれほどの決斷力もないやうだから改造の問題は起らないョ。

◇……民政黨といつたところで何もそう恐ろしいことはないぢやないか。濱口もヨロ／＼だし、安達も床次も腹の中はシックリいつて居るかどうか疑問だから、政府が小策を捨ててウンと頑張る決心さへあれば特別議會はをろか通常議會までは大手を振つて行けるョ。それに政友會の連中がやれ民政黨では濱口が辭めて幣原が總裁になるの、床次が三四十名の本黨議員を連れて脫黨して吳れればよいのとケチな宣傳ばかりやるので馬鹿にされるのだ。あんな風では天氣模樣ばかり氣にして居る中立議員でさへ政府には寄りつかなくなる。大勢が不利になると鈴木不信任案は通るかも知れンぞ。いやさ鈴木ばかりぢやない、內閣全體が危くなるかも知れンぞ。

鈴木喜三郎と武藤山治

小汀利得

一

近頃では同じ政友會内閣でも鈴木内相株が暴落し、その反動で田中大將株に少し値が出た。とは商工大臣の中橋徳五郎が新聞記者を捉えて話した言葉だが、流石に中橋は昔から株をやつて金を貯めた男だけあつて、云ふことが株屋らしくて面白い。

全く中橋の云ふ通り田中内閣の出來たてのホヤ〳〵に地方官の首を大根か牛蒡のやうに遠慮會釋なく切り飛ばし、おかげで内務省志望の高文受驗者を激減せしめた程の、腕の喜三郎も總選擧後は、政友會内の有象無象から五月蠅くせがまれる、非政友系知事の首のすげ替へさへも大いに遠慮勝ちで、とんと氣焔があがらない有様である。

米櫃が空になると夫婦喧嘩が初まる。總選擧の結果が思ふやうでなかつたので、あれ以來鈴木の名聲は頓に衰へて、例の議會中心政治否認の聲明については、閣僚や與黨の幹部中にすら、鈴木を『野郎呼はり』して非難して居るものが少くない程で、世間にこそ發表されて居ないが、閣僚と與黨幹部の鈴木問責會議席上では思ひ切つて手厳しい詰問を受けた。さればこそあの剛腹な鈴木が『いやはや、どうも此頃はからかさ屋の小僧で、骨を折つたり叱られたりでね』などゝ氣の弱いことを云ふやうになつたのだ。

二

鈴木は人も知る鳩山和夫の婿で、いまの書記官長の一郎とは腹は違ふが義理の兄弟、明治二十四年には大學を出ると、すぐ裁判官生活に入つて外國へも行き、岳父の關係して居た早稻田で、永い事專門の民法を教へて居た、例の三木武吉なんかもさうした師弟の關係もあり、その上に世話好きな鈴木のことゝ

學校卒業後も日本銀行員‖司法官‖辯護士の開業と相當面倒を見てやつたので、一時は三木の民政黨脱黨說まで傳はつた程であるが、賢い三木のことゝて、せい〴〵西久保追ひ出し位ひでお茶を濁し、自分の出所進退だけは立派にやつてのけた。鈴木と云ふ男は所謂頭のいゝ奴で、彼れの早稻田に於ける講義はなか〴〵人氣のあつたものだ。專門は親族法だが、講義は民法全體に亘つて何でもやつたもので、要所々々を如何にも判り易く一言の無駄もなく、寧ろ學生を抑へつけるやうに『である口調』で說明した。今でも彼れの書いた親族法の小著は類書中最も簡にして要を得た本として、法律書生に欣ばれて居る程だが、そんなに頭のいゝ鈴木がどうして、いまのやうに變な男になつたかと云ふに、それは恰度坊主の還俗したのに、思ひ切つて惡黨が多いのと共通の原因で法律で頭が固まつてるので、善い人間は間抜けていゝが、惡いのになると箸にも棒にも掛らなくなる、なにしろどんな惡いことをしても、法律にさへ引つ掛らなきやいゝと云ふ氣持になるから。だから曾つて東京地方裁判所の所長をして居た頃など、大抵の者なら特に避けるところを、鈴木は平然として鳩山の選擧事務所へ出掛けて、來る人に誰彼となく『よろしく頼むよ』なんかとやつて居たもんだ。こんたことは普通の者には一寸眞似も出來ないことで、彼れ鈴木が天性覇道を歩むやうに出來て居ることを示す好個の實例だらう。鈴木は大正十三年の六月に清浦內閣の司法大臣として、當時の反對黨たる護憲三派すなはち、憲政、政友および革新の爲めに選擧に大敗しながら、大いに頑張つて、假すに時日を以てすれば反對黨の奴等を三分の二は選擧違反でフン縛つて見せるから總辭職をすることは無いと云つて、光風霽月居士の清浦老人を弱らした。當時この鈴木の主張に贊成したのが、いま浪人の勝田主計と故人となつた大木遠吉の二人だつたが、大木が折柄九州へ旅行中であつたので鈴木の主張が通らなかつたけれども、若し大木が閣議に出て居れば鈴木を支持して一方は司法權、他方は右傾暴力團を利用して是が非でも居据はるところだつたさうで、清浦は大木が居ないで仕合せだつたと云つて居る。

三

田中義一の內閣組織の夢が實現したのは、鈴木とは切つても切れない關係にある平沼騏一郎の力に負ふところが多いのと、この清浦內閣の司法大臣として示した蠻勇振りとにほれて、田中は鈴木を內務の椅子に据えた。

そこでもと〴〵覇氣滿々、目的の爲めには手段を擇ばない鈴木は、こゝぞとばかり馬力を掛けて、地方官の大交迭をやり去

年の府縣會議員選擧に臨み、さらにその論功行賞を兼ねて第二次の大改造を行つて、二月の總選擧に臨み絕對多數を夢見て智惠を絞つたが、結果は逆に反對黨を有利に導き、あとには反つて例の怪文書事件だの、議會中心政治否認だのと云ふ厄介な問題を背負ひ切れないほど背負ひ込んで、當面の反對黨たる民政黨はもとより無產各派、中立の一部から不俱戴天の仇敵視されるだけならまだしも、與黨內部からまで厄病神のやうに云はれ、いままさに西山落日の觀あるはあはれとも笑止の至りである。

四

鈴木と相並んで、いまの政界で變な意味での人氣の焦點となつて居る者に、實業同志會長武藤山治がある。鐘紡の社長で成功した武藤山治は、彼れ獨特の自信から往年實業同志會を創立して目醒しい活躍をつゞけた。殊に議會の中で侃諤の論を吐くのみならず、院外でも大いに國民の政治教育をやらうと、演說會を開き、機關雜誌を發行し、それでもまだ足りないで、自ら脚本までも書いて花々しい活動振りをつゞけ、お終ひには妻君までも三味線を捨てゝ飛び出し、政壇演說をやり、婦人向きの政治雜誌まで出すほどの熱心さであつたが、政治は金儲けのやうに簡單には行かない。大正十三年の最初の選擧に同會から當選した議員數たつた八人、二度目の今度はそれが半減して四人となつた。そこで根が商賣人で算盤玉を彈くことを忘れない彼れ武藤は、何とかしてこの商賣にならない實業同志會を所分する方法もがなと日夜頭を絞めて居た。

ここで武藤が第一番に考へたのは、政民同數で小黨がキャスティング・ヴォートを握るを幸ひ、中立團を糾合して一團體をつくり、之れにうまく實業同志會を賣りつけることであつた。それには鶴見祐輔あたりをおだてゝ、彼れに新團體を起させ、一時それに加入して置き、うまく逃げ出すに限ると、ひそかに某なる者を使者に立てゝ意見を說き、尾崎行雄立合ひの下に一夕奈良ホテルに會見とまで話が進んで居たが、運好く政友會が彼れのこの動搖に目をつけ、總理の代理人なる者を差し向けて吳れたので、武藤は渡りに舟とばかり、見事宙返りをして、いままで極力排擊した既成政黨の、もつとも代表的な政友會と手を握つたのである。

五

武藤の今度の宙返りは、彼れに取つては非常に苦痛であつたに違ひない。恐らく三日三晩位ひ考へつゞけたことであらう、と云ふのは彼れは所謂頭のいゝ點は鈴木と共通だが、鈴木のや

うに目的の爲めに手段を擇ばぬ覇道派でなく、全く眞面目一點張りの王道主義者である。順序として彼れの履歴を見る。彼れはいまを距る四十五年前の、明治十七年に慶應義塾を出ると、米國に亘つて苦學をつゞけ、歸つて來て一寸横濱のボロ新聞に筆を取つたが、間もなく三井銀行へ入り、鐘ヶ淵紡績に轉じて今日に至つた。

鐘紡での彼れの働き振りを見ても判るが、彼れは初め名よりも實を取る主義で會社の本社が東京に在るにかゝはらず、永い間神戸の營業部に閉ぢ籠り、外部との接觸を避けて仕事に精進した。此點彼れと東西に分れて覇を爭つた和田豐治とは全く行き方が違ふ。和田が武藤と兩雄並び立たずして、早く鐘紡を追ん出て富士紡を本據に多方面の活躍をなし、歐洲戰時好況時のごとき三四十の會社に重役や相談役の名を列ね、しかもその爲めに金を儲けるどころか、反つて持出しをしてゐたのに比べると、武藤は唯一鐘紡の社長として全然他を省みず會社と自分との儲けを多くすることに專心して居た。また正直で潔癖な彼れには、多くの實業家が金儲けの手段として、また儲けた金を利用して名譽を得る爲めに政治家に接近することが不快で堪らない、だから井上準之助が前に日本銀行總裁をして居た時分には、公然立つて井上を攻撃した、われ〳〵から見れば何でもないことのやうだが、これは實業家には一寸出來ない藝當であつた。

また日露戰爭直後に當時の株成金鈴木久五郎が、神戸の歸化人吳錦堂の持つて居た鐘紡株を買つてそれを基礎に、市場で鐘紡株の買占めをやつた時には、武藤は何のこだはりもなく、當時の社長日比谷平左衛門の許に辭表を出して鐘紡專務の地位を一時去つた、これも鈴久輩が大株主として會社の支配權を握る以上、その下で働くのはいやだと云ふ、彼れ一流の潔癖から來たもので、之等のことは慥かに褒めてやつていゝ事柄だ。

六

ところがかう云ふ風に潔癖であることは、一方には偏狹を伴ふ。しかも東京に居れば色々の點で視野を廣くすることが多いが、大阪、神戸で永い間王様のやうに威張り散らして居た悲しさには時勢の推移が理解出來ない。

加ふるに名を捨てゝ實を取る主義も、凡人には一生を通じて押し通せるものでない。大倉喜八郎だつて砂利の鑵詰をひとに喰はして居た頃は、名を捨てゝ實を取るに汲々として居たらうが、軈て懐が充實して來ると、今度は少々實を捨てゝも名譽がほしくなる、その頃からにせ書畫を集めるやうにもなり、また官邊へお世辭を使ふやうになつてその結果は男爵にもなり、今

度の總選擧直前には動一等旭日大綬章なんて、柄にもないものまでぶら下げるやうな滑稽を演ずるやうになる。

元來大阪人士は、初めは花より團子主義で、後には之れを逆に行く癖があるが、武藤もこの人情の弱點には打克てず、段々名譽慾が出て來て、一つ大いに政界に乘り出さうと云ふ野望を懷くに至つて、茲に於いて實業同志會の旗擧げとはなつたが、何しろ武藤の絕對專制主義では、骨のある人物は決して馳せ參じない、大抵武藤から選擧費用を引き出して、それで政界に打つて出やうと云ふ連中だから、候補者は四十人も五十人も立てゝ喜んで居たつて、實際當選するのはいつも一割にも足りない憐れな有樣なのである。

七

僕はこゝで武藤の主義節操などを問題にするやうな野暮なことは避けやう。幾ら武藤が政治に素人だと云つても營業收益稅の全廢と、地方委讓とが違ふことと位は知つて居るはずであり、また政友會内閣が今後數年つゞいて、昭和六年度の營業稅委讓が、やれるものかどうか位ひは知らぬ道理がない、金解禁については世間は彼れを買ひ被つて居る。若し買ひ被つて居ると云ふ言葉が惡けりや、少くとも誤解して居る。彼れは大正十三年の暮に爲替が三十八ドル半になつた時こそ、紡績の棉花の買付けに困つたから聲を大にして、即時金解禁などゝ素人だましのコケ脅しをやつたが、その後本人も少しは目が醒め、社會もこの問題の容易ならぬ結果に氣が注いたのと、一方に於いては爲替がパー近くまで騰ると棉花で拵へた綿糸や綿布や、絹糸、布の外國輸出が利がなくなるので、もう懲り々々して居る。だから今では唯この金輸出禁止の形式だけに止めて、大藏省令で大臣が勝手に定めることを改めて、之れを議會の協贊を經た法律に改めよと云ふ、遠い將來はいざ知らず今日唯今のところでは金解禁には何の影響も及ぼさない形式論を主張して居るに過ぎない。然るに世間は迂濶なもので、實業同志會が一月の總選擧には金解禁問題を政策から引つ込めて居ることに一向氣がつかないで居る。

武藤の今度の政友會との馳引きは全くお話にならないもので『あんないやな男と誰れが結婚なんかするものか、口を利くのもいやー』と云つて居た生娘がそのいやな四十男と婚約して方方引つ張り廻はされて、宿屋を泊り歩いたやうなもので、當人だけ如何に自分の純潔を主張して見たつて、世間は傷物としてそんなものを嫁に貰はない。

初め九ケ條の覺書を望月に示し『僕は緣日商人でないから一

ケ條も敢けないから』などと見得を切りながら、段々讓步してずる〱に引つ張り込まれたのは、この弱味があるからだ。

そこが政友會のつけ目、武藤は望月、大口の爲めまんまとしてやられたのだ、考へて見りや實業界の王様も政治に掛けては初心なきものさ。

八

兎に角今度の總選擧と特別議會を中心にして、惡黨たる鈴木と正直一途の武藤とが沒落した、沒落したが少し早過ぎれば沒落せんとすると訂正してもいゝ。

全く表面的には相反するこの二人には、性格上に不思議な共通點があるから面白い。先づ第一にこの鼻息の荒い二人が揃ひも揃つて小糠三合持たぬ養子組であることだ。もつとも鈴木は養子と云つてもたゞ姓を繼いだゝけだが、彼れは川崎大師で有名な神奈川縣の大師河原の生れ、慶應三年だから今年六十一、武藤もまた鈴木と同年生れの六十一で、岐阜縣の生れ、佐久間家から武藤家へ養子に入つたもの、その上笑つて損でもしたやうに、六ケ敷い顔ばかりして居るところも二人共通である。鈴木は政治家になつてからつくり笑ひ位ひするが、武藤はいま以て笑はない。

しかしかうした共通點そのものが彼等を失脚せしむる原因ではない。彼等を失脚に導いたもつとも重大な共通の欠陥は、實に彼等が無暗に威張ることである。少し可愛さうだがその空想振りと、一人よがりの威張り方は、近頃圓本のおかげで日本の社會にもお馴染のドン・キホーテに似通つたところがある。

鈴木は無暗に威張るから碌な人間が近付かない、彼れの手下を見よ、山岡でも誰でも一見して憤飯したくなるやうな連中ばつかり居るぢやないか。

武藤は流石に商賣人だから態度は鈴木と違つて極めていんぎんだが、心持ちが鈴木以上に專制的、壓制的だからこれまたいゝ人間がつかない。武藤は議院の實業同志會控室へ行つて見ると實同派の代議士を給仕のごとくひつ使つて辨當の催促までさして居る。

要するにかうしたドン・キホーテ振りの空威張りが彼等を沒落の悲劇に導いたのだ。

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、廣く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隠れたる智嚢と漏れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歓迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

遊離魂

松村武雄

「魂が身にそはぬ」とか、「魂天外に飛ぶ」とか云ふのは、人間が途方もなく驚いたり怖れたりするときに使はれる形容の辭であることは、誰も知つてゐる。しかし文化人にとつては單なる形容であつても、自然民族にとつては、實際に靈魂が體外に飛んで出ると信ぜられてゐる。「魂天外に飛ぶ」といふ辭も、本原的には實際の信仰觀念を表してゐたものであらう。

ヴントが云つたやうに、自然民族が抱いてゐる靈魂表象は始めは極めて漠然としてゐるが、文化が稍々進んで來ると、次第に發展し分化して、器官魂と遊離魂との二つの表象が生れて來る。前者は、靈魂が身體のさまざまの部分——血液、腎臟、男根、毛、爪、分泌などに宿つてゐるといふ觀念であり、後者は靈魂が肉體を離れて、獨立の存在をなすといふ觀念である。

遊離魂はさまざまの形に觀ぜられてゐるが、自分がここに述べたいと思ふのは、遊離魂としての動物である。中世紀の或る傳說に、一人の男が森の中を歩いてゐると、木の根を枕に眠つてゐる一漢子があつた。と、やがてぽかんと開いたその口から一匹の鼠が飛び出した。男は興がつてそれを追ひ廻してゐたが、鼠は危機一髪の際身を翻して、また眠つてゐる漢子の口の中に姿を隠した。と忽ち目を覺して、危ない目にあつた夢を見たと話したので、男はその鼠が漢子の魂であつたことを悟つたとある。

しかし遊魂が動物の形をして、自由に人間の口から出入するといふことは、決して單なる物語の上の作爲ではない。實際の信仰觀念である。未開人の間では、堅くさう思ひ込んでゐる。人間が氣絶失心するのは、靈魂動物がいはゆる「天外に飛び去つた」からであると考へられ、さうした場合には、すぐに巫女を招いて、その呪術の力で飛び去つた魂を呼び歸してもらふ。眠つてゐる時などには、惡戯者の靈魂動物は、よく窮屈な體內の住家から脱け出して、勝手氣儘に遊び廻る。そんな時に、眠つてゐる者を他の場所に移すとか、その體に賦彩するといふことは、大禁物である。いはゆるタブーである。なぜなら、若しそんなことをすると、遊びくたぶれて歸つて來る魂が、戸惑ひをして、始末に困るからである。南阿弗利加のカフィル族の一人の男が、友達の睡つてゐる顔を土繪具で塗りまくつたら、その魂が主人公をお見それ申して、餘

儀なく何處ともなく立ち去つたので、友達はその儘死んでしまつたと云はれる。

靈魂動物がいろんな鳥獸の形をしてゐる仔細については、ヴントに說がある。自然民族の靈魂表象は、その發展の過程中に氣息魂の表象を分出させるのであるが、氣息魂はその性質上運動が自由であることを特徵とする。從つて自ら敏速輕快に運動する動物の姿に想像せられると云ふのであるが、自分としては、どうも受け入れ難い說と思ふ。靈魂動物は、必ずしも身輕に飛び廻るものには限られてゐない。蛇や蛙のやうなのろまもその仲間入りをしてゐるからである。ヴントの學說は、日本武尊がお崩れになつたとき、白鳥となつつて飛び去られたといふ事實や、埃及のパピルスに死人の姿の上部に鳥の絵が畫いてあるといふ事實などには當て嵌るかも知れぬが、加藤左衞門の二人の妻妾の頭髮が蛇となつて嚙み合つたとか、かねて妖巫につけ覘はれてゐた露國の一人の商人が、暖爐の側に凄しい大蜥蜴が蹲つてゐるのを見つけて、之を火の中に投げ込んだら、妖巫が大火傷をして死んでしまつたとかいふ事柄を說明する力を持つてゐない。動物としての遊離魂の表象の發生は、ヴントのやうな單元說では解釋が難かしからう。いろんな心的原因が關與してゐるに違ひない。

かうした動物としての遊離魂の觀念は、容易に說話と結びつく。即ち人間や怪物等が自分の命を大事にする場合に、生命の本原であるところの靈魂動物を成丈他人の近づき難い、若くは探し出し難いところに隱すといふ物語となる。しかし生命の源泉である靈魂が體外に存在し得るといふことは、自然民族が持つてゐる實際の靈魂表象の一の現れであるとしても、その靈魂や生命を那邊に藏するかといふことになると、實際の靈魂觀をはなれて、說話上の想定に化する。民衆の想像力は、說話にあつては、極めて自由に飛翔する。だから說話に現れた遊離魂に關する想定は、說話の發達や、それを語るものの考によつて、さまざまに分化し、さまざまに複雜化する。而してその分化複雜化を引き起す原動力は、どうすれば體外に存在する靈魂生命が一番安全であるかといふことに對する希求であり願望である。

先づ第一に、靈魂生命を藏する場所が、次第に複雜になつて來る。それが鋼や雪にやどるとか、籠の中の鳥にやどるとかいふ簡單なことでは、おのれの命を覗ふものに見つけ出され易いといふ心配が、說話の上に働きかけると、靈魂生命を包藏する事物の數が漸層的に增加して、スラブ族の一說話が說くやうに、

『ある都の地下に橫はる湖の中に棲む龍の腹の中にある猪の腹の中にある鳩の腹の中』

といふやうな大げさなものにならざるを得ない。かうした複雜化が、實際の靈魂表象若くは生命觀と直接な關係がなくて、文藝上の技巧若くはなるだけ接近し難いところの想定にその發生因を有することは、『御伽草子』の御曹子島わたりの說話に於て、蝦夷が島のかねひら大王の祕藏の大日の法が、

『是よりりしとらの方より、七里奧に、壇を築き注連を張り、石の倉にこめおき、金の箱にをさめ』

てあり、それがために、御曹子は、

『七里山の奧におしいらせ給ひ、七重のしめをひき拂ひ、石の土藏をみ給へば、りんじ三ながれあり、是にりやうといふ字をかきて、こそうのてんをうち給へば、

いしのどぞうはひらけにけり。命の箱のふたを開き、ふしやうの手にとり……」

といふやうな面倒なことをしなくてはならなかつたことからでも推測することが出來るし、また北歐神話に於て、詩才を噴湧させる靈泉が、密閉した洞穴の中の密閉した壺の中に藏めてあつたことからでも、察知することが出來るであらう。

第二の複雜化は、體外に藏する生命の複數化である。ただ一つの生命だけでは、いかに秘藏して置いても、また不安心である。豫備の命が欲しいといふことから、蒙古の神話に於けるやうに、二つの生命が、それぞれ他人の近づき難いやうな場所にかくされる。

第三には、遊離する體外魂に條件をつけることによつて、生命滅亡の蓋然率を少くしようとする努力である。體外にあつて靈魂生命を藏してゐる動物を殺しただけでは、その靈魂生命の所有者を仆すことが出來ないばかりでなく、却つてその者により多くの力を與へることになるといふ觀念の如き、その一つの現れである。たとへば、

(1)ベンガルの一說話に云ふ、二人の羅刹の命が、貯水池の底の木の箱の中の二匹の蜜蜂にひそんでゐたが、その蜂を殺しても、血液が地にこぼれると、羅刹は死なないばかりでなく、對手を七百の片に引き裂いてしまふ。(Dav. Op. Cit., P. 253.)

(2)同じくベンガルの一說話によれば、ある羅刹の生命が、貯水池の底の水晶柱の中にある龍館の中にある二匹の蜜蜂の中に秘めてあつた。蜜蜂が殺されても、その血が大地に落ちると、一滴ごとに羅刹の數が倍加する。(Dammann, Op. Cit., P. 117.)

體外魂に附帶させる他の一つの條件は、靈魂生命の保持者としての動物に、無限の metamorphosis の力を許容することである。さうした動物が、危難に臨む場合を豫想して、さまざまに變形することによつて危地を脫せしめようとするのである。蒙古神話に於て、怪魔マンガタイの第二の生命を藏する蛇蝎が、殺されさうになると、穗黍、山羊、小魚、寶石等に變化するのは、その一例である。

かうして實際の觀念信仰としての遊離魂が、說話界へ進出して、多樣な形態的複雜化を續けて行く。(三、四、四)

再びメンデス・ピントに就て

アブランシエス・ピント

本欄前號に林若樹氏がフェルナン・メンデス・ピントのことを書かれました。まことに面白く拜見しました。そのうちに私から間接に聞いたとしてピントといふ姓が葡國でも稀れであること、メンデス・ピントが大ホラ吹きのピントとしてメンダス(Mendaz)と語が似てゐることを洒落れたんだといふやうなことが出てをりました。これには少しばかり私が迷惑致しましたので訂正を試み度いと存じます。

實は私の教へてゐる生徒からその種類の問ひを受けたことがないやうに思ふのです。全くそんな記憶がありません。若しや、幸田成友教授がさうではないといはれれば肯定しなければなりませんか。何分記憶のことですから。翻つて、實際にそんな質問があるとしますと、私は別な答をしてをる筈です。ピントといふ名は葡國でも伯國でも大

變多い姓でありますが、メンデス・ピントといふ名は殆んど他にはなからうと考へるのです。それから Mendez Pinto を洒落れて Mentez Pinto といはれたものはありますが Mentez とは誰も言ひませんでした。この語は一體邦語ではありません。林氏の記述に對して以上の二點を遺憾に思ひましたが、他はまことに立派なものだと敬服致してをります。殊に大島男爵が Nautaquim に相當する時堯の初名尙時を、南島偉功傳」中に發見(?)せられたのは感謝して宜しいかと思ひます。次手に「南島偉功傳」の系圖の出所である「種子島家譜」を調べ度いものです。私はもつてをりませんので何方か御便宜のある人に御願ひ致し度いと存じます。かうして、ピントの記錄中事實が少しづつ明かにせられて行くことは嬉しいことです。ピントが島の首府としてゐるミアイジマや大友義鎭にオレジエンドと名づけたのやその他まだいろいろのわけのわからぬことがあります。といつても私も林氏のやうにピントの記錄がシャルルウオアの書いた以上に根據のあるものが多いと認めてをります。その點で寧ろポルトガルの今は亡き學者クリストワン・アイレス氏は一番よく辯護をしてゐるのです。然し一方では、例へば日本に誰が始めて着いたかといふ問題に就ての他の有力な數記錄に反證が擧らぬ限りはナウタキンが尙時であるだけの一發見で雀躍することが出來ません。

ピントが何故荒唐無稽なことを書く信用のない男だといはれるかといふ原因の或る有力な一事を次に述べませう。ピントの「巡廻記」(ペレグリナサン)の書きぶりが物語めいてゐるからであるのは勿論一つの理由ですが、一番大きなことは耶蘇會士等が徹底的に排斥抹殺したから起つたことです。ピントは耶蘇會には大變節してゐたのです。名高い聖フランシス・シヤウイエールが日本に居る間に山口に始めて敎會を造る費用を用立てたましたし、一五五四年にゴアから日本へ來た第三回目の傳道團の費用の一部の呈供者であり、その補導者でもありました。そのときなぞは印度總督がピントを推薦して豐後王へ(大友義鎭)への使節として一行に加らしめた程です。この一團長のパードレ・ベルシオール・ヌーネスについて、かの聖シヤウイエールが死んだ十六ヶ月目に正式に耶蘇會へ入りました。それらのことは皆ピント自身が葡國へ送つた書簡や、ベルシオールや、ルイス・フロエスや其の他の會士の書簡に書き殘されてあります。シャルルウオアはピントが正式に僧服を着るに至らなかつたといつてをりますが。然し、それらの諸會士の書簡は多く後世にピントの名だけを削りとつてしまつたものです。例へば學士會文庫、外務省文庫所藏の未刊書簡集は全く抹殺したり引線したりしたものです。だのに一一五五八出版のジアン・アルワーレス西班牙譯書簡集は、抹殺したり引線したりした以前に翻譯したものと見えて、ピントの名が殘つてをりますし、アジュダ宮王城圖書館の未刊書簡集では抹殺し殘したところもあつたので、耶蘇會士が如何にピントを排斥したかが具體的に見せられたのです。あんなにも盡したピントがどうしてそんなに虐待せられるのでせうか。ピ

ントは匆々山に耶蘇會を出てしまひました。アジュダ圖書館にある「日本にて耶蘇會をまりたる者ども」といふ未刊書にはピントは自分からベルシオールに乞ふて出たとなつてをります。此理由は書いてをりませんが、ピント自身の書翰で見ますと、其熱狂好きな男は一時大變宗教に熱したが、また直に覺めて自分から飛び出したもののやうです。ピントがそんなに徹底的に耶蘇會士に嫌はれた理由としては、その還俗位では首肯出來ませんクリストーワン・アイレス氏の著書には、中世の宗教裁判所迫害者研究の權威カルドノゾ・デ・ベッテンクール氏がその研究の途にピントの近い祖先がユダヤ人であつたことの古文書を發見した報告が出てをります。それだけではなく、ユダヤ人であつたため宗教上の迫害を受けたものであることがわかりました。そして、耶蘇會がピントの死後それを知つて絕對に排斥したものだといふことに傾いてゐるのです。尙、これらのことは私の親友の一人が近い將來に一研究として世に發表する筈です。と同時にピントの「巡廻記」の全譯も出ることになります。それに就て見られると詳細が了解出來ませう。

反轉現像藥の發見

理化學研究所
飯盛研究室　石動弘

吾々が寫眞を撮る場合には乾板或はフヰルムを用ひて撮影を行ひ後此を現像液に入れると光の當つた所が黑く現像されて來ます。適當な所で此を定着液の中へ入れると殘つて居る乳劑が全部溶解されて黑白の逆になつた陰畫と稱せられるものが出來上り、此陰畫に印畫紙を當てゝ燒付を行ひ再び此印畫紙を現像すると普通の陽畫が出來上るのであります。此二重の手數を繰返さず最初撮影に用ひた乾板やフヰルム或は印畫紙を直に陽畫に作り上げるのが反轉現像法であります。閑燒付の必要が無くなるのでその應用方面は非常に擴張されます。只今日存在する反轉現像藥は反轉用に作つた特別のフヰルムに限つて使用され一般の乾板やフヰルムには應用することが出來なかつたのであります。昨年のパテーベビー撮影機を初めて手にした時先づ此フヰルムの反轉現像が不完全なものである事を見て、どうにかして燒付けて作つた陽畫と同じ樣なものを反轉現像によつて作り上げたいと云ふ考へが浮んで來ました。此が私の反轉現像に手を染めた動機であります。然し乍らどうせ新らしく現像藥を作るのであれば一般的に總べての乾板やフヰルム又は印畫紙にも使用の出來得るものを工夫して見たいと考へたのであります。此はかなり困難な問題であつて從來の方法では一寸不可能である樣に思はれました。何故とならば感光力の強い乾板と弱い乾板とではその乳劑の性質が著るしく相違して居るからであります。そこで普通の燒付を行ふ方法も一枚の乾板上に繰返す事にしましたが矢張り充分の結果を得る事が出來なかつたので、その原因を考へて見ますと、此は現像液が適當でないと云ふ事が解りました。此處で特殊な現像液を色々と工夫して見ました。どんな事が必要である

か次に條件を擧げて見ますと
一、色が純黑色であること
一、適度のコントラストを得ること
一、還元力の强いこと
一、カブリの生じないこと
一、操作時間の短いこと
等が主要なものであります。此等を一つの現像藥の性質とするには互に矛盾する所があつたりして仲々困難であります。如何なる方法に依つて此目的に適當したものを作つたかは餘りに專門的になるので一切省略して反轉現像法の應用方面について書いて見ませう。

第一に考へ得ることは活動寫眞への利用であります。今日活動寫眞の應用は軍事、醫術、工業、科學、娛樂等あらゆる方面へ及んで居りますが最も不便を感ずるのはフヰルムの高價な事であります。一千尺の映畫を作るにはネガテイーブフヰルム代が百拾圓ポシテイーブフイルム代が三拾五圓燒付現像料が三拾圓合計百七拾五圓の費用が入ります。所がネガテイーブを省き燒付を省き反轉現像法によるとフヰルム代と現像費を加へて六拾圓程で出來上ります。此が尤も重大な點であります。次は時間の問題でありますが燒付をする必要がないので現像や水洗及乾燥が全部一回で濟みますので一時間二十分で完全な陽畫を作つて映寫機にかける事が出來ますから平常ニユース映畫に利用すれば極めて便利なものであります。且戰時に於て偵察機上から敵陣地を活動に撮つた場合等には是非此が必要であります。卽時間と費用の短縮―此が活動寫眞に對する反轉現像法の最も有利な點であります。

此外普通寫眞の上で面白いと思はれるのは乾板やフヰルムなしで寫眞を作る事が出來ると云ふ問題であります。引伸しをする時に使ふブロマイド紙を乾板やフヰルムの代りに用ひて直接に此へ寫眞を撮り反轉現像を行ふと陽畫が出來上ります。此は多數の燒增の必要のない場合例へば書物の複寫の樣な時に大變に經濟的であります。猶反轉現像は寫眞製版の方面にも大いに利用されるのでありますが此も餘り專門的になりますので省略致します。

吾々が娛樂にカメラを用ひて居る時には何の氣なしに乾板や印畫紙を使つて居りますが、此等の感光材料の製作は非常に困難な工業であつて製作者の苦心は實に想像外であります。今日我國に於ても寫眞工業が漸次發達しかけて來ましたが、歐米の寫眞工業に比して實に幼稚なものであります。此は寫眞化學の根本が未だ解つて居ない爲で、只今の所ではその工業の半は經驗に依るの外はないからであります。然し乍ら必要のある所に必ず發見が來るものであります。我國の寫眞工業を發達せしめるには國民一般が此を援助する事が最も重大なことでありますす。私共が研究室に於てその研究材料を大部分外國に仰いで居る爲に受ける有形無形の損失の大なる事を考へると是非自給自足の實を擧げたいと希ふのであります。此は寫眞の學理及び實際問題にたづさはつて居る者丈の力では決して出來得るものではなく、平生カメラを手にされる一般の人々の後援に依つて初めてなし得るのであります。今日

の如く寫眞材料の輸入國である我國に於て多少なりとも此輸入を少くしやうとする所に理研反轉現像藥の使命があると思はれます。

蒙古の古墳から發見された二千年前の織物

石田幹之助

ロシアの有名な地理學者カズロフ將軍の率ゐる蒙古西藏探檢隊が一九二四年の春から翌年の春にかけて蒙古の北部ノイン山中の古墳を發掘し、次いで學士院からパローフカ、テプロウホフの二氏がその續行を命ぜられ、その結果として約二千年前の漠北文化の迹を物語る貴重な遺物を多數に發見したことはもうそれ程耳新しいことではない。然し今本誌の記者から依囑をうけ、その發見品の二三の寫眞を別項に揭出するに就いてその說明代りに極く簡單にその發見の概略を述べることゝする。

ノイン山といふのは蒙古の首都庫倫（最近ソヴエート政府の勢力が入つてからウラン・バートル・ホトといふ。即ち蒙古語赤將城の意である）から北の方キャフタに通ずる幹線道路の東側に位し、庫倫を去る七十哩程の處に横はる山である。高さは約千七百メートル、相當高い山ではあるが附近全體が概して海拔千メートル內外の地である爲特に聳立した高山とは見えない。その南の方のスロープに、二百十二基の古墳が森林の間に散在してゐるがカ氏の一行はそのうち大きいもの六基、小さいもの四基を發掘し、後から加はつたパ・テ兩氏は大きいもの更に一基を發掘した。これらの墳墓の構造、棺槨の形式などは東方考古學上重要な意義を有するものであるが今玆に詳述の暇と紙面とを缺くので省略に從ふことゝする。たゞ棺槨の樣式などは朝鮮平壤の附近樂浪郡の遺址から發見された古墳のものに類することを一言しておく。これらの墓は何ものの墳塋であるか、之は未だ輕々に斷定を許さぬ問題であるが、その埋藏年代は[illegible]年代から推して之を云へば大凡前漢の末期に屬し、常に漢帝國の脅威であつた匈奴の王族の遺骸を葬つたものと見て大過あるまいと思はれる。たゞ多くの古墳に見るが如くこれらの古墳も既に盜掘の厄に遇つて金銀細工のやうな目星しいものは殆ど影を留めてゐないが、それでも金器、青銅器、鐵器、木器、土器、漆器、織物など隨分數多くの出土を見た。織物が澤山發見され、そのうちには婦人のものも交つてゐたことは特に面白く思はれる。これらの工藝品には彼等自身の手に成るものと、支那の舶物と、西方系のものと、大體三つの種類があるが、支那のもの及び西方系のものには精巧を極めたものが存する。就中上林の銘のある漆杯に至つては非常な優品で、漢宮上林苑備用の御器であつたことはその銘文に依つて確認出來る。佛のペリオ氏などはその餘りに巧緻な爲に或は六朝の作かと迄疑つたが、これは樂浪古墳の出土品に徵し漢時代の類品が出た事に依つて殆どその理由を失つた。ところへ昨年獨のキンメル氏が更に

別の銘文を發見してその一部を讀み、續いて我が梅原末治君が仔細に之を調べて遂にその全文を解讀した結果、前漢の哀帝の建平五年（西紀前二年）作であることが、明瞭となつて今ではその疑義は氷釋した。今これらの出土品に就いて一々述べるのは煩はしいし、又既にロシアでは前記バローフカ氏、英國ではパーシヴアル・イエッツ氏が相當詳しいことを書いてゐるし、イエッツ氏の記事は我が坪井良平氏に全譯があり、京都の羽田博士及び小牧學士の抄錄も發表されてをり、拙稿も別に公にしてあるから玆に贅說を須ゐないことゝし、寫眞に示した纔で織物だけに就いて次に略說を試みる。

織物には絹の衣服、絹製帽子、フエルトの靴氈、絨氈と壁懸旗袋物などがあるが、黑貂の皮で緣をとつた袍の殘片や、精巧目を驚かす刺繡のある壁懸、絹絲で刺繡を施した羊毛の織物や支那の錦などはそのうち最も注意すべきものに屬する。これらのうち、支那製のものは英のスタイン氏が樓蘭の故址から採集した漢代の錦と形様吻合するものがあり、その時代も略ゝ察することが出來る。西方系のものは所謂スキチア風シベリア型と稱するもので、ギリシア風、ペルシア風、メソポタミア風、サルマチア風など、東歐・西亞の古文化の各要素がスキチア人に取り入れられて一種のスキチア風を化成し、之が貿易其他の關係に依つて廣くシベリアにも擴布されたものを意味する。この系統のものゝ中には純ギリシア風、純ペルシヤ風のものもあるが、それはスキチア人の酋長にはギリシアの工匠を自己の牙帳の裡に養つてゐたものもあるし、直接ギリシア人、ペルシア人等から購買したものや掠奪したものもあるのでかやうな種類のものが蒙古に發見されたとて別に不思議はない。十三世紀の頃になると、蒙古の可汗が未だ漠北に都してゐた時分にさへ、そこには多くのアラビア人が居り支那の工匠が住民の一半を占め巴里の金工を始め、歐洲の工人が來り住んでゐたことが明記されてゐるが、匈奴の時代に於いてはそれ程のことはなかつたとしても、直接に間接に南は支那、西は遠く黑海を隔てゝ或はギリシア、或は小アジア等の文化が遙かに蒙古の奧地に迄入り込んでゐたことはこの織物からだけでも、玆に確證を得た譯である。――要するにそのカズロフ氏一行の發見はその詳細の研究を今後に期待されてゐるが、今日迄に明になつたことだけでも、極東の古文化を考へるものに對して豫想外の材料を供給したもので西にあつてはヘロドートス、東にあつては「史記」・「漢書」などの記載を大いに活かしてくる。この意味に於てカ氏の仕事がアンデルソン氏の北支那に於ける先史時代の彩陶の發見、我が學者の手に成る樂浪・慶州に於ける漢代遺物の發見と共に、最近に於ける東方考古學上の三大發見と稱せられるのも尤といふべきものである。

トーテム柱（ポール）

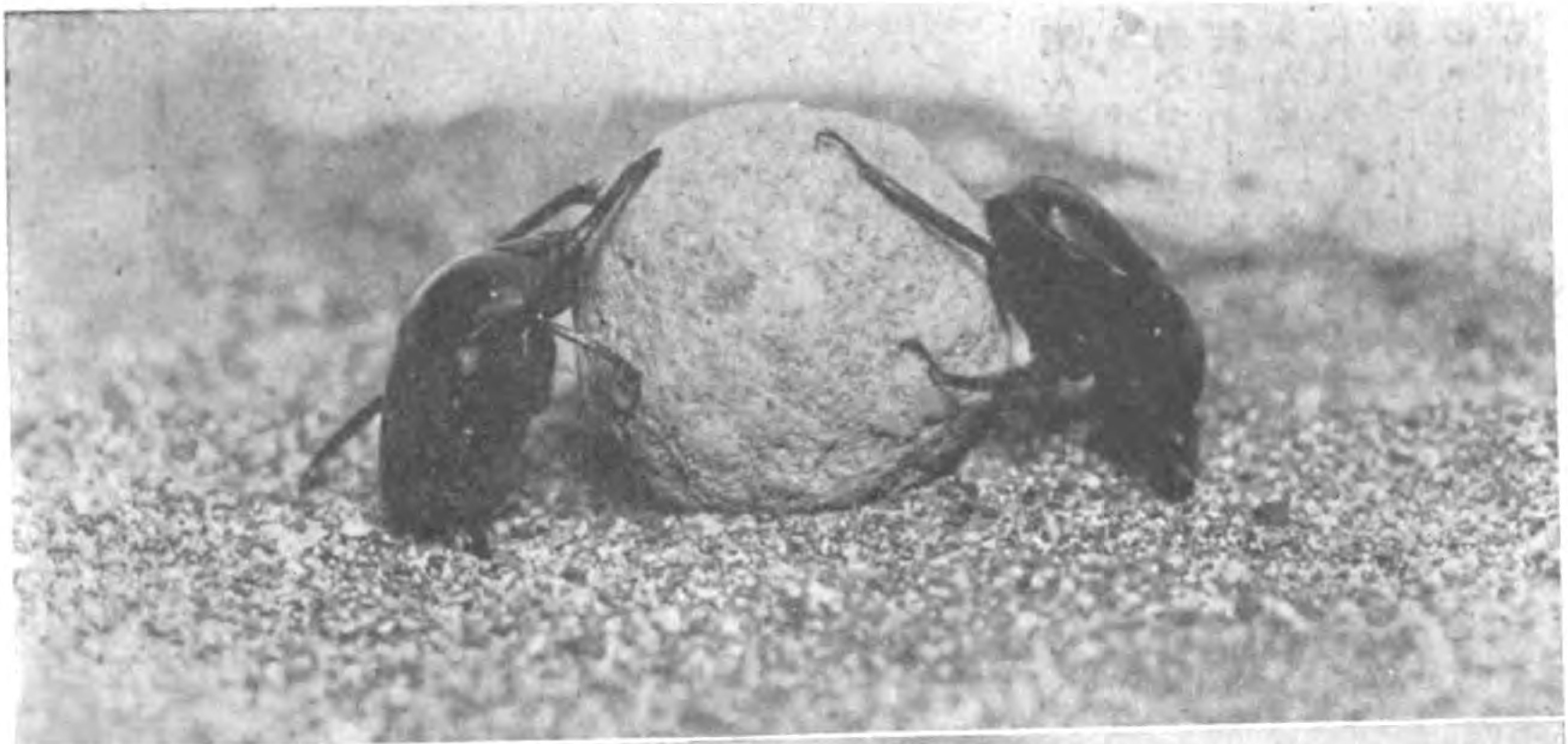
松村武雄

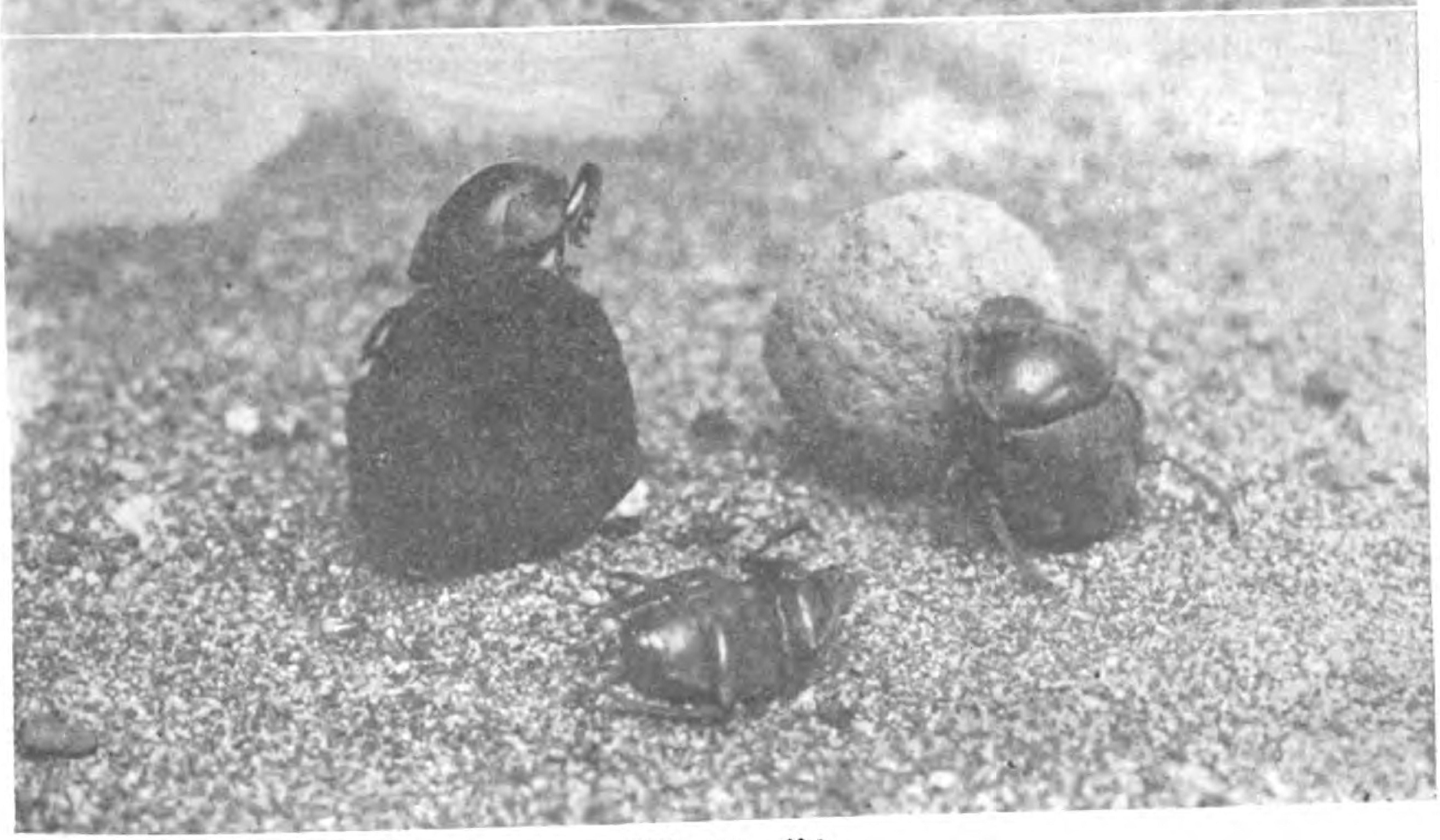
亞米利加や濠太剌利亞等の土人は、自分達の部族が或る動物（時としては植物その他の事物）と血縁を有してゐるとか、若くはこれを祖先とする子孫であるとか信じてゐる。そうした動物がトーテムである。そして土民たちは自分のトーテム、若くは部族のトーテムたる動物の類形を刻んだ柱を、家の前に立てる。富人や酋長などになると、トーテムの他に物語に現れる事物や紋章などまで刻みつける。一種の血統系圖表示の柱である。さうした柱をトーテム柱と呼ぶ。上圖は北米のブリチシュ・コラムビヤの印度人のトーテム柱であつて、柱の持主のトーテムと、部族に屬する神話に現れるトーテムとが彫りつけられ、見事に色彩せられてゐる。下圖は三本のトーテム柱をつけた家で、トーテムの一が開いてゐる口から人間が出入するやうになつてゐる。





（第　一　圖）





（第　二　圖）

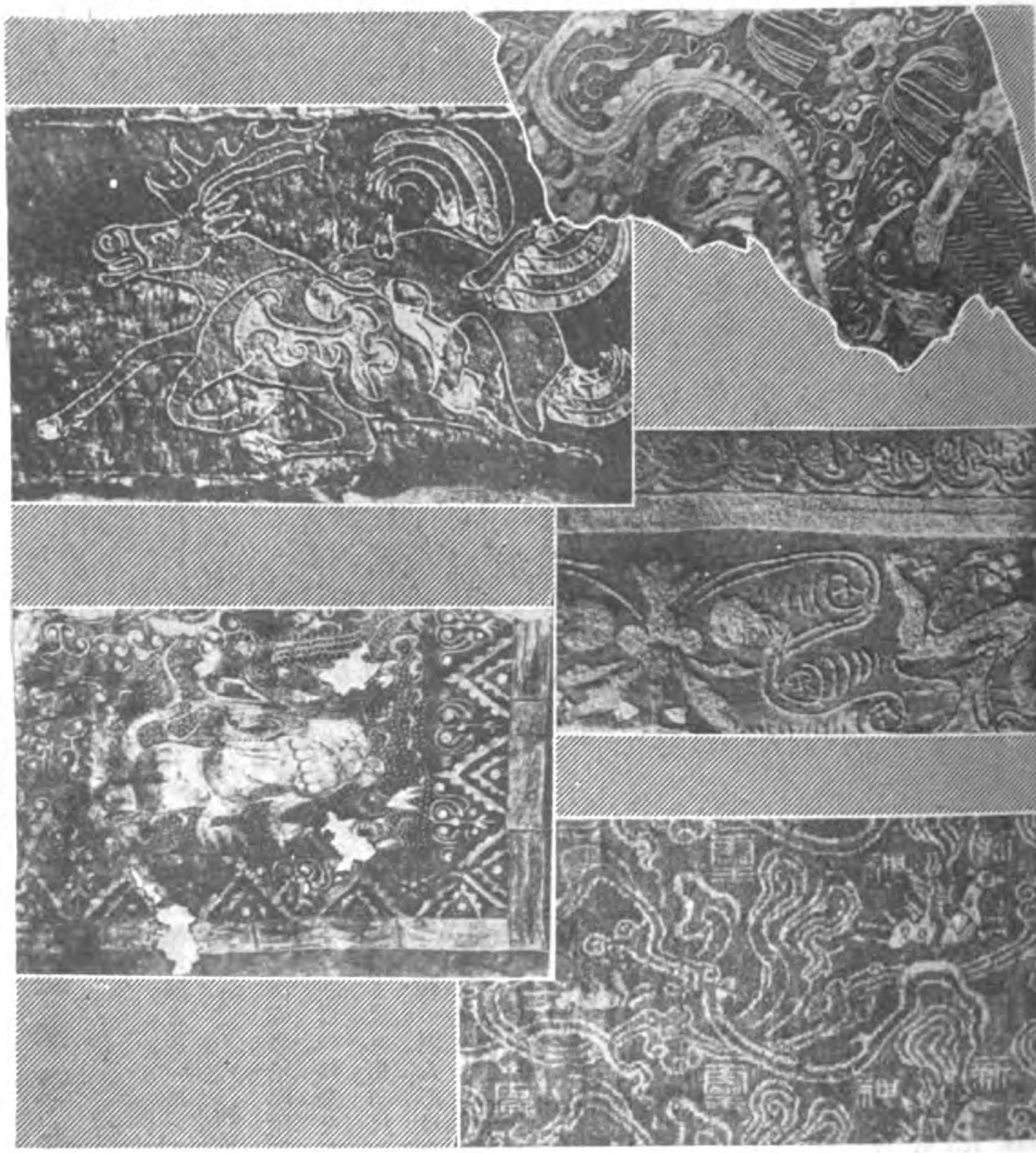
玉押こがね蟲

横山桐郎

第一圖　此處に示した寫眞は、其名を「くろひこたこがね」又は「玉押こがね」といふ二匹のこがね蟲が　牛糞の球を前と後とから轉がし乍ら、自分達の巣へ運んで歸るところです。此蟲は日本では臺灣に二種と、朝鮮に二種居ますが、何れも糞玉を轉がすので有名です。臺灣の蠻界へ行くと、蠻人の垂れた糞を、口と前脚とで丹念に丸めて、直徑七八分の球にして、轉がしてゆくのをよく見かけます。斯様にして彼等は、人のいやがる糞玉を自分の巣に運び込んで、ゆつくり喰べるのです。

第二圖　同じく臺灣の「玉押こがね」。彼が大事な糞玉をセッセと轉がしてゆくと途中から泥棒が現はれて、寶の玉を横取りしやうとする事がある。そういふ時持主は糞球の上へ登つて、下から這ひ上らうとする掠奪者を突き落す。寫眞の左方球の上で足をふん張つてゐるのは持主でその前方に仰向けに轉がつてゐるのが、突き落された泥棒である。

蒙古の古墳から發見された二千年前の織物　（本號八ポイント欄參照）

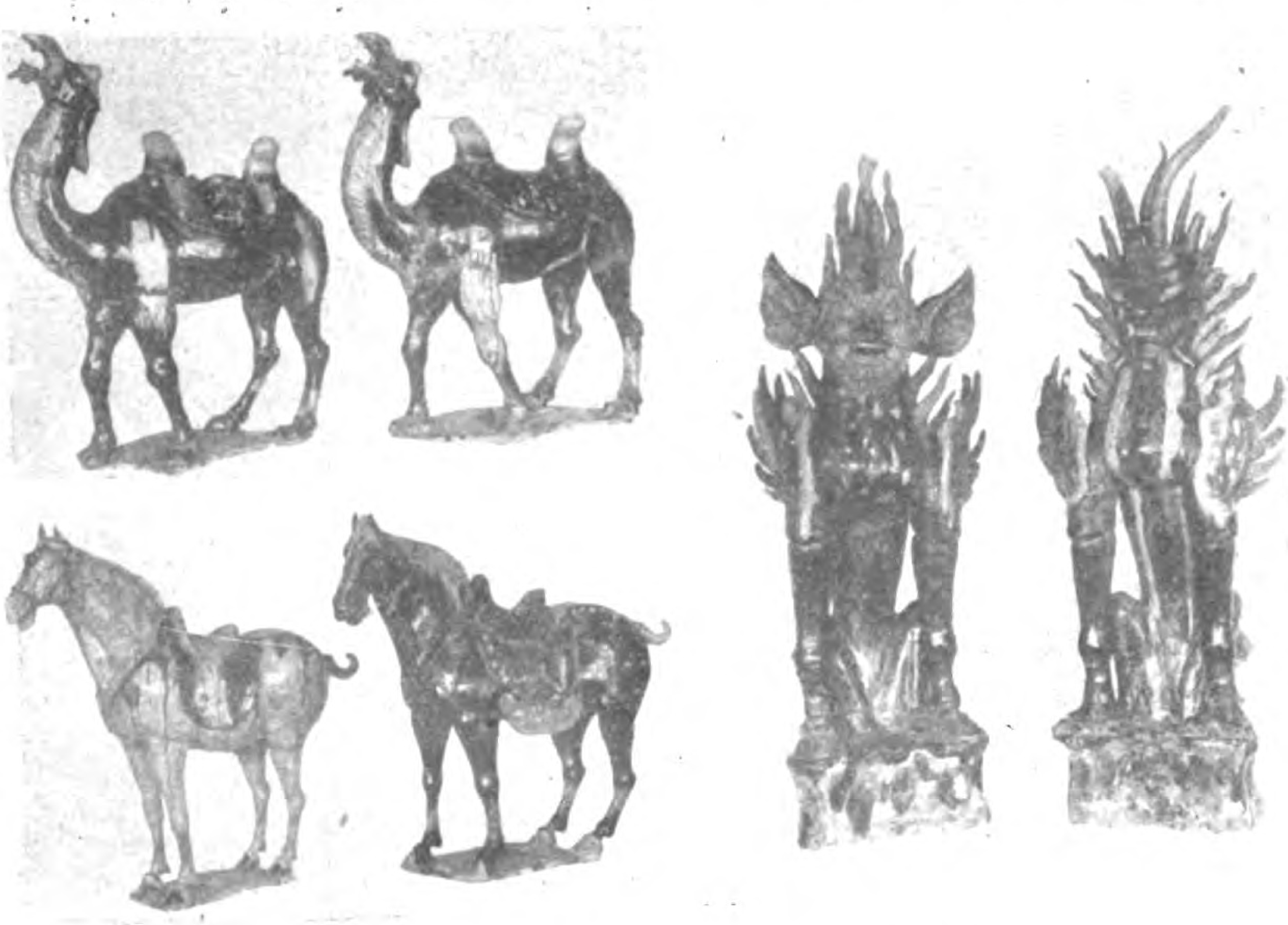


（第一圖）（第二圖）（第三圖）（第四圖）（第五圖）

二千年前の織物

石田幹之助

第一圖　刺繡ある絹織物。第二圖　絨氈の縁の一部動物の爭つてゐる意匠はスキチア風の遺物に習見のものであるが、織物に見えたものとしてはこれが最初の發見である。動物の輪廓は撚絲で縫ひ、彩毛を象嵌してあるがこれはサルマチア風、スキチア風の金屬細工に常に見る寶石の象嵌を模したものである。第三圖　羊毛織絨氈の一部。地は深紅、刺繡は白、褐、黃赤色の絹絲。紋樣はギリシア、ローマ風、外廓の菱形は漢の塼などにも見える。第四圖　精巧な刺繡ある壁懸。ペルシア風の意匠をギリシア風の手法で現はしたもの、中央はドラゴン。第五圖　は支那產の錦、新神靈廣、成壽萬年」の字を織出してある。



泥象種々相

奥田誠一

一概に泥人形と云つたとて埴輪人形の古拙なものや、伏見人形の素朴なもの計りではない。挿畫寫眞の様な精巧な藝術的な泥人形もある。此人形は支那河南省洛陽附近の古墳から出た唐代墳墓の副葬品である。土で固めて緑黄白の釉薬をかけて燒き上げた所謂三彩陶象と云ふ物である。人物の大さは高凡三尺七寸馬や駱駝の高さが凡二尺五寸の大きなものである。此種の泥人形は今から二十三年前支那に鐵道が敷設せられた時に其工事の爲に古墳が發堀せられて出て來たのが初めで、以來盛に出土して其數は幾萬軀と云ふ程であらう。

然し之等の像程の大きさや精巧さのものはそう澤山は出て來ない。先づ稀れな方に屬する。元來古墳の發堀は秘密に行はれるので如何なる人の墳墓であつたのやら不明の場合が多く、其年代やら場所やらが分らぬのは殘念であるが、文献や他の彫刻や繪畫やなどから比較研究して夫れが唐時代のものであるだけは明かである。そうしてそれが皇帝なり當時の顯官なりの陵墓の出土品である事も大凡推斷される。

之等の泥象の出る時は大體一揃になつて出て來るもので普通には武裝の人形文官姿のもの正馬副馬駱駝二麒頭即人面獸身の跪像と羽翼ある獅子の姿した跪像の外に馬引人物駱駝引の胡服の人物音聲隊即樂を奏する五人乃至七人の伶人と二人乃至數人の長袖舞をして居る婦人と所謂正倉

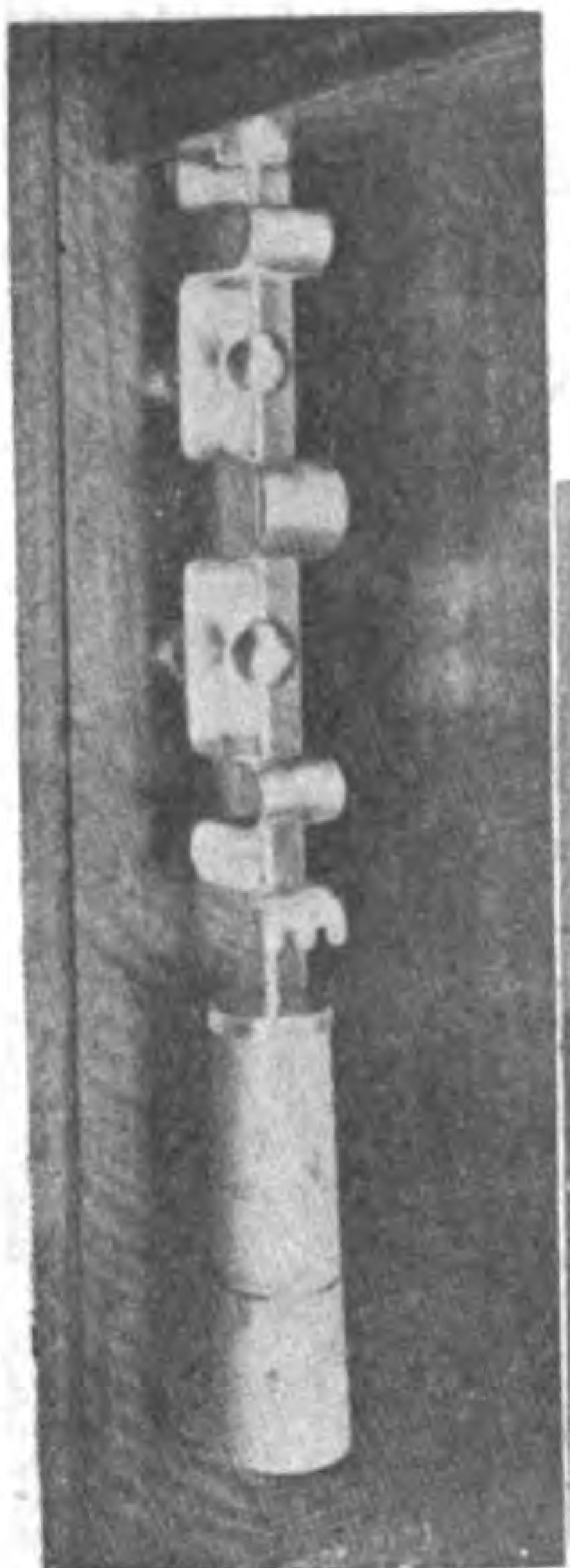


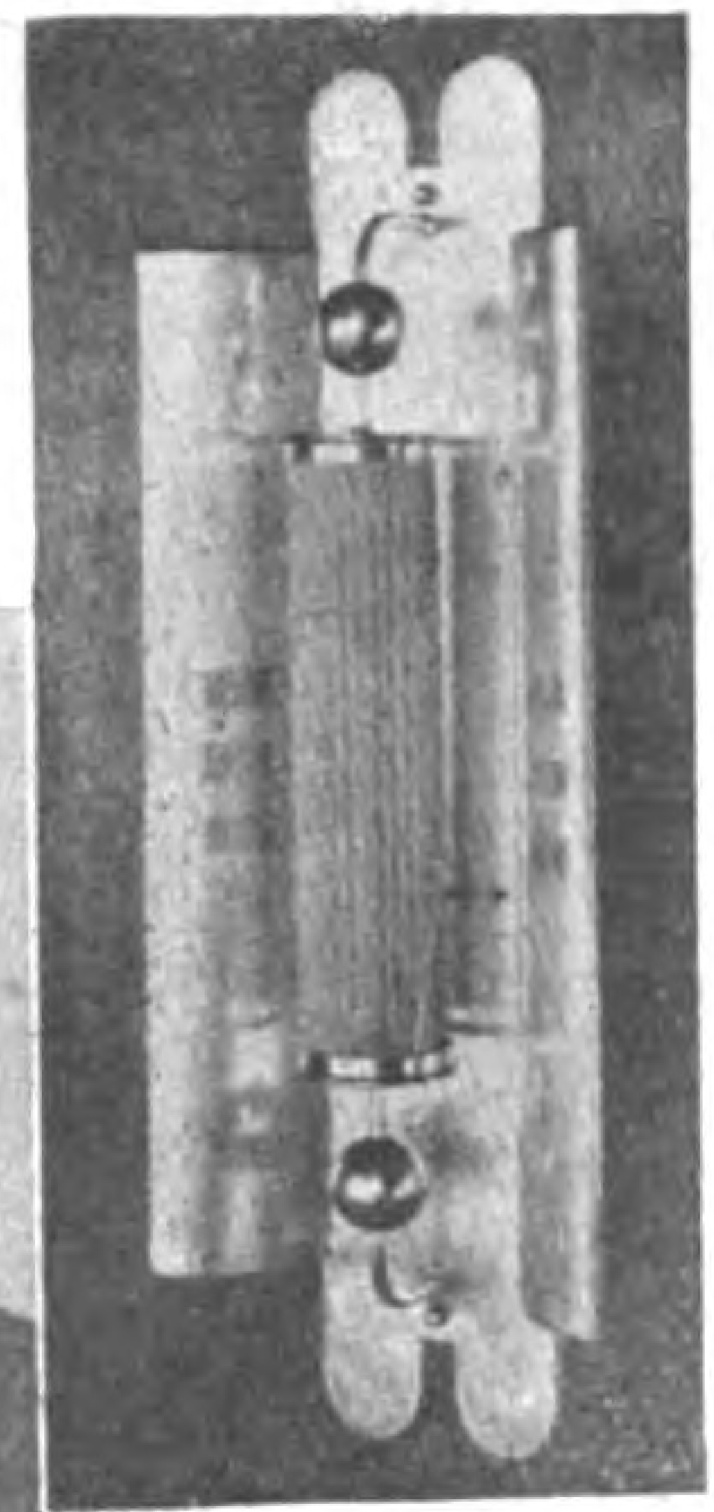
院の樹下美人風の婦人の像の數軀の外に萬年壺と稱する有蓋の壺、盤子、盒子瓶、椀陶枕、牛車犬等數十個の器具人形禽獸の形をしたものが出る。然しそれが市場に出る時は離れ〲になつて骨董商の手から好者の手に移つてしまうから此霊の如く揃つたものを見る事は稀れである。最近歐米から歸つた數人の友人共の話を綜合すると之等泥象の中優秀なるものが蒐蔵せられて居るのは歐米でなく反つて日本であつて、外國の博物館や蒐集家の所藏品中には比較的優秀なものが少いと云ふ事である。

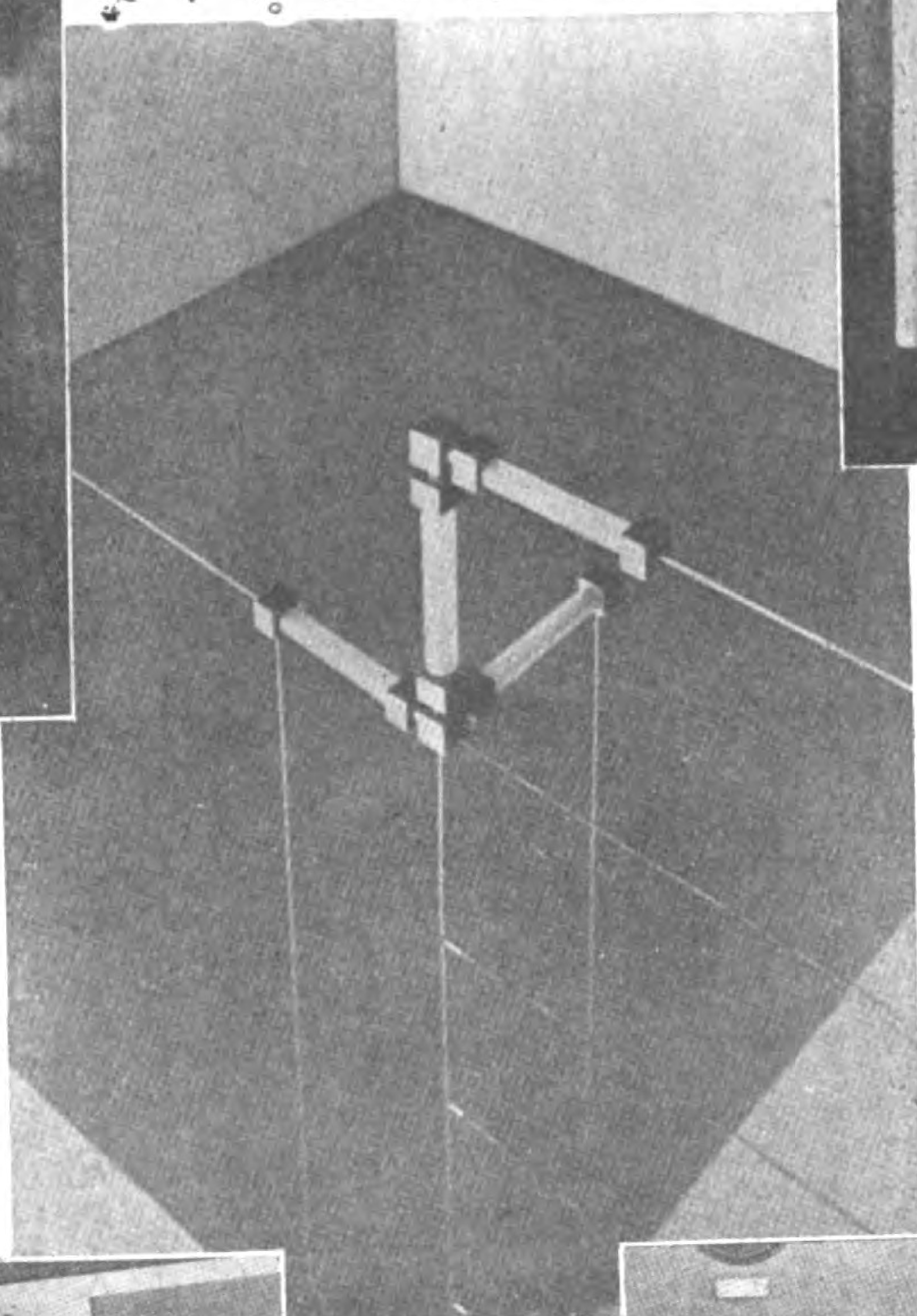
其理由は日本には丁度唐代彫刻に相應する奈良時代の優秀なる彫刻が多數保存されて居り、日本の好者は之等の彫刻に付て研究なり鑑賞なりをして充分其美點を承知して居る結果、所謂目が肥えて居るので優秀な藝術的なものが多く集められるのであると思ふ。之等の泥象の中馬の如きは東洋の產でない事は一見首肯も出來るし、麒頭の如きも羽翼を有する點など埃及乃至波斯との文化の交渉を想像せしめる。唯十軀の泥象であるが西域文化の東漸やら、藝術の技巧やら窯業化學の發達やら、唐代風俗やら色々な事を吾人に物語つて居るから、之等の鑑賞は單なる好事家の道樂のみでない事は考へられよう。こう云ふ大きな泥象でも我が骨董界を賑はして居る名物茶入や茶盆の一箇を得るよりもより容易に手に入れる事が出來る。其十軀を以てしても岩城文琳や何とか茄子の茶入の一箇に價せぬのである。我國の所謂蒐集家や藝術愛好家を以て自ら任ずる諸君の眼界の擴充と云ふ事が、東洋文化の闡明や藝術の研究の爲に必要である事は、敢て吾人の喋々を要しない事であらうと思ふ。

電氣照明の進步

岡田信一郎



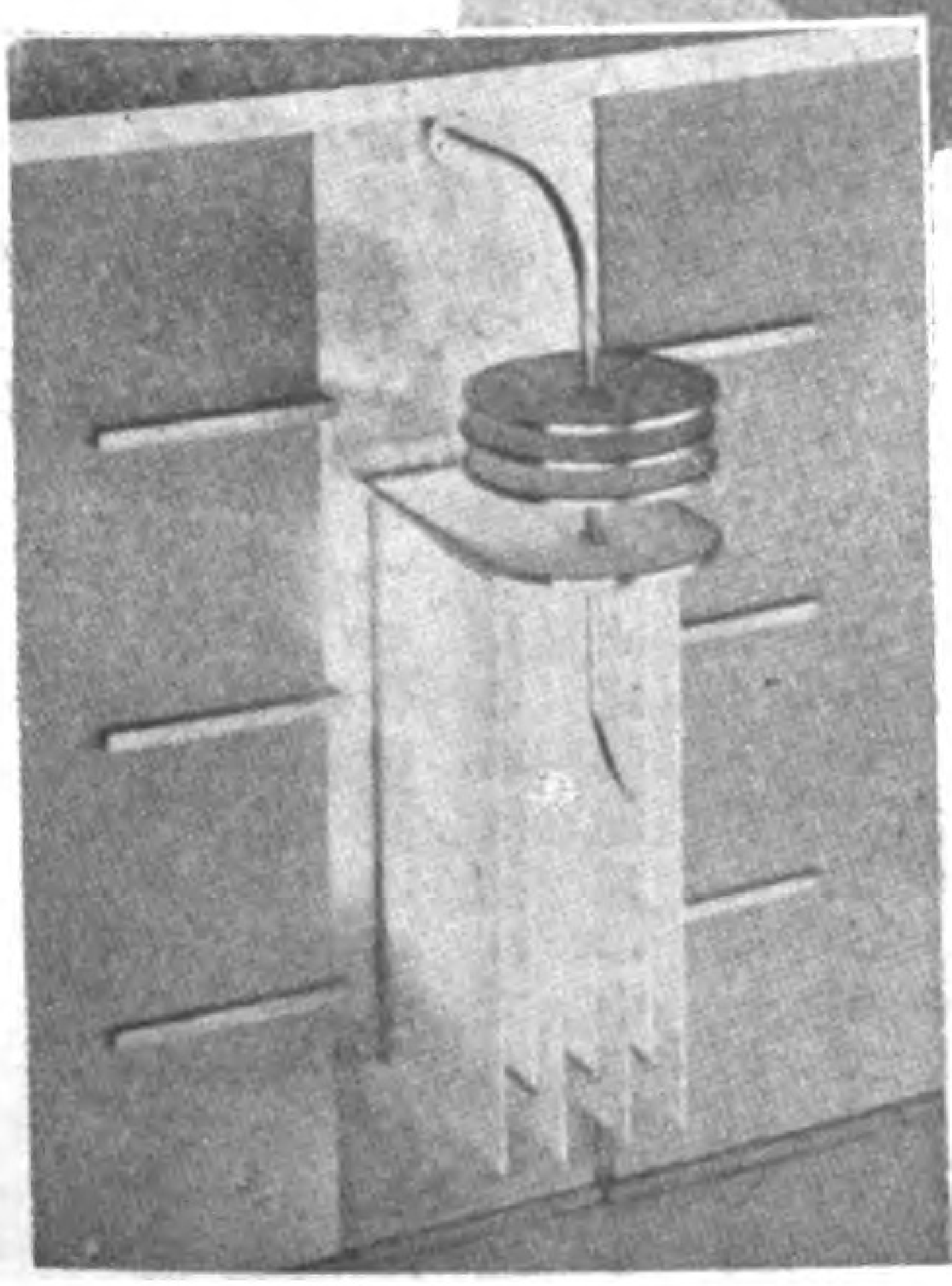


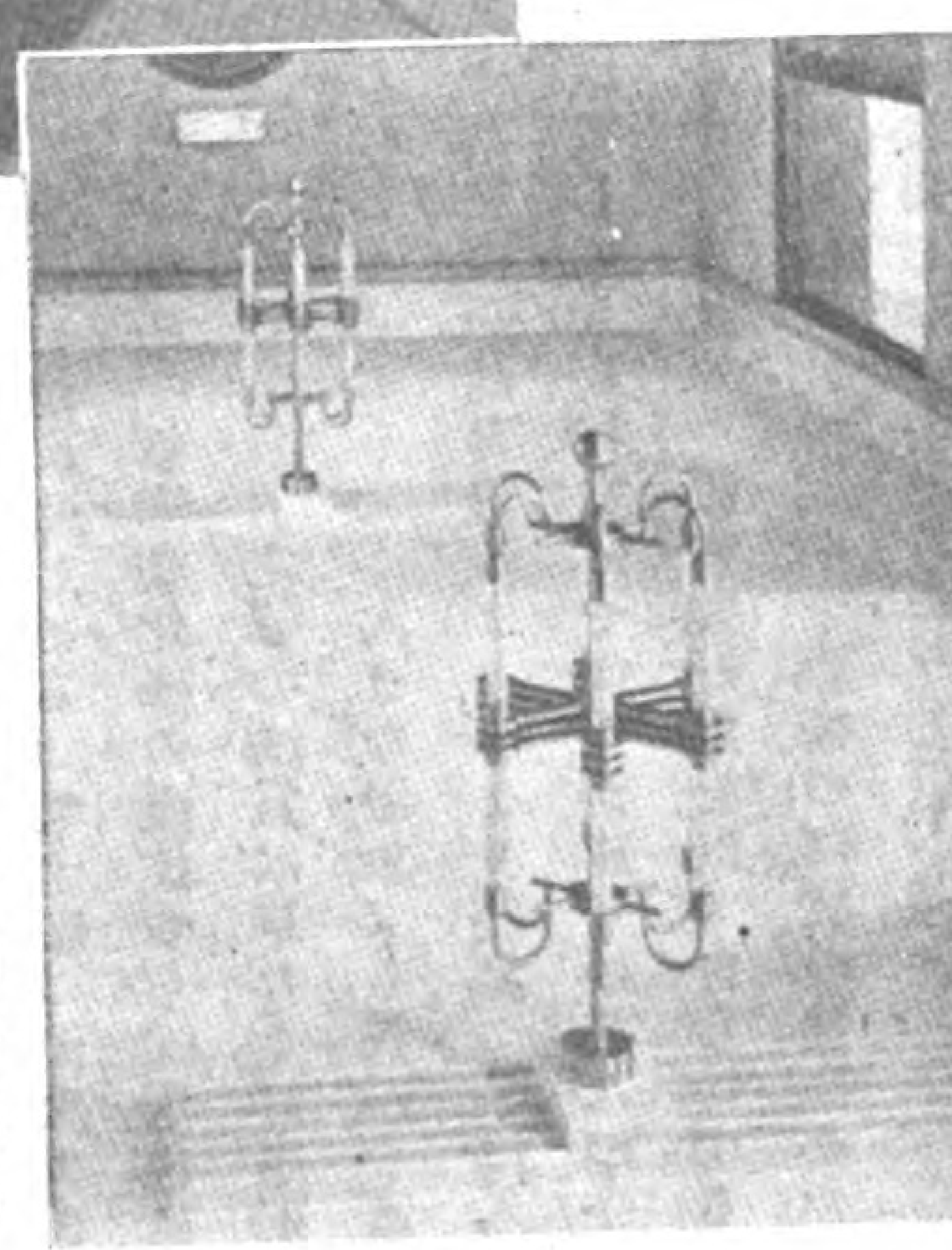


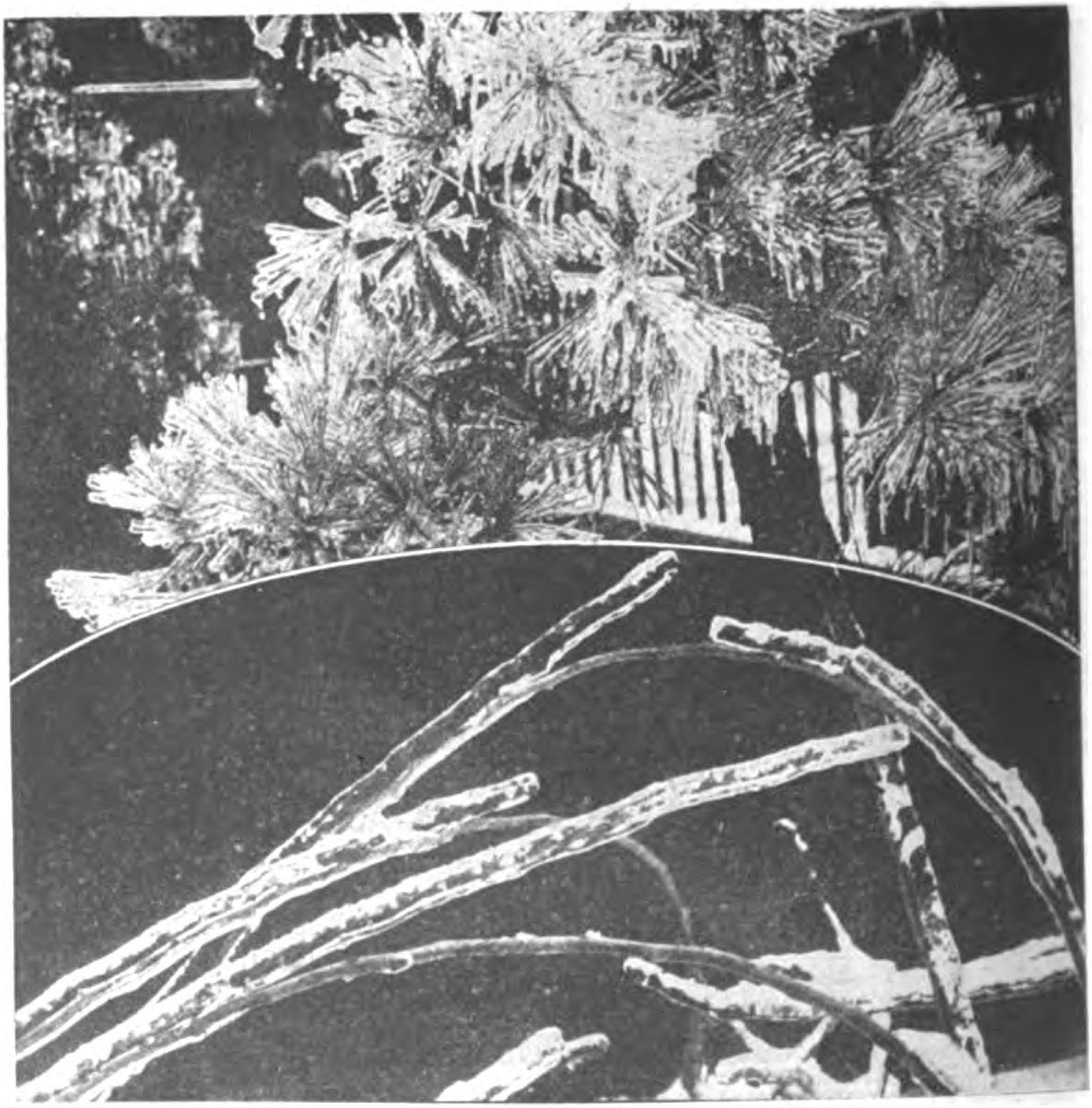
電燈の形は今迄は、間接半間接照明で、電球を隠したものゝ他は、多く古代ランプや蠟燭の形から展化したものが多かつた。近代建築が漸く從來の石造建築※

※の形式を脱して、コンクリート構造の本質に基いた新容を、採つて來たに從つて、電氣照明の器具も、舊燈具の形を

換する行き方から離れて、獨立の新形態をとつて來た。電球も今迄の球形の他、管（チューブラー）狀電球（球はおかしいが）が流行して來て相俟つて新形態が案出されて居る。







雨氷

國富信一

高層の氣温が比較的高い時、其處へ出來た雨滴は、自身の重みで落下しますが、若し落下の途中に氷點以下の低温になつて居る空氣層がありますと、其の爲めに著しく低い温度になります。然し時としては、其の雨滴が氷點以下の低温に冷されても氷結しないで、所謂過熱却と云ふ狀態になつた儘で落ちて來ます。

そうして斯樣な雨滴が地上にある物體へ當りますと、其の儘其れに氷結して仕舞ふものです。斯かる現象を雨氷と云ひます。つまり氷點以下に冷されて居る過冷却の水は激動を與へるか、或は其の中へ何か他の物體を投げ込むかすると直ちに氷結するものでコップに湛へた水を冷して實驗して見ることが出來ます。

雨氷が大規模に降りますと樹枝を折る程です。從つて大森林が全部大被害を蒙つたなど云ふ例も少なくありません。東京でも明治三十五年一月八日、大正七年一月二日などの雨氷は可なり酷く、電線が折斷されたなどの被害がありました。又道路に降つたものも全部氷結しますから、仲々壯觀なものです。然し仲々珍らしい現象で稀にしか見られません。

喇嘛教の佛像佛具（一）

伊東忠太

喇嘛教の教義は幽晦不可思議なもの多く其佛像佛具に現れた處を見るも如何に神秘的であるかを推知するに足る。一般に西藏佛像は、佛、菩薩と雖も圓滿微妙の相に非ずして凄愴陰險の氣か滔在する如く況して諸天忿怒部の像に至ては往々獰猛殘忍の姿を現す。左像は多面十六臂の女像で印度教の神から轉化したもの、右像は髑髏の姿を現した双神が仰臥せる男女の像を踏むもので西藏化されたシヴァの變形であると思はれる。上圖は人の頭蓋骨で作つた佛に供ふる容器である。元來西藏人の間には頭蓋骨で器具を作り日常愛用する風がある。原品は佛領印度支那東京の首府河内(ハノイ)に於ける東洋學院に珍藏されて居るものである。







映畫時評

小山内薫
久米正雄
室生犀星

映畫批評の立場

文壇家の映畫批評といふものが専門の映畫界の人々に取つて折々餘りに文藝家風な獨斷に陥入り、その映畫の領分の外れた批評的批難を屢々自分は耳にした。自分もその文藝家風な批評を敢てする一人であるから、自ら映畫批評の立場を明かにしたいと思うてゐる。

映畫に就いては自分のごときは何處までも素人であり、汚れたベンチに腰かける三等看客の一人に過ぎない。その素人であるための映畫を理解しようとする熱烈さの中に、大衆的な風潮さへ流れてゐる。よき映畫を見ることは其時代を經驗する意味であり、よき映畫に接觸することによつて直接自分の生活の更新的な分子さへ採り入れねばならぬ。一口にいへば何事もその「心持」一風な生活の上で、映畫の中のよい心持、よい場面、よき人生の素直さがそれだけ[illegible]され、心[illegible]になつたか知れぬ。自分の性質が一個の[illegible]として[illegible]への[illegible]する時に、映畫人生の指導によつてそれだけ多くの[illegible]ある準備を與へられたか分らぬ。その[illegible]映畫が[illegible]的な[illegible]の効果ではなく、小説に於ける人間[illegible]的[illegible]經驗と同樣な[illegible]を與へられてゐる。それは自分が映畫的人生への[illegible]い意味のリアリズムの間道を敢てしてゐるのも、此意味の外ではない。自分等の[illegible]はうとするところは自分の[illegible]的な經驗外にある經驗を敢てすることによつて、自分を[illegible]したければならぬからである。

自分は映畫の[illegible]的方面に就いて何も知らない。但し自分もそれを知ることに近い中にあるならば。自分は[illegible]

位置は知つてゐる、しかもその撮影と監督の位置に立つたことはない、また映畫の歴史的な現象を諳んじてゐる譯ではない、唯、何處までも素人としての熱烈さを有ち、素人としてどれほど彼が映畫を理解してゐるか、その理解は一文藝家の批評ばかりではなく、他の凡ゆる同じい素人階級の理解であるといふ點にちからを置きたいのである。凡ゆる素人こそ其批評的なものの正確さを持たねばならぬのだ。

ともあれ映畫批評による自分の立場は、我々と同等程度のファンを以つてする今日の映畫的大衆を代表したもの、又凡ゆる素人から立ち得た好尚を映畫界へ叩きつけるところの代辯的なものであり、同時に僕程度を以つてする批評品隊の中に潑溂するものは、かの偉大にも貧弱な素人の中の一人、三等看客の欲求的な呼聲だといふふうに解釋することは、自ら凡化を以て任ずる僕の快よしとするところである。一介の文藝家としての標的をもつより他の映畫的な智識をもたない彼等、その中の一人である自分は學ぶことによつて恥ずるものではない。かういふ自分の批評的な立場からの自由さは情實と宣傳職外に立ち得ることも、自分として縱横の好尚を天下に選べる譯であらう。

文藝映畫の製作

（ファウスト批評に代えて）

文藝映畫は一般に面白く無いとされてゐる。その作品が古今に通じた大作品であるといふことですら、既に自分には感銘の稀薄な映畫を直覺し、求めて見る氣になれない。例令それを見るにしても到底原作的な手厚い感じを受ける事は滅多にない。最近に於ける「ファアウスト」の上映ですら、原作的重厚、壯麗なる構想、歴史的な詩情を缺いてゐる以外、カメラの美しさ巧緻さが持つ機械的な効果を擧げ得たのみであり、到底「ファアウスト」の大詩情を映畫化したものではなかつた。元より自分は初めからゲーテを見ることよりも、監督とカメラを見に行つたのであるから失望はしなかつたが、今更文藝作品を踏襲する映畫がその目的に於て、又自らその出發點に於て文藝作品と全然別途にあるものであることを知つた。文藝作品の神經的なリリシズムを追從することは映畫の進出を障害させるばかりでなく、監督の感情的自由を硬化させ約束的な拘泥と信屈を與へるのみだつた。さういふ事實は映畫の本格的な精神に害があつても益されるところは無い。

文藝的な作品にヒントされるといふことは、作品全部の映畫

化の場合とは違ふ。ヒントされることは映畫への前向に働きかけることだ。それは必要以上に必要であるが全部的映畫化は、映畫の自由な意志を傷け或は失敗させることが多い。「罪と罰」「カラマーゾフ兄弟」「ミゼラブル」「復活」「ポンペイ最後の日」等の映畫化は、その最も高い映畫目的の外のものであり、第二義的作品だつたことは云ふまでもない。我々の感銘さへも原作を耽讀した呼吸づまる魅惑と心理上の經驗を、これらの映畫の上に見ることのできなかつたのは、一つは「讀んで知つてゐた」ことであり「見て面白くなかつた」事實であつた。讀んだ時よりも見た時の方が、遙かに感銘の深かつたといふ經驗は、文藝映畫の場合に指數える位しかないであらう。讀むべく目的せられた作品がそれ以外に役立つことはあり得ても、讀んだ以上に働きかけることは先づ尠いと言つていい。

最近に上映された文藝風な接續をもつて相應の成績を上げたものは「ウインダーミヤ夫人の扇」「我若し王者なりせば」「椿姫」「カルメン」「ドン・フアン」「女優ナナ」等であらう。「ウインダーミヤ夫人の扇」の成功の外は自分には感銘が淺かつた。しかも昨年度に於ける數十本の映畫の中の、文藝作品で上映されたものは是等の代表的なものの外、今度の「フアウスト」の上映くらゐであらう。余程に文藝映畫の製作が興行策的な常套方針と、興行成績への危惧を持つものだから、その製作數の少ない點に於ても明瞭に分ることである。作品の本筋と作者への藝術的良心への追從は、その監督の手腕を鈍らせるばかりでなく、放射線的な映畫の大なる目的をも鈍らせるのだ。映畫はシナリオによらなければならぬといふよりも、映畫には映畫の人生を持つための天與の「速度」に操られねばならぬ。映畫を生活することによる映畫圏のパンを味はねばならぬのだ。文藝作品の映畫化はその藝術的な純粹な目的は同一であつても、表現では全然反對の生活と行動をせねばならぬのだ。

映畫的人生の泌みこみと、文藝による泌みこみとの比較は、映畫の泌みこみの瞬揮的であるところの速度と同樣にそれ自身に直接性を持つてゐる。文藝の泌みこみは寧ろ時間的な落着きをもつて讀れるのであるから、その速度の非[illegible]的であることに於いて直に反對してゐる。昨年中に我々に感銘を深くしたものの中で、一本の文藝映畫すら無かつたが、「陽氣な巴里子」「ヴアリエテ」「帝國ホテル」「カルメン」「人罠」「ボー・ゼスト」「最後の人」「不良老年」「女心誰か知る」等は映畫的脚本として書き下ろされたものであり、原本から映畫的な組織によつて書かれたものであつた。「暗黒街」もまたこれらの映畫目でらるべき映畫的なものだつた。これらには何等の文藝[illegible]た

く、その現實性は映畫の中にある人生からの現實性だつた。若し文藝的作品が映畫に全部的に働きかけたら、映畫は少しも進むことができないであらう。その意味に於ける文藝映畫の製作は、一つに呪ふべき謬錯であらねばならない。あらゆる文藝映畫を超越してこそ誠の「映畫」が存在し得るのである。

「カルメン」のドロレス・デル・リオの足

「カルメン」に於けるラオル・ウオルシユは、徹底的にドロレス・デル・リオを適役的に配演させた。彼女の中にある肉體的なものの隅々、性的な表現に基づく凡ての延藝的な應用を、ラオル・ウオルシユの腕の限りに示したといふより、より以上にデル・リオはその眞白な肩と胸と腕とに於て、就中足を以つて美事に演技してゐた。足は伸べられ歪められ彎らされ、折りまげられ、媚をつくり嬌態をうつし、うすい靭のやうな光をふくんで絶えず行動し、流れてちからない時は柔かい餅のやうになつて横つてゐた。そこに凡ゆる足が表現され且つ演技されてゐた。宿屋の食卓の上、街をゆく甃石の上、大雪のごとき大寢臺の上、馬車の上、そして折々大膽な大腿の露はれる肉體の瞬間的な行動、自分はラケル・メリエルよりもエロテシズムを、或はラケル・メリエル以上のカルメンを見た。ジエラルデン・ファラーの膨脹した足、ポーラ・ネグリの大雜把的な直前的な足、そして彼女らが演技したカルメンよりも、デル・リオのその眼付の中にあるモナ・リザ風な神秘めいた感情的な一つの古典的表情が「カルメン」に助成し成功してゐることを感じた。

凡ゆるカルメンが近代の神經と性格描寫に基づくより外に、もうカルメンの存在はなかつた。カルメンの中にある劣等な美と熱情とは、凡ゆる新しい解釋によつて寫されなければならない。又凡ゆるカルメンはオペラのカルメンでなく、凡ゆる街巷のカルメンでなければならない。野卑と淫賣との凡ゆる近代的な發情の要素をもつカルメン、自分はそこまでカルメンを見ることの當然さを感じてゐる。そしてデル・リオのカルメン風なカルメンに妙技を終始し得たのは、何處までも惜氣もない感情を搾り出したことにあつた。

ヴイクター・マクラグレンの鬪牛士ルーカスも、その豪邁な頑固な性格がカルメンの媚態に操つて縺れてゆく經過を素直にあらはしてゐた。宿屋の場面に於いて就中成功してゐた。ドン・アルヴアラードのドン・ホセの弱い線の中に、情熱的な風采は見ることはできるが、到底ドン・ホセの適役ではなかつた。情熱の鬪士としての展開はかういふ弱い韻律によつて寫されるものではない。――ともあれデル・リオのカルメンはその故意と

らしくない藝風によつて扮し得たことは特筆すべきことであらう。

「コステロ」の地味な藝風

アラン・クロスランドの手腕に期待をもたない自分は、「マノン・レスコオ」の狙ひどころを朧氣乍ら直覺してゐた。アラン・クロスランドの持つ世界は、映畫の常識道でありその意味に於て失敗のない作者だつた。その踏襲は過去的な繰返しではあるが、こなし方に寧ろ材料に押され氣味であり苦心のあとが歴々と見えた。ラストの流刑船の強調は有繋に引締めてゐたが、これらのグロテスクな効果には手法上の新しい發見が無かつた。

十七世紀風の典雅と好尚は全卷に漲れてゐた、就中ドロレス・コステロの弱々しい美しさが手頼りない感じはしてゐたものの、「人生サーカス」とは自ら異つた演技をこなし得てゐることは、將來に於いて彼女が、突發的な大名を馳せないであらうが、或程よい地位を確保させることを自分に信じさせた。

ジョン・バリモアは拙い柄だけのバリモアに過ぎない。併しフアビアン・ド・グリウの役柄は演技し得てゐた。さういふバリモアは或特種な配役の中に、しかも絶對的な配役をこなせる俳優ではなかつた。硬い表情と藝風の型を常に一歩も出ない彼は、自分には何時も冷淡に見過すにすぎないジョン・バリモアを印象させるに過ぎなかつた。

クララ・ボウ論

餅肌クララ・ボウ、
野卑の美、
白い蛙、
蛙の紋章、
肉體的ソプラノ、
クリイム・チーズの容積、
旣に要求的な滿喫、
裸の腕のマッス、
計算と性格、惡巫山戯とコケット、
そして怜悧と惡こすい眼付、
ジョージ・バンクロウトを與へよ、
その巨大なる抱擁を抱へよ、
餅肌クララ・ボウ、
際物的なクララ・ボウ、
甃石の上をゆくペングイン鳥、
お腹はもう膨んでゐる

世界中捜しても分らない父親、
餅肌クララ・ボウ、
益々肥るクララ・ボウ、
益々美しくなるクララ・ボウ、
蹴飛ばしたくなるクララ・ボウ、
文身をしたくなるクララ・ボウ、
餅肌クララ・ボウ、
蹴飛したくなるクララ・ボウ、
間もなく剝製になるだらうクララ・ボウ、

ブレノンとH・B・ワーナー

「ボー・ジェスト」の物語風なハーバート・ブレノンは、「ソレルと其の子」に極めて平凡な手法を試乘した。ファストシインに戰爭の一シインを點出したのは第一の失敗だつた。あれはロンドンの電車から降りるあたりから展開さるべきだ。妻の出發とソレルの歸宅との同じい時刻、ロンドンの骨董屋の主人の死と彼の就職到着との同時刻、子供らを二人まで負傷させた手法の繰り返し、それらの運命的なるものの自然との交換が突然であり手法の冴えを感じしめない。全篇的の小說風な平かな筋と味ひを引き締めるちからが足りないのだ。本味で行くむら氣と映畫臭を拔けようとする努力はわかるが、さういふ時嶄しい本味は最つと新しいスタンバーグ以上の監督が出現しなければ行き着けないところである。ブレノンでは行けない。彼ができ得る限りの靜かな迫らない監督振りは目に見えるやうであるが、自分はその努力に注目はするけれど他の批評家のやうに斷じて取らない。

この種の父性愛を取り扱つた通俗的なセンチメンタリズムを拔け切らうとしたところにブレノンの意圖的な集中は買へるが、そのため弛んだ間の拔けた平均性のない場面的の出來と不出來とに終つてしまつた。ソレルがトランクを負ふて階段を上るところも古い、唯、最後に妻のドラが息子を訪ふて料理店にゐる場面は、今までに見なかつたよいシインだつた。これはブレノンが川岸で息子と散歩しながら馬に乘らせるシインとともに、よい小說風な効果をもたらしてゐる。

H・B・ワーナーのスティーヴン・ソレルはよく演技してゐた。久しく見なかつた快い澁好みの「面」をもつH・B・ワーナー・「面」そのものが既に哀愁をもつ彼にソレルが似合はないことは絕對になかつた。物靜かな監督への理解「面」が運ぶ本筋的な流暢な彼に、父親としてのゆつたりした本格的な相貌をもち、飲み込みの早い彼の藝風に失敗のあらう筈はなかつた。感

湯のために後向きになつて壁に對ふて泣くところもよかつた。ブレノンの描寫が取る日立たない急所だつた。

「ソレルと其の子」は原作的にも失敗の作である。寧ろ壯烈な落着いたよい名聲ある失敗である。かういふ名聲を負ふて立つところの、彼ハーバート・ブレノンを見ることは自分には寧ろ温かい笑ひを漏らすことに近かつた。

スタンバーグの「陽炎の夢」に就て

スタンバーグの「陽炎の夢」を見て、「救ひを求むる人々」「暗黒街」の同一作者と思はれない程、平凡な作だと思うたが、その手法上の逈々しさに「救ひを求むる人々」の初々しさがあり、何か知ら「救ひを求むる人々」の素直さを髣髴させる優秀さがあつた。一つはスタンバーグに好意と眞率さを感じてゐる自分は、彼の署名が無かつたら或は見落すかも知れなかつた程、何の變化の無いさらにある映畫のやうであつた。「救ひを求むる人々」が本格的な人生詩の肺腑を衝いたものとしたら、「陽炎の夢」は單なる草花詩のたはいない一篇であるかも知れなかつた。しかも此草花詩人風なスタンバーグに愛情をもつ自分は、當然辛棘であるべき批評的な眼目に於てすら、なほ一つの草花詩として「救ひを求むる人々」「暗黒街」の名監督的な冴えの陰に、微かに囁く抒情的な詩情を感じずに居られなかつた。

「陽炎の夢」は彼として今までの失敗の作だつた。原作のアルデン・ブルックスの「逃亡」を彼自身映畫化したことも、失敗の第一だつた。コンラッド・ナゲルもルネ・アドレも平常いやうに冴えた演技を見せてゐなかつた。そしてスタンバーグ自身の緊張的な硬化性が自分に髣髴してゐた。「救ひを求むる人々」の古今に絶する作後の彼として、又さういふ名譽と聲價を贏ち得た彼として固くなることも否めなかつた。彼の此の一作を以つて問はうとした眞實な人生への欲求は、やはり彼の許む人生以外のものではないか、どの役者も何かいぢけ何かおどおどしてゐた。スタンバーグの呼吸づかひは不幸にも彼自身の描寫だけに停まり、彼ら俳優に感覺的なリズムを刺し貫かなかつた。

併し自分は此の映畫に對する感謝には初めから「信頼」と「好意」が懐しく感じられてゐた。笑ひの場面の送場者の列、人形と椅子、狂人扱ひにされたブラッドが少時動かないでゐた非映畫なポーズ、ジプシイの馬車の毀れた板の隙間から、なま白い大腿が見える着換えを暗示させる一場面、ジプシイ女とブラッドとが草原の上で語り合ふ時の平凡な常態、——ラストの二人が肩を組んでうしろを見せる場面で、自分は映畫的センス

メンタリズムの刺戟と作用によつて、何とも言はれぬ「救ひを求むる人々」の最後の光景を喚起すのだつた。僅かな一例ではあるが浚渫の穴堀りの男が、長い弔辭朗讀に背々してゐる有態が何等の動作や表情なしに、唯立つてゐるだけで表現されてゐた。さういふ失敗の中にある美事な部分的な冴えと完成とは、解體的に見たら他の映畫と較べものにならない程効果的なことは勿論である。

　彼、スタンバーグは何よりも詩人だつた。彼の中にある詩人的なるものがよき醸成を作ふ時は成功するが、詩的感情の未熟な發想の場合は失敗した。併しスタンバーグは凡ゆる監督の中の詩人中の詩人だつた。我々に近い詩を生活することによる詩人だつた。「陽炎の夢」がアメリカで歡迎されなかつた事はどうでもよいことだつた。「救ひを求むる人々」の作者として他の多い作ではなかつたが、併し彼のために採れない作品であることは、彼への强度な信頼を持つ我々の當然な彼への皈依だつた。その後彼は斷然として「暗黒街」を持つて立つたことは、我々の疑はなかつた彼への信頼が證明された一例に過ぎない、――彼の中にある「暗黒街」の人生面の複雜性は初期の「救ひを求むる人々」の中に潜在してゐたからだつた。詩人スタンバーグの習作としての草花詩の一つである「陽炎の夢」は、自分に出來不出來のある作家風な親しみを生みつけたことは、何時も渾然たる作者の小完成よりかどれだけ快適なことかも知れなかつた。出來不出來のある作者的な動搖の中にこそ、自分らに近い詩人的な氣脈を見ることが多かつたからである。

「つばさ」

「つばさ」は戰爭物として世界飛行機を最後に映畫化した事、撮影的技術の進歩の外は、自分には何等の感銘を與へなかつた。クララ・ボウも、チャールス・ロヂャースも特に人物的描寫以外の働きをせず、近時稀に見る詰らない映畫だつた。かういふアメリカ風なミリタリズムの唱道の中には、高い藝術的な精神の端くれさへも窺ふことが出來なかつた。

　ウイリアム・ウエルマンは飛行家だつたことは、その監督の指揮の上に役立つたであらうが、無意味な、除物としてこれらの映畫的技術がどれだけ進歩しても、到底我々を感激させるものではなかつた。質に東洋に於ける我々の冷笑が當然にこれらの映畫の上にあるのは、未來の戰爭に對する飛行機的現象に對する冷笑ではなく、さういふ飛行機を介在することによる映畫的人生の展開、さういふ飛行機文明によつて我々を根柢から動かさうとする動機の淺薄さに對する冷笑だつた。又これらの戰爭

映畫が、日本人もが[illegible]、決して東洋の魂に觸
觸することなき映畫であることは、自分らの人生映畫の鑑賞を
本ずるものに取つて價なき一つの藥物に過ぎないからだつた。

自分は「つばさ」の宣傳にさへ不愉快を感じた程である。自分らの戰慄や恐怖や[illegible]の諸々の感情は、決してこの「つばさ」には支那へなかつた。場當りの感嘆さへ自分には感じられなかつたのである。自分のこの映畫鑑賞に於て經驗したものは、誠に東洋の精神の中にある古風な魂の戰ひが、いかに平凡に我々の心象的な歴史をなしつつあるかといふ事だつた。さういふ感情が文明機關への結合を敢てする時に、なほ彼らに偉する烈しいこれらの實行的映畫の人生を展開するであらうといふ事だつた。

併乍ら日本に於ける飛行機文明の現れてゐることは、これらの「つばさ」を見てさへ感じられたのであるが、併し東洋の魂の喝采は到底この「つばさ」には僞されないことは、當然過ぎることであつた。その息もつかせずに興了させるといふことは、一つの機械的な低喘であるとしか思へない程、狡猾な効果に外ならないことも注意すべきことであらう。

雜

この[illegible]しようと[illegible]けたが、[illegible]しかし戯のジョン・ギルバートを同様に入れると同時にた[illegible]て、十分間も見て居られなかつた。

○映畫に於ける惡宣傳はどれほど恐ろしい問題だか分らない。宣傳された映畫に碌なものは見られないのだ。宣傳しなければならぬところに既に消極的な作の弱さがあるのだ。

○[illegible]のせいか自分は映畫見物に興味を[illegible]、その[illegible]的な幻[illegible]は自分に様々な[illegible]を見させた。併し自分にはこの[illegible]が極めて科學的なものであること、人間の精神作用乃ち一夢一自身すら絶えず進歩してゐるものであることを[illegible]した。

○チャプリンの「サーカス」は彼としての仕事の完成期を意味し、もう後の日のチャリイ・チャプリンを自分は見たくない。彼に満足せずに[illegible]すべきである。あゝいふ演技的な技術は、もう我々にはいふまでもなく窮屈であり、一般的にも興味がなくなるであらう。どれ程の長年月を要した傑作であるとしても、それは決して作品の誠に[illegible]ならないからである。チャリイ・チャプリンは自ら消技することなき[illegible]にあるべき、彼の自重を[illegible]悟るべきであらう。

（室生犀星）

「サアカス」を見て

——チヤツプリン論の一斷片——

チヤツプリンの新作「サアカス」を前にして、日本の映畫批評家は困惑してゐる。

兎にも角にも相手はチヤツプリンである。さうひどくこきおろすのは恐ろしいやうな氣がする。さうかと言つて、「巴里の女」や「ゴオルド・ラツシユ」で、無暗と彼を詩人に崇めたり哲學者に祭り上げたりした、それと同じ筆法で「サアカス」を讃めることは不可能である。そこで、讃める方も、惡く言ふ方も、極めて微溫的である。

「チヤツプリンは行き詰まつた」と言ふ。だが、どこが行き詰まつたのか、はつきり言ふ人はない。

「チヤツプリンは疲れてゐる」と言ふ。だが、どこが疲れてゐるか、自信を以て言ふ人はない。

「チヤツプリンは昔へ歸つた」と言ふ。だが、その證據をはつきり擧げてくれる人はない。

そこへ行くと、「ニユウヨオク、ヘラルド、ツリユビウン」のリチヤアド・ヲツツなどは、餘程はつきりした異議の申し立てをしてゐる——

「私は「サアカス」を「ピルグリム」よりも「ゴオルド・ラツシユ」よりも「擔へ銃」よりも努力の足りない作品だと思つた。私はその理由の一二を直ちに述べることが出來る。先づ第一に、この喜劇は第一流のシネマ、フアアスが當然持つてゐなければならない「なめらかさ」を缺いてゐるやうに思ふ。或大仕掛なギヤツグを築き上げる。そこで、そこから何か出て來るかと思ふと、そこからは出發しないで、それはそこで進行を留めてしまふ。さうして、又何から何まで新らしくやり直すといふ風である。

「それから又、從來チヤツプリンの最善の努力の一つであつた正確な即興にも缺けてゐるやうに思ふ。演技と言ひ、樣々な滑稽と言ひ、最後のパリアツチ式な趣向までが、餘りに作られてゐるやうな氣がする。依然として獨自な藝術の持主であるチヤツプリン自身が、屢疲れてゐるやうに、自分の爲事に興味を失つてゐるやうに見える。

「由來のワイアに背中のところを釣られて、綱渡りをする。突然、ワイアの外れたことを發見する。さうして、實際自吹も高いところでチャップリン自身が體の中心をとらなければならないことになる。あのエピソオドが映畫喜劇の歴史に於ける最も偉大なものの一つであることに異論はない。主人公が警官に追はれて、サイドショオの鏡の迷路へ逃げ込むところ、それから、蠟細工の自動人形を眞似るところなどが、滑稽美の貴重な斷片であることも眞實である。併し、私は「ピルグリム」に於けるダビデとゴリアテの說教や「ゴオルド・ラッシユ」に於けるオシアナ、ロオルや、偉大な戰爭喜劇「擔へ銃」全體の趣向に匹敵すべきやうな何者をも「サアカス」の内に見出だすことが出來なかつた……」

ここで、私の意見である。私の意見はちやうどこのヲッツの意見の裏返しである。私はヲッツが惡く言つてゐるところを悉く好いと思つてゐるのである。

私は「サアカス」を見終つた瞬間、今自分がどんな映畫を見たかを思ひ出すことが出來なかつた。それ程この映畫は純だつたのである。少しの澱も、少しの滓も、私の腦裏に殘らなかつたのである。

「サアカス」を見て、チャップリンが昔へ歸つたと言ふものは、チャップリンの進步生長を認めないものである。チャップリンの以前のどの作品に「サアカス」ほど澄み切つた、「サアカス」ほど純なものがあつたらうか。「サアカス」を見た後「サアカス」の内容を思ひ出すのは、私にとつて一つの努力であつた。それは、ちやうど或美しいシムフオニを聽き終つた時の感じだつた。見てゐる間、聽いてゐる間だけの喜びである。あとに殘るものは何もない。しかも、もう一度見たい、もう一度聽きたいといふ熱望が、いつの間にか體中に燃えてゐる。

純粹な劇藝術の精神も亦實にここになければならない。コンメチア、デル・ラルテの昔から系統を引いて來てゐるところの近代のハアレキネイド（チヤアリ・スペンサ・チヤップリンは實にその第一人者である）が、劇藝術獨自の要素として貴重である所以も亦實にここにあるのである。

コンメチア、デル、ラルテの精神は「即興」にある。ヲッツは「サアカス」に即興が缺けてゐるやうに言つてゐるが、私はちやうどそれと反對に、「サアカス」ほど即興に富んだ映畫はないと思つてゐる。

「サアカス」には筋らしい筋がない。若し筋があるとしても、それは實に價値のないものである。總てが即興の連續である。即興の或シリイズが即ち「サアカス」なのである。さうして、

「サアカス」の絶大な價値は實にそこに存するのである。

勿論、それは豫め「考へられたもの」或は「作られたもの」である。併し、その「考へられたもの」「作られたもの」が少しも「考へられたもの」らしく「作られたもの」らしく見えないところに、劇藝術に謂はゆる「即興」の價値があるのである。

この論點から見て、チャップリンは偉大な映畫俳優であると共に、實に偉大な舞台俳優である。ヲッツが「サアカス」の讃美者は、シネマファンよりは寧ろ演劇愛好者に多いだらうと言つたのも、その意味から言へば、卓見である。

私は敢て言ふ。チャップリンに文學的或は哲學的內容はない。若しあるとしても、それは決して他の藝術に優越するものではない。

讀書家であるチヤアリは、「サアカス」の撮影中に、ホルスン・ダイシヤの「道化と默劇」を耽讀してゐたさうである。ダイシヤはこの大部な研究の一部に於いて、アアレキン、グロック、グリマルヂ、タアルトン、フラチネルリ、ピンケスマン、アアキノオ、トム・バリなどと、同じ重大さに於いてチヤアリ・チヤップリンを論じてゐる。さうして、チャップリン一流の扮裝を或哲學の象徴的表現として精細に解剖してゐる。若しチヤップリンに哲學があるとすれば、それはあの袋のやうなズボン、屈折自在なケイン、纖細な上着、エルガントな「グアビイ」、巨大な靴――あの內に哲學があるのである。そして、それ以外に哲學はないのである。

私はチャップリンを詩人だとも思はなければ哲學者だとも思はない。私はチャップリンを唯「役者」だと思ふ。しかも、現代の世界に於ける最も偉大な「役者」の一人だと思ふ。

ヲッツは「ゴオルド・ラッシュ」のオシアナ、ロオルに及ばないと言つたが、私は「サアカス」の自動人形をオシアナ、ロオル以上に買ふものである。あれだけの技藝を、今のどこの國のどの役者が持つてゐるだらう。

自分がサアカスの呼物になつてゐながら、それを知らない。曲馬をする娘に注意されて、それを知ると、急に息張り出して、團長に給料の値上げを迫る。その時、積んである飼葉に肱をのせて反り身になり、藁を一摑み摑んで、それを二つにちぎつて捨てる――あれだけの表現が、どこのどの役者に出來るだらう。

私はロシヤでメイエルホリドがチヤップリンの研究をしたといふ話を聞いた。成程、彼がチヤップリンを學んだ跡は、「吼えろ支那」にも「森」にも「檢察官」にも窺はれる。併し、メイエルホリドは飽くまでもチヤップリンの亞流である。彼の滑稽はしつこくて、あくどくて、あとにきつと澱が殘る。

「サアカス」のチャップリンは實に輕妙に、しかも實に有意義に、畫面を出沒する。少しの「あくどさ」もない。少しの「しつこさ」もない。

役者としての――技藝の人としての――チャップリンには、前述の諧謔測り知るべからざるものがある。

チャップリンは決して行き詰つてゐない。チャップリンは決して疲れてゐない。チャップリンは決して昔へ歸らうとしてはゐない。

その證據が「サアカス」である。

「文學と映畫」

日本の映畫批評家には内容過重論者が多い。殊に文壇の人にそれが多いのは――當然のやうであつて――恥である。

私はそれらの人々に、シクロフスキイ著八住利雄譯の「文學と映畫」の一讀を奬めたい。

シクロフスキイは現代ロシヤのフオルマリストである。彼は一切の藝術を唯材料と形式とから見ようとする人である。その說くところに悉くは服し難いが、一切の藝術を社會學的に見ようとする傾向のある現代に於いて、彼の如きアンチドオトも亦強ち必要でないとは言へない。

「文學と映畫」の一節に曰く――

「詩の形象は映畫性にゆづることは出來ない、何故ならそれは言語性によつてゐるからだ。トルストイが言葉によつて、視覺の世界より認識の世界に持ち來り、通常の人生を描いた異常な言葉――これらの特別な言葉は、寫眞にゆづることは出來ない。トルストイの瑣末な事に對する凝集、瑣末な事に見出す生きた細――たとへば生々とした濕つた皮や血を恐れながら小指と小指で煙草をもつてゐるドクトルの手に對するトルストイの注意の凝集は、寫眞にゆづることは出來ないのである。そして單に普通の焦點からこの表象だけを移動させるのは、藝術がなす所の役目を「殆ど」なさないものである。小說に於ける殆ど何物をも、映畫へ移すことは出來ない。赤裸々の主題を除いては殆ど何物をも移すことは出來ないのである……」

文壇の映畫内容論者は、内容の有無を論ずる前に、先づ文學的内容が完全に映畫的内容たり得るや否やを、理論に依つて示さなければならない。それでなければ「無いのが當然なもの」を「無い」と言つて騒ぐやうな愚なことをする場合がないとは限らないからである。（四月十日）

小山内　薫

薔薇の陰影

（押韻小曲廿五章）

與謝野晶子

×

身を云ふに過ぐ、外を見よ、
默默として彼等あり、
我が痛さより痛きなり。
他を見るに過ぐ、目を閉ぢよ、
乏しきものは己れなり。

×

論ずるをんな糸採らず、
みちびく男たがやさず、
大學を出ていと賢し、
葉は多し、手の言白し、

×

己が痛さを知らぬ蟲
折れた腕をも食むであろ、
人の言葉を持たぬ牛
云はずに死ぬることであろ。
ああ蟲で無し、牛で無し。

×

夢にをりをり蛇を斬る、
蛇に巻かれて我が力
仕ようこと無しに蛇を斬る。
それも苦しい夢か知ら、
人が心で人を斬る。

之れを離さずば僞を離づ。

×

人に哀れを乞ひて後、
涙を流す我が命。
うら恥かしと知りながら、
すべて貧しい身すぎから。
ああ我れとても人の中。

×

波のひかりか、月の出か、
幻覺を照す、窓の中。
遠いところで鴨が啼き、
心に透る、湖の秋。
宿は岬の松の間。

×

十國峠、名を聞いて
高い所に來たと知る。
世離れたれば、人を見て
路を通らぬ牛の方から
海に眞赤な日が落ちる。

×

すべての人を思ふより、
唯だ一人には背くなり。
いと寂しきも我が心、
いと樂しきも我が心。
すべての人を思ふより。

×

雲雀は揚がる、麥生から。
わたしの歌は涙から。
空の雲雀もさびしかろ、
果てなく青いあの虚ろ、
ともに已まれぬ歌ながら。

×

鏡の間より出づるとき、
今朝の心ぞやはらかき。

鏡の間には塵も無し、
あとに靜かに映れかし、
鷄冠の色の紅つばき。

×

そこに在りしは唯だ二日、
十和田の水が其の秋の
呼吸を稱する、夢の中。
瘦せて瓜實おもざしの
蒼ざめゆくも木ゆゑか。

×

つと休らへば若きたり、
幹のもとなる低き椅子。
空を透して一日のひかり
うす紫の陰影を落す。
物みな今日は身に與す。

×

海の颶風は逆風無し、
船を吹くこと矢の如し。
わたしの船の上がるとき、
かなたの船は東を向き、
つひに別れて西ひがし。

×

笛にして吹く夢の聲、
よく眠る時は覺ける時。
誰の聽かぬ夢の節、
思ひつめたる心にゐる
よく守る時は覺ける時。

×

地獄の底の火に焼かれた、
薔薇に埋まる床に寝た。
金の獅子にも乘り馴れた、
天に中する日も仰いた、
己が影にも聞き慣れた。

×

微風の把る彩の路
すべての物の上を撫で、
光と色に點す涙。
ことに優れてめでたきは
牡丹の花と人の袖。

×

涙に濡れて火が燃えぬ、
今日の苦惱に氣色が出ぬ、
絆を把れど色が出ぬ、
わたしの窓に鳥が來ぬ、
窓には白い月が光ぬ。

×

あの白鳩も近く來る、
すべての花も目を見はる、
青い梢も手を伸べる。
春を迎へて森の國
路の苔にも蝶がをる。

×

人形ならば指さゝん、
立つ波ならば濡れてみん、
咲く花ならば手に取らん。
心ばかりは形無し、
偽りとても如何にせん。

×

人われ門を去りて行く、
やがて消え去る、森の影。
今日も北の風が吹く。
馬に乗る身は眠はぬか、
野を白くする霧の中。

×

鳩のこころを俯かや、
巣は雨ふりて沈めるも
旅を空に立てばや、

育てし雛を吹く風も
塵も無き日に放たばや。

×

牡丹のうへに牡丹ちり、
真赤に燃えて重なれば、
いよいよ青し、庭の芝。
ああ散ることも光なり、
かくの如くに派手なれば。

×

閨にて聞けば朝の雨
半ばは現實、なかば夢。
やはらかに降る、花に降る、
わが髪に降る、草に降る、
うす桃色の絲の雨。

×

赤い椿の散る軒に
埃のつもる臼と杵、
莚に干すは何の帆。
少し離れて垣越しに
帆柱ばかり見える船。

×

三たび曲つて上る路、
曲り目ごとに木立より
青い入江の見える路、
椿に歌ふ山の鳥
花踏み散らす苔の路。

發塚異事

岡本綺堂

發塚即ち墓荒しは支那の特色である。それは古來の習慣として、王侯貴人の墳墓には種々の寶物や金銀珠玉のたぐひを埋めてあつて、詩人のいはゆる「玉魚金盌無人見」といふわけであるから、自然それを發掘して一儲けしようと企てる者共が出て來つたのである。これは殆ど他國に其例を見ないことで、たま／＼他國に見出されるとしても、それは何か特殊の事情に因るのであつて、單なる盗賊の目的に出づるものは極めて少ない。蝦夷が田道の塚をあばいて大蛇に驚かされたといふのも、物をぬすむが爲ではなかつたらしい。

「御伽百物語」のうちに「石塚のぬす人」と題して、盗賊の群が吉備の中山にある神功皇后の御陵を發かうとして怪異に逢ふ話を載せてゐるが、それは唐の「酉陽雜俎」の飜案であつて、もとより實錄ではない。併し前にもいふ通り、支那は墓荒しの本場であるだけに、それに就ては古來種々の傳說が殘つてゐて、復讐のために仇家の墓を發くといふのもあるが、大體に於ては盗賊のためである。勿論、どこまでが事實で、どこまでが本當か判らないが、わたしの知つてゐる話のなかで、やゝ異聞に屬するものを書いてみる。所詮は日長のつれ／＼を醫する茶話の材料に過ぎないもので、支那文學精通者

に示すべきものではない。

◇捜神記◇

晉の干寶の「捜神記」は早くわが國に渡來して、彼の「今昔物語」等に幾多の飜案材料をあたへてゐるのは周知の事實であるが、その中に發塚の異聞が幾種も記述されてゐる。

東漢の孝桓皇帝の馮貴人は病んで死んだ。然るに次の孝靈皇帝の代になつて、盜賊の一群がその塚をあばくと、死後七十年――これは誤りで、恐らく二三十年であらう――を經過したるにも拘らず、美人の容色は生けるが如くで、唯その肉が少しく冷たいのみであつたので、兇惡の群賊は喜んでその死體を辱め、たがひに先を爭つて、なぐり合ひや殺し合ひの亂鬪を演出したと云ふことである。又、漢の末に關中が大に亂れて、前漢の宮女の塚を發いた者があると、その宮女はまだ生きてゐた。魏の郭后はこれを愛して我が宮中に置き、常に漢代における宮中の故事などを質問してゐたが、その答ふる所はみな正しかつた。而も郭后が崩じると、その宮女も哀みの餘り、哭泣が度を過ぎて再び死んださうである。

三國の呉の孫休のときに、一人の戍將が廣陵を守つてゐたが、城の修繕をするために、附近の古い塚を掘りかへして石の板をあつめた。勿論、見當り次第に澤山の塚を荒したのであるが、そのうちに一つの大きな塚をあばくと、塚の内には幾重の閣があつて、その戶はみな回轉して開閉自在に作られてゐた。四方には車道が通じてゐて、その高さは騎馬の人も往來が出來るほどであつた。ほかに高さ五尺ほどの銅人が數十も立つてゐて、いづれも朱衣、大冠、劍を執つて整列し、そのうしろの石壁には殿中將軍とか侍郎常侍とか彫刻してあつた。それらの護衛から想像すると、定めて由緒ある公侯の塚であるらしく思はれた。そこで、正面の棺を破つてみると、棺中の人は髮が已に斑白で、衣冠鮮明、その相貌は生けるが如くである。棺中には厚さ一尺ほどに雲母を敷き、白玉三十枚を死體の下に置き列べてあつた。兵卒等がその死人を舁

き出して、うしろの壁に倚せかけると、冬瓜のやうな大きな目がその喉中から轉げ出したので、驚いて更に掘すゝむと、死人の耳にも鼻にも棗の實ほどの黄金が詰め込んであつた。

兩半分としても、時々にこんな掘出し物があるので、墓荒しもなか〳〵止められないわけである。但し又、時には其のやうな祟りを受けることもある。次の廣川王は身分にも似合はず墓荒しが大好きで、あるときは一つの塚をあばくと、その棺も祭具もみな朽ち破れて、何物も餘されてゐなかつたが、たゞ一匹の白い狐が棲んでゐて、人を見て驚き走つたので、王の左右にある者が追ひかけたが、わづかに戟を以てその左足を傷けただけで、遂にその姿を見失つてしまつた。その夜、王の枕もとに、鬚眉こと〴〵く白き一丈夫があらはれ來つて、お前はなぜおれの左の足を傷けたかと責めた上に、持つたる杖を以て王の左足を撃つたかと思ふと、夢は醒めた。その以來、王は撃たれた足に痛みをおぼえて一種の瘡を生じ、いかに治療しても一生を終るまで平癒しなかつた。

◇風と沙と◇

唐の段成式の「酉陽雜爼」にこんな話がある。即ち前に云つた「御伽百物語」の種本である。

唐の刺官を勤めてゐた李邈といふ人は、高陵に庄園を有してゐたが、その庄に寓居してゐる一人の客が斯ういふことを懺悔した。

『わたくしはこの庄に足を留めてから二三年になりますが、實は窃かに盗賊を働いてゐたのでございます。御承知の通り、大抵の盗賊は墓荒しを遣ります。わたくしも其の墓荒しを思ひ立つて、大勢の徒黨を連れて、先頃この近所の古塚をあばきに出かけました。塚はこの庄から十里(六町一里)ほどの西にあつて、非常に高く大きく築かれてゐるのを見ると、よほど由緒あるものに相違ありません。松の林を這入つて二百歩ほども進んでゆくと、その塚の前に出ました。おひ茂つた草

の中に大きい碑が倒れてゐましたが、その碑はもう磨滅してゐて、なんと彫つてあるのか判りませんでした。兎もかくも五六十丈ほども深く掘つてゆくと、一つの石門がありまして、その周圍は鐵汁を以て嚴重に鑄固めてありました。その鐵を溶かすには人間の脂汁に限るので、脂汁を熱く沸かして幾日も根よく沃ぎかけてゐると、自然に鐵が溶けるのです。

今度もその手段を用ゐて、やう〳〵のことで其の石門をあけると驚きました。內から雨のやうに箭を射出して來て、忽ち五六人を射倒されたので、みな恐れて引返さうとしましたが、わたくしは肯きませんでした。ほかに機關があるわけでは無いから、あらん限りの矢種を射盡させてしまへば大丈夫だといふので、こちらからも負けずに石を投げ込みました。內と外とで箭と石との戰ひが暫く續いてゐるうちに、果して敵の矢種は盡きてしまひました。それから松明をつけて進み入ると、ゆく先に又もや第二の門があつて、それは譯なく明きましたが、門の內には木で作つた人が何十人も控えてゐて、それが一度に劍を揮つたから堪らない。先に立つてゐた五六人は又もやこゝで斬倒されました。こちらでも棒を以て無暗に叩き立てゝ、その劍をみな撃ち落した上であたりを見まはすと、四方の壁にも衛兵の像が描いてあつて、南の壁の前に大きい漆塗りの棺が鐵の鎖にかゝつてゐました。棺の下には金銀や寶玉のたぐひが山のやうに積んであります。

さあ、見付けたぞとは云つたが、前に懲りてゐるので、迂闊に近寄るものも無く、たがひに顏をみあはせてゐると、俄に棺の兩角から颯々といふ風が吹き出して、沙が激しく吹きつけて來ました。あつと云ふうちに、風も沙もます〳〵激しくなつて、眼口を明いてゐられないどころか、地に積む沙が膝を埋めるほどに深くなつて來たので、みな恐れて我勝ちに逃げ出しましたが、逃げおくれた一人は又もや沙のなかへ生埋めにされました。外へ逃げ出して見かへると、門は自然に閉ぢて再び這入ることは出來なくなつてゐます。たとひ這入ることが出來ても、とても二度と行く氣にはなれないので、誰も彼も早々に引揚げて來ました。そのときの怖ろしさは今に忘れません。その以來、わたくし共は誓つて墓荒しをしないことに決めました。』

この話はこれで終りであるが、酉陽雑俎には更に他の異聞を傳へてゐる。

近い頃、幾人の盗賊が蜀の玄宗の塚をあばきに這入ると、内には二人の男が燈下で棊を圍んでゐて、ほかに侍衛の軍人が十餘人も武器を持つて控へてゐたので、盗賊共もおどろいて拜謝すると、棊に對してゐた一人が見返つて、おまへ達は酒をのむかと云ひ、めいめいに一杯の酒を飲ませた上に、玉の腰帶一條づつを呉れたので、盗賊どもは喜んで出て來ると、かれらの口は漆を含んだやうに閉ぢられてしまつた。帶と思つたのは大きい蛇であつた。

◇地下に十二年◇

六朝時代の後魏の菩提寺は西域の人の建てたものである。それに就て、唐の闇選の「再生記」にこんな話が載せてある。

沙門等が彼の菩提寺内の墓をあばくと、一人の青年が生きてゐるのを發見したので、不思議なことであるとして朝廷に差出した。時に魏の太后は孝武帝と共に華林堂に在つたが、試みに彼の青年を呼び出して詮議すると、彼は答へた。

『わたくしの姓は崔、名は涵といふもので、父の名は暢、母の姓は魏と申します。家は城西の阜財里にありまして、私は十五歳のときに死にました。それから地下にあること十二年で、當年は廿七歳になります。地下にあるあひだは、酔つて眠つてゐるやうな心持で、平生は別に飲み食ひをするやうな事もございません。ときどきには出あるいて何か飲み食ひをしたやうにも思ひますが、すべてが夢のやうで記憶して居りません。』

そこで念のために役人をつかはして、彼が生家をたづねさせると、果してそこに崔暢といふ者が住んでゐて、妻の姓は△といふのである。それのみならず、崔涵といふ伜があつて、十五歳のときに死亡したといふ事實までが符合するので、役人は前の一條を打明けて、おまへの伜は蘇生してゐると云ひ聞かせると、父の暢は俄におどろき怖れて、實はわたくし

に崔涵といふ者は無い、唯今申上げたのは誤りであると、一切を取消した。併しそれが事實であることは早く聞いてゐるので、役人は歸つて奏上すると、太后は命じて彼を生家へ送り還させた。すると、案外である。崔の家は火を焚いて、父は白刃を揮ひ、母は桃枝をたづさへて、嚴重に門を守つてゐるのである。

『貴様のやうな妖怪がおれの家へ入り込んでは困る。おれは貴様の親ではない、貴様はおれの子ではない。早く立去れ、さもないと、唯は置かないぞ。』

激しい權幕で逐ひ立てられて、崔涵はどうすることも出來なかつた。折角この世に再生しながらも、彼は生家へ歸ることを許されないで、遂にそのまゝ立去つて都に上つた。併し頼るべき所もないので、常に佛寺の門前に宿つてゐると、その事情を聞き知つた汝南王が憐んで黄衣一襲ねを賜はつた。かれは暗黒の地下に長い月日を送つてゐた爲であるか、日光を恐るゝこと甚しく、決して天を仰ぎ視なかつた。路をあるくにも決して徐行することなく、疲れるまでは走りつゞけてゐた。さういふわけで、世間の人は彼を本當の人間とは認めず、彼は矢はり幽鬼であると噂されてゐた。洛陽の北に奉終里といふ所があつて、そこには葬具を賣る家があつた。その商人に向つて、彼はこんなことを話した。

『棺に柏の木を用ゐるのは好いが、槨に桑を用ゐてはいけない。わたしは地下にあるときに、陰界の兵卒が來て棺をあばくのを見た。ひとりの死人はそれに對して、自分の棺は柏を以て作られてゐるから發かれる筈はないと云ふと、兵卒はそれに答へて、なるほどお前の棺は柏で作られてゐるが、槨が桑で作られてゐるからいけないと云つて、たうとうその棺をあばいてしまつた。』

・その話が傳つて、どこの家でも棺をあつらへる場合には總て柏の木を用ゐることになつたので、柏の材木の價が俄に騰貴した。一說によると、葬具屋が彼を買收して、高い柏槨を賣るためにこんな事を云はせたのだとも云ふ。先づそれが本當であらう。

◇銅鷄の怪◇

唐の敍君孚の「廣異記」に銅鷄の話が出てゐる。

鄴縣に東泼の奴官の塚といふものがある。その附近は田になつてゐるのであるが、每年秋穫の頃になると、その塚に近い田は稻穗をみな失つてしまふのである。それが久しく續くので、村の者共もひどく困つて、每夜交代に張番してゐると、彼の塚のなかから四羽の大きい鷄が出て來て、そこらの田を荒すのであると云ふことが發見された。

さう判つてみると、捨てゝ置くわけには行かない。殊に奴官の塚には寶物が收めてあるといふ傳說もあるので、村の者共は一種の慾も手傳つて、畑あらしに對して墓荒しを決行する相談をきめた。そこで多人數が隊を組んで、いよ〳〵その塚をあばく事になると、入口には四羽の鷄がゐて、翅を揮つて人を擊つので、人々も杖を以てさん〴〵に打ち拂はれると、鷄はやがて動かなくなつた。よく見ると、それは生きた鷄ではなく、銅を以て作られた物であつた。それから進んで外廳に入ると、寶劍二本を得た。ほかにも何か判らない器物がおびたゞしく見出された。更に奥深く進んでゆくと、水が深くなつた。

それを涉ると、正門の前には紫衣の人が立つてゐて、彼等を入れまいと防いだが、村の者共は多勢を恃んで突擊すると、紫衣の人は敵の群を衝いて表へかけ出した。彼は疾風のごとくに走つて、縣の役所へ飛び込んで大に呼んだ。

『賊がわたくしの墓をあらします。』

『あなたの墓はどこですか。』と、主任の役人が聞いた。

『奴官塚です。』

役人はすぐに里長に命じて賊を捕へしめたので、村の者共はみな[illegible]繫ぎになつた。紫衣の人の姿はみえなくなつた。

これは玄宗皇帝の開元年中の出來事である。

◇死美人の舌◇

これも「廣異記」の一節で、やはり開元年中のことであると註してある。

開元の初めに、華妃は玄宗の寵を得て、慶王を生んだ。妃は薨じて長安に葬られたが、開元廿八年に盜賊の一團があつて、妃の塚を發掘しようと企てたが、何分にも寵妃の塚で警衛も行き屆いてゐるので、彼等はその塚を去る百餘步のところへ一つの大きい空墓を築き、その內から潛に坑道を作つて、妃の塚へ往來することにした。さうして、棺を破つてみると、妃の面色生けるが如くで、手も足も柔かに屈伸した。彼等の習として、この貴婦人に對して凌辱を恣まゝにしたのは云ふまでもない。それから塚の內に藏めてある金銀珍寶をこと〲く奪ひ取つて、一方の空墓へ運び去つたばかりか、妃の腕を切つて其の金釧を奪つた。

『死んだ者でも油斷は出來ない。夢にあらはれて訴へると云ふこともあるから、口の利かれないやうにして置くに限る。』

彼等は死人の舌を拔いてしまつた。彼等は更に空棺を車に積んで、恰も送葬をするやうに見せかけ、夜陰に乘じて彼の空墓から贓品を運び出すことにした。かうして、萬事が首尾よく成就しようとする時、彼等の惡事は忽ち發覺した。彼の慶王の夢に生母の華妃があらはれて、一切の事情を訴へたのである。かれらは用心して死人の舌を拔いたが、結局それは無効であつた。

慶王は元來孝心の深い人であつたから、その惡夢におどろき悲んで、夜のあけるのを待ち兼ねて參內すると、帝もその訴へを聞いて驚き怒つて、京兆の令に命じて其の賊徒を捕へせしめた。さうとは知らない彼等は贓品を車一杯に積んで歸る途中、春明門の前で門吏に怪まれて、こと〲く捕縛された。その徒黨は數十人の多きに上つて、いづれも貴戚の子弟

の素行不良の徒であることが判つたので、晟王はその巨魁九人を得て母の仇を報いんことを請ふと、帝はそれを許した。王は彼等五人の五臟を採り取つて、それを煮て母を祭つた。その餘の者は京兆の門外に殺された。

◇死人の笑ひ◇

唐の劉子の「逸史」にもこんな話がある。

樊澤が襄陽の節度使であつた時に、その部下の巡官に張某といふ者があつた。張の父は經略使を勤めたことのある人物で、鄧州の北數十里の地に葬つてあつたが、ある夜、張の夢に父があらはれて、おれの墓は賊のために荒らされてゐる。その賊は衣類や器物をたづさへて城門に來るから、すぐに取押へろ。日が出てしまつては取逃すぞと云ふのである。夢が醒めて、それを二人の弟に話すと、弟達もおなじ夢を見たといふ。兄弟三人が同時に同じ夢をみた以上、もはや猶豫はならないと思つて、張は夜の明けないうちに上官の樊澤の門を叩いて、その次第を訴へると、樊はすぐに役人を呼び出して命令を傳へ、日の出ない前に怪しい者どもを城門外で捕へた。彼等は果して張の父の墓をあらした者で、その巨魁大小同類五人、いづれも證據となるべき贓品をたづさへてゐたので、一も二もなく白狀に及んだ。

その賊の白狀はかうである。

「わたくし夫婦は已に十年餘りも墓荒しを商賣としてゐましたが、今度ばかりは恐らく一身の破滅を來すであらうと、内々覺悟してゐました。と云ふのは、わたくし夫婦が墓をあばく時には、必ず酒を用意して行つて、先づ墓の前で火を焚いて其の酒を温めます。それから徒黨の者共が墓を開くと、我々は棺の蓋をあけて死人と酒の遣り取りをするのです。即ち先づわたくしが酒を把つて、「客人が一盞頂戴いたします。」と云つて飲みます。それから「御主人も一盞お飲みなさい。」と云つて、死人の口に一杯の酒をつぎ込みます。その次にわたくしの女房が一杯飲みます。かうして、一巡飲んだ後に、わ

たくしが「この酒の代はどこから出るのだ。」と云ふと、女房が「それは主人が出すに決まつてゐる。」と云つて、死人の衣類や寶物を奪ひ取るのです。云はゞ一種のまじなひのやうなもので、斯うして置くと決して露顯しないのでした。

ところが、今度ばかりは不思議でした。棺をあけると、死人は紫衣を着けて玉帶をしめてゐて、その風采がさながら生きてゐるやうに見えたばかりか、わたくしが例に依て先づ一杯を傾け、それから「御主人もお飲みなさい。」と、その口のなかへ酒をつぎ込むと死人は笑ひ出しました。私はびつくりして其の死人をおさへると、それがいつか普通の骸骨に變つてゐるのです。いよ〳〵不思議に思ひましたが、兎も角もその腰の玉帶を解きかゝると、死人は急に聲を出して「痛い、痛い。靜に遣つてくれ。」と云ふので、もう堪らなくなつて逃げ出しました。それから何だか精神茫然として昔の元氣がありません。これは危ないと思つてゐると、果して運の盡きになりました。」

彼等がこと〴〵く死刑に處せられたのは云ふまでもない。

◇厚葬と薄葬◇

宋の魏泰の「東軒筆錄」にも發塚盜の話がある。

蘄州の張侍中と撫州の晏丞相とは倶に陽に葬られたが、その墓の距離は遠くなかつた。そこで、例の發塚盜が先づ兩者の墓のあひだに一軒の家を築いて、その家から地下を掘つて二つの塚のなかへ入り込むやうに工夫した。その準備が整つて、先づ張侍中の墓をあばくと、豫想の通りに金寶珠玉の獲物が甚だ多かつたので、賊は取るだけの物を取つてしまつて、その棺を元の通りに藏めて來た。

次に晏丞相の墓をあばきにかゝると、内には猛獸の吼えるやうな聲がきこえたので、賊は驚いて更に一人の仲間を呼んで來て、二人連れで怖る〳〵這入つてみると、今度は甲冑のひゞきや鬨の聲がきこえたので、彼等は又おどろき恐れた。

そこで、更に又一人の方圖を踏んで來て、三人揃つて忍び込むと、内には寂として聲が無かつた。

「丞相の御威德もこれぎりか。」

三人は笑ひながら仕事に取りかゝると、これは豫想に反して殆ど何の獲物もなかつた。供へてある器具もみな普通の陶器で、衣服も已に腐朽して塵の如くになつてゐるので、盜賊共は大に失望した。彼等は腹立ちまぎれに、供へてゐる刀や笏のたぐひを以て、その骸骨をめちゃ〳〵に叩き碎いて立去つた。而も彼等は張の墓から奪ひ取つた贓品が證據となつて、後にみな捕縛されて一切を白狀したのである。

張は厚葬に因て其の遺骨を全うし、晏は薄葬に因てその遺骸を碎かれたのである。晏は丞相の高官でありながら、儉德の人物であつたから子孫を戒めて厚葬を廢させた。それが却て禍をなして、その遺骸を辱しめられることになつたのである。から云ふことがあるから、大抵の人は厚葬をやめない。厚葬が行はれるから、墓荒しも止まない。どこまで行つても、墓荒しは支那の特色である

◇伯夷叔齊◇

これは勿論笑談だと思はなければならない。

ある人が蘇東坡のところへ來て、あなたの兄さんに奉職の御周旋をおねがひ申して置いたが、どうも埒が明かないから、あなたからお口添へを願ひたいと賴んだ。それに對して、東坡先生はかう答へた。

「まあ、お聽きなさい。こんな話があります。ある男がひどく貧乏で、苦しまぎれに墓荒しを思ひ立つた。さうして、先づ一つの墓をあばくと、そのなかには一人の男が赤裸で坐つてゐた。これには少し驚くと、その男は笑ひながら「お前は此の世に揚王孫といふ者のあつたことを知らないか。おれは世人の厚葬を戒めるために、赤裸で葬らせたのだ。お前に遣る

物はなんにも無いぞ。」と云ふ。仕方がないから更に第二の塚を尋ねたが、それを掘るにはなか〳〵骨が折れた。どうやら斯うやら掘り當てると、今度は一人の王者を見た。王の曰く「おれは漢の文帝だ。死ぬときに遺言して、おれの塚のなかには金銀珠玉を一切入れないことにした。この通りの始末だから、おまへに遣るものは無いぞ。」これから又探しあるくと、今度は二つの塚の列んでゐるのを見つけたので、大骨折りで先づ左の方の塚をあばくと、内には痩せ衰へた男が葬られてゐた。その男は微かな聲で「わたしは伯夷だ。おまへも知つてゐるだらう。わたしは周の粟を食らはずして、首陽山の下で餓死した男だ。おまへに遣る物などのあらう筈がないではないか。」と云ふ。行く先々がこの始末で、墓あらしの男も嘆息した。「こんなに骨を折つて、この始末では仕方がない。まあ、せめてもの賴みに隣の塚を掘つてみよう。」と行きかゝると、伯夷が再び弱い聲で呼びとめた。「又むだ骨を折ると氣の毒だから敎へてやる。隣はわたしの弟の叔齊だ。兄のわたしが此の體だから、弟のところへ行つたところで何うなるものか。」……。」

かう云つて東坡先生は笑つた。その人も思はず笑ひ出して立去つた。

◇宋の諸陵發掘◇

これは笑談どころではない、歷史上で有名の悲劇である。

元の至元廿二年八月、會稽縣の泰寧寺の僧宗允と宗愷は陵木を盜伐したといふので、守陵の者から訴へられた。その罪を免かれようとする爲か、二人の僧は揚總統に向つて、前朝の宋の陵墓には澤山の金玉異寶が埋めてあると云ひ、その發掘を勸めたのである。揚總統も慾心の淺くない人物であるから、遂にその勸誘にしたがつて、大勢の大工や人夫を狩り出して、宋の寧宗、揚后、理宗、度宗の四陵を片端から發掘した。頗る大規模の墓あらしで、その獲物の莫大であつたことは云ふまでもないが、表面は彼の盜伐問題から寺領の境界を檢查するといふことで胡麻化してしまつたのである。その時

に理宗の頭は砕かれたといふ。それに味を占めて、楊璉眞伽と其僧二人は更に孟后、徽宗、鄭后、高宗、吳后、孝宗、寧宗、楊后、光宗の陵を發掘し、あらん限りの寶貨をうばい取つて、その骸骨を投げ捨てた。その暴虐實に言語道斷であるが、誰も制するものも無かつた。

時に一人の義士がある。それは宋の太學生林景曦といふ人で、彼は乞食のすがたに身をやつし、竹籠を背負ひ、竹枝をついて、墓あらしの現場へ忍び込み、ひそかに寺古の僧に賄賂を贈つて、高宗と孝宗の二帝の遺骨を竹籠に收め、自分の故郷の東嘉に持ち歸つて、厚く埋葬したのである。彼はその事を紀するために絶句十首を作つた。そのうちでも「橋山弓劍未成灰、玉匣珠襦一夜開、猶記去年寒食日、天家一騎捧香來」の一首が最も悽惋として後世まで傳へられてゐる。

さて一方の墓荒しの一黨はどうしたかと云ふと、彼等のあひだには當然起りさうな贓品分配の悶着を生じた。楊僧の一人宗愷は好い加減のところで諦めて、貰れるだけの物を貰つておとなしく引き下つたが、他の宗允の方はなか〳〵承知しないで、飽までも分配の不平を鳴らしてゐた爲に、楊總統も業を煮やし、結局彼を陸本福代の座で杖殺してしまつた。

◇掘塚奇報◇

淸の袁隨園の「子不語」のうちに「掘塚奇報」と題して、左の怪談を掲げてゐる。

杭州の朱某は墓あらしを一種の職業として身代を作つた。その徒黨六七人あつて、日が暮れると皆それ〳〵に鋤や鍬を持ち出し、見あたり次第にそこらの墓をあらし歩いてゐたが、近來は思はしい掘り出し物が少く、いつも骸骨ばかりで碌な物も掘り當てないので、彼等も悄氣となつた。

「手あたり次第に掘るから失敗するのだ。今度は占つてみた上で、取りかゝることにしようではないか」

彼等は乩盤を設けて占ふことにした。乩盤とは盤の上に沙を敷いて錐を立て、一人がそれを捧げてゐると、錐が自然に

動き出して、沙の上に文字を記すといふ一種の方術である。すると、その盤にあらはれた神は宋の忠臣岳飛の靈であつた。岳忠武ともあるべき人物が冢あらしなどに好い智慧を貸してくれる筈がない。頭領株の朱は頭ごなしに叱り付けられた。

「汝、塚をあばいて死人の財を取る、その罪は盜賊にまさる。若し改悛せざれば、われ汝を斬らん。」

朱は大に驚いて、それから一年餘りは稼業を休めてゐた。併しそれでは徒黨の者どもが食へないので、彼等は朱をそそのかして、再び乩盤の占ひを試みさせると、今度はなんだか判らない神が降つて來て、我は西湖の水仙なりと云つた。さうして、保叔塔の下に石の井があつて、その井の西に富人の墓がある。それを掘れば千金を得べしと教へた。

彼等は喜び勇んで、その晩すぐに指定の場所へ出かけたが、どこにも井戸らしいものが見えないので、頻りにそこらを尋ね廻つてゐると、何者かが朱の耳に囁くやうに聞えた。

『塔の西に柳の木がある。その下が井戸だらう。』

念のために柳の下を尋ねてみると、成程そこには井戸らしいものが見出されたが、それは潰れた井戸を埋めたのであつた。三四尺ほども掘り下げると、果して大きい石槨があらはれたが、非常に大きく重いもので、六七人の力では何うしても引きあげることが出來ない。かれらも途方に暮れてゐるうちに、不圖思ひ出したのは、淨土寺の僧には禁枠の呪といふのを行ふ者がある。その呪文を百遍唱へると、棺はおのづから開くと云ひ傳へられてゐる。そこで、彼等はその僧を迎へに行つて、一切の事情を打明けると、僧もその分け前を貰ふ約束で早速に出て來た。かれも一個の妖僧たることは勿論である。

僧は彼の石槨に對して、型のごとくに呪文を百遍唱へ終ると、果して石槨は自然に開いた。と見る間もなく、長さ一丈餘もあらうかと思はれる一本の青い腕がぬつとあらはれて、忽ちに彼の僧を引つ摑んで槨のなかへ引き摺り込み、ばり〳〵と引き裂いて啖ふのである。これには流石の朱も蒼くなつた。他の徒黨も生きたる心地はなく、命から〴〵で四方へ逃げ

散つてしまつた。それにしても餘りに奇怪であるので、明る日そつと樣子を窺ひにゆくと、ゆうべの場所に井戸などは無かつた。彼等は何かの妖魅にたぶらかされたのである。

併し寺僧がゆくへ不明になつたのは事實であつた。寺の方では朱が呼び出しに來たのを知つてゐるので、遂に官に訴へることになつて、朱は召捕られた。彼は罪の免かれ難きを知つて、獄中で縊死した。

こんなことを書いてゐたら際限があるまい。鬼を談ずれば鬼至るといふから、筆者も妖魅にたぶらかされない中に、こゝらで談鬼の筆を擱くことにする。

編輯者雜記

×

校了にした時には、いつでも好い雜誌が出來たと自信してゐる。本號は尙更さうだ。〆切ると共產黨の記事解禁となる。特別議會切拔けには都合がよいかも知らぬが、雜誌には意地の惡い事だ。突差に「共產黨檢擧と勞農黨解散事件」を集める。それにしても卷頭論文と「世界的怪物」の記事がチヤンと用意してあつたことは編輯者の周到さを見て欲しいと思ふ。

×

序に好意ある一愛讀者（住所が判らなくて御禮狀も出せないが）の忠言に感謝したい。

×

谷孫六君はいよいよ三月廿一日夜九時十五分で元氣好く東京を出發した。出立が豫定より少し晩れたために本號には第一回の通信が間に合はなかつた。讀者諸君にお斷りしておく。その代り六月號には屹度間に合はせるからそれを樂しみにして頂きたい。

○

共產黨檢擧事件に次ぐ勞農黨に對する解散命令は各方面に大なる衝動を與へた。之れを以て政府の一大彈壓なりとして飽く迄抗爭せんとする勞農黨と、寧ろ此度の處置を遲きに失するとして政府の態度を當然なりと論斷する者とあつて、當面の政局不安に絡んで早くも事件の重大性を暗示した。問題の今後の展開は今俄かに豫想を許さぬが、此度の事件の重大であればある程其重大性に對する研究考察は一日も忽せに出來ぬ。其對策に至つては一層重要であらう。本誌は最も緊切なる時事問題として、又此度の事件の最も根本的批判として「政治不安と社會不安の展望」の題下に諸家の意見を集錄すると同時に、當面の事件の考察論議に亦諸家の寄稿を煩はした。殊に卷頭論文として現政局と共產黨事件に對する猪俣氏の論策をいちはやく得たことは本誌の誇とする所である。共に刻下必讀の文字たることを疑はぬ。

△

各方面の不安動搖今日ほど甚しい時はない。この騷然たる事象に對し、吾々の批判こそ最も冷靜公正でなければならぬ。徒に過激に走らず保守に偏らず飽くまで嚴正な時代批評に終始して來た本誌の論調が最も重きをなす時である。而して本號の內容がその責務を果すに近きものであることを自負してゐる。本誌編輯上の中心が何處に在るか沈思して貰ひたい。

△

單に顏觸れだけでなく、その內容に於ても優に現代文壇の最高水準を示し得た本號の創作欄を私に誇りとする。各氏各々その持味を發揮しての傑作力作ぞろひである。殊に眞山氏の戲曲は想を練ること殆んど年餘、二百枚に亘る大力作で、氏の代表的傑作として殘るべきものである。

◇

大竹博吉氏の「世界の怪物ロシア共產黨の正體」は時を得た讀物である。少數の專門家の外には、眞の共產黨ロシアの內情を知る者は少ないであらう。殊に現に今日本でも共產黨事件が世の視聽を集めてゐる際、熟讀に値する文字である。

□

五月、一切が男性的躍進を初める。明るい朗らかな世界が開けるのだ。我々は此の三四ケ月の間に重苦しい塵埃の積つた古き衣を脫ぎ去てなければならぬ。靑葉の憂鬱などを感じてはゐられない。明るい朗らかな五月だ。

前東京高等師範學校教授 岡倉由三郎先生
東京帝國大學文學部教授 市河三喜先生
主幹

英文學の國民化遂に實現！註釋精細綿密 屢原文の分量を超ゆ

研究社

英文學叢書

豫約募集

大文學の滋味は斷じて原文に掬まれねばならぬ。コンマは感情のテムポ、ピリオドは思想のポーズ、嘗て如何なる名譯と雖も此微妙なる陰影を再現し得たものがあるか？ 切に薦む、英語を知るほどの人は直接英文學に親み給へ。研究社英文學叢書は此理由を以て古今英文學の戲曲・詩・小說・評論・其他の名篇大作に精緻無比の解說註釋を加へ以て我國民の鑑賞を容易ならしめた稀書、兩主幹初め擔當諸家は悉く斯學の權威者である。曩に三輯六十卷を頒つて普く學界讀書界の讃仰を聚めたが、更に玆に第四輯廿卷を編んで英文學一千年の集大成を實現し、併せて江湖の熱烈なる慫慂に應じ第一輯廿卷及總索引を提供する。冀くは全國英學者英學生諸賢、速に本叢書を得て更に弘く深き人生を味ひ、高潔なる紳士魂を永く培ひ給へ。

豫約申込期日 五月十日限り
第四輯廿卷 第一輯廿卷及總索引

會期 自昭和三年五月至同四年四月、一ヶ年に完結 各每月一卷又は二卷配本（總九千頁）

豫約申込 金壹圓（但最終回會費に繰入る）

會費 各輯每月拂 金四圓八拾錢 同一時拂 金五拾參圓

內容見本會則 贈呈

研究社英文學叢書部

東京麴町區富士見町六丁目 電話九段四〇二・四〇三 振替東京二八六〇一番

婦人

内容外観ともに大刷新を試み

五月號『都會の誘惑』

定價七十錢
郵税二錢
中央公論社

□都會生活の魅力……吉田絃二郎

□都會の誘惑と兒童の精神生活……山野ゆう

□博覽會を繞る誘惑の魔の手……實例をあつむ

都會の誘惑

酒井眞人……淺原六朗
西條八十……鈴木傳明
池谷信三郎……室生犀星
稻垣足穗……山田邦子
南部修太郎……村山知義

□女學校の修身教育批判……原田實 山田わか 稻毛詛風

□兒童映畫の問題……らいてう

□山川菊榮氏の戀愛論を難ず……高群逸枝

□或る少女の冒險……水野葉舟

□都會情調歌……杉浦翠子

□芝居の見方……三宅周太郎

□映畫百人傳……野口武美

□現代音樂家……小松耕輔

□うまく欺された話三篇

公論

て俄然讀書界の大好評を博せる本誌

□北川三郎さんの死（精進湖畔に愛人と情死した北川學士の死の眞相）……谷本初枝

醫學的美容法

◇皮膚…古宇田醫學博士
◇姿勢…田代醫學博士
◇眼……前田醫學博士
◇齒……高橋ドクトル
◇鼻……林ドクトル
◇毛髮…佐多醫學博士
◇音聲…鍋谷醫學博士

□流行作家が處女作を出した頃……
□鐵血宰相ムッソリーニ夫人……
□あの男（探偵小説）……水谷準
□春の憧憬（探偵小説）……木蘇穀
□エスペラントページ……石黒修
□母の死……島中雄作
□驛名掲示と國字問題……高信峡水

□野田爭議の眞相……坂水四郎・特派記者

□土に癒ゆる（小説）德田秋聲
□男舞（戯曲）坪内士行
□第七の天（小説）牧逸馬
□憂鬱な愛人（小説）松岡讓
□私達が別れるまで……諸口十九・筑波雪子

□映畫のページ
□京都婦人の美顔法……
□女學生時代の化粧法……
□廢物利用の兒童服……
□季節向きの野菜料理……
□フランス風の晩餐獻立……
□空腹な愛人（漫畫）

三省堂英和大辭典

各專門大家百余氏執筆

注文殺到
十萬突破
全國諸校指定濟

學界翹望の書！愈よ白熱的賣行

本書成つて英語の國譯始めて完し
百冊の辭書もこの一冊に及ばず
英語辭典界の最高峯!!!

前例を破つた値段
三十萬部限り提供 特價五圓五拾錢（定價七圓）書留送料卅六錢

裝幀 新型四六版最上クロース製
總金箔押・箱入
頁數二・七〇〇語數二六〇・〇〇〇
挿畫四・〇〇〇熟語一一〇・〇〇〇

劃時代的內容

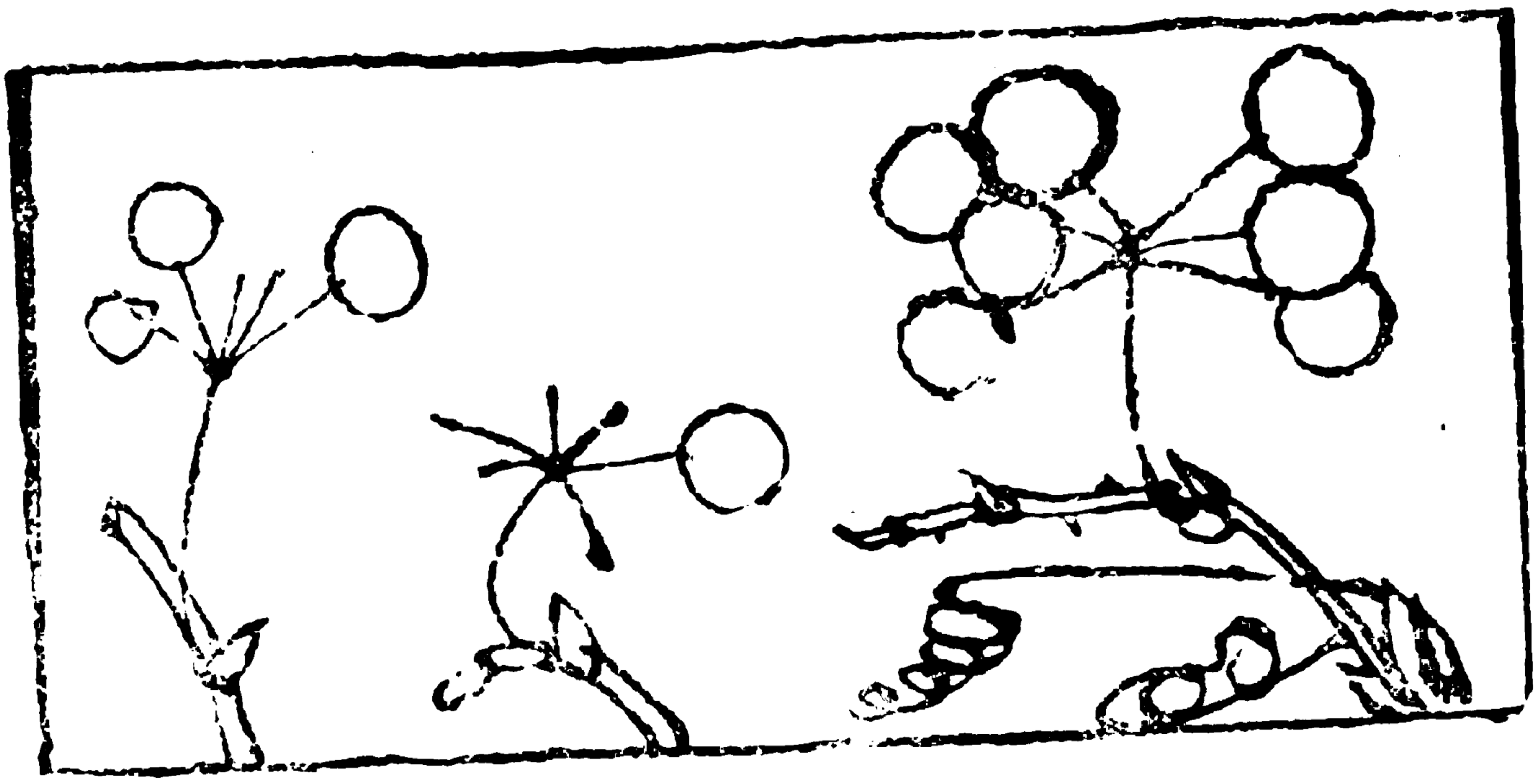
1 勞することなく、直ちに求むる個所へ眼がとゞく最良唯一の工夫
2 廣き範圍に亘り專門語を蒐集し正確なる譯語を附して區々に流れた在來の譯語を統一し、ここに我國の標準譯語を示す
3 挿畫四〇〇〇、いづれも典據あるものに依り、明瞭適確に説明を補足し最新語のすべてを加へ空前なる語數を擁し、求めて得られない言葉は一つもない
4 日常會話はもとより、文藝上のもの、各科專門的のものに至るまで、一切の熟語を網羅し、宛然一大熟語辭典の資格を兼ねる
5 發音は一見明瞭・語原の重要なるものはこれを示す

株式會社 三省堂 東京麹町區大手町 振替東京三一五五五

三省堂大阪支店 大阪南區順慶町 振替大阪八一三〇〇

內容見本進呈

資.B44



みんな出鱈目

正宗白鳥

人物

前枝たより（二十九歳くらゐ。頭髪も服裝も、人に目立つほどの新しさを現はす）

白川さく子（たよりの姉。三十歳くらゐ。白川洗吉の妻。妹よりも地味な風をしてゐる）

村上順三（實は高見敬助。三十歳くらゐの利口さうな顔した男）

ある男（顔は四十くらゐの年齢として見える。しかし、年齢に拘泥しない服裝をしてゐる）

白川洗吉（四十歳くらゐで、その年齢に相當した身裝をしてゐる）

時節は初春。

（一）

あるホテルの一室。壁やカーテンなどが緑色で色取られてゐる。窓は全く鎖されて、電燈が點いてゐる。

諸枝たよりといふ、心にも身體にも若さを有つてゐる女が、しどけない様でダンスの獨稽古をしてゐる。時々、姿見鏡に自己の姿態を映しながら微笑を洩らしてゐる。他人の傍觀を意識しない自己惑溺のダンス獨稽古が暫く續く。

扉のノックを聞きつけて、思はず立竦んで、「どなた？」と聲を掛ける。

「ちよつと待つて下さいね」と云つて、慌だしく衣服を着替えて、さつきとはちがつた、澄ました顏して扉を開ける。

たより　いらつしやい。

さく子といふ、たよりの實姉で、白川洗吉といふ學校教師に嫁してゐる、いくらか世疲れのした女が入つて來る。

さく子　あなた一人？（と、部屋の中を見て、外衣を脱ぎながら）今夜のダンスは見に來られなくなつたから、今お斷りに來たのよ。

たより　さう？。どうせそんなことだらうと思つてましたわ。……さあ、お掛けなさい。今はあたし一人なのよ。ゆつくり遊んでいらつしやいな。

姉妹は、差向ひの話に適したやうな位置を取つて椅子に腰をおろして、互ひに何かを思つてゐるやうに表情で顏を見合せる。

少しの間、言葉が止切れる。

さく子　村上さんは？

たより　今朝早くから出て行つたの。方々駈けずり廻つてるんでせう。無論お金の工面よ。（ふと、笑ひをこぼしながら）事によつたら、あなたのところへもお金の無心を云ひに行くつもりかも知れないことよ。

さく子　さう云つて拗ねてるつもり？　村上さんはあたし達の顔を見たゞけでさへ、すうつと逃げつちまふくせに。

たより　あの人、そんなに氣が弱かないのよ。（姉を責めるやうに云ふ）

さく子　誰れも、あの人が氣が弱いとは思つてやしないさ。

たより　あなたや義兄さんを嫌つてる譯でもないのよ。

さく子　（今度は、姉の方で反抗するやうに）嫌はれたつて構はないしね。

たより　さうでせうとも。村上なんかは取るに足らない人間なんだから。

さく子　あたし、さういふ意味で云つたんぢやないの。

たより　どういふ意味でもいゝわ。……あたし、誰れに嫌はれても構はない人間に成り切つたらいゝと思つてゐたよ。……（ふと、打解けた調子に變つて、姉の顔を見詰めて）それで、今朝姉さんがあたしに話したいことつてなあに？　またお父さんに頼まれて、あたしに忠告しにいらしつたの？

さよ子　へえ。（空呆けて）たよちやんは、あたしがそんな用事をもつていつも訪ねて來ると思つてゐるの？

たより　でも、何だかさうらしいんですもの。……その用事でなくつても、何か用事があるんでせうから、まづ、その大切なお話から片付けてしまひませうよ。

さく子、沈默。

たより　あたしが二三日前から東京に來てゐて、このホテルに泊つてゐることを、お父さんや兄さんは、誰れかゝら聞いて

知つてるのね。

さく子　これはどうだか。……あたし、この頃暫く本郷の方へは顔出しをしないから、あなたが此方へ來てることも、あたしから知らしやしないの。

たより（怪訝な顔して）さう？

さく子　あたしは、今日自分の事であなたに相談したいことがあるの。

たより　姉さんの事で？　珍らしいわね（氣を落して）ぢや、直接あたしに關係したことぢやないのね。

さく子　あたしがあなたの生活に餘計な干渉をしようと思つてやしないことは、あなたにはよく分つてるぢやないの。

たより　でも。……

二人とも少しの間沈默。

さく子　あたしね。當分何處かへ身を隱してようと思つてるのよ。さうでもしなきややり切れないの。家の中がうるさくつて。……あなたのやうな氣儘な、のび〳〵した氣持で日を送つたことは、一日だつてなかつたんですからね。

たより　……姉さんは無斷でお家を出ようと思つてゐて？

さく子　あたし、誰もゐないところで、眠るだけでも飽きるほど眠りたいと思つてゐるの……だつて、この二三年以來、あたしは思ふ存分に睡ることさへ出來なかつたぢやないの。

たより　……年を取つた舅姑さんが二人に、小姑が二人、おまけに小姑の一人は出戻りさんだから、大抵ぢやないわね。……でも、姉さんの無斷の家出は大變な事件になりやしないこと？

さく子　でも、あたしはよく考へて見て、當然のことのやうに思つてるのよ。このまゝでゐちや、あたしはぺちやんこにひしやがれてしまひさうなんだもの。

たより　それで、當分何處に隠れてようと思つてゐらつしやるの？　本郷へ？

さく子（氣色ばんで）誰れが本郷なんかへ。……お父さんの家なんかであたしを匿まつて呉れるか呉れないか、考へて御覧な。

たより（甚だ同感して）さうねえ。……ぢや、大森の兄さんのお家は？

さく子　あんな家に三日でも二日でも一日でもゐられるものですか。貨物自働車に一杯手土産を運んでたら、どうだか分らないけれどね。

たより　ぢや、澁谷の叔母さんのお家は？　あしこには人目をよけて住むにいゝ離れがあるのだから。

さく子　お止しよ。眞面目くさつて何をお云ひだ？。兄弟や親類の家を一軒々々數へて見たつて、何の足しにもなりやしないさ。あなた自身の經驗でよく分つてゐさうなものだ……あたしはたよちやんにだけ打明けといて、温泉場へでも行かうと思つてるの。箱根か熱海か。少し遠くつても修善寺へでも行かうか知ら。

たより　姉さんのことだから、旅費は有餘るほど持つてるんでせう。

さく子　あたしがそんなにたつぷりしたお小使を持つてる筈はないぢやないの。……でも、直きに親類に泣きつくやうな見つともない眞似はしないつもりよ。

たより（ふと勢ひよく）おや、このホテルに泊つちやどう？。あたし、決して姉さんの秘密は洩らさないことよ。

さく子　さうねえ。（珍らしさうに部屋の中を見渡す）

たより　女一人で温泉場なんかへ行くのは不安心ぢやない？

さく子　そんなことを危かしがるの？

たより　でも……警察へ捜索願を出すやうなことはないでせうか知ら。

さく子　そんな氣遣ひはないの。
たより　義兄さんは學校の先生だから、家庭の不和が新聞に出されたりして、表沙汰になつて、世間的名譽に傷がつくのを恐れるのね。本郷のお父さんのやうに。
さく子　それもさうだけれど、あたしから、よく筋道の立つた置手紙を書いて置くし、それにあたしの保證人になつて呉れる人を一人こしらへておくつもりなんだから。
たより　その保證人はあたしぢやないこと?。
さく子　まさか。
たより　あたしには人の保證人になる資格はないんですものね。………あたしの保證人になつて呉れる人もないんだし。……そんなことはどうでもいゝとして、このホテルに隱れてゐてもいゝと思つてるのなら、今直ぐにでも空部屋を訊いて上げてよ。……あたし、姉さんの家出を勸めはしないけれど。
さく子　あたし、一應家へ歸つて、自分の物を整理して、身仕度をして來なきやいけないの。
たより　そんなことしてもよくつて?
さく子　大丈夫よ。あたし、彼の人に氣取られるやうなへまな眞似はしないことよ。
たより　本當に? ……家出する人が一度歸つて出直すつてことあるものか知ら。
さく子　疑ひ深いのね。……とに角、あたしの決心を人に洩らしちやいけないよ。
たより　それだけは大丈夫だよ。

妹の確答するのを見て、さく子が座を立ちかけると、そこへ、たよりの同棲者である村上順二といふ、三十歳くらゐの才子らしい男が、西洋菓子の入つてゐるボール箱を提げて、何の豫報もしないで、扉を開けて入つて來る。

その瞬間、二人とも意外な感じを起して、互ひに間の惡さうな様子を現はす。

たより　大變お早かつたのね。（咎めるやうに云ふ）

順三　忘れ物があつたから、ちよつと歸つて來たのだ。直ぐにまた出掛けるよ。

彼れは、妻に向つて會釋をしながら、さく子に挨拶をする。

さく子　暫く御無沙汰しました。お忙しくていらつしやるの？（なつかしく云ふ）

順三　さうでもありません（よそ〳〵しく云つて）ちよつと失禮（と云つて、さく子の側を通つて洗面所へ行きかける）

さく子　あたし、急ぎますから、これでお暇しますわ。

彼女は、二人のどちらに對するともなく云つて、戸口に向ふ。

たより　あたし、待つてゐてよ。何處へも出て行かないで。

扉の側まで見送る。さく子、何か小聲で云ひながら出て行く。

たより、元の座に戻つて、ボール箱を開ける。順三、洗面所から出て來る。

たより　このお菓子はあたしに食べさせようと思つて買つて來て下すつたの？　おいしさうね。

順三　いや、それは伊藤さんへ持つて行くんだから食べちやいけないよ。

たより　こんな安つぽい手土産はお止しなさいね。……あたし頂くわ。今朝からよく運動してゐたから、お腹が空いちやつた。（西洋菓子を摑んで、貪るやうに口に入れる）

順三　そんなに腹が減つたのなら、みんな食べつちまふさ。（自棄らしく云ふ）

たより　怒つたの？　お菓子を一つ食べたくらゐで怒られちやたまらないわ。

順三　下らないことを云ふもんぢやない。……そんなことよりも、お前の姉さんは何しに來たの？　僕の顔を見ると、逃

げるやうに歸つて行つたところをもつて見ると、何か秘密の用事があつたんだね。
たより　えゝ、大變な用事があつたのよ。
順三　例の忠告か。これまでとは違つた話を持つて來たんだね。どうもさうらしかつた。
たより（食べかけの菓子を机の上に置いて、眞面目な態度を取つて）さうらしかつたなんて己惚れちや駄目よ。
順三　妙なことを云ふぢやないか。
たより　あたしも己惚れちや駄目なのよ。身内の人がいつまでもあたしのことを氣にして、いろ〳〵に構つて呉れてると思ふのは、己惚れかも知れないわね。
順三　若しさうだつたら、煩くなくつていゝぢやないか。お前は先日までよくさう云つてたぢやないか。
たより　でも、身内から完全に除けものにされたと思ふと、淋しくないこともないわね。
順三　ハヽヽ。弱いことを云つてる。お前にも似合はない。
たより　ところが、姉さんの話を聞いてるうちに、あたしにも元氣が出たのよ。……だつて、痛快なことを聞いたんですもの。
順三（思はず乘出して）痛快なことと？
たより　とても痛快なことなのよ……でも、何だか當てにならないやうに思はれないこともないの。
順三　早く云つて御覽な。自分だけの獨合點ぢや駄目だよ。
たより「姉さんがね。白川家の人に無斷で家出をするんですつて」（改つた口調で、これだけを重々しく云つて）あなたなんかは何とも思はないでせうけれど、あたしだけには非常に痛快に思はれるの。姉さんはあたしにかぶれたのよ。今まであたしに意見をしてゐながら、心のうちではあたしを羨んでたことが分つたのよ。あの見識ぶつた高慢ちきな白川の

家の人がどんな顔をするか、思つても気味がいゝぢやないの。子供の幸福よりも世間の人の思わくを気にしてゐるあたしのお父さんがどんな顔をするか、思つても気味がいゝぢやないの（さも愉快さうにへらへらと笑ふ）

順三（困らなさゝうに）何だ。僕にはちつとも面白くないことさ。

たより　でも、あなたの利益になることもありさうなのよ。……姉さんは、今日のうちに家出をして、このホテルに隠れてゐたいと云つてゐたわよ。

順三（顔を顰めて）へえ、此処へ来るのか。

たより　姉さんはお金は随分持つてゐるの。あたしちやんと見破つてゐるわ。

順三　他人の懐中が当てになるものか。

たより　あなただつて他人の懐中を当てにして飛廻つてゐるくせに。

順三（腕時計を見て）さあ、僕はまた出掛けなきやならない。午餐は他所で食べて来るかも知れないよ。

たより　晩の時刻を忘れちやいやよ。踊りはあるし、姉さんは来るし、大変なんだから。

順三　この頃は僕も忘れつぽくなつていけない。陽気の加減か知ら。

彼れは、デスクの上を捜して、一つの書き物を取上げて、ポケットへ入れて出て行く。たよりは、順三の方へは目を留めないで、客間を見詰めて物を考へてゐる。やがて、椅子に腰をおろしたまゝ、足でダンスの稽古をする。が、その足の運動は次第におろそかになる。

ふと、外出を決心したらしく、力を入れて立上ると、そのトタンにノックが聞える。

「お入んなさい」と、声を掛けると、ある男が扉を開けて顔を出す。

「あの。……高見さんのお部屋はこちらで御座いましたね」

「いゝえ、違ひます」

「どうも失禮しました」

その男、出て行く。

「間抜け野郎」と、たよりは獨言を云つて、出仕度をしてゐると、ノックとゝもに戸が開いて、さつきの男が再び顔を出す。

ある男　こちらのお部屋は二十二番で御座いましたね。

たより　えゝ、さうですわ。（反抗的な目で相手を見詰める）

ある男　昨日銀座で高見さんにお目にかゝつた時に、ホテルの二十二番の部屋に泊つてると仰有つたのですが。

たより　それはあなたのお間違ひぢやないでせうか。わたしどもは高見ぢや御座いませんの。

ある男　わたくしの聞き間違ひぢやありません。たしかに二十二番と仰有つたのです。二度も念を押して仰有つたのだから、高見さん御自身の思ひちがひでもありますまい。

たより（多少の恐怖を感じながら）帳場でお聞きになると分りますわ。わたしどもの姓は高見とは違ひます。

ある男　御主人がゐらつしやると分るんですが、只今は御不在なんですね。

たより　ゐてもゐなくても、あなたのお訪ねになる方とは違ひますわ。

ある男　若しもわたくしの間違ひだつたら、お詫びのしようも御座いませんが。……

たより　どうぞ帳場でよくお聞き下さいましな。

ある男　ハテナ。

彼女がその男の前に立つて追立てるやうな態度を見せる。しかし、その男は頑なに動かないでゐる。

たより　どうぞお引取り下さい。

ある男　（いやな笑ひを洩らして）わたくしは今日のうちにどうしても高見さんに會つてお話しなきやならない事情が出來たのです。お出先がお分りにならなければ、高見さんのお歸りになるまで、このお部屋でお待ちしてゐませう。

たより　あなたは失禮ぢやありませんか。他人の部屋へお入りになつて。……これほど譯を云つてもお歸りにならないのなら、帳場へ知らせて、誰れかに來て貰ひます。

ある男　へゝゝ。わたしは狂人じやありませんよ。これでも高見さんの友人なんですよ。

たより　高見ぢやないと、これほど申上げてるのに。

彼女は、興奮して、卓上電話の側へ駈寄る。それと同時に、電話の鈴が鳴る。彼女は受話器を耳に當てる。

たより　モシ／＼。……あゝあなたですか。……丁度よかつた。今此方へどなたかいらしつて、あなたを高見といふ方と間違へて、どうしても此處で高見さんに會つて行くと云つて、あたし困つてますの。

彼女の言葉の終らないうちに、ある男は傍へ寄つて來て、「高見さんから掛つて來たんですか。丁度よかつた。わたくしが直接にお話しませう」と云つて、奪ふやうに彼女の手から受話器を取る。

ある男　ヤア、高見さん。昨日は失禮しました。……さうです……僕は今夜の汽車で西の方へ出掛けなきやならないので、その前に是非あなたにお會ひしたいと思つて、只今此方へうかゞつたのですが、あなたは何時頃ホテルに歸つていらつしやるでせうか。……左樣ですか。……ぢや、お言葉に從つてホテルでお待ちすることにしませう。それから。……アツ、電話が切れちやつた……

ある男は、電話でかう云つたあと、たよりを顧みて、

あなたは高見さんにお話しになることは御座いませんでしたか。高見さんはおそくも三十分後には歸つていらつしやるらしい

るさうです。……わたくしが、このお部屋にゐちやお邪魔になりますでせうから、玄關の廣間で高見さんをお待ちしてゐることにいたしませう。

たよりは、さつきから呆氣に取られた樣子をしてゐたが、ある男が出て行かうとすると、

たより　あなたにちよつとお訊ねしたいことが御座いますの。まあ、そこへお掛け下さい。

ある男　ぢや、わたくしはまだこのお部屋にゐてもよろしいんですか。

たより　あなたはどうして、村上のことを高見々々と仰有いますの？

ある男　村上ですつて？　わたくしはさういふお名前は知りませんね。高見さんがいつの間にか、姓をお變へになつたんですか。御當人からまだ承はらないんですが。……

たより（驚いて）今でも昔でも、村上に高見といふ姓が別にあつたつてこと、わたし少しも存じませんでした。

ある男　永年もお目にかゝらなかつた間に、高見さんは、この頃御養子にいらつしやつたんぢやありますまいか。それで姓が變つたんぢやありますまいか。

たより　いゝえ、そんなことは。……

ある男　尤もあの方は、二つや三つの變名は有つてゐさうに思はれないことも御座いませんね。さういふ趣味を有つてゐらつしやるんですね。……しかし、高見といふ姓は、あの方の大昔からの姓なので、それだけは間違ひないです。

たより　ぢや、あなたは何年ほど前から、高見を御存じでゐらつしやいますの？

ある男　左樣さ。……もう十年か十五年も前から知つてゐる筈ですよ。いや、もつと前から知つてゐたかも知れませんね。しかし最近は滅多に會はなかつたので、昨日往來でパツタリ行遇つたのが、實際不思議な緣のやうに思はれます。

たより　それで、今日は高見に特別な御用がおありになるんですね。

ある男　まあ、さうです（ふと、氣づいたやうに立上つて）まだ御懇意でもないあなたに餘計なおしやべりをしてちやいけない。あちらへ行つてゐませう。

たより　わたし、も少しお訊きしたいことが御座いますの。あの高見は家柄のいゝ財産のあつた關西地方の舊家に生れたので御座いませうか。

ある男　さあ。何とお答へしていゝかな。（と、氣のない返事をして）それよりも、あなたは高見さんとどういふ御關係でおありになるんですか。

たより（侮辱を感じたらしく）それは、高見に直接お聞き下さい。

ある男　成程、さうですね。……ぢや、わたしはあちらでお待ちしませう。……いづれ後ほど。

ある男は會釋して出て行く。

たよりは、見向きもしないでゐる。そしてあとで、「馬鹿野郎」と叫んだが、意氣銷沈して、椅子にぐつたり倚掛つてゐる。暫くして、

（幕）

（二）

その日の午後。

日比谷公園の一隅。風が荒く埃が烈しく、鬱陶しい光景を現はしてゐる

いろ／＼な人間が通つてゐる。その後から、順三がある男と連立つて現はれる。

順三　かう埃が強くつちやたまらない。ここで一休みしようか。ここは木陰だからいくらかいゝだらう。

ある男　あなたも物好きだ。ホテルの部屋を締切つてお話をなされればいゝのに。わたしはどう間違つたつて、あなたに乗

びついて、あなたの喉を締めたりする人間ぢやありませんからな。

順三　どうだか分らないね。

ある男　へゝえ。さう疑つた日にや、どちらがどうだか分りやしない。あなたの方に一層危険性が多いかも知れませんよ。……兎に角、わたしはさうお手間は取らせないつもりです。

順三　まあ、ここへでも腰を掛けよう。

ベンチの上に腰をおろす。ある男もそれに倣ふ。

順三　君の顔を僕の同棲者に見せたくないし、君の話は尚更聞かせたくないと思つたから、こんなところまでわざ〳〵君を引張り出して来たのだ。

ある男　へゝゝ。暫くお目にかゝらなかつた間に、あなたは大変臆病になりましたね。わたしの話を傍の人に聞かれたつていゝぢやありませんか。わたくしはあなたを脅迫しに来たんぢやなし、お金の無心を云ひに来たのぢやなし、……わたしは、いつあなたにお目に掛つても、好意を有つてゐなかつたことはなかつたぢやありませんか。

順三　僕だつて、昨日君に会つた時には、久振りでいゝ所で会つた、君の知恵を借りたいと思つたのだが、うつかりして、君に注意しとくのを忘れたのだ。同棲者の嫌疑を受けるやうなことは云つて貰ひたかなかつたのに、大しくじりをやつた。

ある男　そんなことが気になりますかね。……同棲者と云つて、あの女はあなたの奥さんぢやなささうですね。わたしは一目見てさう思ひましたから、敬意も表さなかつたのですよ。

順三　（叱るやうに）それだからいけないんだ。

ある男　へえ。……わたしの方から云ふと、あなたも、いつの間にか、文化的になつて、西洋風のホテルなんかへ婦人を

見込んでいらつしやるのが、少し擽つたく思はれたのです。

順三　君がそんな氣持でゐるから、あしこでは君に會へなかつたのだ。君が不用意な事をしやべつて、僕の同棲者を傷けやしないかと氣になつてならなかつた。……君は、僕が歸つて來る前に餘計なことは云はなかつたらうね。

ある男　いや、なんにも。……しかし、あなたがそんなことを氣になさるのは意外ですね……へゝゝ。（卑しい皮肉な笑ひ）

順三　いやに冷かすぢやないか。薄つ氣味の惡い君の笑ひ聲を聞くのも久振りだが……君は相變らず獨身らしいね。獨身で、いよ／＼金に行詰つた時にや、芋の皮を噛つて水ばかり飲んで平氣でゐられる人間だから、僕の今の氣持は分るまい。

ある男　いや、わたしは一目見て分つたつもりだ。……わたしの知惠と度胸は昔からよく知つてゐらつしやる筈だが、暫くお目に掛らなかつた間に、物忘れをするやうにおなんなすつたね。へゝゝ。

順三　（おとなしく同意して）物忘れはするやうになつた。

ある男　文化的におなんなすつても、懐中工合は有福ではなささうですね。

順三　その通りだ。そのために氣力が衰へて忘れぽくなつたのかも知れないよ。

ある男　ハテナ。貧乏をそんなに苦にするやうなあなたぢやなかつた筈だが。……お貯へがなくなつたにしろ、金はそこら中に轉がつてるぢやありませんか。わたしがお手傳ひして、少し黃金の採集に取掛つちやいかゞでせう？

順三　昨日さう思つて歩いてゐると、パツタリ君に出會つたのさ。

ある男　それはあなたの御運がよかつたのですよ。わたしは今夜の急行で關西へ出向くことになつてゐました。さうすると、當分お目に掛る機會は得られなかつたのですからね。

順三　君には益々うまい仕事があるんだらうね。こんな不景氣な世の中にでも。

彼れは、さう云ひながら、相手の、可なり身窄らしい服裝に目を注ぐ。

ある男　それは、どんな世にでも喰ひはぐれのないのは、わたしが生れながらに持つてる一得でさ。

順三　知らない人間は、君の服裝を見て、君の腹の中の價踏みまでするかも知れないが。……

ある男　ハヽヽ。……お互ひに忙しいのに、詰らない話をしましたね。「時は金だ。」下らない話は切上げて、わたしがあなたにお頼みしたいことを、短刀直入に申上げませう。わたしは、あなたから紹介狀を二三通頂きたいんです。それも、名刺の端つこへ、何々を紹介す、御引見下されたしと、通り一ぺんの文面を書いただけぢやいけませんよ。

順三　僕の紹介狀が役に立つのかい。君のお役に立つのなら、そんなものは何枚でも書いて上げるが、全體僕の紹介狀を何處へ持つて行くのだ？

ある男　それが、宛名は除いて書いて頂きたいんです。なに、御自分でお書きにならなくつても、あなたのお許しさへ頂いたら、わたしが必要に應じて、自分で勝手に書きますよ。

順三　それもいゝだらう。しかし、君は僕の身體にまだ世間的信用が殘つてると思つてるのかい。

ある男　ところで、世間は狹いやうで廣いものでね。關西地方ではあなたを高見敬善の遺族として買被る人間がありさうですよ。

順三。ハヽヽ。君は知惠者だと思つてゐたら、案外お目出たいんだね。今日の時世は人間が目敏くなつて、實力のない空つぽの人間には巾を利かせなくなつたよ。暫く會はなかつた間に、君は大分時世おくれになつたやうだね……さう云へば、君の服裝もよつぽど古ぼけて見えるよ。

ある男　時世おくれ？……あなたも衣物で人を價踏する組だな。

順三「時は金だ。」こんな無用なおしやべりをしても爲方がないが、……

ある男　ところで、今わたしのこの古ぼけた平常服のポケットには、生憎持合せがないんですよ。だから、今直ぐと云つて、あなたの要求に應じる譯には行きませんがね。

順三　それは分つてるよ。

ある男　だけど、わたしがあなたに求めると同様に、あなたもわたしに求めるところがあるんでせう。

順三　まあ、さうだ。君の知惠でお察しの通りだ。

ある男　これ式のことに知惠も何も入りやしない。この忙しい世の中に訪問し合つたり、こんな埃つぽい風の吹きまくつてゐるロハ臺で、いゝ年をした男が話をし合つてゐるのは、どうせ腹の中は分つてゐますさあ。お互ひに相手に何かを求めてるにちがひはありませんさ。

順三　なる程、君のお説の通りだらうね。

ある男　どうです？　わたしと一しよに關西の方へお出でになる譯には行きませんか。

順三　さうは行かないよ。

ある男　あの方を打やつて他所へいらつしやる譯には行かないと云ふんですね。

順三　まあ、さう云つてもいゝね。君のやうな無經驗者には分るまい。

ある男　しかし、惚れた女と別れられないくらゐなことは、珍らしい話ぢやありませんね。わたしでも聞き飽きてゐますよ。經驗もへつたくれも入つたもんぢやない。……ところで、あなたはあの方と幸福な日を送つてゐらつしやるんですか。

順三　ちつとも幸福ぢやないね。以前、君に捨てられて馬鹿をやつてた時分の方がよつぽど面白かつたよ。

ある男（得意らしく）さうだらうと、わたしは一目見ると思ひましたよ。……ぢや、氣分を轉換するために、わたしに随いていらしつちやどうです？　……時代が變つても、わたしには、まだ子分もあるし、金の蔓を見つける腕も有つてま

すよ。……まあわたしの仲間に入つて御覽なさい。

順三　ところが、僕は探偵小説の英雄にはなりたくなかつたのさ。

ある男　それは御尤もだ。わたしだつてこの年になつちや探偵小説の端役は御免ですがね。しかし、あなたが通俗小說の人物を一役勤めて、お目度出たく收つてゐらつしやるのは可笑しいね。……どうせ兒戲持のくせに。（この言葉は威嚇の響きを有つてゐる）

順三　兒戲持？（今までになく、反抗的元氣をあらはして）そんな大きな聲で下らないことを云つちやいけないよ。

ある男　へゝえ。（平穩な聲で）兒戲持と云つたのは、あなたの昔の言葉の受賣りなんですよ。人間はみんな兒戲持見たいなものだ、おれ達ばかりぢやないと、昔のあなたが仰有つたことを、わたしは名言だと思つて思出しただけです。

順三　君は僕にも強いて昔のことを思出させようとするんだね。

ある男　古馴染のわたしに會ひたいと、たしかあなたは仰有つた筈だが。

順三　君の手でも借りなきや、どうにもならんと、ふつと思ひついたところだつたから（ふと反省したやうに）しかし、さう思つたのは、僕の迷ひだつたかな。

ある男（相手の面に鋭く目を注いで）わたしの手でも足でも、御遠慮なくおつかひ下さい。

順三　……まあ、考直して見よう。

ある男　さうですか。強いてお役に立てゝ頂かうとは思つてゐません。

順三　君は何でもやれさうな男だから、ふつと詰らんことを思出した。

ある男　分つてますよ。

順三　獨合點をされちや困るよ。

二人は、互ひにある事を想像しながら黙つてゐる。

ある男　あなたは、わたしに随いて今夜旅へいらつしやれば、それですべてが解決するんですけれど。……旅費は二人分くらゐは、わたしが持つてる。決してあなたに御迷惑は掛けません。

順三　この頃の僕を連れて行つたつて何の足しにもならないだらう。

ある男　ところが妙なものですよ。……惡魔でも女人がいるといふ譯ですか。わたしも獨旅は少し心淋しくつてね。

順三　自分で子分も崇拜者もあると、今云つてたぢやないか。何が心淋しい。……心淋しいのは今のおれのことだ。

ある男　だつて、あなたには、一ときも離れてゐられないやうな文化的婦人がおありになるぢやありませんか。

順三（相手の揶揄に動じないで、しみぐした口調で）僕が同棲者のためにどんなに屈託してゐるか、さすが君でも見透せないだらうね。

ある男　ハ、ア。

順三　何がハ、アだ？。

ある男　今までのおしやべりは、要するに無用なおしやべりだつたのですね。……あなたは、あの文化婦人と同棲して幸福でないと仰有つたのは、あの同棲者に不平があるんぢやないんですね。余のために屈託していらつしやるのが、第一の苦勞になつてもゐないんですね。わたくしといふあなたとは切つても切れない人間が、あなたの影のやうに世の中をうろついてるためなんですね。わたしだけはあなたの過去を知つてる。わたしだけはあなたの心の底の底までも知つてる。そいつがあなたを不幸にしてるんだ。

順三は、さして感動しないで黙つてゐる。

ある男　しかしね、高見さん。わたしは死にたくつても死ねない人間ですよ。人の首を捻ぢ切ることは出來ても、自分の

首に縄を掛けることの出来ない人間ですよ。

順三（冷然として）誰れだつてさうだよ。

ある男　だからあなたとわたしは、形と影とのやうになつて、この世に長生をするんですね。

順三　それで、僕の影を關西へ連れて行かうといふのかい。

ある男　わたしを信じてゐらつしやい。決してあなたの幸福のお邪魔はいたしませんよ。……どうしても邪魔になるのなら、あなたの力で、わたしの首を捻ぢ切るんだが、今のあなたには、さういふ力はない。さうですね。ハヽヽ。（あたりを見て）風がます〳〵ひどくなつたから、近所に人通りはなくなりましたよ。埃まみれでこんなおしやべりしてゐるのは、馬鹿ですね。

順三　お互ひに忙しんだ。

ある男　話の續きは歩きながらやりませう。

順三　さうだね。

　二人、一しよに立上る。

順三　君の今云つたことは出鱈目だよ。

ある男　若しさうだつたら結構ですね。

順三　君の旅行前に頼みたいことがあつたのだが、おしやべりしてゐるうちに、云へなくなつちやつた。

ある男　出立前に、も一度お目にかゝりませう。これはあなたのためだ。

（幕）

その翌朝。

同じホテルの一室。(一)の部屋よりも狭くて粗末である。寢臺は二つ並べられてゐる。その一つには、さく子が寢たまゝ目を開けてゐる。たよりは起きて、窓際に置かれた椅子に腰をおろしてゐる。

さく子　(いくらか身を起して妹の方を見て)たよちやんは昨夜よく眠れなかつたのね。夜つぴて寢床がガサ〱音だしてるのが、あたし氣になつてならなかつた。

たより　姉さんは憎らしいほどよく眠つてゐたわね。

さく子　三年も五年もの疲れが一度期に出たやうな氣持なんだもの。

たより　いゝ度胸ねえ。お家ぢや大騷ぎをしてるでせうのに。

さく子　どうだか。……あたし、家のことなんか、すつかり忘れてゐたのよ。……あなたが傍にゐて呉れたからこそ、あたしも昨夕安心して眠れたんでせうね。あなたとあたしと、姉妹で同じ部屋に寢床を並べて寢ることがあらうとは、あたし今まで想像もしなかつた。たよちやんはさう思はない?

たより　(さして感じないらしく)それは、あたしのやうな兄妹中の嫌はれ者が、姉さんのやうな模範的婦人と同居するのは、不思議なことに違ひないんですけれど。

さく子　(自分ひとりの樂しい空想に耽つてゐるやうに)あたし、本郷の家の二階で、あなたと一しよに寢起きしてゐた幼ない時分のことを、昨夕は夢に見てゐたのよ

たより　そんな夢が面白くつて?

さく子　あの時のあなたは、あたし達の話すことをおとなしく聞いてゐたわね。

たより　さうでしたわね。

さく子　あなたは幼い時分のことなんか思出さないでせうね。

たより　今はそんなこと思出す場合ぢやないわ。

さく子　どうして？　あなたは鎌倉にゐたりこんなホテルに泊つたり、氣儘勝手なことをして、今の生活が面白過ぎるから、昔のことなんかはどうでもいゝやうに思はれるんでせう。

たより　さうでもないわ。

さく子　あたし、何年となく、毎日同じ顔ばかり見て、つく〲いやになつてよ。お婆さんにお爺さんに、あの小娘に。それから出戻りさんの細つこい顔を見てるとうんざりしてよ。

たより　……毎日見てる顔の方が安心でいゝぢやないの？

その時、姉妹は顔を見合せる。

さく子　あなたはどうかしてるのね。あなたの顔は、不斷のたよちやんの顔とは思はれないよ。鏡を見て御覧なさい。

たより（姉の言葉を氣にしながら、わざと動じないで）村上が高見だつたりするんですもの。あたしの顔だつて變るのが當り前なのかも知れないわ。

さく子　名前なんか、人間の符牒だからどうだつていゝぢやないの。あの人が働き者で、お金をつくることが上手で、それでゐて、あなたを愛してゐるのなら、何も言分はないやうに、あたしには思はれるのだけれど。

たより　姉さんは人の事だと思つて、冷淡な口が利いてゐられるのね。

さく子　さう思つてるの？……大ちがひよ。……あたし、昨日までは、冷淡であつたかも知れなかつたけれど、昨夕あなたと一しよに寢てからは、さうでなくなつたのよ。今もあなたのことを親身で考へてるの。……だつて、あなたと姉妹

連れて、違つた土地へ旅行でもしてるやうに思はれるんですもの。夢を見てるやうなの。何とも云へないいゝ夢を見てるやうなのよ。

起上つて、妹と向合つて椅子に腰を掛ける。そして、晴々した顔して懐つこさうに笑つたが、妹は顔を背向ける。

さく子　どうしてさう御機嫌が悪いの？　たよちやんにも似合はない。

たより　姉さんは家出したことがそんなに面白いの？

さく子　あたしにはあなたの不機嫌な譯が分らないよ。

たより　あたしには、姉さんの元氣な譯が分らないわ。……少しの間あたしに構はないでゐて下さい。あたし、何だか、氣がくさ〳〵していけないんだから。

さく子　今朝はいつまでも一しよに寝てゐて、お互ひに昔の話をしようと、昨夕約束したぢやないの？

たより、煩さゝうにして返事をしない。

さく子　あなたはやはり、あの人と同じ部屋に寝てゐなきや安心してゐられないのね。……おや、行つてゐらつしやい。あちらの部屋へ。あたし、一人で正午時分まで眠直したいから。……そして、お午御飯を二人で仲よく食べませうよ。

たより　だつて、あたしは昨夕あんな荒つぽい口を利いたんですもの。あたしの方から訪ねてなんか行けないわ。

さく子　氣が弱いつたらないわね。家庭の破壊者だの、道徳の破壊者だのと、お父さんに云はれたあなたも、案外な弱蟲なのね。……おや、あたしが代りに行つて、あの人の様子を見て上げませうか。あちらでも夜も眠らないで、あなたのことを心配してるかも知れないわね。

たより　え、行つて頂戴。あたしが姉さんにお頼みしたとは云はないで。……

さく子　行くことは構はないけれど、あの人あたしを氣嫌ひしてるやうだから、打解けた話が出來るかどうか。

たより　いゝのよ〳〵。

さく子　あなたも現金ね。

彼女は急いで寢衣を脫いで、妹に手傳はせて他所行に着替える。

たより　あたしだつて、時々は、本鄕の家へでも、身内の家へでも行きたくなることがあるんですけど、此方から折れて出ちやおしまひだと思つて、勢一杯意地を張つてゐるのよ、………瘦我慢ね。

さく子　瘦我慢でもいゝぢやないの。あなただけはさうして瘦我慢を張つてる方がいゝのよ。みんなが親や兄の差圖通りになつてるのは忌々しいぢやないの。たよちやん一人が度外れの氣儘をしてるのを見て、あたしいつも溜飮を下げてるんだわ。

たより　さう思つてくれる人は、身内のうちで姉さん一人ね。

さく子は、間に合はせに衣服を着てしまふ。

さく子　ぢや、行つて來るわ。………こんなことが一日の用事だつたら、人間は氣樂でいゝわね。

たより　あたしが姉さんにお願みしたやうなことを云つちやいやよ。

さく子　分つてゐてよ。

さく子、出て行く。

たより、姉を目送したあと、ふと立上つて姿見鏡の前へ寄つて、おづ〳〵自分の顏を見詰める。そして、驚いて顏を外らしては見直す。元の椅子に戻つてガツカリしてゐると、電話が鳴る。

たより（受話器を手にして）モシ〳〵。あなたどなた？………白川のお義兄さん？　……えゝ、さうです。あたしが此方にゐることよく御存じね。………義姉さんが此處にゐらつしやる筈ですつて？　あたし存じませんわ。………だつ

て。……あなたが此方へ訪ねていらつしやるの？　……さう。……今直ぐですつて？

電話が切れる。「何のことだか分らない」と呟いて、元の座へ戻ると、さく子が入つて來る。

たより（狼狽して）姉さん、大變よ。今白川の義兄さんから電話が掛つて來たのよ。あなたが此處にゐると云つて、ちつとも驚いてなんかゐないんだから變よ。

さく子（不機嫌に）あたしがちよつと部屋を空けた間に電話が掛つたりして。運の悪いつたらない。

たより　あたしの方からは、姉さんが此處にゐるつてこと、決して云はなかつたの。でも、義兄さんの方で、頭から極めてかゝつてるんですもの。今直ぐに訪ねていらつしやるさうだから、あちらの部屋にでも隠れていらつしやい。あたし、姉さんは此方にゐないと云通してよ。（ふと氣づいたやうに）あの部屋では、まだ眠つてるの？

さく子　ボーイさんに訊くと、あの人は疾つくに起きて外へ出て行つたんだつて。

たより　あたしの部屋へ聲を掛けもしないで。……ひどい人ね。

さく子　あたしがゐるから遠慮したんでせう。

たより（不機嫌に）昨日、變な人が突然に訪ねて來たからいけなかつたの。あの變な人はあたし達の仲を割くために來たやうなものよ。

さく子（笑つて）あなた達の仲は、風來坊の變な人の差出口くらゐで仲を割かれるほどに薄弱なのか知ら。……だつて、親兄弟の意見さへ何とも思はないで我を通してゐたよつちやんぢやなくつて？

たより（不思議さうに姉を見て）姉さんは此處にじつとしてゐてもいゝの？

さく子　えゝ大丈夫よ。

たより　どうして？

さく子　あたしのことには構はないでゐらつしやい。……あなたの同棲者は、あなたと生活を樂むためのお金集めに、朝寢もしないで驅廻つてるのね。安心して樂みにして待つといでな。

たより　あたしは姉さんほどの度胸はないわね。

この時、ノツクが聞える。妹は不安な目付をしたが、姉は平氣でゐる。二人は聲をかけないでゐるのに、來訪者はソツと戸を少し開けて、顏を半分ほど出す。それは白川洗吉である。

洗吉は、たよりの顏を見つけると微笑してツカ〳〵と入つて來る。

さく子（不機嫌に）なぜこんなに早くいらしつたの？

たより　この近處で電話をお掛けになつたの？

さく子　あたし、飽きるほど眠つて、それから、久振りでたよちやんと、昔の話でもして氣保養をしようと思つてゐたのに。

洗吉　しかし、正午までには此處へ來る約束をしたのぢやないか。

さく子　あたし達、まだ朝の御飯も頂かないのよ。お正午まではまだよつぽどの時間があるんでせう。その時計を見せて御覽なさい。

夫妻互ひに相近づく。さく子、夫の腕時計を見る。

さく子　まだ十時前ぢやないの？

洗吉　まあ、いゝさ。（空いてゐる椅子に腰をおろして）おれも、今日は日曜だから、ゆつくり寢てゐようと思つたのだがね。どうも傍の者が騷ぐので、落着いてなんかゐられなかつた。それで、言譯をこしらえて、早く家を飛出したのだが、當てのないのにぶらついちやゐられないよ。それに、今日は外が寒くつていけない。まだ少し早過ぎると思つて、

このホテルの近所を何度もぐる〳〵廻つてゐたのだが、なか〳〵時が經たないんでね。……それで、電話を掛けてこちらの様子を訊ねて見たのさ。

たよりはさつきから呆氣に取られて、二人の様子を見比べてゐたが、この時二人の話のなかへ割込む。

たより　義兄さんと姉さんとは、今朝こゝで會ふ約束をしてゐたのね。……あたし、何だか、騙されたやうな氣がしてよ。あんまり變なのですもの。

さく子　（妹に答へるよりも獨言のやうに）あたしも何かに憑かれたやうだつたのよ。

たより　お二人で約束して、一日こんな所へいらしつたことが、そんなに變つた生活になるの？（冷笑して）安價な生活革新ね。

さく子　あなたどうつてさうよ。

たより　姉さんが、家出の保證人があると云つたのは、義兄さんのことだつたのね。それぢや大丈夫な譯ね。あまりに平凡過ぎるわ。

さく子　御自分のやうに非凡ぢやないと思つてるの？（と妹に向つて云つたあと、夫に非難の目を向けて）あなたがあんまり早くいらつしやるからいけないの。

たより　あたし、本氣で姉さんのために心配してゐたのに。姉さんに一杯喰はされたのを知らないで、馬鹿を見ちやつた。（腹立たしさうに云ふ）

さく子　一杯喰はしたなんて、そんな汚い口を利くもんぢやないわ。あたしは一日でも、ごた〳〵した家の中のことを忘れて、あなたと二人つきりで本當の姉妹のやうに、のんびり日を暮したいと思つてゐたの。それは、嘘のないあたしの本心なのよ。

たより　あたし、のんびりしてゐられるどころぢやないわ。昨日姉さんに來られてからは、いやなことばつかり湧いて來るぢやないの。いやになつちまふ。（八つ當りのやうに云ふ）

さく子　それをあたしのせいだとお云ひなの。呆れつちまふわ。溫泉へでも行かうと思つてゐたあたしに、此處に隱れてゐろと勸めたのは、誰れだつたか知ら。あなたぢやなくつて？

洸吉　（間の惡さうに）まあいゝぢやないか。おれは樣子だけ見たらいゝんだよ。さう長くはお邪魔をしないつもりだから、あとで二人で好きなことして遊ぶといゝ。

たより　（ツンとして）御遠慮には及びませんわ。……あたしの方でお邪魔になるのなら、あちらの部屋へ行つてゝもよろしいのよ。

さく子　いやみなことをお云ひでない。あたしと義兄さんと、二人きりでこの部屋に殘されたつて、話すことはなんにもありやしないよ。……二人で話すくらゐなら、わざ〳〵此處まで來て泊めて貰つたりなんかするものかね。

洸吉　昨夕は姉妹で寢臺を並べて仲よく眠つたのだね。

さく子　さうですとも。

洸吉　よく眠れたかい。

さく子　眠れましたとも。（姉に向つて）あたしはたよちやんの側で、この柔かい寢臺に寢てると、今までは茨の床に寢てゐたのぢやないかと思はれてよ。だから、たよちやんは幸福だと思はれてよ。

洸吉　成程寢心地がよささうだね。（寢臺にさはつて見て）おれの家でも奮發して、かういふものを買ふことにするかな。

さく子　寢臺の一つや二つで誤魔化さうたつて駄目よ。茨の床といふのはそんな外形のことぢやないの。精神主義のあなたには分つてらつしやるのに。白ばくれてるのね。

洗吉　妹が側にゐると思つて、いやに氣が強くなつたね。……たよりさんも、さく子にいろんな知恵をつけちやいけませんよ。(照れかくしに云ふ)

たより　まあ、義兄さんは何を仰有るの？　あたしは兄妹中で知恵の足りないお馬鹿さんだと、みんなに云はれてゐるんぢやありませんか。姉さんに入れ知恵するやうな知恵は有つてませんわ。

洗吉　いや／＼。たよりさんは、お父さんが手におへないと見切つたほどあつて、僕は決してあなたに下手な意見をしようと思はないがね。しかし、さく子を感化しないやうにして下さい。

さく子　あたしが妹に感化されてゐると思つてゐらつしやるの？　あたしもさういふ女と思はれてゐるんですかねえ。

洗吉　いや、さういふ譯ぢやないがね。……

さく子　そりや二日も三日もたよちやんと一しよに暮したら、あたしも妹に感化されるかも知れないわ。たよちやん達の自由な生活に比べると、あたしの不斷の生活なんかは、奴隷の生活なんですもの。まるで女中と召使との相違なのよ。……だから、四五日一しよに暮してたら、あたしも本當に、あんな家庭から永久に出奔する氣になるかも知れないの。

洗吉（澁面をつくつて）はたから見たら、何でもよく見えるものなのさ。

さく子　はたから見るよりも、内輪に入つて見てゐると、もつとよく見えるのよ。あなたも、三日でもたよちやん達のお仲間になつて暮して御覧なさい。

たより　あたし、頭がピン／＼していけないから、あちらの部屋へ行つて一ねむり眠つて來ますわ。義兄さんは御ゆつくり遊んでいらつしやい。

逃げるやうに出て行く。

洗吉　あの女には金があるのかい。こんな贅澤な眞似をして。

さく子　あるものですか。……でも、村上といふ男は、あの女の御機嫌を取るために、どこからかお金を工面して來るらしいのよ。えらいわね。

洗吉　危い綱渡りをやつてるんだね（嘲笑するやうに云つて）われ／＼はそんな男にかまつちやゐられないよ。……しかし、お前は實家へ遊びに行つてることにしといたから、安心して一日二日、好きなやうに遊んでゐるといゝよ。

さく子　そんなことはどうでもいゝんです。……あたしは妹を墮落から救ふために此處へ來たのよ。

洗吉（苦笑して）お前の目的はいろ／＼に變るんだね。……そりや、妹を救ふのもいゝことだらうが、お前の力でそんな六ケしいことが出來るだらうか。あんな氣隨氣儘な生活をしてゐた人間が、まともな人間になれるものだらうか。おれには信じられないね。

さく子　あなたが打壞しさへなさらなきや、乾度うまく行くのよ。本郷のお父さんは、村上があたり前の職業を守つて身を立てるやうに決心をしたなら、二人を正式に結婚させてもいゝと妥協して、あたしに任せてゐるんですから。

洗吉（厳かに）それはいけないよ。あんな男がおれ達の身内の一人になつたら、おれ達の信用にも關はるぢやないか。あの男は内しよで何をしてるか分らんと云ふぢやないか。……嘘だらうが、泥棒をしてるといふ疑ひさへあるんだから

（これは、あたりを顧みて低い聲で云ふ）

さく子　昨日ここへ來てから様子を見てると、そんな變な噂が、あるひは本當ぢやないかと、あたしにも思はれないことはないんですけれど。……

洗吉（思はず高い聲を出して）假りにも泥棒の疑ひのある男と縁組みがさせられるものか。お前はどうかしてゐる。お前もそんな男に接近してかゝり合ひをつけられちやいけないぢやないか。

さく子　でも、見るから柔しさうな男よ。それに、たよりの前ではおとなしくつて、御機嫌ばかり取つてるのよ。あなたのやうに、夫の體面といふことにばかり拘づてる人ぢやないの。

洗吉　なに、上べの柔しいのは當てにはならないよ。柔しさうな顔してる奴が、案外腹の底は圖太いのかも知れないよ。

さく子　まあ一度會つて御覧なさい。今日の正午に一しよに食事でもして御覧なさるといゝ。

洗吉　以つての外だ。……お前もさういふ男と食事なんかしちやいけないね。おれと一しよに歸ることにしよう。何處か外で飯を食べて、活動でも見たければ、おれもお交合ひをしてもいゝよ。

さく子　あたしも、今度はよく〳〵の思ひで家を出たのに、食堂で丼物を食べて活動寫眞を見たくらゐで歸つて行つちや、あんまり情なさ過ぎるぢやありませんか。

洗吉　ぢや、お前は泥棒と食事を一しよにしたいのか。おれは御免だよ。

さく子　ぢや、あなただけ先へお歸りになるといゝ。

洗吉　お前は妹を墮落から救ひ上げるよりも、自分で妹にかぶれたのだね。

そこへ、順三が、たよりへの土産物の小箱を抱へて、案内も乞はないで、ノロリと入つて來る。洗吉を見て間の惡い顔して會釋をする。洗吉も間の惡い顔して挨拶する。さく子だけニツコリする。

さく子　お歸んなさい、たよりは少し氣分が惡いと云つて、あちらのお部屋で休んでゐますのよ。そつと寢かしといた方がよ御座んすわ。

順三　さうですか。……わたくしは此處で休息させて頂いても、お差支えは御座いませんか。

さく子　どうぞ。

洗吉　僕はもう直きにお暇しますよ。

さく子　あたしども、一度あなたの腹藏のないお話を承りたいと思つてゐましたのですが。

順三　わたくしは、一つとしてあなたのお耳に入れるやうな興味のある話は持合せて居りません。

さく子　でも、あなたのやうな自由な生活をしてゐらつしやる方のお話は、わたしどものやうな平凡な人間は、承るだけでも世間が廣くなるやうに思はれますわ。

洗吉はさく子に目くばせして、早く此處を出て行かうとする。しかし、さく子は澄してゐる。

順三　どういたしまして。わたくしは當てのないのに、毎日躊躇して居ります。(彼れは、洗吉などにしげ〳〵顏を見られるのを厭ふやうな態度を取る)

話が止切れる。

さく子　今朝は大層お早かつたぢや御座いませんか。

順三　朝つぱらから無駄足ばかり踏んで來ました。今日は戸外はひどい風でひどい埃ですよ。

洗吉　さう早く天氣が變つたんですかね。わたしが此處へ來る前には、ホカ〳〵と溫かい、春らしいいゝ天氣でしたよ。

順三　いや、目を開けてられないほどの恐ろしい埃でしたよ。

さく子　さう云へば、あなたは昨日お目にかゝつた時とは、違つた方のやうに疲れていらつしやる。(洗吉の方へ目を轉じて)あなただつて、顏からお召物から埃だらけよ。そこで顏を洗つていらつしやるといゝ。

洗吉　おれは氣がつかなかつたが、さうかなあ。(自分の顏を撫でて見て)まあ、いゝや。どうせ歸りにはまた汚れるのだ。

さく子　無性を云はないで、そこに浴室があるから入つていらつしやい。そして、四人揃つて御飯を頂きませうよ。……あたし、お風呂の仕度をして上げますわ。

さく子は、部屋に附屬してゐる浴室へ入る。

洗吉は順三と顔を合はすのを不快に感じて、立上つて、前庭の方を、何を見るともなく見てゐる。順三は、洗吉の態度を苦笑しながら、ポケットから葉卷を摑み出して、

順三　どうです？　一本お吸ひになりませんか。

洗吉　有難う。わたしは、煙草はやらないんです。

順三　さうでしたか。

自分でその葉卷の口を切つて、火を點けたが、ふと、持つて來た小箱を引寄せて、蓋を開ける。眞珠の首飾りがあらはれる。

順三　こんなものを買つて來ました。

洗吉　何です？　大變立派なものですね。……わたしにはかういふ物の價値はちつとも分りませんよ。

順三が差出すのを、洗吉は手に取つて見ようともしない。

順三　安ものですよ。

箱から出して、相手に見せつけるやうに、ぶら下げてゐるところへ、さく子、浴室から現はれる。

さく子　眞珠の首飾り？　それをたよちやんにおやりになるの？

彼女は近づいて見て、手に取つても見る。洗吉は不快な顔しながら、彼女の目の動くあとを彼れも追つてゐる。

さく子（ふと顔を上げて夫に向つて）あなたはお湯へお入んなさい。そこへ衣服を脫いで。……さあ早く（と、叱るやうに急き立てる、

洗吉は浴室へ入る。

さく子　たよちやん、喜びますよ。

順三　ハヽヽ。まがひ物なんですよ。
さく子　そんなことないでせう。
順三　それはあなたにお預けしといて、わたしもあちらで顔を洗つて來ませう。
相手にかまはないで出て行く。
さく子、その首飾りを自分の首に掛けて氣取つて見る。
洗吉、浴室から首だけ出して、
洗吉　オイ、そんなものを見て現を抜かしちや駄目だぜ。眞珠の出所はどこだか分つたもんぢやない。
さく子　あなたも男なら、このくらゐな首飾りの一つや二つはあたしに買つて吳れたつていゝのよ。……よく見て御覽なさい。こんな飾りを身體につけてると、人間に位がつくぢやないの。
洗吉（小聲で）馬鹿！　（と云つて）早く返せ〳〵（と、浴室から乘出して、手を振る）
さく子　羨ましいわね。腕のある御亭主を持つ女は仕合せだわ。
洗吉、いま〳〵しさうに浴室の戸を締める。

（幕）

（四）

（一）と同じ部屋。
ある男、頭から夜具を被つて寢臺に寢てゐる。
順三はさうとは氣づかないで、椅子に腰を掛けてそちらを見てゐる。

そこへ、さく子が、首飾りを收めた箱をもつて入つて來る。

さく子　たよちやんはまだ眠つてゐますの？

順三　えゝ。よく眠つてるやうです。眠りたいだけ寢かして置きませう。（低い聲でよぶ）

さく子　昨夕はあなたのことが氣がゝりで眠づらかつたやうでしたよ。……でも、何といふ寢坊だらう。

彼女はそつと枕許に近づいたが、ふと驚いた顏して、順三の傍へ來る。

さく子　ここは部屋が違ふんぢや御座いませんの？　寢てる人、たよちやんぢやありませんよ。

順三　部屋は此處です。

枕許に近づいて、そつと覗いたあと、ふと勢ひよく毛布をめくる。

ある男の熟睡した顏現はれる。

順三　こりや驚いた。……オイ、起きないか。

搖起されたので、ある男、目を開ける。

順三　君はどうしたのだ？

ある男　もつと寢かしといて吳れればいいのに。

目をこすりこすり起上る。

順三　君は昨夕、夜汽車で立つた筈ぢやあなかつたのか。いつの間にこんなところへ潛ぐり込んだのだい。

ある男　あなたのことが氣がゝりでしたから、一日出立を見合せました。

順三　嘘を吐け。……此處にゐた僕の連れを何處へやつたのだ？

ある男　へゝゝ。さう興奮なさらなくつてもよろしい。今に歸つていらつしやいますよ。一昨日頂いたあなたの委任狀を利用して、あの方にあなたを呼びに行つて頂きました。……そのお留守にこの寢臺を拜借して一休みしようと思つて。……わたしもひどく疲れてゐますので。

順三　僕を呼びに？　僕の行先は分つてもゐないだらうに。

ある男　それは、無論出鱈目でさあ。

順三　爲様のない奴だなあ（さく子に向つて）この男は、昔わたしの家の玄關番をしてゐた男で、幼い時分から、この男はわたしに惡知惠をつけてならなかつたのです。

ある男、不思議さうに順三を見たが、合點したらしく、

ある男　ハ、、、。さう安つぽくあつかはれちや、實も蓋もありませんね。

順三　（さく子に向つて）此奴は出鱈目を云つて爲様がないんです。しかし、大した惡氣のある男ぢやありません。（ある男に向つて）昨日から君の惡戯のために詰らない騷ぎをやらかしたよ。

さく子　たよちやんはあんまりお調子に乘り過ぎてたから、たまにはそんな目に會つてもよろしいのよ。（小箱を順三に渡して）これをお返ししますわ。こんな見事な贈り物を見たら、あの女がどんなに喜ぶでせう。

ある男　それは何んです？（順三の手から小箱を引たくつて、開けて見て）ホウ、首飾りか。（と云つて、眠い目をこすつて、よく見て、ニヤ〳〵笑ふ）

順三　どうだ？　いいだらう。

ある男　すばらしい物ですね。

さく子（首飾りの方へ目を注いだあと）わたし、白川を呼んで來ますわ。たよちゃんが歸つて來たら、四人で一しよに午餐を食べませうよ。

順三　さういふことに話が極まると結構ですね。

さく子、出て行く。

ある男　あの方はどなたです？

順三　それよりも、ここにゐた女を君はどこへやつた？

ある男　大丈夫です。

順三　君の謂ふ「子分」の手に渡しやしまいな。昨日、公園で僕の云つたことを誤解すりやすまいな。

ある男　あなたに頼まれりや、女一匹、どうにでもなると思つたが、あなたが未練がありさうだから、殺生はよした。しかし、今の女にわたしのことをひどく安つぽく吹聽しましたね。

順三　君にでも、安つぽく吹聽されちやいやなんだね。虚榮心があるんだね。

ある男　それよりも今の女は何ものだか知らないが、夜店で賣つてる子供の玩具のやうなこんな首飾りを有難がつて見てゐるんだから滑稽だ。

順三　あの女よりも君の目の方がどうかしてるんだ。

ある男　そんな物であの同棲者を喜ばせようと思つてるんですか。

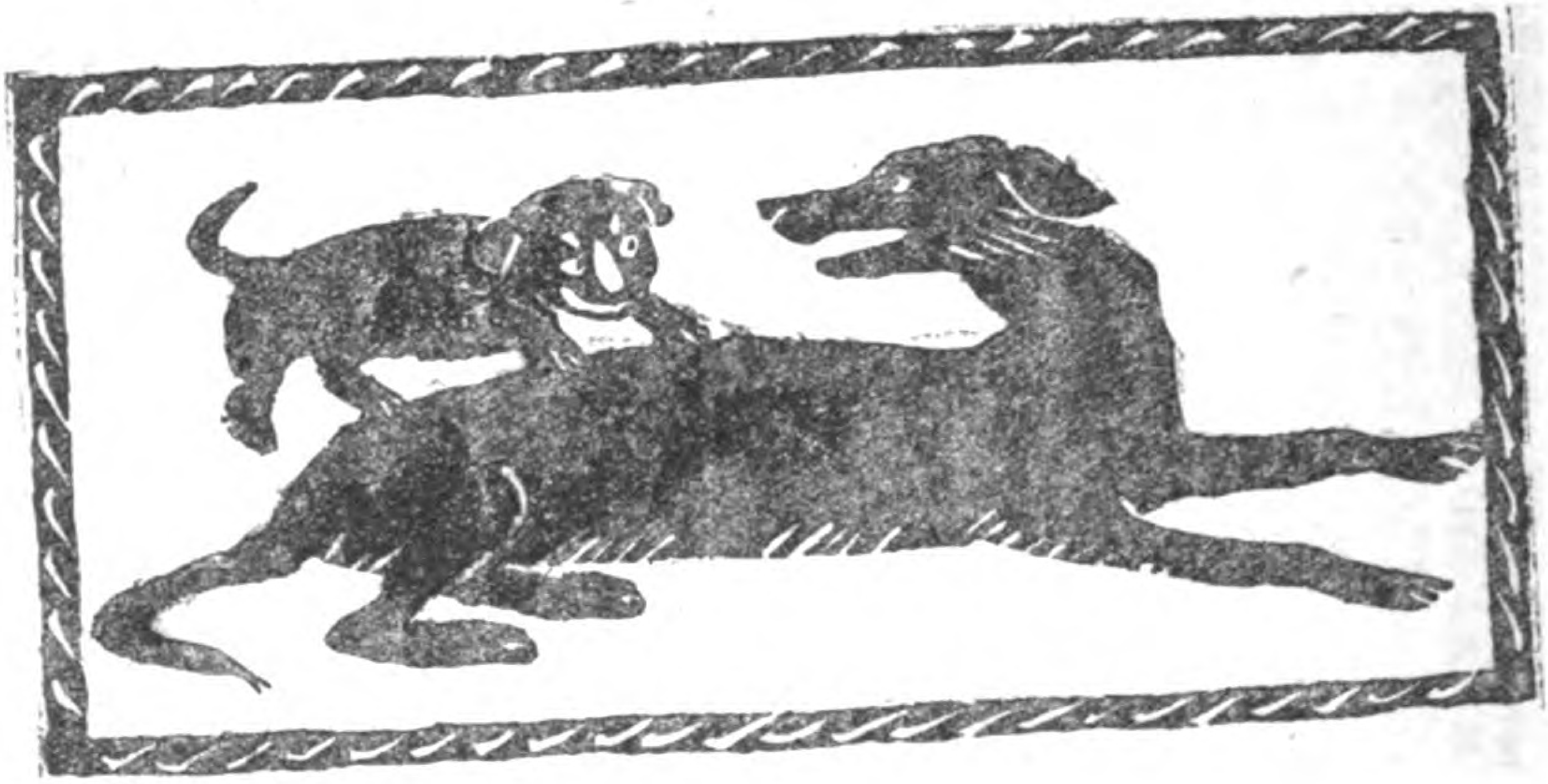
順三　さうだよ。……この隣室には模範的夫婦が來てゐるんだがね。おれ達二人と一しよに食事をしようと云つてゐる。君も加はるといゝよ。五人で午餐會を開かうよ。

ある男　そして、その席で、あなたの同棲者にその首飾りを掛けさせようと云ふのですか。

順三　それよりも、君は僕の連れの女をどこへやつたのだ?

そこへ、たよりは今美容院から歸つて來たやうに美しく髮を結つて入つて來る。

（幕）



殺される人々

武者小路實篤

登場人物

A
B
C
D
老人
異國の兵士達

（ある國の牢屋）

A。あゝあ。

B。どうした。

A。退屈だな。

C。何かしましやうか。

A。何にもしたくない。

C。あいつ達は俺を殺すつもりかね。

B。それはさうだらう。どうせ殺されるなら早い方がいゝ。

A。俺はおそい方がいゝ。その内に援兵が來ないとも限らない。

B。まにあふものか。それにたまたまつか、援兵がくればなほ早く殺される。逃げる前には俺達を殺すにちがひない。

C。どうしても助かりませんでしやうか。

B。助からないね。

C。それなら私達はもうどうしやうもないのですね。

B。まあさうだね。君は日記をつけてゐるね。

A。つけてはゐるが、どうせ殺される時、一緒に燒かれてしまうだらう。

B。燒かれるときまつてゐて、それでかいてゐるのか。

A。萬一のことを考へてゐる。

B。そんな時は來ないだらう。

A。來ないと思ふね。しかし來ないときめるわけにもゆかない。

B。望みをまだ失なはないのか。

A。失なはない。しかし事實は殺されるにきまつてゐる。それもどんな慘酷な殺され方をするかわからない。何しろ相手が野蠻人だからね。たゞ殺すだけでは面白くないと思つてゐる連中だ。

D。そんなことは云はないでくれ。

A。云ひたかない。しかし默つてゐたつて、事實の方は平氣でやつてくる。

D。今殺されちや僕は浮ばれない。

A。いつ殺されたつて同じことだよ。

D。僕には妻子がある。僕が死んだらどうして食つてゆくか。

A。どうにかなるよ。

D。君なんかうちが金があるから安心してゐられる。

A。安心もしてゐられないよ。

D。だが僕は死ねない。

A。それなら生きてゐればいゝだらう。

D。僕は岩にしがみついても、妻子のために生きてゐたい。俺が死んだと聞いたら。

A。いゝ幸にして他の男と結婚でもするだらうよ。

D。そんな妻ぢやない。

A。あてになるものか。

D。僕の妻は僕が死んだと聞いたら自殺するかも知れない。

A。鬼が笑ふよ。

D。君の細君と僕の妻とは人がちがうよ。

A。それはちがうだらう。だがあてになるものか。

B。そんな話はよせよ。

A。こんなことでも云つてゐると退屈しないですむ。

D。退屈しのぎにそんな出鱈目を云つてゐるのか。

A。まあ、さうだね。こゝに碁盤でもあればね。せめて紙と筆とハサミがあるとね。

B。そんな贅澤なことを云ふな。

A。云つたからつて別に早く殺されもしまい。

B。早く死にたかつたのは誰だ。

A。それも冗談さ。誰が死にたいものか。だが、こんなことをしてゐて、とゞのつまり殺されるなら、早く成佛した方がいゝかも知れない。一ぺん死ねば、二度と死なないですむ。この世に生れて來たのが夢になる。僕は考へると隨分出たらめをして來たものだ。よく今までに死なゝかつたものさ。

B。しかし今度は大丈夫、死ねさうだね。

A。ありがたいことにはか。

B。君は平氣で死ねるかね。

A。あてにはならないが、大和魂を見せて死んでやるよ。

B。俺もさうするつもりだ。

A。皆、殺される時、見ともない眞似をするな。どうせ泣いたつて、跪いたつて殺されるのは同じことだ。野蠻人を喜ば

してやるだけの話だからね。

C。私にはそんな力がありません。

D。僕はどうしても助かりたい。

A。俺だつて本音をはけば助かりたいのだ。だがあきらめるより仕方がない。

C。まだ助かるかも知れないと僕は思へます。

(鐵砲の音がする)

皆。あつ。誰かやられた。(沈默)

(又鐵砲の音がする)

A。おはゝゝ。又やりやがつた。いくらでもやれ。自分達はいつまでゝも生きられるつもりでゐやあがる。

D。味方が來たのぢやないかな。

A。馬鹿云ふな。味方はあんなうちかたはしない。

D。こゝで殺されちや俺は何のために生きてたのかわからない。

A。誰だつてわからないよ。

D。俺は今迄隨分苦しい思ひして金をためたのだ。それも妻子をよろこばしたいため許りだつた。そしてどんな山奥へでも入つて炭を賣つて歩いたものだ。そして俺は金持と思はれて泥棒にあふと困るので乞食のやうな風して歩いた。俺は隨分苦しんだ、之も國へ歸つて、之からうんと樂をしてやらうと思つたからだ。

A。お氣の毒だよ。人間て、さう都合よくは出來てゐないものだよ。愚痴を云へば切りがないさ。

D。愚痴でも云ふより仕方がないよ。

B。同感だ。君が饒舌つてゐるのをきくと僕は勇氣が出てくる。
A。それはおかしいね。
B。こゝに俺より臆病な奴がゐると思ふとね。あはゝゝ。
A。本當にさうだな。あはゝゝ。我ながら不景氣な笑ひ聲だ。死ぬつてこんな不氣味なものとは思はなかつた。
B。呑氣ものだな。
A。呑氣ものと云へばあすこにゐる爺よ。あいつはいくら注意して見ても、平和な顏して默つてゐあがる。
D。あいつは氣ちがひだから何にもわからないのだ。
B。どつちが氣ちがひだかわからないぜ。
A。あゝなれば氣ちがひだつて惡くない。だがいくらあいつでも殺される時は一寸はいやな氣がするだらう。
B。どうだかね。
A。餘程耳が遠いやうだね。
C。何か時々祈つてゐるやうですよ。
A。あいつは宗教家かね。
B。眞宗らしいね。
A。殺されゝば極樂へでもゆけるつもりでゐるのだらう。
C。さうかも知れませんね。あの爺さんの顏を見てゐると僕の心は靜まつて來ます。
A。まああの爺は別ものさ。俺達はまだ若いから、あゝはなれない。なれない方が面白いと思つてゐたが、こんな日にあふとは一寸思はなかつた。

B。弱は音をはいたね。

A。君はこんな目にあふと思つてゐたか。

B。思つてはゐないね。

A。それ見ろ。

B。こんな目にあつたものは今迄にいくらでもゐる。

A。その内にはCやDより臆病なものもゐたらう。

B。それはさうだ。

A。戀人と結婚して、一晩も一緒にゐない内につれてこられて殺された奴もあらう。病人の子供を看病してゐる處をつかまへられて殺された女もあらう。目の前で赤坊を殺された奴も、そして妻を目の前で殺された奴も、そしてあげくの果に自分も殺された奴もあらう。

B。ないとは云へない。

A。その殺した奴が又殺される。

B。さう許りも限るまい。

A。本當に惡人が榮えることもいくらでもあるな。

B。君のやうな惡人でもつかまることもあるからな。

A。俺は惡人ぢやないよ。

B。だが惡人と云はれた方が嬉しいのぢやないか。

A。こんな目にあふことがわかつてゐたら、もう少し大膽に惡いことをしてくれればよかつた。

B。困つた奴だな。

A。内心君もさう思つてゐるだらう。

B。さう云へば俺は少しピユーリタンすぎたね。だが今になら同じことだ。

A。思ひはのこらないかい。

B。少しはのこるね。だが大して殘らない。

A。妻子のことは考へるか。

B。それは考へるよ。

A。逢ひたいか。

B。それは逢ひたいさ。

A。君の子供はいくつだい。

B。十四と十一さ。

A。上が女だつたね。

B。さうだよ。

A。下は男か。

B。さうだ。

A。今時分君がこんな目にあつてゐるとは思ふまいね。

B。しかし新聞に出てゐるかも知れない。心配してゐるだらうと思ふよ。君の子はいくつだつたね。

A。僕には子供はゐないよ。

B。細君は。

A。今時分他の男と一緒になつてゐるだらうよ。僕が死んだつて泣く奴は一人もゐないよ。

B。二三人はゐるぢやないか。

A。馬鹿云ふなよ。だが逢ひたい奴もゐるな。

B。女の人かい。

A。あたりまいさ。

B。何處にゐるのだ。

A。東京に一人、朝鮮に一人、北京に一人。まだゐつた。

B。困つた奴だな。

A。いろ／＼の奴を思ひ出すよ。たつた一目見た奴までね。君だつて妻子のこと許りを思ふのぢやあるまい

B。そんなことをくわしく聞く奴があるか。

A。こゝで遠慮はゐらない、君の細君に聞へはしないからね。

B。こつちが逢ひたくも、向ふぢや何とも思つてゐないと云ふ奴だ。

A。あてにはならないね。C、君はどうだ。

C。ありますね。十人はありますね。

A。之はおどろいた。中々すみにおけないね。若いと思つても。

C。第一お母さんに逢ひたいのです。

A。なんだ。

C。それから妹です。弟です。それから

A。あとは默々か。

C。まあさうです。それは美しい人です。

A。なんだ。それでその女は君に惚れてゐるのか。

B。わからないのです。しかしその人が不意に來てくれたらどんなにうれしいかと思ふのです。

A。はゝゝゝ。矢張り若いな。

B。可愛いゝ處がある。こんな奴を殺すのは惜しい。

A。君は殺されても惜しくないか。

B。君なんかさしづめ殺されても惜しくない方だね。

A。馬鹿云ふな、俺よりも百倍もうは手な奴がまだピンピンしてゐる。

B。あんまり上手だからピン〳〵してゐるのだらう。はゝゝゝ。

(又鐵砲の音がする)

D。あつ。

B。又やりやがつたな。

A。おい〳〵俺達の番が廻つてくるな。

B。人を殺さなければ解決がつかないと思つてゐるのは餘程馬鹿だな。

A。殺さなければ殺されるとでも思つてゐるのだらう。

B。殺せば殺される。

A。あてになるものか。

C。日本の兵隊はどうしてゐるのでせう。

A。日本が戦争に加はらなかつたらよかつたのだ。

B。何と云つたつて、あとの祭りさ。俺達はつまらぬ犠牲になつたことだけがまちがひではない。

A。馬鹿な目に逢つたものだな。

B。馬鹿な目に逢つた奴は今迄に何人ゐるか。

A。そして今後も又何人も出ることだらう。

B。いやになるな。

A。怖くなつたか。

B。あまりいゝ氣持でもない。戦ひやうがないからね。

A。はゝゝ。仕方がない。

B。急に生命が惜しくなつて來た。

A。そんなことは云はないがいゝ。

B。平氣でゐられたらいゝのだがね。

A。あの爺さんのやうにか。

B。爺さん、あなたは本當に平氣ですね。

老人。私か。私は佛さんにみんな任せてゐる。

A。佛さんなんてゐるものですかね。私達に後生と云ふものがあるものですかね。

老人。私はそんなことは知らない。だが佛さんのことを思ふとありがたくなつて、私は心がおちついてくる。

A。殺される時でも佛さんのことをあなたは考へてゐられますか。

老人。考へてゐられると思ふね。君達は若いから死にたくないのは尤だ。だが私はもういい齢だ。もうそろ〳〵死にたくなる齢だ。

A。齢とろとだん〳〵生命が惜しくなるものださうぢやありませんか。

老人。人にもよるよ。私はいつ死んでも心のこりがない。私は皆佛さんにお任せした。だが君達のことを思ふと、涙がでてくるよ。本當に人間は平和にくらしてゐればいゝのにと思ふよ。

A。そんなことを云つたつて、始まりませんよ。

老人。始まらないでも私はさう考へる。皆仲よくしてほしいつてね。なほ考へるよ。

A。お爺さん、お爺さんは敵も愛しますか。

老人。氣の毒に思ふよ。

A。氣の毒ですつて。

老人。生てゐるのは大へんだからね。

A。死ぬ方が樂だと云ふのですか。

老人。まあさうだね。私はさう思ふね。死ぬことは悪いことぢやないと思ふね。

C。お爺さん、僕は死ぬのがいやです。

老人。尤だ。

C。どうかして助からないでせうか。

老人。助からないね。
C。それならどうしたらいゝのです。
老人。神樣にお祈りをするがいゝ。
C。私は神樣を信じてゐません。
老人。それでは、何かにお祈りするがいゝ。
C。何とお祈りするのです。
老人。今後私達のやうな目にあふものがなくなりますやうにつて。
A。はゝゝゝ。お爺さん。そんな祈りが何になります。僕はむしろ、皆がこんな目にあつて人間と云ふものはどんなに下らないものかと云ふことを知らしてやりたい。
老人。あなたはあなたの好きなやうに考へるさ。私は私流儀に考へる。
A。お爺さんの流儀はどう云ふのです。
老人。私の流儀は、自分の生命はどうなつても仕方がない。あとの人を幸福にしたいと云ふのだ。
A。幸福に出來ますか。
老人。出來ないでもさうお祈りすることは出來る。そして私にはそれがうれしいのだ。
A。お爺さん、僕は人類なんか亡びてもいゝと思ひますね。
D。僕だつてかうなればさう思ふね。皆が死ぬものだと考へれば少しはあきらめがいゝ。
B。僕はお爺さんに味方するね、僕は犬死にしたくない。何かしてゆきたい。
A。もうかうなつたらおしまひだ。

B。だが私達のお祈りはラヂオのやうに世界の人の魂に聞へない聲でさゝやくかも知れない。悲慘な目にあつた人間は、たゞは死なゝい。あとに何かのこすものだ。

A。恨みをね。

D。さうだ僕は殺されたら恨みをきつとのこしてやる。僕を殺すやつを呪ふ。僕はどうしたつて、たゞは死ねない。

老人。それは無理はないが、しかし私は平和に死ねたら、死ぬ方がいゝと思ふ。それが出來ればその人は敵に勝つたのだ。殺すものに勝つたのだ。殺すものは彼を生かしたにすぎないことになる。

B。僕はお爺さんの云ふことが本當だと思ふ。

A。口ではね。だが死ぬことを考へて平和でゐられるか。僕達は何のために死ぬのだ。僕達は何の惡いことをしたのだ。

D。本當に僕は今死んぢや浮ばれない。お爺さんはもうこの世に何のたのしみも、未練もないでせう。だが私は今迄は苦勞許りして來たのです。それも之からうんと樂が出來ると思つて辛棒して來たのです。

A。仕方がないよ。

D。神様。あなたはこの世にはゐらつしやらないのですか。

A。あたりまいさ。神なんかゐたつて僕達のことは氣にはしない。僕達は苦しめば苦しむ程、自分の奴隷になるとでも思つてゐるのだらう。僕は神なんか信じない。

D。神様、神様、どうぞ私達をお助け下さい。

A。そんなことを云つてもだめだよ。

D。それでも私はどうしても死にたくないのです。

A。死にたくないものは死なずにすめたら、世の中は泰平さ。死ぬ奴なんかありはしない。

D。あなたは死んでもいゝのですか。

A。よかない。だが、仕方がない。力がないのだから、野蠻人の勝手になるより仕方がない。

（又鐵砲の音がする）

A。又、やつた。一人々々やらずに、一どきにやればいゝのに。

B。一人々々裁判をして、そして殺すのだらう。その方がたのしみが多いと思つてゐるのだらう。

A。D君、みにくいざまをしてはいけないよ。

D。もうその話はよして下さい。僕はまだ死ぬとはきめてゐません。

A。だがだめだよ。足音が近づいてくる。

B。いよ／＼來たな。

（異人劍をつけた銃をもつて、五六人くる。牢の錠をあける。隊長らしい男）

隊長らしい男。この内からくぢをとれ、其處にかいてある番號の順で銃殺することになつてゐるから。

A。え、さうですか。さうして君達の番號は何番でした。あなた方も近い内に殺されるのですからね。

隊長らしい男。ぐず／＼云はずにとるがいゝ。

A。勿論とりますよ。

（AとB、恐れないやうにとる。C殊にDは手がふるへてくぢをとれない。老人は靜かにとる）

A。君は何番だ。

B。一番さ。君は。

A。三番だ。かはらうか。

B。いゝよ。

A。D君、君は何番だ。

D。ぼ、ぼ僕は二、二、二番です。

B。お爺さん、あなたは何番です。

老人。五番です。

B。それなら僕が平和に死ねるやうに祈つて下さい。

老人。承知しました。一心に祈つてゐます。

B。皆さん、おさきにゆきます。しかし君達を待つてはゐない。君達が助かることを僕は最後までのぞんでゐるのだから。

A。どうせゆくから、待てるなら待つてゐろよ。君の顏色は感心にかわらない。

B。あぶない處さ。だが奴等の顏を見ると勇氣が出てくるよ。死ぬのもわるくないつて云ふね。

隊長らしい男。（少し丁寧に）誰が一番です。

B。僕です。

隊長らしい男。それならこつちへ來て下さい。

B。何處までゝもゆきますよ。それぢやさよなら。僕は一寸日本が見たくなつた。だが僕は日本の男として死んでゆく、日本のことを思ひながらね。お待ちどうさんです。それならゆきませう。

A。あゝ、とう／＼行つたか。あいつはいゝ奴だつたがな。

C。本當にいゝ方ですね。

A。君はまいらないか。

C。少し勇氣が出て來ました。

A。感心、感心。

老人。僕でB君のことをお祈りしませう。

A。えゝ。祈りませう。

老人。南無阿彌陀佛、々々々々々。

(鐵砲の音する)

A。(立ち上り) とう／＼やりやがつたか。もう承知しないぞ。だが僕達はどうすることも出來ない。

(足音する)

A。又やつて來たぞ。D君、しつかりしたまへ。

(前の異國の兵士隊やつてくる)

隊長らしい男。二番は誰です。(沈默) 二番は誰です。

A。僕が二番です。

隊長らしい男。紙を見せて下さい。

A。もうやぶいてしまひましたよ。

隊長らしい男。君は三番でした。この人が二番です。

A。その男は病氣してゐるのです。四五日猶豫さしてやつて下さい。

隊長らしい男。そんなひまはない。

A。どうしてゞす。

隊長らしい男。日本人たちが、四五日の内にのりこんでくるかもしれない。

A。それは本當ですか。

隊長らしい男。死んでゆく君達だから、本當のことをきかしてやらう。それは本當だ。

A。それならこの男は許してやつて下さい。可哀さうな男なのですから。

隊長らしい男。いけない上官の命令だ。さあぐず〳〵云はずに來い。

(D何か云はふとして云へない)

A。本當に病人なのです。

隊長らしい男。病人ならなほ早く殺された方がいゝだらう。

A。あなたは何と云ふ亂暴ものだ

隊長らしい男。この男を引きづつてゆけ。この臆病ものを。

(D、兵士どもにひきづられて行く)

A。はゝゝ。意久地のない奴だ。あんな奴こそ殺されてもいゝ奴かも知れない。だが日本軍が近かくに來てゐると思ふと、なほ死にたくなくなる。もう一度日本の土地がふめたらな。だが仕方がない。どうでも勝手にするがいゝ。

(C、しく〳〵泣き出す)

A。どうしたのだ。

C。急にお母さんの顏が見たくなつたのです。

A。馬鹿だな、赤坊だな。お母さんの顏が見たいのか。あはゝゝ。(泣き笑ひする)

(鐵砲の音がする)

A。あつ。とう〳〵あの臆病ものも成佛しやがつたな。

老人。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（又兵士たちくる）

隊長らしい男。今度は貴様の番だ。

A。どうもありがたう。いづれ君達の番も今にくるから、よく僕の殺される方を見ておき玉へ。さあ、おともして來たまへ。それぢや一寸行つてくる。之で僕も厄のがれが出來たわけだ。生てゐると云ふことは厄介なことだからね。さよなら。

（A。皆に護衞されてゆく）

C。お爺さんと二人だけになりましたね。

老人。あゝ。

C。今度は私の番です。

老人。さうだね。

C。お爺さん。僕は今死にたくないのです。僕はしたいことが多いのです。僕はいゝ詩がかきたいのです。僕と云ふ人間がどんな人間か示してから死にたかつたのです。叔父さんの處へ旅行しに來た許りに僕はつかまへられたのです。運と云へば、運ですが僕はあきらめられません。

（何かさわぎが聞へる）

C。なんでせう。

（鐵砲の音が一しきりする）

C。日本軍でも來たのぢやないのですか。もしさうだつたら。

（鉄砲の音やむ）

C。矢張り望みはないのですね。僕はこのまゝ死んでゆかなければならないのですね。たつた十八で。

老人。本當にお前は氣の毒な子だ。

C。兩親達はどんなになげくでせう。僕は今どうしても死にたくないのです。

老人。どうにかしてあげたい。だがあきらめるより仕方がないだらう。だが君の死は、犬死にゝはならない。

C。そんなことはありません。

老人。君の死は君の友人を眞劍にさせるだらう、又君の精神は誰かの精神に必ずのりうつるだらう。むだには死んでゆかない。

C。そんなことが今の私の慰めにはなりません。

老人。尤だ。尤だ。私のやうに生てしまつた人間は、もう別に人生に未練もないが、君のやうな若い身で死ぬことを考へると同情しないわけにはゆかない。

C。お爺さんはいくつです。

老人。私か、私は八十三になる。

C。そんなお齡で殺されていらしやるのですか。

老人。私は見ちやいけないものを見たのだ。私は私の曾孫の娘がけがされて殺されたのをまのあたり見た。私はその他いろ〳〵のものを見た。私の曾孫も死にたがつてはゐなかつた。

C。不幸なものは私許りではないのですね。

老人。あたりまいさ。
C。私は私は生きてゐたい。せめて六十、五十。いや三十六でもいゝ。そしたら私はきつと何かして見せるのだが、あゝやつて來ました。私は見にくい様はしません。だが私は死にたくはないのです。石にしがみついても。
（又、兵士達くる）
隊長らしい男。（Cに）今度はお前の番だ。今の男はいざと云ふ時逃げやうとした。そのかはり足をうたれて倒れた處を、兩手を切られて、首をはねられた。だが聲は出さなかつた。強情な奴だつた。
C。私はあなた達を憎み、又輕蔑します。人を殺さなければ安眠の出來ない、意久地のないあなた方を輕蔑します。
隊長らしい男。お前も逃げたら今の男のやうに殺されるぞ。
C。逃げられゝば逃げますよ。だが僕は逃げられないことは知つてゐます。お爺さんそれならおさきに、私も死ねる勇氣が出て來ました。安心して下さい。
老人。私は君に感心した。そして君が平和に死ねるやうに祈つてやる。
C。どうか私が又生れかへれるやうに祈つて下さい。そして今生で出來なかつたことを今後生れたら必ずしとげて見せられるやう祈つて下さい。
老人。祈つてあげる。
隊長らしい男。早くしろ。
C。それならお爺さんどうもありがたう。
老人。本當に君は見上げた男だ。私は君を禮拜する、今度又生れかへつて大いに仕事をし玉へ。
C。ありがたうお爺さん。

隊長らしい男。さあゆけ。

C。ゆきますとも、千萬億土迄でもゆきます。あなた達がなかなかゆけない處までね。だが來ないわけにはゆかない處にね。

（Cつれられてゆく）

老人。とうとう一人になつた。私は誰もはゞかることはない。私は死んだ人、殺された人の冥福を祈り、そして生てゐる人、之から生れる人の平和なことを祈る。そして人々が業に安じて、安心して威張つて生きられる時のくるやうに祈る。神様、私は今になつてもあなたに祈るより他仕方がない老人です。そして私は子供からのくせで、南無阿彌陀佛と云はないではゐられないのです。そして私は南無阿彌陀佛と云ふと不思議に心が靜まるのです。私はあまりに恐ろしいことを見て來ました。だが私はまだ人間を信じてゐます。よき日がやがてくることを信じてゐます。小鳥がないてゐる。あたりはへんに靜かだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（鐵砲の音する）

老人。あのけなげな子供は死んでいつた。今度は私の番だ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（を靜かにくり返す）

（又兵士達あらはれる）

隊長らしい男。今度はお前の番だ。

老人。はい。（すなほに立ち、南無阿彌陀佛を小聲にくり返しつゝ護衛されてゆく。靜かに幕）

（一八、四、一）



山のほとり

室生犀星

左の瞼の裏に鋭い痛みを感じ、それに手を當てゝ擦つたのが、夕方から酷く疼き初めた。頭痛がして齒も上の方が一齊に浮き出すのだつた。鏡を見ると上瞼のマイボーム氏腺に小さい腫れものが、隆起してゐた。

町へ出て醫師に診て貰うたが、單なる物貰ひだといふ外大したものでないとの事だつた。夜の散歩を止めて早くから床に這入つて温罨法を施した。併し疼痛は脈膊のやうに正しい刻み方でずきずき深くなる一方だつた。避暑地の七月の終りは蟲の聲ばかりではなく、夜冷えは雨戸の隙間からも、裏山に騒ぐ夜風の物音にも涼しい感じがあつた。點眼藥を注し罨法を取代えたりしてゐる間に、三千尺に近い山間の夜明けは最う雨戸の内側まで明るくしてゐた。

前庭へ出て見たが日はまだ向ひの森の上にも射してゐなかつた。あたりの別莊の

葉はみな閉つて露で濕つてゐる土の上に鮮やかに青い蝗が一疋止つてゐる。——それの胶體はふしぎに歪んで見えた。手で觸つて見ると上瞼は腫れ上つて、眼はやつと開いて居るくらゐだつた。

女中が汲み上げの冷たい水を用意したので、洗面場で熱い瞼を冷した時は快い氣持だつた。鏡を見ると自分の眼とは思へないくらゐ腫れてゐた。

前庭に出て椅子に腰かけ乍ら茫然としてゐた。専門醫はゐないので其爲め上京するには面倒だ。然し打捨つて置く譯には行かなかつた。

妻は驚いて痛むかと問くのだ。私は昨夜よく寢てゐた彼女を思ひ出して、冷淡に唯疼くと返辭しただけだつた。子供は心配さうに自分の顏近く差し覗いて憂慮するので、傳染りはせぬかと少し離れるやうに言ひ附けた。子供は去年の夏、此の山中の蚋のやうな蟲に刺され瞼を腫らしたが、直ぐ化膿して恢復が早かつた。あの時頭痛がしなかつたかと尋ねると、しなかつたと云つた。彼女が眼を病むより自分の方が惡くなつた方がよいと思ふほど、去年の彼女の瞼の腫れが美絢でそこね痛々しく思はれたのだつた。

暫くして日が向ひの森の上に東の方の片面だけ照らし出した。彼はかういふ光景を注意して見ることは始めてゞ、何か一夜の内に彼は自分の頭が違つた考へを模索してゐるやうに思はれる程、物珍しい氣持で森を見佣けた。馬鹿々々しいくらゐ宗敎的な光景であつた。

「この藥をお注しになればそれほど痛みません。」

彼は醫師を神のやうに信じた。併し彼が家へかへると同時に神の手は彼の痛みから離されてゐた。落葉松の枝や枯葉の刺々しいのが彼を刺戟し、ぎらぎらした日光は一層の痛みを加へた。原稿紙さへ張り切つてゐる瞼の上に耳痛い反射をもたらした。仕方なしに人氣のない山道を歩き乍ら、松を過ぎる風をその根元に蹲踞つて聽いてゐると、何やら引續いて悲

視する氣持に陷入るばかりだつた。

彼は山の中腹に手巾のやうに光るものを見出し、それが植物に纏り着いて來てゐるのではなかつた。[illegible]彼は日輕事症の白い惡かけが日に光るのだつた。糊の硬さまで著いてくるのだ。彼は狼狽てゝ又繃帶の片眼鏡をかけた。彼は眼と擦れ違ふまで左の道路から出て來るのが見えなかつた。左眼の横の方には一切視覺がとゞかなかつた。

結局化膿を待つより外に手術の方法はないらしく、此の厄介な瞬に見離された腫れものを臉の上に大切に保ちながら何時も彼は露台の椅子で物憂げに坐つてゐた。彼は家の前通りを眺めてゐる時、電報配達夫が赤松の間から、自分の家へ目がけて走つてくるのを眼に入れた。電報はA君の死去を報じてあつた。A君と彼とは家が近隣にあつたので、彼はこんどの旅行前には取急いでゐて會はないで立つた。いつも突然に旅行に出るのが、自分の癖だつた。A君の亡くなる理由として彼の頭に浮んだものは、A君の執拗な病氣だつた。

彼がA君に三週間前に會うたのは、A君の二階の書齋だつた。自分の外に二三人の客があり自分とA君とは隣合うて坐つてゐたので、A君の横顔だけしか見えなかつた。その日A君は君の家も訪問したのにどうして來たのと云つた。

「實は家に客を待して置いて來たんだ。H君が行く／＼といふので一緒に來たのさ。」勢ひ自分は早く歸らなければならぬと云ふのであつた。

「でも尋ねて來る客は失望するだらう。」

A君は何故か此日の訪問を氣にしてゐた。又急に思ひ出して、「論文は讀んだ、どうも有難う。」と突然に云ふのであつた。自分はあとの方の足並が少し亂れてゐて氣になることを云つた。論文はA君の人と作との比較的長い印象批評だつた。

元氣が無く話疲れてゐるのだらうと思うてゐたが、大して氣にはならなかつた。暗示の付くのは彼はなぜか何時ものや

うに自分の顔を見つめることをしなかつた。A君は話對手の眼をぴつたりと凝視して話をする人だつた。隣合せではお互ひ凝視し合ふことが位置の關係でできないのかも知れなかつた。自分が歸る一寸前に、あ、蜘蛛が蝶を捕つたと伸び上つて云つた。

椎の頂の枝ばかり見える二階の椅子の上から、同時に自分の方では其殺力の光景は見えなかつた。話し合ひ乍ら絶えず庭や空ばかりを見てゐたらしかつた。

「約束の一時間が經つたから歸る。」

自分は立ち上つて笑ひ乍らさういふと、「さうか約束の時間が經つたか？」そして突然にお可笑し相に笑つた。自分はその笑ひ方がその時ですら氣になつたが、今考へると最後の親愛でもあり輕蔑でもあつたらしかつた。何も知らずにゐやがる此奴は！　A君はさういふ考へをする人ではなかつた。是非もないといふ沈んだ氣持で目を瞠る人だつた。

「A君がなくなつた電報が來たのだが一應問合さなくともいゝかね。」

彼は妻を驚かすまいとしながらから尋ねて見たが、至急報ではあり間違ひはないでせう。これは不吉なことが起つたものか知れませんねと云つた。彼はAの住む田端の書齋の机のそばに、友の顏を描いて見て朧氣ながら微かな死を感じた。

彼は落着いて台所へ行つて、汽車の時間表を見て五時發に乘つて上京することに決した。

彼は返電を打つために町へ出掛けると、急に氣持が騷ぎ出した。他の知らない人間を見たからだ。彼は途中隔れてゐるところにゐる白鳥氏に知らせようと思うて、知り合ひの旅館で電話をかけて貰つた。此の旅館へは二た夏續けてA君は避暑したことがあつて主人も懇意だつた。電話は白鳥さんの別莊の管理してゐる事務所から通じて貰ふやうにした。彼は電話の濟むのを旅館の椅子に腰をおろしながら神妙に待つてゐた。

電話では白鳥さんは停車場へ出てゐるといふ返事であつた。旅館の主人は後で自分が去つてから酷く騷いでゐたとのこ

とで、家族はA氏の話を主人の前でせぬやうにするほど、主人はA氏の死を驚き陰鬱に感じてゐた。A君の噂をわるくしたのも此の高原が最初であるらしく、自分も一緒にゐたのでその事は知つてゐた。神經的に主人はそれを感じてゐるのではないかと思うた。それなら自分はそれを氣にせぬやうに云はなければならぬ氣持だつた。金をくずして貰つて車の用意を言ひ付けて家に歸つた。

停車場で白鳥さんらしい人が見えないので、彼は暫此處見廻してゐると待合室のベンチから不意に立つた人が白鳥さんだつた。袷を着込んで雨の飛沫で裾廻りが夥しく濡れてゐた。律儀な田舍の人のやうな風貌の白鳥さんにも、驚愕とそれに伴ふ昂奮の色が窺はれてゐた。

「僕らはしかし長生きしたものだ。」白鳥さんは三十六で亡くなつたA君に自分の年齢を比較した。「併し何か不幸らしいね。腦溢血のやうな……」

「とにかく不慮の死は死でせうね。」

自分はこれだけ答へ、歩廊へ打連れて出た。白鳥氏は香奠の紙包を自分に托されて汽車の動くまで立つてゐた。日に燒けた夏帽子を鳥渡頭に乗せた白鳥氏は、反身になつて雨で濡れた薄い下駄を引摺り乍ら、柵の方へ戻つて行つた。

自分は洗面場へ行つて瞼の腫物を檢して見たが、僅かの間に化膿して了つてゐた。氣持の混雜が化膿を早めたものらしかつた。手を洗うた後に用意の脱脂綿で醫師に教はつた通り、膿をひねるのだつた。その度に頭の心に痛みがつたはり、前額と頰、鼻梁の痛みは殆じつとして居られぬくらゐであつた。輕い眩暈さへ感じた。

彼は坐席の前に乘り合はした姉妹の美人のゐることを意地悪い宿命的悪戯のやうに感じ出した。彼女を見送りに來てゐたなかにM侯爵夫妻のゐたことからも、此の姉妹は貴族に違ひなかつた。彼女等は屢々自分の方を何氣なく眺めてゐた然も彼は此の姉娘の異常に高い背丈と品格のある美貌とが、眼を閉ぢてゐても浮んでくるのだつた。彼は寧ろ次第に此美

しい貴族的な女の存在を避ける氣持になつた。暑さは彼の患部にこもつた鈍い痛みを誇大のやうに重々しくした。彼は溜息をつき、心で唸り聲を立てながら雨に煙る窓の外の風景を折々眼を開けて眺めて居た。村落や青田の景色は逆さまに彼の片方だけの眼の中へずり落ちては過ぎた。A君の亡くなつたのは今朝らしいが、明け方から雨になつてゐたことなどを思ひ出してゐると、彼は何やら耳元で女の聲がするやうな氣がした。「朝日グラフを貸していただけないでせうか。」

自分はそれでもまだ氣附かずに眼を閉ぢてゐた。併し確かに二度目にその聲がして眼をあけると、向ひの坐席の姉娘の顔が餘りに近く自分の顔に差し迫つてゐた。自分は機械的に朝日グラフを此の貴族の娘に手渡しした。醜い眼を見られたゞけでも不愉快だつた。併し彼女がグラフを返した時も先刻と同じい平氣さで、さういふ些事にはこだはつて居らぬ氣持らしかつた。彼女は時々自分を靜かに見る外、決して朝日グラフのことなど考へてもゐないやうであつた。自分はその氣持には或る境遇的な美を感じた。さういふ特質は貴族に未だ殘つてゐるものらしかつた。

田端へ着くとかかりつけのS先生への車の道順を辿り乍ら、どうにも我慢ができなくなり、子供が診て貰うたことのある眼療院で下車した。そこの寢台で横になり腫物を切開するのだつたが、汽車の疲勞と昂奮から彼は自分の手を爪先で引搔きながら、さくりと瞼の腫れものを切開された。彼はその時列車の中で見た姉妹の美しい顔も、同時に抉り出され脱脂綿で拭き取られたやうな氣がして、妙な心殘りを感じるのだつた。老醫はその切開したあとを捻るのだ。自分は呟むやうな氣持の錯亂で痛いといふ聲を出したのだつた。

「すこし我慢をなさい。」老醫の聲は寧ろ強制的に嚴格だつた。看護婦は頭をおさへてゐたがその顔は見えなかつた。充分に化膿してゐるので療治しやすいとのことだつたが、最後にかれは瞼の奥に烈しい痙攣とゝもに、老醫は何やら透明な葡萄狀をした腫物の根を引き摺り出すのだつた。それは寧ろ神秘に近い憎惡すべき小粒な珠だつた。

「これの仕業です。」老醫は自分にそれを鳥渡見せて來てた。同時に頭痛は薄らぎ浮いた齒根が落着いて、晴々した氣持に

なつた。自分はガラス瓶の透明な水を卓上に見ながら、乾いた喉元にそれを求めるやうな氣持だつた。頭を擡げ手を支へながら寢台からよろけながら下りると、暫らく椅子の上に腰をおろして、眩暈の靜まるのを待たなければならなかつた。彼は直ぐ車で自宅へ行き、留守をしてくれてゐる人に譯を言つて、暫らく眼を溫めてゐた。間もなくA君の死が尋常でないことが判つた。

A君の書齋で白布の下のA君を見たのは、十時過ぎだつた。A君は曾て彼と輕井澤で騷てゐた時よりも色は蒼褪めてゐたけれど、靜かさは一入深かつた。彼はA君とは一ト月程會はなかつた。A君は吳昌石の蘭の掛物を持つて來てくれたのも、夏の初めだつた。「これを君に獻上しよう」自分は表裝を仕立直し少し細づくりにしたいと云ふと、好きにしてくれとのことだつた。自分は表具を直した。A君はその次に來てそれを見て、なるほど細めにしてよかつたと云つた。

彼は近頃になつて、「何かおれを利用することはないか」と或時云つた。自分はないと答へた。彼はさういふことの嫌ひな人間だつたが、何かあるだけの好意を示さうと努めてゐるらしかつた。自分はA君の顏を見て此言葉を思ひ起した。併も彼は此の漠然たる死の中にA君の願ひは何も彼も煩はしさ機はしさから、潔癖の彼岸へ一足飛びに飛び越えてゐるやうな氣がした。

「おれはほつとしてゐる。」自分はかう云ふ言葉の中にA君の性根を感じた。

椎と竹との庭、A君の書齋、それらに隨時にA君を感じることはできたが、夜のほのぼのと明けかかる頃には、より分けA君を感じることが深かつた。椎の葉の一枚づつ明けて行くのは、何かA君の鋭い清らしい感じ以外のものではなかつた。彼はA君の親友の一人が通夜の人々の去つたあとに居殘り、沁々泣いてゐるのを眺め、鋭く打たれるのだつた。人氣のない二階へ上ると其處にA君に似た顏がゐて、その顏を見ると自分は初めて涙を感じた

翌日家へかへり庭へ出てゐて、何氣なく竹の葉のうらに蠢めく毛蟲を見ると、急にまた眼がいたみ出した。一昨日切開したあとへ又小さい腫物がもう一つその執拗な巣をつくり初めたのだつた。眼科院へ行くと此種類の腫物は幾つ出るか分らないとのことだつた。自分は天眼鏡の下から老醫の白い顎髭を下から覗き上げて、膏ぐすりを塗り込まれながら、又明日から起る頭痛や歯の浮き悩むことを想像すると、一時にヘタ張つてしまふのだつた。苦々しい自暴の氣持はあつても、その儘その氣持になれもしなかつた。

彼はA君の火葬場へ行き、歸りの車を上野で降りて時計を見ると、發車にはまだ一時間あつた。東京にゐても手當の方法が解つてゐるのだから、信州へ戻らうと考へるのであつた。彼は周章てゝ夕飯を言ひ付けて、折柄起る音樂を半分喪失した氣分で聴いてゐた。通夜の不眠と氣勞れとで音樂は直ぐ彼を茫乎とさせて了つた。A君と彼とは「パイプの會」で此の料理店で能く坐つてゐた。しかもパイプを啣へたA君の姿はどのボックスにも映らないではなかつた。その聲音も音樂のまにまに紛れて聞えるのも、強ち彼の錯覺ではなかつた。A君は此のレストランの前を先刻通つて行つたのだ。

彼はその晩おそく信州の假住居へかへり、朝起きて見ると瞼はもう一杯に腫れ上つてゐた。朝日はやはり向ひの森の上に金色の額ぶちを縁取つてゐたが、此間とは違つた油繪めいた風景の中に或神々しい誇張された光を見せてゐた。彼は此の勇ましい金鵄勲章のやうな輝きの中にA君の何者かを感じたことは、決して友情的な發作ばかりではなかつた。別の意味で此の見苦しい眼の疾患は何か毒のある吹箭のやうなものを、何處からとなく或は此朝日の中からも飛ばされてゐるかも知れなかつた。彼は英國生れの女の子供が豆畑の中に自分の娘と遊んでゐるのを見て、二人とも白衣の短い服を着けて居て、同様に足の半ばを出しながら英語で何か喋つてゐるのを耳に入れると、此の地上の天使どもの美しい姿が、古い重い黴の吹いた書物の頁からハネ出されたやうな思ひがした。

彼らは落葉松の枝から下つてゐる鞦韆の上に乗り合うて、一人づつ動かし合ひながら叫び聲を立ててゐた。自分は芝生

の上に坐つて、眼に白布をあてゝ無表情な氣持で見守つてゐた。その遊び戯れる姿を穏かに見守つてゐる自分に、どうかすると此儘何處かへ逆さまに墜ちはせぬかと思はれる位、幸福さに不安が附き纏ふのであつた。A君が夜更けて總ての準備が終つてからその愛兒に頬擦りをしながら、死に就いた光景が自分の眼に映り出した。此の鳥渡した想像は極度に感傷的な氣持に自分を惹き入れた。周章てゝ自分は子供を呼ばうとした位だつた。彼らは樂しきが中にも樂しげな能く撮れた寫眞のやうに乘り合うてゐた。自分は何故か込み上げる氣持を紛らし乍ら、鞦韆の繩を引いて遣つてゐた。あたりには澤山の天使らが枝を鳴らして扈從してゐる古畫のやうな光景であつた。

片眼を掩うた世界で見た此の二人の子供らは、冷たい足を朝露で濡らしてゐたので、自分は妻を呼んだ。彼女は井戸端で靴の泥を滌いでゐた。然し彼女は子供らの遊ぶ有樣を見て、あれを見よといふ快よげな微笑をして見せた。自分も同樣の微笑みでそれに答へた。

「繩は大丈夫でせうか？」

彼女の注意で鞦韆の繩を調べて見たが、どれだけも摩擦されてゐなかつた。落葉松の枝は鞦韆の動くごとにその頂の枝を鋭く綱のやうに震はして見せた。

夕方、彼は町へ出て、眼の疼きの止まる方法はないだらうかと相談したが、醫者は前通り化膿した上切開するより外に手段がないと云ふのだつた。晩は疼き通しで明けかかり、彼は夢の中の人物と同樣、點眼藥を射し低いうめき聲を立てながら、床の上にゐて暗い山中にゐる恐怖さへ感じ出してゐた。

厠へ立つた時に湯殿に誰かがゐるやうな音がしたが、宵の口の湯が次第に冷えてゆくらしい湯氣が、洗面場へほのぼのと其幾すぢかを這き入れてゐるのであつた。自分は何となくその湯氣に注意深い目を向けた。白い瀬戸できの洗面器の上に一疋の赤蛙が落ちてゐて、それが微かな音を立てたから、此夜半に跳躍きながら目ざめてゐた。

自分はなるべく人に繃帶された眼を見られない要心のため、別莊地帶の裏側の山道を散歩してゐた。併し此處にも別莊は散在してゐたけれど、人通りは平常も途絶え勝ちな山道だつた。此爪先上りの山道の果てたところに一軒の別莊があり、櫟と落葉松に取圍まれしながらじめじめした鎧戸を閉め切つてあつた。自分は去年の夏も此別莊に誰も住んでゐなかつたことを朧氣に記憶してゐた。五度目にこの家の前で内部を覗き見たい欲望を感じた。

玄關の客間らしいドアが二寸ばかり空いてゐるのを見て、開けかゝつた戸は譯なく外れてしまうた。閾の際には落葉松の枯葉が水い冬の風に揉まれて粉のやうになつてゐるのを見た。客間の暗い中で次の寢室を覗いて見たが、鐵製の粗雜な寢台があるきりで他に何もなかつた。二階は暗い中に雨戸の穴から漏れる明りが、不思議に或小劇場で見た星空の背景を聯想させた。自分は客間に三四脚の普通の腰掛椅子と一つの長椅子とがあるのを見て、その長椅子の上に腰をおろした。勿論ストーブは北壁に塗り込まれてあつた。西洋紙の手紙らしい燒き殘りはあつたが、細かに崩れて最う灰のやうになつてゐた。その上に花瓶があつて、何も生けたあとはなかつた。板敷の上は古い落葉や落葉の屑だらけだつた。乾いてゐるばかりでなく落葉らしい尖りが擦り切れてゐるのを見ると、去年や一昨年の古い落葉らしく思はれた。

自分は勝手の方に炊事道具の棚があり、そこに西洋風の瀨戸引きのバケツが俯向きになつてゐるのを見た。そして又先刻の長椅子の上に戻つて坐つてゐると、山道に誰かが通り乍ら話し聲を立てゝゐるのを聽いて、すぐドアの外へ出ることを控えた。かういふ間にも眼の痛みは容赦なくおそつてゐた。併し彼は非常に健全な神經を持ち合してゐたゝめ、何者をも此の別莊の中で怪訝な想像力を働かすこともなく、また元の穩かな風のない山道を歩き出すのであつた。併し彼は彼の思惟の中に何やら的確に感じられないものを、殆捕捉しがたいものを今ふと思ひ出すのだつた。それはマントルピースの上の俗悪な花瓶だつた。その花瓶はすくなくとも三寸の幅と五寸の背丈を持ち、水は一滴も這入つてゐないらしく空の感

じであつた。文枝は伊萬里の金入りの唐子が描いてあつた。彼はその花瓶の後方に、花瓶の陰で見えなくなつてゐる暗みに遂に何者かを想像することを最後まで拒むことができなかつた。

山道から散歩道へ出ると知合ひのK夫人と令孃との二人が、夕立の押し迫つてゐる西の方の暗い曇りを背景にして、ゆつたりと散歩しながら自分の方に近づいてゐた。自分は眼を見られまいとする努力を棄てゝ、よく彼女らであるかどうかを繃帶を外しながら見定めるのであつた。

「お眼をどうなさいました。」

「木の枝でついたのです。」

彼は親子らしい美をもつた彼女らと三分位の立話で別れた。

天候は益々險惡だつた。誰か馬に乘り暗い西の方へ馳けて行くのが見えたが、風は歇んでひつそりと氣味惡かつた。彼は此の高原の風の落ちしづまつた時程寂しい思ひをする時はなかつた。

ウインさんの家では病ウインがギターを彈き、マダムは何か唄をうたつてゐた。病氣の療養のために米國へ十月には歸らねばならぬ人達だつた。自分はしばらく此のギターの音を聽きながら惹き入れられるものを感じた。あたりは松ばかりで夏も寒いところだつた。

遂に壯烈な夕立が來て四邊は暗くなつた。かれは雨戸の僅かな隙間から雨あしを眺めたが、かけすといふ深山の小鳥が降り込められ、松の梢に止つてゐるのを眺めた。夕立が晴れ美しい星が出ると、自分はまた眼に鈍い痛みを床の上に感じて、點眼藥を注しあぶら藥を塗り込み、山の中の夜更けを一人で目さめてゐた。この間にも晝間見たマントルピースの上の花瓶が目に映じた。

自分はその晩夢を見た。六年前に失うた亡兒の姿が揺れ椅子の上に笑つてゐた。次にはこれも亡くなつた或夫人がその

椅子の上から自分を呼んでるのが見え、又次には失明してゐた自分の養父が薄れ行く夕日のあかりの中に、危なかしげに椅子の上に腰かけ、何やら譯の解らない繰言を云つてゐた。第四番目の人物は眼科の老醫が自分の瞼を切開しようとするところだつた。最後に自分は眼から月見草の花が咲いてゐるところで目がさめたが、瞼の腫物は實際月見草の花のやうに化膿してゐた。自分は身慄ひをしながらその不淨物を絞るのだつた。堅い鐵の錆茶けた岩壁に次第にひゞが這入り、除ろに割れ落ちて行くやうな遥かな展望を何處かに感じながら、悪辣な腫物の上に馬乗りになり膿をしぼるのだつた。さういふ自分は一羽の蝙蝠の醜體を持ち合してゐた。

自分は間もなく初秋の山中から四回目の手術を受けに上京した。自宅から眼療院への途中、蛇屋があつて自分は其處で何時も鳥渡足を止めるのが常だつた。自分は夢にまで此の蛇屋を見た。

眼科醫への質問は一切しなかつた。そこに集る眼を患ふ人々は皆眼を閉ぢお互ひに見合ふといふことがなく、宿命的に膝に手を置いて俯向いてゐた。自分も元氣のない人々と同様、鯖のやうに痩せ細れて坐つてゐた。眼を患ふことは元氣をなくすることだつた。誰も一言も話をせず默々と陰鬱に入れ代つてゐた。自分は切開された時に思はず寢台の縁に何か掴むものを欲した位、劇しい疼痛を感じた。自分は竊かに老醫に尋ねて見た。

「その針はどれほど入つたのです。」

「この針ですか、一分五厘くらゐでせう。」

老醫の此の言葉は漠大な恐怖を伴ふのだつた。鋭い神經のある瞼へ刺される一分五厘の針は、かれの腦の中へひゞき入るに充分な疼痛だつた。自分は頭を垂れ恐ろしい痛みを回顧した。まだ化膿しない間に穴を拵へて置くことは、化膿の後の疼きを避げるのだ。此日の手術くらゐ彼を臆病にした經驗は稀れであつた。かれは點眼の順番を待ち乍ら此處で完全に

眼を開けてゐるものは、看護婦だけだつたので、その眼を殊さらに美しく感じた。患者は盲目同樣に一人として開眼してゐるものはゐなかつた。

彼らの或者は杖を曳いて行き、或者は車で去り又或者は自分のやうに徒歩であつた。駄馬や自轉車は通つてゐたけれど、彼らの陰鬱はその日の雲脚の亂れた間に挿み込まれ、この世のものであるよりも何か遙かなものだつた。自分は高台へ出て煙と埃の市街を見に出た程、心は滅入り込んでゐた。しかも自分はルドンの描いた丘の上の眼だけの異人を思ひ出した。――自分は一週間の後に漸くその腫物を退治することができて、或朝蛇屋の瑠璃窓に優しい朝日の當つてゐるのを見て嬉しく感じた。併しそこに一生涯その視線を蛇の方へ向けない努力に昏倒してゐる一疋の蛙を見出した時、自分は再た苦痛を感じた。しかも蛙は神心疲れて半ば死に瀕してゐた。自分は凡ゆる形容を絶した無神論者の執拗な惡戲な惜まずにゐられなかつた。

自分は妻子のゐない我家に坐つて、失神的に庭を眺めてゐた。妻子は山中で安らかに暮してゐるだらう。併し自分は一人でゐる心安さに沁々庭を見てゐた。A君が就死前四週間程前に來た時、他に二三人の客があつて、A君はその座の中から物をも云はずに庭を見てゐた。恰度飛石の惡いのに氣をふさがれてゐたので、七八枚ばかり打ちかへた後だつた。自分はA君がそれに氣附いてゐるに違ひないと思ひ、その事は殊更らしく云はなかつた。文字通りA君は物凄く庭を見てゐた。併し自分はA君の表情に些しの輕蔑の色を感じなかつた。自分らは伊豆榮へ飯を食ひに行つた。池の上に何か浮いてゐるものが食事の席から見られた。同行のHと三人で水の上を眺めてゐたが、自分はそれが偶然一疋の死魚だつたことを發見した。しかし其麼事は何でもなかつた。自分らが歸らうとして不圖そこに三つの座敷が襖でしきられ、三つの部屋々々には各々文人風の花が生けられてゐるのを見た。

「これは今朝生けたものらしい――。」

自分は其中の一番さびれたのが一等よいと云つた。A君もそれに同感した。併し其麼事は何でもなかつた。「夏山に足駄をおがむ首途かなといふ句があるな、あれはどうだ。」

「芭蕉が光明寺で詠んだ句だね。どうして其句を想ひ出したのだ。」

「唯おもひ出したのさ。」

自分が再た信州へ歸へて見ると、四五日の間に山中は秋の半ばに色を變えてゐた。或朝山道を例の別荘の前へかかると、別荘の窓やドアが開かれて女の聲がしてゐた。自分は何人の住居かと注意して見るまでもなく、裏口に子守が赤ん坊をあやしてゐる姿を發見した。今頃になつて何のために來たのだらうと不審だつた。

その翌日自分は洗面する時、指さきが瞼のマイボーム氏腺にふれ、ちくとした痛みを感じたが、晝頃には既う經驗のある鈍痛が始まつた。自分は椅子の上から恐怖と憤怒とで飛び上つた程だつた。宿命的な腫物はその晩から蜂の巣の中にゐるやうに彼を追ひ立てた。自分はすぐ町醫へ行つて赤硝子の下に佇んで見たもののどうにもなるものではなかつた。氣は焦し出すばかりでなく狂ひさうだつた。彼は彼自身の歩調の數を算へて歩き、それに據つて痛みを忘れようとした。冷たい外氣にふれてゐる間も痛みは去らなかつた。彼はしまひに崖の上を爪立て掻き上らうとしながら、爪の剝げるやうな痛みを前額と眼の上とに感じた。かれは例の蛙を思ひ出し老醫を思ひ出した。漆黑な森の中で大勢の騎馬兵か弓矢を番へながら、蹄の音を立て、闇の中へ辷り落ちてゆくのは兎も角、その中から振顧つた一人の番へてゐる矢がしらが、彼の歩いてゆく方向から、ねらひを定めてゐるやうでならなかつた。彼は理由もなくあなたは氣が弱いと云つた何日かの妻の言葉をにくにくしく思ひ出した。女などにどの程度までの強い弱いの氣もちがわかるものかと思ふのだつた。併し彼は再び避暑客の完全に去つた町の中へ出た時、機械的にハムを買ふのだつた。彼は腹を强くして置かなければならぬと何故か考へる

のだつた。

自分は人通りのすくない或家の土手の上に「此の土手の花折るべからず」と書いた立札を見て、理由なく悄然として自慨した。憤慨することに氣持とゝもに腫物が苛立ち痛むのだつた。家の近くに來ると、向ふのヴヰアザといふ英國の少女が窓に腰かけ、自分の方へ向いて右手を擧げてゐるのが眼に見えた。自分も同じことを繰り返した。彼女は自分の娘と遊び友だちだつた。彼女のおばさんは英國の田舍から遙々彼女にスエターや服を送つてくるのだつたが、彼女の成長の早いため何時でも短くなるらしかつた。自分はいつでも此の少女の外を見てゐる「窓」を新しい洋畫めいた感じで見てゐた。

自分らは荷物を纒め始めた。瞼の腫物の都合上歸京を早めたのだつた。もう自分は此の宿命的な腫物には倦氣がつき自分の指を顏にふれることをしなかつた。彼は一切脫脂綿で拭かねばならなかつた。自分は眼を見るごとに睫毛のかげさへ慄然として腫物に見えるのに怯えてゐた。

東京へ着くと每日眼科醫院に通ふのだつた。眼が次第に見えなくなる中年の女が通うてゐて、それを試驗するため老醫は自分の指を最初に一本伸して見せ、次に三本を伸して見せ、又その次に四本を開いて見せるのが、習慣となつてゐた。そのたびに中年の女は老醫の指の數を間違え、その朧氣な視線をどうかすると自分の方へ向けることがあり、自分は苦痛以上に氣難しくなるのだつた。併もその問答は非常に殆どうにもならない退屈そのものだつた。稀に或少女がその手術の椅子に坐つてゐたが、自分には中年の女と顏や表情が混線するほど、瞼の痛みのためにふらふらするのだつた。

「これは?」

老醫は節高な指を空に向けて三本だけまたハネて見た。

「一本だす。」中年の女は焦點のない氣味の惡い眼を瞠つて答へた。「いや、能く見てください。」老醫は云つた。

「三本だす。」

彼女の關西訛さへ寧ろ慘たらしい哀願的な語勢を帶びてゐた。「いや、能く見てや」老醫は同じことを繰り返した。中年の女はしまひに自分で手を出して對手の手をさぐるやうにじりついてゐた。

「ぼうとしか見えまへん。」

それは絶望以外の聲ではなかつた。老醫は椅子から乘り出した女を元の腰掛へもどして、又初めから指を立てゝ見せるのであつた。「心を落ちつけて見て下さい。」

自分はもはや女に答へる意力のないのを知ることができてゐた。併し女は答へなければならなかつた。

「一本だす。」

「三本だす。」

「ぼうとしか見えまへん。」

かういふ物憂い問答の中で、中年の女はしまひに床の上を這ひ廻り乍ら、天上を見上げてはのた打つてゐた。老醫は暗い瞼の前にその四本の指を折り曲げたまゝ、何やら屈托がましく考へ込んでゐた。點眼藥をさゝれると彼女は見えます見えますと嬉しげに叫びながら、あたりの患者の顏を見まはし初めるのだつた。彼は此の慘酷な光景の中から筧から小屋根をわたる灰だみた雀を美しい小鳥のやうに眺めた。しかも此の中年の女の疾患には少しの同情をも持たなかつた。彼女は見えます見えますを續けさまに云ひながら、老醫をモーゼか何かのやうにその前に蹲踞んでゐた。併しその間にもその視力は或は滅びかかつてゐたかも知れなかつた。

自分の父は大學目藥を半年程點眼したまゝ、底翳になり視覺を亡ぼしたのだつた。しかも父は眼の見えなくなつたことで口惜しがつたことは、只の一度もなかつた。穩かに視力に去られた父は田舍の一僧侶だつた。一僧侶のあきらめは遙か

にその視力無き後も平和だつた。父の居間からは六つの部屋の唐紙障子を開け閉てしなければ、厠のある縁側へは出られぬのであつた。自分の部屋はこの六つ目の座敷だつた。父は日に幾十となく此處から六つ目の部屋々々を通して行くのが常だつた。

「川の水が濁つてゐるのか？」

川は出水で濁つてゐた。さういふ父を今自分は拜むやうな氣持に感じてゐるのは、あながち眼の悪いためではなかつた。何かが堪え何かを父は感じさせてゐるのだ。自分の最初に眼をわるくしたのは七月の十八日だつた。十月の終りだのにまだ自分は癒らなかつた。自分は悄々しく患者を一トわたり見廻し、次には絶望的に眼を閉ぢ、第三に中年女が縮まり切つて坐つてゐるのを見て、徐ろに老醫のメスを第六回目に受けるのだつた。自分は思ひきり云ふのだつた。

「どうぞ充分に、痛いとは申しません。」

老醫は殊勝げに笑ひながら靜かにメスをおろした。髭の白い顔の長いモーゼと何の渝りはない此の老醫は、碓氷山上に立ちながら柔らかい瞼にその第二刀をおろした時に、いままで自分の視界にあつた看護婦の生優しい顔が突然にヘシ潰れたのだつた。腦の中に沁み透る疼痛は自分の氣もちを遠くした。自分は最早苦痛に慣れさうたものに思ひながらも、苦痛は事ごとに新しい苦難だつた。或は生涯眼をわずらふのかも知れなかつた。

自分は例によつて跛跟として寢台を下りてから、漸つと弱々しい聲で此モーゼに問ねるのだつた。

「これでおしまひでせうか。」

「おしまひにしたいものですがね。」

老醫は多少習慣的に最う一度説明した。「人によるとまだまだできる人があるものです。瞼の裏を一ト廻りしないと癒らない人が稀れにはあるのです。」

「瞼の眼を一ト廻りですか。」自分の腫物はまだ下瞼だけを一巡しただけだ。上瞼を又た一ト廻りされてはどうなるのだ。三月に餘る腫物は彼の神經をくたくたにさせた。彼は習慣的に眼を細めなければ確かに物象を見きはめられさうもなかつた。或はこれ以上腫物のできることがあるとしたら、氣が狂ひはせぬかと思はれる程だつた。實際かれの目は惱え乍ら次第に弱る一方だつた。

山中にゐた時は幾晩となく眠れないのに、しまひには山の荒い膚にさへ膿をもつてゐるやうに感じられたのだ。彼はさういふ想像ばかりに草臥れて、健全な山の美しささへ思へなかつた。彼は彼自身への問題では遂に彼はかう吐き出すやうに云ふのだつた。「おれが何を悪いことをしたといふのだ。」

自分は外で眼の悪い人間に會ふことでは直ちに屈辱を感じた。何よりも眼病人の薄暗い思想の中では同じい病人を厭ふことは、意想外の嫌惡であつた。或本屋の配達人は片眼を繃帶しながら自轉車に乗つて、彼のところへも書物を配達して來たのだつた。彼は能く片方の眼で自轉車に乗れるものだと同情した。併も本人は危なくて困るが仕方がないと醉うてゐるやうな足付で自轉車を繰り乍ら行くのだ。彼はそれ以來馳驅する多くの自轉車を、片眼の自轉車を恐れ初めた。自轉車に行き會ふと乗手の眼が丈夫かどうかを確めなければならない程、自分の氣持への自責を感じるのが常だつた。或夕方、朽ちた垣根の竹を潜る犬と不圖顔を見合した彼は、その犬の左眼だけ白い死眼だつたことを發見して以來、犬をさへ普通の意識では見ることができなかつた。

彼は其後第七回目の腫物を期待せずに濟む幸福を、もはや露骨に感じてゐた。老醫は毎日彼の瞼をめくり天眼鏡で彼自身の宿命を退治してくれた。彼は多くの不幸な眼の悪い子供が、そこの床の上にころがりながら點眼藥の苦痛に身悶えしてゐるのを見てゐたが、彼自身は屋根瓦に割られてゐる空を美しいと眺める外、大して子供に同情しなかつた。併も此の

淺猿しい自分の考への中へも、次第に第七回目の騎初は深暗い思想と打連れて迫つてくるのだつた。彼は[illegible]しながら手巾でちよつと眼を拭いたあとで氣が附くと、同時にちくと或鋭い感じがした。翌朝目がさめると此の百年の宿命は彼の瞼の上に、凡ゆる魑魅魍魎を蝟集させ、ずきずき痛み初めるのだつた。彼は蒼くなり妻にこの事を例に據つて告げるのだつた。

「昨夜手巾を當てたのが惡かつたのだ。」

彼女は悧れて呆やりと彼の顏を見詰めた。彼は同じいことを七度も妻に云つてゐたのだ。何と云つても彼は彼女の答へに食ひつくことを知つて居り、默ひ默つてゐた方が得だといふことを悟つてゐた。「そこでおれはどうしたらいいのか知ら？」彼は元氣がなく最早食ひつけなかつた。「お醫者へお出でなさるより仕方がないぢやありませんか。」彼女の此の言葉の下で、彼は門を出て坂を上り幾つかの道路を曲つて、蛇屋の前で鳥渡立止つて眺め、眼療院へ這入るのだつた。彼はその庭に垣根から這ひ下つて土の上に咲いてゐる朝顏を身に沁みて眺め、和歌を作りたい哀れな欲望を感じた。

「又始まりました。」

「はあ、……」

自分は例により瞼をめくられ、瞼をめくられることに感じる女の持つ羞かしさを感じつゝもう經過を話す氣持にはなれなかつた。老醫の治療をも彼には機械的であるとしか思へなかつた。「一體僕の眼はどうなるんでせう。」

「目にさわらぬ外仕方がないんです。殺菌は今のところ不可能ですから傷がついたら必然と初まるのです。」

彼は片眼を繃帶された儘、家への方へは行かずに電車通りへ出て、埃の中に佇みながら神も佛もない氣持だつた。埃にまみれた駄馬の引く車に精根のない「彼」を見るのはまだしも、此のまま自分の落着くところがないかと前後を振りかへり見るのだつた。彼は一軒の汚ない汁粉屋を發見した。彼はそこへ漂然とはいり込んで腰掛け台の上に腰かけ、汁粉を一

杯くださいと云つた。彼はどろどろの汁粉の中に硬い切餅を見付け、仇敵のやうにその餅を箸の先にいぢるのだつた。彼はそこにある「こわめし」を一瞥して、何故か遽かに戰慄した。併し彼自身で撰んだ此の汚たい汁粉屋も、依然落着きを與へなかつた。彼はしまひに梅毒ではないかと疑ぐり初め、寒く居竦むのだつた。兎に角汚らはしい病氣に違ひなかつた。

翌日偶然に田舍にゐた批評家のF君が訪ねて來た時、此のF君が右の眼を繃帶してゐるのにも一種の恐怖を感じた。彼は田舍から持ち越した血膜炎だと云ひ、東北の長い汽車の中で充分眠れなかつたとも云つた。繃帶をしてない左眼はにぶい力のない光だつたが、自分は何か不安で欝陶しく見てゐられなかつた。彼はF君を眼科醫に誘うて見たが、F君も一度診て置く必要があると云ひ二人で出掛けるのだつた。F君は詩人で批評家だが物に頓着のない人だつた。「四人の子供は次へ次へと百日咳をやつたが、おれ丈けは丈夫だつた。よく丈夫でゐられるものだ。」F君は震災後自分と前後して田舍へ落ちて行つたのだが、自分だけは彼より二年前に歸京してゐた。併し此一見暢氣相に見えるF君は寒い東北に四年も蟄居してゐたが、文壇的には何も書かなかつた。彼は原稿以外の教師の仕事や新聞記者の生活をしてゐたのだつた。自分は原稿以外で生活を支へるF君を尊敬し、さういふ心構えをもつことに譯無く同感するのであつた。

F君は田舍の新聞に出社した翌日、その文藝欄を先づ第一に廢したのだつた。自分はその話を他の人から聞いて壯烈な思ひがしないでもなかつた。その血祭は百の文壇的勇敢な批評を論破するよりも、彼には壯烈そのものの戰ひを思はせるのであつた。が彼は最後に田舍新聞の經營も困難に陷ち入り、その社の樓上で烏賊の煮付や魚の干物を嚙り乍ら、印刷工と一緒に別杯を汲んで捲土重來の氣持で上京したのだつた。「田舍の苦勞は身動きできないよ。」といふF君の四年間は、徒らに身邊の安易に汲々たる自分に較べて悲壯でもあり、又戰士の一人としての戰ひもした生活であるらしかつた。自分はF君の四年間に何人も輕蔑できない苦衷を感じるのだつた。

「君が何日かいいものを書くやうになるほど讀者が減るといふことを言つたね、あれは時々思ひ出すよ。」

F君は曾て上京した時に、自分は馬鹿のやうなことを或酒場で不圖云つたのを、忘れずに田舎に居乍ら思ひ出したといふのだつた。自分はF君のこの言葉の中に可成りな懇しい知己を感じた。

自分は眼科醫院へ來てから、老醫にF君を紹介した。F君の眼は過勞から血膜炎を起したらしかつた。F君は點眼藥を射されると、意氣地なく涙をその旅づかれのした眼の睫の上に落した。

「痛むか？」

「うむ痛む……」

F君は苦しさうに椅子の上をにじり出ては遠慮深げな身もだえをしてゐた。自分は瞼の上へ針を一分五厘も刺し透されたことや、顏ぢうが夜中に痙攣することなどを話してF君の痛さくらゐは何だといふのだつた。さういふ自分は晴々しい氣持になつてゐることは爭へなかつた。併しF君はじりじりと苦しがり大粒の涙を零してゐた。

自分は相渝らず陰氣な患者達の中に今日は何故か寛くり坐つてゐられる安易さを感じてゐたが、F君が藥をさゝれるごとに苦しがつてゐるのに心惹かれた。最後にF君はハツキリと眼を見開いて、爽ぱりしたと大聲に云ふのだつた。實際彼は繃帶なぞしなくともよいと言ひ、彼は熱の解れた眼を冴々とひらいて見せるのだつた。F君は割合無頓着で苦痛を押しこらへてゐたらしいのが點眼と洗滌とでハツキリした氣持になつたらしかつた。

自分の番になり老醫に診察されたが、老醫は初めて穩かな語勢でいふのだつた。「最うあなたは御安心です。」

「さうでせうか然し又……」

自分はかう云ふだけでも、にがにがしい經驗を顧る氣もちだつた。「考へないでゐらつしやい。それが第一です。」老醫は肩を叩いて彼をドアのそとへ送り出すのであつた。彼は子供のはればれしさと輕い屈辱とを全身に覺えた。

「併し僕はどうも梅毒ぢやないかと思ふのです。」

「眼に發しる梅毒の人なんてものは此麼やさしいものではありません。わたくしが受合ひます。」

老醫は事もなく云ひ放つて手を洗ひに去るのだつた。F君と自分とはまだ朝日の匂ひのする眼療院のそとの道路へ出た。

「おれは今度上京したら第一に眼がつぶれさうな氣がした。」

實際彼は先刻見た陰欝な鈍い光の眼のF君ではなかつた。快活な長身痀軀の大男だつた。「A君の在世時分は惡くも言いたが、それだけA君がゐなくなつたので心淋しい。」とも云ふのだつた。自分はけふF君にあうたので何故か元氣になれたのが嬉しかつた。蛇屋の玻璃窓に冬近くはあるが暖かい朝日がさしてゐた。曇天の日にこの蛇屋の蛇の生きてゐる姿を眺めるほど、佗しいものはなかつた。かれらの醜い長尺の脊にも朝日の耀きがさしてゐるのは、それだけに安堵のできる氣持だつた。

「河といふものにも上品な川と、野卑な川とがあるのだよ。僕の郷里には一度も洪水のない川がある。」

十和田湖の近くを流れる或川は、降雨があつても水の量は增さないで、やはり物靜かに何時も同じい水の量で流れてゐた。それ故小さい岩や石には古くからの樹や草が自然に形づくられ、その儘「庭」のありさまを傳へ古色を帶びてゐた。

「君に見せたらきつと喜ぶだらうが、さういふ穩和な川といふものは少數いものだ。僕もその川を見るまでは川にもさういふ區別のあることは知らなかつた。」とF君は沁々その川を目前にして話した。

「そんな川も何處かにあるやうな氣がしてゐたが、やはりあつたのだね。」

自分は永年同じいささ流れを續けてゐる川を恍惚として考へない譯にはゆかなかつた。さういふ川に何時か自分は行きあふのだらうと、その類ひない光景の中に彼は直ぐ自身が佇む幸福を感じた。「いい話をしてくれた、そんないい話は近年

聞いたことがない……」そのいい話がどれだけ神經の亂れてゐる此頃の自分を鎮めてくれるかを、F君に言葉巧みにつたへたい位だつたが、それだけに猶露はに云へない氣持だつた。

「お互ひにこんな仲をもつやうになつては達者でゐなければならんね。」

さういふF君の風貌には未だ古色蒼然たる書生の氣慨があつた。文事にも要求ありそれ故に私は漸つと時間に餘裕のあることを見付けて、他人には面白くない自分には必然な文字を綴らなければならなかつた。かれらは贅沢な食事をした後別れた。彼自身は光輝ある批評を、自分はまた自分だけ解るものを書かなければならなかつた。「そのうち家内をよこすよ。」彼ら夫妻の仲人をした自分は、かういふ彼の中の親愛よりも、此の言葉を平然と挨拶がはりにいふF君が好ましかつた。

F君の歸つた後、自分は滅多にない快活な氣分で、庭へ出て落葉なぞを描いてゐた。そして楓の木かげに俗にいふ茶毒蛾といふ黄ろい嫌い毛蟲を見出した時、（大方その前後に違ひない、）突然左の瞼に輕い痛みを感じたが、自分でも疑はぬ譯にはゆかなかつた。「まさか刺まつたのではあるまい……」その晩かれは久しぶりで活動を見に行つた。館を出てから全く例の腫物がもう刺まりかけてゐること、楓の枝か葉にふれた覺えのあることが記憶に新しく考へられた。彼は驚き騒ぎ車に乗ると、全身が固まる程猛烈に昂奮するのだつた。これは一種の憤怒の發作で狂氣をも加へたものだつた。街々の燈かげすら手痛く映るのだつた。で、弱々しく今は宿命の前に頭垂れてゐるより外に方法はなかつた。

彼は妻へは默つて床には入り、朝になると洗面の時に可成腫れてゐることを發見した。永い間通うた道路を又通ふのだ。事もなく洗濯や掃除にいそしむ女らや、學校通ひの子供や、齒入屋の新しい齒黄や、光る自動車を見て眼科院には入るのだつた。患者の顔ぶれも變つてゐたが、けふは若い娘達も來てゐて診察されてゐた。彼は老醫や看護婦の顔をも見ないやうにして、小さな朝顔の花ばかり見てゐるうち、此花にも眼があるやうな氣がし出した。彼は時計や藥價表や其他あ

らゆる退屈なものに目をふれ、一人で冷笑するのだつた。おれは生涯これらに目をさらしてもよい。又生涯おれはこの宿命と道づれになるのもよい、唯、「青い汗」の用ゐ苦しさゝへ癒つてくれゝばよい、彼はよごれた敷物の上で單純に想像することは、これらの平凡な事がらだつた。

彼は呼ばれて默つて老醫に喉をめくられ洗はれるのだつた。老醫はやはり化膿部に針を打つことを主張し、それによつて疼痛を薄らげる方法を執りたいといふのだつた。實際それ以外に痛みを減らす方法は全然無いと云つてよいのだつた。

「口をあけてさへ居ればいいのです。一寸の間です。」

彼は默つてその「口をあける」針のことを考へてゐた。口をあける、恐ろしい針を刺されることは、彼の腦をもう刺戟しはじめるのだつた。併し彼は抵抗しがたいものを感じてゐた。

「針を打つてください。」

「あとが樂ですから、それでは我慢なさいますか。」

彼は叮嚀に頭を垂れて見せた。

彼は寢台の上にねかされ、上から頭をおさへる看護婦の手を感じた。この時間は瞬時にして遂行された。彼は雀のやうに灰ばんで力なくばたりと落ちた。そのスリッパに足をつッかける元氣もなかつた。

彼は老醫に力ない稀薄な笑ひを笑つて見せた。「痛みますか。」彼はさう尋ねた。「いやそれほどでもないのです。」自分は近眼の試驗紙を讀んで見た。間違ひなく讀めるのだつた。朝顔の小さな花も見ることができるのだつた。唯氣持が何か非常に自分のものであるのに遠かつた。その遠さはめまいのする遙々とした可成な速力のある遠さだつた。彼はその果に見覺えのある化膿してゐる山嶽の一帶を見上げた。



京都御構入墨者

眞山青果

第一幕

時――文久二年十月上旬のある日。午後。

處――京都三條小橋の北、木屋町枡屋。

土佐藩士武市半平太が他藩勤王派の有志と應接交際のために借入れたる町家にて、母家より離れて一軒建の借座敷風の家なり。

舞臺に見ゆるところは建物を外部より見て、その出入口と客室の縁側及び庭園の一部なり。即ち下手に潜り戸つきの京都風の出入口あり、その傍に石の井筒あり。上手客間は八疊四疊の二室ぐらゐにて、内部は全部

見えざれども、折廻しの縁側となり障子を鎖せり。その前方は開ひめきて物寂びたる小庭。石燈籠、敷松葉、飛石など、わざとめかしくそなはり、立木も三四本あり。小庭と下手の出入口通路の間には、低き塀又は垣にて仕切り、木戸あり。

その日は暖かに晴れたる小春日の午後にて、遠景に見ゆる近傍寺院の銀杏樹の梢を、落日はなやかに染め、まぶしきまで縁側の障子に降りそゝぐ。時々鵯の聲を聞く。

幕明く。土佐藩の郷士野添於莵馬、縁側に長々と寢そべり、背中を温めゐる。その傍に同じく郷士にて田淵進一郎、田舍出らしき物馴れぬ青年、屈托さうに坐りて話してゐる。

野添於莵馬はこの戯曲の主人公にて、年齢二十七歳、貧家に生れて劍道に達し、剽悍氣鋭なれども、ほとんど文事を解せず、直情徑行にして修飾なきため、態度粗野にして檢束もなく見ゆるなり。この日は近日勅使として江戸に下向する姉小路公知の從列行裝の豫行演習のため同公の祇園社參詣ある日なり。於莵馬も御中屋姓の一人として豫習に加はる筈なりしが、故ありて參列の時刻に遲れたるため、その怠慢をわびんがため、同志の首領にして劍道師匠たる武市半平太の寓居を訪問せるなり。隨つて服裝は旅姿の制規にて、黑縮緬紋付の長羽織、小紋小袖をジン／＼端折りにし、一文字の菅笠、帶刀に柄袋をかけたり。

於莵馬　何んだ、鵯か。（顏を上げて聞き）すると野田村邊からはいるのか。

田淵　いや、野市から西佐古にかゝつて、二里半と云ふんだ。

於莵馬　物部川の川通りだらう。行つた／＼、知つてる。安政地震の翌年だつたかな……、先生が香美の役場に劍術師範

の出張を命ぜられた時、おれも隨行して貴様の方を通つたよ。隨分ひどい處だぞ。

田淵　御城下から見ては、とても較べにならん。

於菟馬　その城下があれだからな。はゝはゝゝ。あの邊では何を食ふ。米の飯は、節句ぐらゐだらう。

田淵　（田舍者らしくむツとして）百姓は稗や蜀黍を食ふさうだが、われ／＼はそんなもの、食はん。

於菟馬　食つたつて好いぢやないか。はゝはゝゝ。と云ふおれだつて、高知を出るまでは大唐米の採飯よ。お菜は醤油の縮粕だ。あの眞黒にボロボロした粕を、熱い飯にまぶして食ふのだ。存外、食へるぞ。

田淵　われ／＼の居村は、田處だから米は……。

於菟馬　（ゴロリと寢返り）京大坂は食物が好いなあ。國にゐてはとても食へないものが食へる。これだけでも都に勤務は得分だな。四條通りを遊歩したか。食物屋の前が通りきれないだらう。はゝはゝゝ。

田淵　わしは母の實家が布師田だから、毎年正月のお取初には、父につれられて高知に出てゐる。

於菟馬　その高知が何んだ。田舍者だなあ……。

田淵　京都だつて、大坂だつて、わしは一向驚かん。

於菟馬　今度國へ歸つて見ろ、町の屋根が低く、穢なく見えるよ。はて、こんなだつたかと思ふよ。一度二度と國へ歸るほど、都の繁昌が初めて分る。この都に驚かないうちは、田舍者の證據だ。はゝはゝゝ。

田淵　然し山内家は、二十六萬石の城下大名だから……。

於菟馬　馬鹿。大坂の堂島へ行つて見ろ。二十六萬石は一軒の商人が藏出し藏入れしてゐるんだ。少しその、踵の土氣を落せよ。

田淵　（青年らしく憤慨して）おれは何うで、田舍者だ。

於菟馬　損だなあ、これが。國者は直ぐギクシャクして厭がられる。大庭へ出ては、故郷の無暗自慢はやめるがいゝ。おれは江戶も長崎も見て、知つてるから云ふんだ。待て〳〵、今夜連れ出して、うまい物なら美しいものなら、目にも腹にも堪能さしてやらう。はゝはゝゝ。然し、路用は十分か。

田淵　(多少昂奮しつゝ)わしは、遊山に上京したのぢやない。

於菟馬　貸せとは云はんよ。心配するな。その通りだからさつきのやうに、皆に馬鹿にされるんだ。貴樣も勤王組で、今度五十人衆と一緒に上つたのぢやないか。雀ッ子の腹のやうな、小さい根性はやめろ。

田淵　(思ひ出して、口惜しさうに)わしは最う、國へ歸つてもいゝ。

於菟馬　そんなら、何んのために脫藩までして出て來た。

田淵　阿彌陀酒の附合もせんで勤王がならんなら、わしは國へ歸る。わしは日本外史の勤王をするんだ。

於菟馬　(顏を見て)こいつ、おどけてゐやがる。はゝはゝゝ。煮花を一杯、持て來い。

田淵　煮花？

於菟馬　茶だよ。田舍者だなあ……………

田淵、不平ながらも勝手の方へ去る。於菟馬、腹を日光に暖めて、一人クス〳〵笑ふ時、今日の祇園社行列に參加したる吉助太郎、鈴樹東吾、多田鐵馬など隊行の演習を終りて、退出し來る。いづれも土佐藩の鄕士にて、武市主帥の勤王黨に屬し、姉小路卿の警固に選ばれたる同年配の若人なり。服裝はみな於菟馬と同じさまの旅支度なり。

田淵、茶を汲み來る時、三人は開戶より緣側を通らんとして、そこに寢てゐる於菟馬を見つくる。

鈴樹　(思はず聲を尖らして)於菟馬。主は何うしたんだ。

多田　貴藩ひとり不參のため、行列の手順が狂つて大騷ぎした。

曾根　馬鹿者。何處をうろついて居た。

於菟馬　何處にゐやうと……、餘計な世話だ。

　　於菟馬、突ツ掛けの一言にむツとして、溫茶を飲む。

曾根　今日の祇園參詣は、大事な演習だぞ。今回姉小路少將が幕府改革の勅使として關東下向されるため、われ〱一黨から選士十名、警固につけられたのだ。その道中作法を稽古するための參詣だ。

森　用事があれば、前隊に屆けてくれゝばいゝのだ。

於菟馬　煩さい、雜魚ども。文句があるなら武市に聞く。

多田　武市だ――？　武市とは誰を云ふのだ。

於菟馬　（又聲聽んで）半平太よ。おれの師匠だ。

曾根　（むツとせしが、靜かに）野添、お主この頃口が過ぎるぞ。

於菟馬　半平太だから半平太だ。おれは誰の前でも、然う呼んでゐる。

曾根　何。

於菟馬　野添於菟馬は、姉小路樣の道中並に江戸表に於て、狼藉者が顯れた際、眞劍の護衞をするのだ。發足前に祇園樣の石段の前で、お邌物の眞似をするなら、貴公達で結構用が足りる。はゝはゝゝ。

曾根　餓鬼め！

　　曾根、不快さうに呟き、三人と共に境内に入る。

於菟馬　（からかふやうに田淵を見上げ）何うしたい、安藝郡の先生。何をそんなに、ボンヤリ考へてゐる。

田淵　（進み出て、熱心に）人を切るのは、結局業ですか、心ですか。
於莵馬　ほう、稗喰ひ先生。妙なこと云ひ出したな。
田淵　國を出る時、兩親に誓つたことがある。野添さん、あんたは天誅の名人だと云ふ、敎へて下さい。
於莵馬　それ當流の極意は、心、氣、力の一致にあり。心定つて氣奮ひ、氣奮ふて力生ずか——。はゝはゝゝ。みな嘘の皮だよ。
田淵　然し……。
於莵馬　それは誰か、外の者に聞いて見ろよ。おれは何日も、から夢中だ。道場で習つた劍法など、一度だつて役に立つたことがない。（田淵を見て、妙に目映しげに笑つて）本當だ、本當だ。
田淵　然しあんたの人切りは評判だ。井上佐一郎、本間精一郞、目明しの文吉、それに石邊宿の旗本三人、最う七八人も切つてゐませう。
於莵馬　はゝはゝゝ。（たゞ馬鹿のやうに聲立てゝ笑ふ）
田淵　目下京都に於て、薩摩長州兩大藩の間に立つて、假りにも薩長土の勤王三藩と呼ばれるのは、やはり斬姦天誅の評判のためでせう。何日の天誅にも、あんたの名が出ないことはない。
於莵馬　はゝはゝゝ。もう止めろよ。
田淵　わしの父は、世間に知れない流儀ですが、淨心古流を使ひます。國を發足する時、極意の三法を傳授されましたが、わしには何うも未だ、會得されないところもあつて、苦しんでゐるんだ。
於莵馬　お主、そんなに人を切りたいか。
田淵　（眸を赫かして）切りたい。是非切つて見たい。

於菟馬　好し。そのうち便宜があつたら、連れて行かう。

田淵　本當ですか、野添さん。連れて行つてくれますか。

於菟馬　そんな面白いものぢやないよ。(苦笑) 馬鹿だなあ……。

田淵　國元では御状日毎に、晒首の風聞を聞いて、二本差すぐらゐの若者どもは足が地につきません。勤王脱藩の無賴を初めて、それを路用して追々と出京して來ます。その中でも、あんたの名は何日も一番だ。

於菟馬　はゝはゝゝ。

於菟馬、得意と云ふより寧ろ苦しげに笑ふ時、やはり同志の少年高松太郎、祇園社の參詣より退出し來る。太郎は坂本龍馬の姉の長男にて十七八歳なり。行列の近習並に選ばれ、作法の服裝をなす。

高松　(庭木戸より入り來りて、野添を見る) 七軒町。何うしたのだ。

於菟馬　(親指を示し、小聲) おやぢ、怒つてゐるか。

高松　そりや……。今日は、惡いもの。

於菟馬　用があつたのだ。遁がれられない首尾なのだ。で、何うだつた。少しは市中の見物が出たか。

高松　四條の橋束は、揉み返すほどの見物だつた。

於菟馬　その間を、われ。(急に突袖の眞似して) 遣つて歩いたのか。はゝはゝゝ。おれも殘念なことした。

高松　宿入りの稽古を三度もしたが、むつかしいぞ。「笠を一文字にして、歩並が一つに揃はなければならん。えゝ、ほう、ほう——、」御先拂の制止聲を丁度……、五つ位に刻んで歩むと好い加減に足が揃ふ。

於菟馬　ほゝう、遣つて見ろ。

高松　こゝぢや出來ん、馬鹿臭へ。

於菟馬　先生は駕か。
高松　姉小路の雜掌柳川左門といふ御觸れ出しだ。今日姉小路樣からお名前を下されて、後供の先頭だ。本棒の駕籠に乘つて、若黨二人、鎗持、草履取、具足櫃、はさん箱、家來が都合六人つくのだ。
於菟馬　ほゝう、それは〳〵。
高松　丑之丞と丑五郎、若黨格で乘物の兩側に立つのだ。まるで以つて、狂言芝居のやうだつた。はゝはゝゝ。
於菟馬　然うか……、そりや殘念だつた。（心から出て云ふ）
高松　江戸城に到着して、將軍家對面の日の行列は、これは又大變なさうだ。道中追つて練習すると云ふ話だつた。
於菟馬　おい等も、江戸のお城に入れるのか、高松。
高松　當り前さ。そのための勅使の警固ではないか。七軒町は御中屋姓と云ふ役割だ。何うする、何うするぞ。
於菟馬　おれが――？　はゝはゝゝ。土佐なら百石以上の格式だ。はゝはゝゝ。おれが御中屋姓か……、目が舞ふやうだなあ。
高松　おりやこれから、江戸の叔父へ飛脚を出すんだ。
高松、少年らしく興奮して、奥に入る。於菟馬、その後を見て譯もなく大笑する時、青年田淵の悄然と俯向いて、涙含めるに心づく。
於菟馬　何うした、安藝の守。何をめたに鬱いでゐる。
田淵　僕はもう、土佐へ歸る。
於菟馬　何んで。
田淵　わしは高松のやうに引がない。高松は坂本龍馬といふ叔父貴があるので、いつも出世場へ廻はる。おれ等は、とて

も……駄目だ。

於菟馬　萎れるやつがあるか。うぬが働きで伸せ。

田淵　（俯向いて涙含み）わしの家は野取郷士の格には入つてゐるが、貧窮で、殊に親父は中氣で寝てゐる。屋敷についた杉林を賣つて……やつと今度の旅費をつくつて來たのだ。高松のやうな好い衆の眞似は、とても出來ない身だ。

於菟馬　龍馬が何んだ。役とてわれ〳〵と同じ同列だ。

田淵　坂本一門は家が有福だ。僕等は、貧家の生れだ。

於菟馬　好し、おれが後を見てやる。野添の尻に食ツついてゐろ。

田淵　坂本龍馬などは有福にまかせて、諸藩往來の交際も派手に、同志の間にも費用など見るさうだ。隨つて、人の思ひ付きもある譯だと、親父がわしに、然う云ひました。勤王もやはり身代次第です。

於菟馬　然う云や然うだけれど……、そんなことはない。おれなんか誰の前に出ても下らない。おい龍馬！武市、みな頭ごなしだ。はゝはゝ。

田淵　あんただつて、矢張り、損をしてゐると思ふ。

於菟馬　おれがか。何處に損をしてゐる。

田淵　やはり然うです。何處にでも、貧富の隔てがあります。貧なる者はいつも、犬のやうに働かなければならん。

於菟馬　そりや僻みだ。馬鹿を云ふな。はゝはゝ。兎に角、おれが見てやる。樺はん、何事でも、野添が然う云つたと云へ。おれを背負つてゐろ。

田淵　實に……、こんな不公平なことはない。（嘆息）

於菟馬　馬鹿を云へ、田舎者。はゝはゝ。その氣だから、人の前に出られないのだ。男らしく堂々と、堂々と遣れ、は

はゝはゝゝ。

この對話の間に、同志の一人淸岡治之助、松山熊藏と共に祇園社より歸り來る。やはり同じ服裝にて、十人の警護選士のうちの人々なり。治之助は磊落氣慨の人物にして、文學に通じ、論議堂々たるために同志に畏敬せらる。

淸岡　(背後より肩を摑み) 於菟馬。今日不參の理由を聞かう。

於菟馬　え……。(淸岡の顏色を見て、やゝ痺む)

淸岡　同志間の規約がある。理由によつては寄合を開くぞ。

於菟馬　全く、餘儀ない用事で、刻限を外したのだ。直ぐ、姉小路樣のお屋敷に駈けつけやうと思つたが……、それも甚だ面目なくて……。

淸岡　聞いてゐるぞ。お主この頃、不潔なる場所など、徘徊するさうだ。

於菟馬　(狼狽して、頭を振り) うゝん、嘘だ。嘘だ。

淸岡　貴樣増長して、今日の役宛でも不滿なのか。何故、不參した。

於菟馬　そりや、唯……。

淸岡　今日の協議に掛けやう。勅使隨行が不得心ならば、武內君に話して、人選を代へることとしやう。

於菟馬　そりや解せない。おれは江戸へ、行く行く。

松山　(傍より口を出し) 於菟馬。貴樣今日の失態を輕いことに思ふか。三條公姉小路公ともに今度の勅使下向は、幕府に對して朝廷の尊嚴を立つか傷けるか、必死の覺悟で出發されるのだ。その御利運祈禱の大事な御社參に、行列の規模を紊して相濟むと思ふか。姉小路樣にも聞し召されて、悉く御不快の御模樣であつたぞ。

清岡　武市君はその爲め、從列一同を代表して、土佐藩參謀の進退伺ひに、姉小路邸に伺候したのだ。

於菟馬　（正直に仰天して）そんな大事か――！　おやぢ、行つたのか。

松山　公卿方の御祈禱大事は、貴樣も知つてるだらう。

於菟馬　然うか。それなら何を繰合つても、參列するんだつた。……（茫然としつつ、田淵を見付けて）何を聞いてる。引込んでゐろ。（田淵を追ひ遣りて、松山に）然うか。實はおれは、それ程とは思はんから、大抵ゆるりとしてゐたよ。そりや……困つた。

清岡　辯明があるなら、聞いて置かう。

於菟馬　辯明と云つて、詰らんことだ。小兒が泣くから可哀さうで、藥を煎じたり、粥飯の支度などして與へてゐたのだ。

清岡　何。

於菟馬　おやぢに話すよ。叱られるならおれは、おやぢに叱られる。

清岡　貴樣の旅宿の裏屋（はなれ）に、按摩取りの後家がゐる。そこへ入り浸つて、湯水の世話までしてゐると云ふのか。

於菟馬　寢てゐるんだよ。昨夜から急に差重つて、藥も通らず、十死一生なんだ。五つに三つの小兒が、枕元に泣き立てる。十六になる娘は西陣の機屋に年季を入れて、自由に介抱もならないのだ。

この前より障子のなかに、クスクスと笑聲聞ゆる。

清岡　娘はひどく、別嬪なさうだな。

於菟馬　京都者の不親切は、實に切齒する。親戚はあつても、唯一人寄つて來て世話する者がない。近所の者は娘を五條新地へ賣つて、病氣養生をしろとすゝめるさうだ。人間を見ると、直ぐ賣買に氣がつく族だ。

清岡　（輕蔑の語氣にて）手放ない譯だ。至極尤もだ。

於莵馬　おれも少し、深入りした。宿の小女郎に事情を聞いて……、少し酒の勢もあつた、親類の者合借屋の者の集つてゐるところへ行つて、退引きならない餘計なことを云つてしまつた。それが祟りで、打遣つても置けず、實は今、少し迷惑にも思つてゐるのだ。

松山　その迷惑なら然し、甲斐があるよ。結構なことだ。

室内の人々、怺えかねてドッと大聲に笑ふ。

於莵馬　治之助。そりや困る（去らんとする清岡を抑へて）みな笑ふのは、僕がその娘に戀着でもしてゐるやうに思ふのだ。誓ふ、誓ふ。おれは決してそんな心はない。おれも貧家に生れて、貧の苦しみを知つてゐる。貧のために悩む人は、見て通り過ぎられないのだ。

清岡　桃は貧家に咲いてふさはし。貧家には又、得て美しい娘があるものだ。

松山、清岡、憫笑を洩して家に入らんとす。

於莵馬（慌てゝ立塞がり）そりや困る。聞いてくれ。

清岡　聞いた。もう澤山だ。

於莵馬　然し、困るよ。おれは決して、そんな不潔なこゝろからしたのぢやない。弱き者を救ひ助けるのは、人間の道ぢやないか。違ふか、松山。

松山　道も道にこそよれだ。男子の大道を忘れるな。

於莵馬　然し現在そこに、泣き叫んでゐる小兒を見て……。

清岡　だから粥も煮ろ、水も汲んでやるがいい。

清岡、松山、椽側より座敷へ上る。障子のなかの若人達は、又どつと笑ふ時、同志の一人平井收二郎、巻紙と

硯箱を持ちて縁側に出で来る。くろつきたる平服、着流しの姿。二十八歳。

平井收二郎は土佐藩勤王派中にても、武市半平太と相並んで主謀者格の人物、主として京都貴紳の間に遊説運動す。

於莵馬　（笑聲に激して）えゝ、何がおかしい。おれは娘などに惚れてゐない。おやぢが歸つたら、おやぢに話しする。

平井　（微笑しながら、靜かに坐つて）おれが笑つたのぢやないよ。娘に取入るなんて、貴様にそんな藝はないよ。なあ於莵。

えゝ吠えやがるな！

於莵馬　馬鹿にするな。おれの精神は潔白だ。（憤然として腕組み、面白からぬ表情にて緣側に腰掛けゐる）

平井　幕府方の探索が嚴しいのだ。石部宿の斬殺を、薩長二藩と口を合はせて置かなければならない。うちの藩から押込んだのは、治之助、喜三之進、賢之進、貴樣、外にも一二三人あるのだな。

於莵馬　おりや知らん。外のやつ等に、聞くがいゝ。

平井　知らんと云ふやつがあるか。國元同志へも報じて置かなければならん。薩摩からは田中新兵衛、外五六人。長州からは久坂元瑞、寺島忠三郎、外六七名。（帖面に引合せつゝ）都合二十六七名だな。

於莵馬　知らん〳〵。おりや知らんよ。（口惜しさうに淚を溜め、一點を睨む）

平井　中でも貴樣は抜群の働きで、渡邊も大河原十藏も、初太刀は貴樣が切り付けたと云ふことだ。後に殘るのだ、はつきり話してくれ。御隱居樣から後日お尋ねあるまいものでもない。貴樣の手柄だ。

於莵馬　手柄などは何うでもいゝ。おれは最う、同志に義絶されやう

平井　馬鹿なことを云ふな。貴樣、醉つてるのか。

於菟馬　おりやその娘と、ろくに話したこともないのだ。（手の平に眼瞼を拭つて）あんな事云はれて……、心外でならない。おれは唯……。

平井　石邊宿の働きを聞いてゐるのだ。娘のことなど何うでもいゝ。

於菟馬　好くはない。（頑固に頭を振り）おれは、惚れたと云はれては、心外だ。おれはたゞ、見るに見かねるから、西陣の機屋へ掛合ひに行つたのだ。

平井　馬鹿。夏羹の煮え立つやうに、何時までブツ〳〵と……。

於菟馬　（涙を拂つて立ち、障子のうちに）おい、誰か一緒に來い。これから一緒に、娘を呼びに行かう。呼んで來て、聞いて、皆に謝罪させる。來い、治之助來い。熊藏、來い。

　於菟馬、室内に入らんとする。一同、拍手して笑ふ。

於菟馬　笑つたな。こいつ等――。

平井　待て、於菟馬。（肩を突き）何んの眞似だ！

於菟馬　何んだ。

平井　娘にはれた惚れたが問題ではない。貴様が今日の參列に、不參したのが問題なのだ。もの丶大小を顚動しては可けないぞ。

於菟馬　けれども、その不參は娘に惚れたからして……。

平井　諄いやつだなあ。（舌打）貴様も土佐の野添於菟馬だ。高が西陣の織子ひとり、何うなつても好いではないか。

於菟馬　好くない、好くない。（頭を振り）惚れないものを惚れたと云はれては、筋が立たない。治之助、來い。鐵馬、出て來い。

一同、又笑ふ。於莵馬、なほ激して平井と爭ふ時、長州藩士久坂元瑞、瀟洒たる姿にてブラリと入り來る。元瑞は吉田松蔭の高弟、當時在京志士中に錚名あり。時に二十四五歲。

久坂　何うした〳〵、野添。（ニヤ〳〵しつつ於莵馬の肩を叩き）何を怒れてゐる。

於莵馬、久坂を見て少しく恥ぢ入る。

於莵馬　失敬極まる。皆おれを……侮辱しをる。

久坂　野添。素拂らしい評判だ。今日中山侍從の卿に面謁すると、越後の本間を切つたのは何人だ。是非その人物に會はしてくれとのお賴みだつた。何うだ、賣り込んだものだなあ。はゝはゝゝ。

平井　侍從の卿と？ 何處で會はれた。

久坂　祇園の例の茶屋よ。お公卿樣然に茶屋酒を飲み覺えて、この頃はしげ〳〵ですよ。はゝはゝゝ。

平井　ありや何うも、少し變なところがある。はゝはゝゝ。

久坂　無事に御參詣も濟んださうで、お悅びに出ました。

平井　それも御友藩の御周旋に依ります。一安心致しました。

久坂　これからですなあ。これから江戸城内の一芝居だ。

平井　機運ですかな。斯うまで運ばうとは思はなかつた。

久坂　ほんに、みな然う云ふて居りますよ。はゝはゝゝ。

平井　半平太も追付け歸るでせう。久坂さん、二階が好いだらう。

久坂　有難う。

平井、先に屋内に入る。久坂、不快さうにそこに立つ於莵馬を見て、笑ひながら傍に來る。

久坂（肩を叩き、小聲）野添。書つて貰はなくちやならんぞ。

於菟馬　何ん――。

久坂　祇園の藝子で、お主と遊んで見たいと云ふやつがある。

於菟馬　又――。

久坂　逃げるやつがあるか。はゝはゝゝ。大信で聞いて見ろ。眞劍おれは、頼まれて來たのだ。何うだ、今晩。

於菟馬　貴公の話は取らん。何うもこの頃、軟弱極まる。

久坂　云つてるぜえ、はゝはゝゝ。滿更ぢやあるまい。

於菟馬　怪しからんことだ。

久坂　目を見てるぞ。赤くなつてゐるぢやないか。はゝはゝゝ。

於菟馬　知らん。（久坂を突き放して）おれは、馬鹿だ！

久坂　はゝはゝゝ。はがんでゐやがる。（面白さうに笑つて）時に、二階へ來ないか。お主とも少し協議したいことあつて來たのだ。

於菟馬　二階は厭だ。協議などは、智慧者どもに任せて置く。

久坂　然し、今日は貴公第一の頼まれ人なのだ。來いよ。

於菟馬　雲上のことはおれには分らん。おれは下で働けばいゝのだ。

久坂、カラ〳〵笑ひながら二階の方へ去る。

於菟馬（何か考へて、家内に呼ぶ）進一郎、進一郎よ。

田淵（座敷より顔を出し）何んだ。

於菟馬　われ少し持つてゐるか。一ツ時出し換えて置いてくれ。

田淵　銀か。

於菟馬　糞忌々しい。出て少し、そこらを歩かう。一緒に來い。

田淵　平井君が然う云つてる。先生が歸るまで、野添を出しちや可かんと。

於菟馬　こいつ吝な、貸すのが惜しいのか。おれにも近々、江戸下りの路用が下がるのだ。利倍をつけて返してやる。

田淵　金錢ぢやない。勝手に出て、後で叱られる。

於菟馬　ちよツ、馬鹿々々しい。おれあ、考へると時々厭になる。おのれ等の根性で人を見くさる。そんな劣等な於菟馬ぢやない。

於菟馬、ブツ〳〵呟きながら又縁側に寢轉ぶ。

田淵　それだから、人間には何うしても片照りがあります。

於菟馬　（見上げて）何をぼやいてゐる。坐れよ。

田淵　うむ……。

於菟馬　應對だ、協議だ、周旋だ。瘦公卿どもの裏所を這ひ廻つて、何うするんだ。勤王といふからには幕府を倒す、攘夷といふからには夷人を打攘ふ。醋も蒟蒻もあつたものぢやない。眞向不亂に突進したら好いのだ。なあ田淵、然うだらう。袴穿いての協議が何になる。智謀ぶつて、出來し立てするやつは大嫌ひだ。少し暴れても、酒飲んでも、グツ〳〵小言を云ふ。行儀なんか何うでも、勝ちさへすれば勤王だらう。

田淵　犬骨折つて人手代。われ〳〵は梲は上がらない。

於菟馬　大體長州人は利口過ぎる。口で角力をとる氣でゐる。馬鹿々々しい。おれあ拔う、止めだ。國に歸つてやらうか

　　　知らん……。
田淵　功名するやつは、功名するやうに出來てゐる。潰されるやつは、潰され通しなのだ。馬鹿な話だ。
　　　於菟馬、田淵、銘々の冥想に耽る。やゝ長き間。夕日やうやく薄れて、鴿の聲一しきり啼き立つ。
於菟馬（突然、快活なる聲）進一、われが方ぢや魚が釣れないか。
田淵　用水堀だ。ろくな魚は居らん。（興味なく答ふ）
於菟馬　毒流しはやらないか。
田淵　もう遲い。わしの方ぢや、ありや紫蘇の實の出ない前としてゐる。
於菟馬　好いなあ。おりや釣など出來んが、毒流しは大好きだ。はゝは。殊に雨の前の暮方時など、蕺草の葉がぷうんと臭つてな、濕つぽい晩よ、魚のアゼを探して、青葉のなかを……、河を漕いで行く心持と云つたらないぞ。はゝは、おら山胡桃の葉を揉んで、あの青臭い匂ひを嗅ぐのが好きだ。魚なんぞ、居ても居なくともいゝ。はゝはゝゝ。
田淵　詰らん。取つて見て雜魚だ。
於菟馬　何――？
田淵（俯向いて溜息）ふむ……。
於菟馬（舌打）氣の惡いやつだ。貴樣のやうなやつ駄目だ。歸れ〳〵。
田淵　……。
　　　武市半平太、姉小路邸より退出し來る。若黨丑之丞、丑五郎從ふ。半平太熨斗目麻上下の下に、白無垢を二枚重ぬる。土佐勤王黨の主唱者にして、沈着豪毅、常に指導者として一同に尊敬せらる。この時三十四歲。
　　　若黨二人は井戸端にて足を洗ふ。半平太は庭木戸より內に入らんとして野添を見る。於菟馬、ギョツとして棒

立になる。半平太を恐れて心疎むもの丶如し。

半平太、屹と於莵馬を一瞥したるのみ。無言、去る。田淵、丑五郎より包物を受け、それを持ちて随ひ去る。

於莵馬、ホウと全身の汗の發散するやうなる心持にて、暫し師匠の後姿を見送りゐる。やがて何か考へてコソコソと着せし羽織上着等を脱ぐ。直立、柄袋など一つに纏める。

於莵馬　（障子の間より小聲に呼ぶ）進一、進一郎。

田淵、出て來る。

於莵馬　進一郎。この着衣一切を、おやぢの前に返して來てくれ。

田淵　何んで？

於莵馬　何んにも云ふなよ。お返し申します。それで澤山だ。早く返して來い。（次第に虚勢を示しつゝ）おれには、おれの考がある。置いて來い。

田淵　然し……。

於莵馬　少し歩いて來るのだ。置いて來い。早くしろ。待つてるぞ。

田淵、不承々々に衣類を持ちて去る。於莵馬、下着に帶を締め、兩刀など帶する時、さきの久坂元瑞、平井收二郎と共に姿を顯はす。

平井　何んだ於莵、駈落ちでもするのか。

於莵馬　（プン〳〵憤りつゝ）飲みに行くんだ。

久坂　また花見小路か。御仁體に拘はりませう。はゝはゝゝ。

於莵馬　何んでも好しい。わしは下々の、下の役者だ。

平井　そりや然し困つたな。實は少し、貴樣の智慧を借りたいのだが……。
於菟馬　智慧――？（侮辱されしやうに相手を見る）
久坂　平井君とも今まで相談したのだが、又一人、何うしても處置しなければならないやつがあるのだ。戊午大獄の關係者だ。
於菟馬　（眼の隅よりキラリと久坂を見て、不快さうな聲）又か――？
久坂　賀川肇だよ。やつと彼奴の隱家を突止めたのだ。彼は池内大學などと協力して井伊大老の手足を働き、和宮樣問題にも惡辣を極めてゐるやつだ。到底生けて置けないやつなのだ。
平井　長州さんでは一手で處置すると云はれるが、それぢや土佐の名が立たない。御隱居容堂公の御意見が未だ公武合體論にぐらつきさうだから、その因循を一掃するためにも、是非わが藩の手で氣勢を上げて置かなければならない。
於菟馬　（頤にて奥を差し、穿物に足をかけながら）人を切りたがつてるやつは、そこらに大勢ゐるよ。
平井　その大勢は困るのだ。賀川も嚴重に用心して、會津守護職でも警備がとゞいてゐる。物になれた選士二三人を擇んで、咄嗟の間に事を擧げなければ、却つてこちらの破れとなるのだ。
久坂　先づこの人選は、薩摩では田中か、土佐では野添君だらう。
田淵進一郎、障子の間より顏を出し、熱心に聞く。
於菟馬　（呟くやうに）然し、おやぢ知つてるか知らん。
平井　知つてる段ぢやない。こゝが奮發どころだと云つてゐた。
於菟馬　又飛び出して、叱られはしまいかのう。
平井　はゝはゝゝ。誰が叱るのだ。

於菟馬　おれには正直、巨細の意見など分らないのだ。初めから行けと然う云つてくれると、何時だつて行くさ。行かう行かう。

久坂　然うか。それぢや薩摩の連中とも取合はせて、こちらから刻限を打合せやう。

於菟馬　おれも例のところで飲んでゐやう。好しく頼む。進一。進一。われも一緒に來い。

平井　田淵を連れて行くのか。

於菟馬　田舎者にも、場を見せて置かう。さ、來い〱。（急に元氣づいて、譯もなく笑ふ）

平井　於菟。さつきおやぢに叱られたらう。

於菟馬　うん？（平井を見て）何んだ、おやぢなんか。言分があらば、こちらだつて負けてばかりゐないよ。なあ久坂さん。

久坂　然うですよ。はゝはゝ。

　平井も笑ふ。於菟馬も笑ふ。

（幕）

——以下次號——

定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年四月十八日印刷
昭和三年五月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


月のやさしさ
白の明るさを
兼ねて生れた
新マツダランプ
マツダ
神奈川縣 東京電氣株式會社 川崎市

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.